THE CENTRAL REVIEW

中央公論

七月號

第三十七年　第七號　第四百十號

獨逸イエナ大學名譽教授 ヘッケル博士著 文學士 栗原古城譯

宇宙の謎

十一版

●四六版總布製 定價參圓 送料十二錢

◉東京朝日新聞評『同教授一代の研究を歷捲したる精髓たるのみならず、實に歐洲の科學界、哲學界を震撼せしめたる名著なり。』

獨逸 ショーペンハウエル著 增富平藏譯

處世哲學

五版

●四六判總布製 定價貳圓八十錢 郵稅十二錢

「…人生の眞價と生活の歸趣とに關する深刻の省察に充ち啓發さるゝ所多し。譯文亦平易明快此種の譯書に通有なる難解の辭句を羅列せざるは喜ぶべし」—(東京朝日新聞批評)—

ロッチ博士著 高橋五郎譯

七版 ◉死後の生存 附錄『靈怪實在論』

定價參圓 郵稅十二錢

白耳義 マーテルリンク著 文學士 栗原古城譯

七版 ◉靈智と運命

貳圓貳拾錢 郵稅拾錢

▼久しく品切中のところ訂正再版發行

增富平藏譯

ショーペンハウエル隨想錄

四六判總布裝 四百二十頁 定價貳圓六拾錢 郵稅十二錢

本書は、將來に於ける一切の精神的又道德的文明の根柢とすべきもの(ワグネル評語)と云はれ或は形而上學の完成者(ドイツセン教授評語)とたゝへらるゝショーペンハウエルが弱年の頃より晩年に至る迄隨時に書留め置けるものをグリーセッバ博士が秩序的に編纂せるものにて、上は倫理宗教の眞理、處世の指南より下は男女間の情事等に至るまで忌憚なく論議して一流の人生觀を吐露せる短文實に四百餘章、譯文亦ショ氏の私淑者增富先生が三たび稿を更へたりと言はるゝほど極度の苦心を重ねたるものにて、警抜の想、明快の文、相俟つて近來の好譯本たるを疑はず。

東京本郷西片町 玄廣社 電話小石川一三九番 振替東京七九九五地

卑猥なる廣告の申込みは謝絶す

中央公論社

マックイーヴー著 井上吉次郎譯

早大教授 杉森孝次郎推薦

（定價壹圓八拾錢 郵稅八錢）

最新刊

社會學

マックイーヴー博士の「社會學」は學界の驚異である。杉森教授の言ふ如く、戰後の世界改造運動の一大指導力たる價値を具有し、現代人にあまねく讀まるべき社會的眞必要ある著述である。博士の博大にして明瞭な頭腦を通じて、一切の社會現象は一列の透徹した組織に要約せられ、社會の奧義は適確に示された。殊に國家と社會との關係の解剖の如き、識見卓拔である。譯者は專門の社會學徒で、其精彩な筆致で簡潔にされた縮譯「社會學」は眞に啓蒙力あり教育力ある一書である。

東京牛込 振替東京一一二三 早稻田大學出版部 （賣捌）東京堂・至誠堂・北隆館・東海堂・盛文館・星野

十年間に貳千五百圓の貯金の通帳を無くして仕舞ふも同じだといふ
煙草も一度「カロット」を口にすれば

斷じて再び煙草は吸えぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!

實業之日本代理部と榮川堂主人

昨年十月十三日煙草代用品「カロット」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロット」の御註文がありました店員が此事を主事に報告しますと主事は「明日私自身で代理部へ上つて「カロット」を御說明申さう」と云て主人は翌十五日午前十時「カロット」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて呉れました、其處で榮川堂主は自身來社せる眞意を述べて「カロット」發賣に至る迄の苦心と確心を申上げました、其うして先づ一社員の煙草好な方に御試を願ひました、すると其社員の方は早速「カロット」を取上てお試しになりました、暫して其方は「カロット」を口より放して今度は卷煙草をお吸ひになりましたが、社員の方、やつ、之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました到底煙草等吸へないですね—、驚いたと仰有いたした。此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ、」「僕もやつて見よう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が總立ちになつて「カロット」を取り上げてお試しになりました。「やあこれでは煙草は吸へませんね—」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞讃下さいました、其處で更に店主は口を開いて一度「カロット」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロット」が多くの人に認められて來た事の本懐を述べて暇をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此の品の將來に對する御奬勵の言葉を述べて下さいました。

弊堂は日比谷交叉點から銀座に向つて行けば右側八軒目です、何うか一度誰方も御來店の上御試しの上ニコチンの中毒の害からのがれて下さいまし、最後に弊堂は確信を以て次の事を斷言します、其れは「萬一御來店御試吸の上煙草が直ぐに廢められない方は其儘「カロット」を壁に投げつけてお歸り下さいまし……」

特徴

外見少も卷煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適量朝鮮人蔘の精氣を含有せるを以て朝鮮人蔘が具有せる諸效用の凡てを人體に與ふると同時に溫雅なる香氣と忘れ難き清涼なる甘快味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は全く煙草に對する永き嗜好を必ず離れて斷じて再び試みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生ずる時其他散歩等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を完治すべし。

カロット 金貳圓

パイプ(水牛製) 五十錢
同(銀模様入)(ベークライト製) 八十錢
同(象牙製サツク入) 壹圓五十錢

送料(内地十八錢 海外四十五錢)
引替送料(内地卅五錢 海外五十五錢)

御註文は振替利用を便とすれども御都合によりては端書にて御申越次第引換小包にて送品可仕候

東京市日比谷有樂町一丁目二番地

榮川堂

電話丸の內一一九一九
振替東京五二九一一

中央公論第卅七年七月號目次

▼公論

▼說苑

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA


プラトン
シャープ鉛筆
鉛心の繰出しのみならず
繰入れも自動的に行く
専賣特許品
歐米の製品より
更に一歩進んだ
理想のペンシル
一番書きよい
プラトン萬年筆
日本文具製造株式會社特製
中山太陽堂文具部發賣
Platon



雪陰一橋　　小杉未醒筆

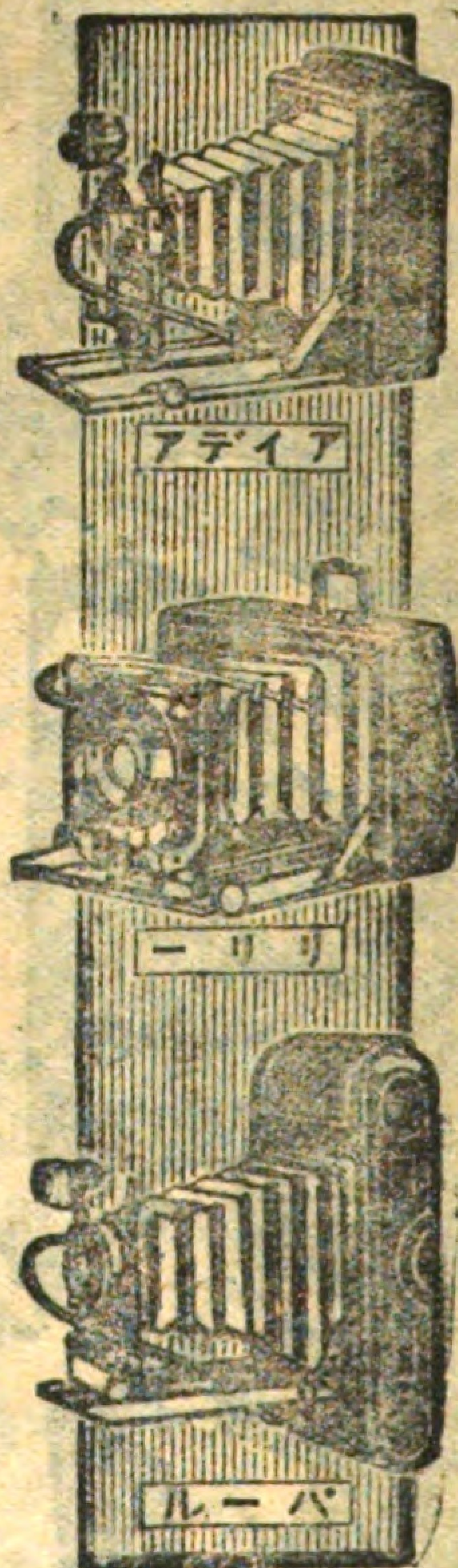
山岳へ!!　海濱へ!!

何處へお持になつても

便利で……理想的な寫眞器は……

リリー
パール
アイデア
カメラ

乾板フィルム兼用
ピントも覗かる



◇カメラだけを別に販賣して居りますから御持合の鏡玉を利用せらるゝには至極御便利です

◇種類　名刺形――手札形――葉書形
（目錄進呈）

東京本町二丁目
小西六本店
支店　大阪長堀橋筋

北郊雑記

阿部次郎

哲人にして藝術家たる著者の如きは又珍しい、晴れては三畝の後圃に鍬をとり、降つては讀書に耽溺する阿部氏が、その日、その日の思出をノートし、若くは女子大學、慶應の講義のあひま／＼に採錄した詩味豊かなる小品を完成せるもの、壓搾はしてあるが、しかし肩のこらぬ氣品の秀れた藝術觀、人生觀のとび／＼である、こうして氏の深い人生觀に魅せられつつ讀過する一日は、いかに我々に幸福であるか。

七版

◇菊半截布製函入◇
◇定價壹圓九拾錢◇
◇郵稅金拾五錢◇

改造社

◇東京芝區愛宕下町◇
◇振替東京八四〇二◇



大正十一年

中央公論

七月一日發行

七月號

第卅七年第七號

第四百十號

加藤内閣存立の根據

加藤内閣の出現を以て政界の常態に非ずと爲し、頻りに之を難ずる者がある。新總理加藤男爵は聲望手腕に於て既に自他之を許すもの多く、閣僚の顔觸れまた從來の内閣に比して左まで遜色はない。然るにも拘らず其の出現を難じ其の存立を呪ふは何の故ぞ。

曰く超然内閣なるが故に非也と。又曰く中間内閣なるが故に非也と。併し吾人の觀る所を以てすれば、單に這般の論據のみを以ては未だ新内閣存立の基礎を動かすには足らぬ。吾人は必しも新内閣を辯護せんとする者ではない。又固より之を理想的内閣なりと讃する者でもない。只之を難ずる世上の俗説の中に許す可らざる謬想の潜むを見て、敢 一言の辯妄を禁じ得ざる者である。

立憲政治の歸趨が政黨内閣に在る事は之を爭はない。從て一政黨失脚の後を他政黨承けて之を嗣ぐは憲政の常道である。政黨に根據なきものゝ臺閣に立つが如きは力めて之を避くべきである。果して然らば加藤新内閣が所謂憲政常道論の形式的要求に合せざるは極めて明白と謂はねばならぬ。

然れども一歩退いて考ふるに、所謂憲政常道論は何に依て現代政界の通義となつて居るのか。そはいふまでもなくデモクラシーの徹底のためではないか。政黨は民衆の意思の代表である。多數は欺く可らず、現時開明の世に在ては多數の正直に是とする所に眞理は存在すると觀る。之を豫定して政黨政治を最良の政治形式とするのだ。茲に憲政常道論の依て以て立つ所の道德的根據がある。この道德的根據に立脚する限りに於て而してその限りに於てのみ、憲政常道論は現代政界の不動の通義たり得るのである。

擊劍は最良の運動方法だとする。併し之は人の普通の健康を豫定しての話だ。豫定の根據と離して、漫然第一義的の原則に拘泥すると、瀕死の病人にも擊劍を強いねばならぬことになる。我國には、兎角西洋に行はれた原則を飜譯し、其の道德的根據と引き離して、漫然之を概念的に持て囃す弊がある。憲政常道論を以て今日の政界を支配せんとするが如きも、また稍其の嫌なきを得るだらうか。

政黨は民意を表現すべきものであると云ふに何人も異論はない。が、現今の政黨は事實民意に根據して居ると眞面目顔に説く者あらば、誰か其の欺瞞に噴飯せざる者があらう。民意の開拓を謀らず、其の自由判斷を悖まず、**寧ろ民意を侮ることとの方法に依て不正の投票を集めたるの點は、朝野兩黨を擧げて其の罪を一にするではな**

いか。眞に民業の良心に連絡するものなきが故に、政黨內閣の形式的通義を固執することは、實質的には必しも社會の文化に何等道德的の關係はない。故に思ふ。憲政常道論の主張は、よし之に依て更に政界の弊を深くするの憂なしとするも、政界の眞の進步を促すべき何等積極的の力あるものではないことは言ふを待たないと。

實質的觀察に依れば、眞個民業的良心と連絡なきの點に於て、今日の政黨は貴族院の諸分派と其の性質を異にするものではない。名を政黨と稱するに眩惑して、之を特殊のものと見誤つてはならない。故に若し政友會の失脚後、政界の一勢力として相當の分野を占むるものに內閣組織の社會的權利ありとせば、此點に於て憲政會は貴族院諸派と同列に在るものだ。憲政會獨り後繼內閣組織に獨特の權利を有するが如く呼號するは、滑稽なる僣稱と謂はねばならぬ。初めから民意に根柢する政團なき以上、議院に相當の分野を占むる勢力をして、內閣の組織に當らしむるに甘んぜざる可らざるが故に、所謂政友會內閣が超然內閣でなかつたと同じ意味に於て、今度の內閣とても必しも超然內閣とは云へない。只政友會に次ぐの大政黨たる憲政會を差し措いて他に持ち廻つたのが穩當の處置かどうかに、大に議論の余地はあるが、加藤新內閣の如きが、我國現時の政情の下に於ては其存立を認む可らざる底のものでないことだけは、明白に之を承知して置かねばならぬ。

吾人が斯かる異說を主張する所以は、加藤新內閣を特に辯護せんが爲ではない。寧ろ斯かる內閣をも非認し能はざる我が國現時の政情に世上の反省を促さんと欲するが爲である。內閣が變態なのではない。政情そのものが變態なのだ。而して其の主たる原因が實に今日の所謂政黨共者に在るの事實は、深く吾人の戒心に値するものである。此點に於て在野黨たりし憲政會の如き從來餘りに放慢輕燥に過ぎなかつたか、若し夫れ政友會が天下を敵黨の蹂躪に委して舊惡の暴露せらるゝを怖れ、所謂中間內閣の出現に狂奔せしの醜態に至ては、恥を千載に貼すもの、識者の唾棄にも値せざるものである。

終りに新內閣に一言する。吾人は現今の政情の下に於て新內閣存立の合理的根據を拒まない。が、また形式上最良の內閣とも思はない。從て其の前途には幾多の困難もあらう。が、望む所は、最良の政策を以て實質的に國運の進步に貢献せられんことを。就中吾人の希望に堪へざるは、變態的政情の肅正に對しては最も意をとゞめられん事である。自家政權の永續に戀々として、變態的政情の肅正を怠るが如きあらば、是れこそ國家に背くの罪輕からざるものである。

中央公論



第卅七年第七號
七月號
第四百十號

階級闘爭思想と勞働組合運動

林癸未夫

一

過去に於て各國の勞働組合が執拗に社會主義運動に捲込まれることを回避したことは、屢々インターナショナルをして幻滅の悲哀を感ぜしめる原因となつた。彼等が勞働組合を洗禮するに社會主義の熱火を以てし赤色の十字架を擔うて屍を階級間の壙穴に埋めしめやうと闘つたことは一日の業でなかつた。過去半世紀間のインターナショナルは、幾度か歐洲の諸都市に會同し、繰返し〱資本主義の弊害を高唱し、帝國主義の罪惡を列擧し、階級憎惡の感情を煽揚して、イン

ターナショナルの精髓を宣布するがために長い努力を續けて來た。從來社會主義者の國際會議に參列した數百人の階級鬪爭の驍將等が、社會の現狀に對する彼等の峻酷なる彈劾と、公正安寧なる將來の社會に對する彼等の不退轉なる欲求と之を實現するために取らうとする彼等の悲壯なる計畫とを主題として、眞摯熱烈なる論議を交へ、それが堂々たる大文章の宣言書となつて中外に喧傳せられた時に、何人も之に對して威壓されるやうな物々しさを感ぜなかつた者はゐるまい。しかも彼等によつて代表せられる各國のプロレタリヤは數十萬から數百萬に、數百萬から數千萬に急激に增加して、其勢容の壯んなる、洵に資本主義的國家を戰慄せしむるに足るの概があつた。

然るに其效果は果して何うであつたか。獨軍の先登隊がマースを涉り、リエージユに砲聲が轟くと共に、五十年のインターナショナル運動は束の間に壞滅した。英佛のプロレタリヤは獨墺のプロレタリヤと相殺傷して、流るゝ血の量多きを競ふた。資本主義の憎惡も、階級間の反感も忽ち雲散霧消して、殘つたものは唯これ「感情中の最愚なるもの」と誰かゞ名けた愛國心の亢奮だけであつた。顧れば勞働者の國際的團結とは單に紙上に印刷せられたる宣言文の堆積の謂であつたか。さなくばインターナショナル會議の參列者は悉く帝國主義者の間諜であつたか。彼等は總て擬國會の雄辯家であつたか。ベベルも、カウツキーも、ジョーレも、ケヤ・ハーデイーも等しく道化芝居の名優であつたか。否、否。恐らく彼等は善意でもあり正直でもあり眞面目でもあつた。唯彼等の過失は人を欺くに足る程の狡智を有たない代りに己れを欺くに足る程の迂濶を有つてゐたことであつた。インターナショナルは數百千萬の勞働者のものではなくして、唯單に其會議に參列する數十人か數百人かのものに過ぎないことを、彼等が氣付かずにゐたことであつた。否第一流の社會主義者たる彼等自身すらが眞に其奉ずる所の主義に徹底するまでの陶醉を有つてゐなかつたことであつた。若し彼等が戀する者が喜んで戀に死する程の陶醉を、其主義に對して懷いてゐたとするならば、一九一四年の秋に於ける歐洲

戰爭の形勢は今少しく相違してゐなければならぬ筈であつた。少くとも一九一八年十一月の休戰は今少し早く到來しなければならぬ筈であつた。而して又一九一九年の平和條約は今少しく其内容を異にしてゐなければならぬ筈であつた。彼等の力も足りなかつたに相違ない。併しもつと足りなかつたものは彼等の熱であり、彼等の意志であつたのである。

二

惟ふに人間の出處進退は、葛藤の極所に窮迫するに及んでは、常に意志よりも感情に支配されるものである。此場合に感情を抑けて意志に順ふことのできるものは唯少數の傑出したる思想家に限られる。インターナショナルの信條は社會主義者の理智であつた。併しながら此理智を支持すべき彼等の意志が脆弱であつた。況んや彼等が統率し指導しつゝあると信じてゐた幾百千萬のプロレタリヤに於ておやである。彼等の大部分は極り文句の宣傳演說を聽きかぢつたり、刺戟的な宣言文を列ねた大會の報告書を讀んだりしたゞけで「社會主義も惡くはない」位に考へてゐた輩である。彼等の指導者等は常に幾十萬、幾百萬或は幾千萬の同志を代表してかく信じ或はかく述べるといふ。無論彼等は之に異議を挾むべき理由も有たなければ又其必要をも感じなかつたであらう。けれども社會主義者の國際大會に活版刷の宣言書を可決しに出かけて行く地方的に有名なる數百名の代表者等と、彼等によつて代表せらるる幾百千萬の無名のプロレタリヤとの間にも、又議場に熱狮を揮うて拍手喝采の裡に出席者の嚮背を指導しやうと試みる國家的に有名なる數名の首領等と、彼等の采配によつて進退する數百名の代表者との間にも、社會主義學說に對する造詣、社會革命思想に對する理解、階級憎惡の感情、階級鬪爭の熱度等に於て、測り知るべからざる程度の差があつたことに心づかなければなら

ぬ。丁度それは同じ佛教徒と稱せられるゝ者の間に於ても、上は空海親鸞の如き名僧智識から、下は善光寺の御札に月に一度の御燈明を忘れぬ老婆までであると同樣である。勞農露國に於ける共產主義者の治世に謳歌して、苟くも之に疑ひを挾む者には狂犬の如く吠えかゝることを怠らないレニンの渴仰者等は、彼等の所謂ブルジョア國家に於て行はるゝ普通選擧なるものが、民主主義の眞諦から見て、一種の欺瞞的制度に過ぎないことを力說する。私はこれが全然誣妄であるとは言はない。併しながら若し彼等の評するが如く、現存の國家に於ける民主主義の政治組織が欺瞞的制度であるとするならば、欺瞞者たるブルジョア階級若しくは其利益のみを擁護しつゝある政治家等によつて淺墓にも欺瞞されつゝある所の數千萬の勞働者が、同じ程度の淺墓さに於て、共產主義の宣傳者によつて欺瞞される危險がないとは何うして保證されやう。社會主義國家に於ける立法委員や行政委員がプロレタリヤによつてのみ選擧されるといふ事實によつて是等の委員の意見や政策が正確にプロレタリヤの意志を代表してゐるといふ證據にはならない。何となればそれは委員の道德觀念の正邪と、プロレタリヤの智識及理解力の程度によつて著しく左右される問題である點に於て、資本主義國家に於ける政治家と選擧民との關係と少しも相違はないからである。權力の地位に在る者は、如何に彼が公正無私の士であつても、やゝもすれば其權力を維持することが社會のために必要だといふ誤信から免かれ難い場合が屢々ある。かゝる場合には國民をして自己の權力維持を是認せしめる方便として、かくするに好都合なる報告のみを國民の前に發表することが彼の政治的良心に許される。若しそれが自己のために權力を愛惜する政治家であれば、報告の捏造は一層露骨であるが、しかもそれは資本主義的政治家の特質であつて、社會主義政治家には絕無な誘惑と斷ずることの不當なるは言ふまでもない。大衆の指導者が卓絕したる人物であればある程、彼と大衆との人格的距離はます／＼廣くなつて彼が大衆のために圖る所の意見が、眞に大衆によつて理解され得る可能性はます／＼乏しくなる。これは偉大なる者の

常に感ずる所の悲哀である。茲に於て彼は自己の政策を形造る所の萬般の資料を其儘大衆の前に披瀝することの危險を感じ、多少の程度に於て「依らしむべし知らしむべからず」の方法を取ることが已むを得ない必要として考へられる。殊に彼が怖るべき外敵を有し、大衆を率ゐて之に抗爭しなければならぬやうな急迫した事情の下に置かれた場合には、右の如き政策の必要は一層痛感せられるに相違ない。其結果彼が大衆の名を以てする所の變動が、ます〳〵大衆の理解と實感とから遠ざかつて行くことが必然の勢をなすのである。動機は如何に公正であつても、結果が欺瞞に陷るべき機會の多いことに於て、社會主義政治組織も資本主義政治組織に讓る所はあるまい。何となればそれは制度の問題ではなくて、人間の德性知能の問題であるからである。

私は現に諸國に行はれつゝある社會改造の諸運動を輕視しやうと企てゝゐるものでは決してない。それを輕視し過ぎることの危險はそれを重視し過ぎることの危險よりも遙に大きいに違ひない。殊に現今社會改造運動の基調たる社會主義的思想が、他日人類の世界に驚歎すべき大事業を建設する力の母體でないと豫斷するは寧ろ無謀の沙汰である。けれども他日の力は今日の力ではない。力山を拔く項羽と雖、曾ては一匹夫にも捻り潰される赤坊の時代があつた。インターナショナル總會の出席者が名義の上に於て幾百千萬人を代表してゐやうとも、又其決議した宣言書の上に如何なる熱辭烈句が羅列されてあらうとも、それを以てインターナショナル運動の實價だと速領する者があるならば、それは風聲鶴唳に氣死した昔の武將にも劣らぬ痴人である。實價を見誤ることは何人にも危險ではあるが、殊に其品物の持主に取つては尙更さうだと言へる。現代のブルジョア階級が故意に耳を蔽うて遠雷の響を避け、明日も亦快晴だと獨斷して、一日の苟安を偸まんとする痴態も固より嗤ふべきではあるけれども、バロメーターの示度を誤視して暴風たちどころに來襲すべしとの警報を發し、自ら風神にでもなつた積りで、風袋の底が拔けてゐることに氣のつかない社會主義者の焦燥

も亦た亦憫むに堪ゆるものである。

三

ひとりインターナショナル運動のみがさうなのではない。社會主義者の國內運動に對しても全く同じことが言へる。戰爭の末期から戰爭直後の二年間に於て、歐洲各國の勞働組合運動が一時著しく左傾したことは爭はれない事實と認められる。社會主義は最早既往の如く勞働組合運動から邪魔物扱ひをされなくなつたばかりか、寧ろ進んで之を指導すべき中心思想として受容されたかの如く見えた。殊に露西亞に於ける勞農政府の創造と、獨逸に於ける君主政治の全滅とは社會主義の宣傳に絕好の機會を提供して、燎原の勢忽ちにしてあらゆる舊制度を一掃し盡すかと思はれた。戰爭は過去の社會秩序を一變し、新しく目ざましき何物かゞ出現して、人類の社會生活を改造するであらうといふ漠然たる期待は一般の勞働者をして、社會主義の理論に新なる注意を向けしめる原因となつた。主要なる產業の公有を斷行して、資本主義の橫暴を永遠に抑制することが、勞働組合運動の第一義と考へられ、且聲明されるやうになつた。多年勞働組合運動の政治化を企圖したる社會主義者の努力は漸く酬はるべき時期に到達したかと思はれた。一般勞働者の感情は熾烈なる階級憎惡の意識に燃えて、階級鬪爭の花々しき一戰を待望しつゝあるかと思はれた『資本論』の結末に豫言された資本主義の弔鐘は高鳴りして、搾取者の搾取さるべき時機は目睫の裡に迫りつゝあるかと思はれた。

併しながら是等の期待は破られた。インターナショナルの感じた幻滅の悲哀は、ナショナルの社會主義者によつて一層痛感されなければならなかつた。一般勞働者によつて懷かれた階級憎惡の實感は、組合の宣言書を起草したり、大會に講演したり、決議案に協賛したりする首領連中のそれに比べて、今尚甚しき深淺の差あることが發見された。否、寧

しく產業の公行を旗幟として新社會秩序の建設に協力すべきことを盟つた勞働界の巨頭中にも、其實現のために寸々熱心と努力とには非常に程度の差あることが證明された。プロレタリヤは未だ眞に階級意識に覺醒してゐなかつたのである。今夜飲むべき酒のために彼等は戰つたであらう。明朝食ふべきパンのために彼等は戰つたであらう。併しながら彼等は資本主義の撲滅のために、社會主義國の建設のために戰ふべき準備を未だ有つてゐなかつたのである。

試に思へ、歐洲のプロレタリヤの間に社會主義的思想の最高潮に達したる戰後の數箇年間に於て、何故ゴータ宣言以來約半世紀間の臥薪嘗膽を經た獨逸の社會民主黨が、始めて政權を掌握したる曉に、多年の主義綱領に背いて、半熟不徹底の黃化政策に甘ぜなければならなかつたか。何故に一九一七年六月の英國勞働黨大會が、新社會秩序の骨子として主要產業の國有を高唱し、一九一九年九月のトレード・ユニオン・コングレスが炭坑國有の遂行を可決したるに拘らず、一九二〇年三月に於て、英國坑夫聯合會の直接行動案は、他の勞働團體の强硬なる反對によつて廢棄されなければならなかつたか。何故に一九二〇年五月の佛蘭西に於て、鐵道國有の强要を目的として勃發したるC・G・Tの總同盟罷業が無殘なる失敗に了らなければならなかつたか。何故に一九二〇年九月の伊太利に於て、工場占領騷動當時に於ける共產主義者の赤化運動が、勞働組合員自身の反對のために排斥されなければならなかつたか。何故に其善後策として首相ジオリッチにより提案されたる產業共同管理案が、中途頓挫して闇中に葬られなければならなかつたか。何故に諸國勞農政府が第三インターナショナルを通じて歐洲のプロレタリヤを橫斷的に結束しやうとする大計畫に失敗して、自ら資本主義への逆轉を餘儀なくされるに至つたか。何故に英國のブルジョアとプロレタリヤとが、各々其主力を以て相當らんとしたる三角同盟の總同盟罷業が、昨年四月の「黑色の金曜日」に潰滅に歸さなければならなかつたか。是等一切の事實は現存の國家の諸機關が悉くブルジョアの勢力の下に在るといふ、ボルセビーキ得意の論法によつて、名殘なく一掃

し盡されるほど、簡單な而して他動的な理由に基くものであらうか。私は決してさうは信じない。勿論彼等の抑壓を利とする他動的な勢力の存在を疑ふことはできない。併しながら彼等はそれよりももつと大きな理由を彼等自身の裡に有つてはゐなかつたか。惟ふに勞働者の大衆は社會主義の信條を未だ其實感の中に捉へてゐなかつたのである。よし其原理の大體には通じ、其教義の骨子には同感してゐたとしても、彼等は未だ眞に之を自己の感情の中に融化して、自然に其行動を支配すべき本能の力として所持するまでには至つてゐなかつたのである。かくの如き本能は、資本主義と社會主義との鬪爭に比べては、遙に淺薄な理由に據つて、遙に輕微な獲物を奪合ひつゝある政黨員の仲間に於ても、局外者には寧ろ滑稽に感ぜられる程發達してゐる本能である。此敵愾の本能が政治といふものを如何に毒しつゝあるかは改めて說くまでもないけれども、ともかく個人としては相當に理智に秀でた人々までが、屢々此本能に驅られて盲動しつゝあることの事實は否定し得ない所である。社會主義運動の中心となつてゐる少數の指導者等が、ブルジョア階級に對して有する所の憎惡敵愾は、在野黨の領袖が政府黨に對して有する所のそれに比べて一層深刻であることは爭はれない。此故に若し形に於て彼等に率ゐられつゝある幾百千萬のプロレタリヤが眞に其指導者等と感情を等しくするならば、社會主義運動の實果は、今日吾等が見る所のものよりも、遙に〳〵多大でなければならない筈であつた。しかもそれが僅に今日の程度に止つてゐる所以のものは、未だ社會主義の思想が大衆としての勞働者の實感に喰入つてゐない。彼等の本能に化してゐない。從つて彼等を衝動的に支配するまでの力となつてゐないがために外ならないと私は信ずるものであ

言ふまでもなく勞働組合は社會主義よりも古い歷史を有する。階級鬪爭思想が初めて構成された『共產黨宣言』公表の當時には、英國の勞働組合運動は既に半世紀の成長を遂げてゐた。其後に於ける各國の勞働組合運動は、思想としての社會主義運動とは別個の策源地から指導されつゝ漸次其領域を擴めて行つた。從つて社會主義者が其思想運動を社會運動に具體化（インカーネート）しやうとするアンビションを懷くときには、いつも彼等の企圖は既存の勞働組合に社會主義の洗禮を施さうとする努力となつて現はれるのが常であつた。併し其事業が如何に困難であつたかは各國の社會主義運動史の證明する通りである。勞働組合は容易に社會主義者の宣傳に聽從しなかつたのみならず、寧ろ之を嫌忌し、排斥することが、自家の利益を擁護するために必要だと感じた場合が多かつた。此故に大戰勃發前までの各國の社會主義運動は、大體に於て勞働組合運動と全く異つた道程の上に異つた人々によつて指導されてゐた。何となれば社會主義運動は殆ど總てが思想運動であつたがゆゑに、思想として之を理解することに興味を有ち、且其腦力を有つ人々の間に限られてゐた。從つてそれは主として學者、思想家、政治家、操觚者、其他の智識階級の運動であつて、其手段は辯論と文章の外に出づることができなかつた。要するに彼等は圖上戰術の考案者に過ぎなかつたのである。之に反して勞働組合運動は殆ど總てが實利運動として行はれたがゆゑに、之に參加するものは眼前に捕捉すべき獲物を發見したる勞働者に限られてゐた。眼前の獲物でなければ彼等の實感が動かない。彼等は硝煙の香をかぐことなしに、圖上の戰術から突擊の勇氣を喚起される筈がなかつた。社會主義が如何に精到なる學理的體系の上に建てられてゐやうとも、唯それだけで同盟罷業の一つをだゝ誘發することは困難であつた。併しながら一日數錢の賃金の增減は、幾百千度も勞働者を驅つて水火の中に飛込ましめることができたのであつた。

右の如き事情は英國に於て勞働組合運動が最も健實なる發達を遂げた理由を說明するものである。英國における社會

主義運動は獨佛兩國よりも始終火の手が低かつたのみならず、勞働組合が社會主義的思想の侵入を回避しやうとする用意に於て最も周到であつた。インターナショナルから國際勞働組合聯合會が分離したのも、主として英國勞働組合員の主張からであつた。獨逸に於ても勞働組合の創立者は大抵社會主義者であつたに拘らず、勞働組合が發達するに伴れて漸次社會主義者の勢力から脫離しやうとする努力が熱心に試みられた。佛蘭西に於ける勞働組合の發達を害した最も大なる原因は、社會主義に對する求心力と遠心力との牽制によつて、內部に絕えず紛爭を釀し、その大同團結（ソリダリテー）を妨げられたからである。米國に於ては階級鬪爭的な Knights of Labor が短命に亡んで、其後に社會主義を憎むことと資本主義に劣らざる米國勞働聯合會が生まれ、初めて健全なる發達を遂げることができた。凡そ是等の事實は、一として社會主義者の希望するが如き形態に於ての勞働組合運動の發達が、組合自身の存在と發育とのために、如何に危險であつたかを立證しないものはないのである。

茲に於て私は、ゼー・エッチ・トーマスが他日英國の勞働運動史上に於て、其賢明を證據立てられるの日が必ず來ると思ふ。一九一九年の三月、死物狂ひになつて直接行動の斷行を絕叫する坑夫等の要求が、彼の熱心なる反對演說によつて終に廢棄せられた時、又一九二一年の四月、英國を慘憺たる階級鬪爭の渦中に投ぜんとしたる三角同盟の總罷業が、危機一髮に迫つて、彼のために阻止せられた時、世界各國の急進社會主義者は「老猾なるトーマス、卑怯なるトーマス、裏切者のトーマス！」と叫んで彼の名を呪詛せざる者はなかつた。まのあたり彼の面に唾せんことを希ふた者さへ尠くなかつたかも知れない。彼を多年の首領と仰いで心服啻ならざる鐵道從業員の中にすら、彼を痛罵して息まざる者が多つかたのである。

洵に産業公有の信奉者として彼も一個の社會主義者であるに相違ない。併しながら彼は其主義に盲進すべく餘りに聰

明なる理智の持主であつた。スマイレーの如きプロレタリヤ的本能に滿たされたる勞働首領が、成敗利鈍を顧ずして階級鬪爭の一血戰を試みやうと焦慮する間に、冷靜なるトーマスは精細に味方の戰鬪準備を檢閱して、無謀なる冒險を抑制するの已むを得ないことを確認する。眞に勞働者を愛し、勞働組合を愛する者は、常に名を捨てゝ實を取るの用意が肝要である。勞働者の感情を激發して彼等を死地に陷入らしむることは易いが、彼等を抑制して眼前の屈辱に堪へしむることは難い。此故に只表面の名のみを重しとする勞働首領等は、やゝもすれば難きを捨てゝ易きに就かうとする。其結果は多くの場合、勞働者日常生活の曠缺となつて顯はれ、勞働組合運動の蹉跌となつて顯はれる。數百萬の勞働者を驅つて必勝の算なき階級鬪爭場に猪突せしめ、空しく資本主義の砲彈の餌食に供することの罪惡は、無謀の戰ひを他國に挑んで、數千萬の國民を塗炭の苦に陷れたるカイゼルの罪惡と選ぶ所が何處に在らう。恐らくトーマスはそれを知つてゐた。英國勞働組合員の階級意識は、大規模なる階級鬪爭に堪へ得るほどに未だ熟してゐないことを彼は能く知つてゐた。眞に忍ぶことを知るものにして始めて大業を成すことができるる。直接行動の否認、三角同盟の瓦解は、プロレタリヤの味としてのトーマスの名を不朽ならしめる所以でなくて何であらう。

五

個人の自由意志から成立つ大衆の集團としては、現代の勞働組合ほど組織あり、節制あり、統一ある集團は他に決して類例を求められない。全く現代に特種なる存在である。併しながら勞働組合が克く大衆の結束を維持して、有効に活動し得る所以のものは、第一に其目的が勞働者の實感に直接觸れる所に在るからである。勿論勞働組合の發達を以て、新社會建設の基礎たらしめやうとする學者の提說からするならば、勞働組合の目的は更に高遠であるべき筈である。併

しながら勞働組合の目的が勞働者の日常生活に於ける實感の範圍から遠ざかれば遠ざかる程、勞働者の結束は弛緩することを免かれ難い。若し過去の勞働組合運動が高遠なる理想のみに馳せて、「全部か皆無か」といふ理論的には徹底した態度にのみ出てゐたとするならば、言ひかへれば社會主義運動にのみ重きを措いて、卑近な眼前の小實利を獲得するに全力を竭さなかつたとするならば、恐らく勞働組合は今日の如き發達を遂げなかつたのみならず、今後と雖、現存の組織を保持し、其統制を完ふすることは餘程困難であらうと私は信ずる。何となれば未來に約束される新社會の理想は、彼等の實感に訴へる力に於て、眼前の賃金や時間よりも遙に輕微であるからである。例へば死は人間に取つて最大の恐怖である。併しながら乞食が一飯を失はんとする場合、盗人が捕縛から逃れんとする場合、青年が戀人に背かれんとする場合、投機師が山の脱れやうとする場合に感ずる恐怖は、死のそれよりも遙に強い。時間の隔りは人の感情を稀釋すべき最も大きな要素の一つである。社會主義者や無政府主義者の說き示す未來の理想社會が、如何に勞働者を心醉せしめるに足るものであつても、彼等をして卽座に其實現のために奮起せしめるには、距離が餘りに遠すぎる。剩餘價値を搾取する資本主義の根柢を覆すよりも、差當り賃金の幾分かを値上して貰ふことの方が、多數の勞働者に取つてはもつと緊要な問題である。殊に學理の上から現代社會組織の不合理を究明したり、經濟制度の缺陷を指摘したりすることは、自ら勞働の苦痛を嘗めたことのないインテリゲンチヤの頭腦から案出されたものであることが爭はれない事實である以上は今日思想界に大きな刺戟を與へつゝある社會革命に關する諸學說は、悉くこれ苦痛の實感から生れたものでなくて、眞理を求め、正義に殉じやうとする心が、智識の模索の間から發見した所の一つの理論である。この理論を眞に能く理解するがためには、之を發見したる學者と同じ程度の智識を具へ、同じ程度の思索を經なければならぬ。併し之は言ふまでもなく、極めて少數なる篤學の士にしか望まれないことである。一般の者は唯其梗概と結論だけを聽いて首肯するに

止まるのである。併しそれすら差當り急迫した苦痛に驅られてゐない、比較的餘裕ある心境の所持者に限られる。一日の勞働を了へて疲勞と飢渇とに充たされた體軀を、辛うじて己れの宿所に運ぶ勞働者の群に取つて、何の學説が望まれ何の思想が求め得られやうか。彼等の得んと欲するものは唯パンである。唯肉體の慰安である。今日の晩餐の膳の上に備へられる酒の分量が、昨日よりも一合多いといふことは、一世紀以後に於ける資本主義の崩壊よりも、彼等に取つては遙に耳寄りな話である。彼等の興味を誘ひ、熱情を喚起し、努力を強ゐるものは常に唯眼前の實利である。是とするも非とするも之が過去及現在に於ける勞働者の大多數の心理であることを否むわけには行かないのである。

私がかくいふたならば、プロレタリヤの御護符を以て自任する一部のマルクス及レニン切賣業者や、眞に階級憎惡の念に充たされたる少數の左翼勞働組合員等は、種々なる辭柄を設けて私の謬見を匡さうと試みるかも知れない。私はそれ等の人々に五月二十日發行の『勞働者』に掲載された『知識の販賣屋』と題する一感想文を示したい。此新聞は如何なる種類の人々によつて編輯されるのか知らないけれども、隨分階級鬪爭氣分に充ちてゐる。しかも其中に次のやうな一節がある。

「埃立つ工場でハンマを振つたり汗みどろになつて車を引つぱらねば、その日〳〵の生活をやつて行けない人間に、そんな連中(社會主義や無政府主義の理論的紹介者たるインテリゲンチヤを指す)の書いた小むづかしい書物に眼を晒してゐる暇があらうか。かう言へば勞働者は、永久無智でおはらなければならないかと言ふことになるが、勞働者には勞働者としての實感がある。なるほど彼等の書いた理論も、時としては茶の代りになるくらゐなこともあらうが、しかしそれで實感が動かし得られると思つたら大間違ひである。……だが彼等だつて棲むに家なく、着るに着物がなく、食ふにパンがなくなつて見給へ、もう默つてはゐない。……ぐず〳〵吐すな、やつつけろい――と云つたやうに、

すべてはおしまひである。そこに何等の理論がなり立たう筈がない。だがそれを以て勞働者は無智だとか、輕擧妄動だとは云ひ得られない。たゞ彼等には、永い間虐げられた經驗と實感があるのみだ。しかしすべてはそれでたくさんだ。と云つて俺は、何も智識と云ふものを輕蔑する譯ではない。要は、實感の伴なつた智識でなければならないことだけだ……」

實にさうだ。プロレタリヤを動かすものは智識ではなくて、實感である。此實感の中に階級意識が體得せられ、闘爭意志が發動した場合に於てのみ、階級としての勞働者は驀然として起つであらう。併しながら彼等は未だ曾て起たなかつた。起たなかつたのは社會主義の思想が未だ彼等の實感の中に捕捉されてゐなかつたからである。社會主義が未だ彼等の實感の中に捕捉されてゐなかつたことは、やがて彼等を階級意識の下に結束することできなかつた所以である。彼等を階級意識の下に結束することができなかつたことは、やがて彼等を階級闘爭に直往せしめやうとする企圖が曾て成功しなかつた所以である。

六

そも〳〵階級闘爭とは何であるか。闘爭の手段は如何やうにでもあれ、其闘爭に參加する當事者が先づ階級意識を有し、己れの屬する階級の利益のために、之に抗敵する他の階級と戰ふといふ意圖によつて行はるゝ闘爭がそれである。然らば階級意識とは何であるか。それは單に我は資本家であり、彼は勞働者であるといふだけの自覺を指すのではない。我はブルジョアとしての階級に屬し、彼はプロレタリヤとしての階級に屬する。しかも此兩階級は現存の社會制度の下に在つては、必然的に利害相反する經濟的關係によつて支配される。ブルジョア階級の現に有する利益と特權とは現社

會組織を此儘維持することによつてのみ確保せられ、プロレタリヤ階級の將來に望まれる利益と幸福とは現社會組織を根本的に改造することによつてのみ期待せられる。此故に此兩階級は終局まで相鬪ふべき關係に置かれてゐる。而して我はブルジョアであり、彼はプロレタリヤである。從つて我と彼とは何方かゞ絕對に征服せられるまでは相戰はなければならぬ運命に在るといふ自覺が即ち階級意識である。少くとも社會主義學說の上に於て、階級鬪爭を導き出す心理的原因としての階級意識とはこれである。此階級意識に發端して、各々が其階級の利益を擁護するがために、ブルジョアは飽くまでもプロレタリヤを現在の被搾取的地位に膠着せしめることを目的とし、プロレタリヤは現經濟組織を覆滅して、社會主義の理想を實現することを目的とし、各々がそれを意識して行はるゝ鬪爭のみが階級鬪爭と名けらるべきである。從つて鬪爭の名目が雇傭條件であつても、工場管理であつても、產業國有であつてもそれは問題でない。要は唯階級意識の存否と社會主義の實現が窮極の目的とされてゐたか何うかによつて、勞働爭議が階級鬪爭であつたか、なかつたかを判斷すべきである。

果してさうだとするならば、過去の勞働組合運動の大部分は階級鬪爭ではなかつたと言つて然るべきだと私は思ふ。何となればそれは主として雇傭條件の改善を目的として行はれたからである。經濟學的に言へば資本と勞働との間に於ける生產價値の分配を目的として行はれたからである。勿論階級鬪爭なる語の意義を純客觀的に解釋するならば、此種の爭議も亦階級鬪爭と名け得ないではない。現にしか名くる學者もある。併しながら事實に於て一工場、一地方、若しくは一產業に於てのみ行はれる勞働爭議は、其目的も又其効果の及ぶ範圍も、其爭議に參加した者の上にのみ限られることは言ふまでもない。從つて其爭議は當事者以外の勞働者の利益に反して行はれる場合が屢々あつた。此場合に利害を害される虞れある勞働者は、當事者たる勞働者の行動を掣肘し、或は進んで之を抑壓するために罷業破りの手段に

出づることすら稀でなかつた。勿論此種の鬪爭と雖、それが全勞働者階級共通の利益のために、共同して決行される場合、例へば總同盟罷業といふやうな場合を想像するならば、全く他の勞働者の利益に反しない鬪爭たるを得ないではないけれども、現存の個人的資本制度の下に於て、生產の價値の分配を目的とする鬪爭が、全勞働者階級の總同盟罷業の形を取り得るか何うかは理論的にも疑問であり、又實現の可能性は極めて乏しい。過去に於ても固より其例がない。即ち此種の鬪爭は常に必ず、或一人の傭主若しくは一種の產業に從事する傭主の集團と、其傭主に使用せらるゝ被傭者との間に於ける利害の衝突によつてのみ行はるゝものであつて、決して當事者以外の傭主なり被傭者なりの利害に何等の關係をも有するものでない。若しそれが間接に當事者以外の傭主被傭者の利害に影響したとするならば、それは單に偶然の結果であつて、鬪爭の目的の中には存しないものである。從つて當事者以外の傭主被傭者等は、時としては善意の中立者であり、時としては惡意の干涉者であつて、決して傭主は常に傭主を援助し、被傭者は常に被傭者を支持するといふ關係に在るものではない。若し資本家と勞働者とが相爭ふといふ單なる客觀的事實のみに據つて、それが階級鬪爭と呼ばるべきであるとなるならば、其當事者が鬪爭の結果として受くる所の利害は、必然的に資本家全體又は勞働者全體の利害であるといふ客觀的事實が之に伴はなければならない。然らざれば其鬪爭は、主觀的にも客觀的にも、全く階級といふ要素を失つてしまつて、唯單に當事者のためのみにする鬪爭に過ぎないからである。しかも過去の勞働爭議が屢々資本家間又は勞働者間の利害の不一致のために、幾多の非階級的紛爭の原因となつたことは、事實の教へる通りである。

右の如き關係に在るがゆゑに、雇傭條件の改善を目的とする資本家と勞働者間の經濟的鬪爭は、之を一箇の社會現象として見るならば、企業家と企業家との間に於ける利潤の爭奪を目的とする經濟的鬪爭、若しくは勞働者と勞働者との間に於ける生活資料の爭奪を目的とする經濟的鬪爭と全く其意義を等しくするものである。それは全く階級としての利

害を超越したる、個人對個人の鬪爭と看做すべきものである。例へば獨佛兩國が開戰の意圖を有つて居つたとすれば、一斥候兵が國境を横切つただけでも、兩國が干戈相交へたことを意味するけれども、平和の際に、兩國の水兵の一群が何處かの酒場で大喧嘩の末に相殺傷したからと言つて、兩國の戰爭を意味しないのと全く同一である。即ち酒場に於ける獨佛兩兵の喧嘩が、獨兵と獨兵との喧嘩、佛兵と佛兵との喧嘩と等しく、單に一個の警察事故に過ぎないと同じやうに、雇傭條件の改善を目的とする勞資間の鬪爭は、單に一箇の經濟的爭議であつて、階級鬪爭と呼ばるべきものではないのである。

七

既往に於て、雇傭條件の改善を目的とする勞働組合の努力は、政治的方面と經濟的方面とに向けられた。しかも政治的方面に於ては現政治機關を通じての立法的手段を以てする團結權の承認と勞働時間の制限とを主眼とし、經濟的方面に於ては團體交渉權の運用と同盟罷業の敢行とを武器として、勞働報酬の增額に主力を注いだのであつた。

政治的手段も經濟的手段も、近世產業組織に固有の弊害たる契約自由の原則に制限を設けて、勞働者の生活改善に貢する所が少くなかつたことは言ふまでもないけれども、政治的手段は專ら國家機關の發動に俟たなければならないがために、經濟的手段に較べると、效果が一般的である代りに、其發展は極めて鈍重なるを免かれ難い。工場法を修正すべき一法律を得んがためにも、數十年の間斷なき努力を必要としたやうな例が稀でない。從つて賃銀の如き日々の生活に直接關係ある雇傭條件の變更は、勢ひ之を經濟的手段に俟たなければ、到底其効果を收むることはできない。乃ち過去に於ける勞働爭議の大部分は賃金問題を中心として發生したものであつて、團體交渉權の獲得並に其前提なる同種勞働者

の團結が、勞働爭議に於ける最大の武器とせらるゝ所以も、全く賃金問題の折衝上に、勞働者の地位を有利ならしめんがために外ならない。何となれば此武器なくしては、常に生活費缺乏の脅威を感ずる勞働者相互間に於て、就職競爭に基く賃金の低落を防止することができないからである。

既に勞働爭議の主題が賃金に在るとするならば、賃金增給によつて利益する者は爭議の當事者たる勞働者だけであつて、當事者以外の勞働者を含む公衆は何等の利益をも得ないのみならず、却て之がために不利を感ずる場合が屢々ある。何となれば若し增給の結果が單に企業家の利潤を削減するだけに止まるならば、其惡影響は公衆に及ばないで濟むけれども、若し利潤の削減が企業家の堪へ得る程度以上であるならば、彼は必ず製品の賣價を値上するか或は其品質を粗惡ならしめることによつて、增給に因る損失を消費者たる一般の公衆に轉嫁するに違ひないからである。競爭の激甚なる工業若しくは生産費中の主たる因子が賃金であるやうな工業に於ては、實際賃金一割の値上が其企業の致命傷であるやうな場合は決して少くないのである。

公衆（當事者以外の勞働者を含む）は爭議の結果によつて不利を蒙むるのみならず、又其途中に於て必ず何等かの形に於て多少の迷惑を蒙むるものである。時としては其業務の執行を防げられ、或は進んで生活の安全すら維持することができないやうな場合が稀でない。例へば大都會の電車の運轉手が同盟罷業を演じたとするならば、數十萬の俸給生活者も、勞働者も、學生も甚しき迷惑を感ずる。電話、電燈の從業者等が同盟罷業をしても、市民の苦痛は之に讓らない。水道の如き生活上絕對的に必要で、しかも貯藏の困難な公用品の供給が止つたとしたら、忽ち數百萬人の死活に關する問題である。かゝる場合に感ずる公衆の苦痛は固より階級を超越してゐる。否寧ろ罷業者と同一階級に屬する下層民程其苦痛は大きく感ぜられる筈である。若しそれが階級鬪爭の一戰術として行はるゝ爭議ならば、彼等は之に堪ふべき義

務があるかも知れないが、一工場、一會社に屬する勞働者のみの雇傭條件の變更を目的とする非階級鬪爭に於ては、當事者以外の一般勞働者が之に困つて生ずる苦痛を甘受すべき道德的義務は存しないのみならず、自衞上已むを得ざる場合には、進んで罷業者を抑制すべき道德的權利を有するとさへ言へるのである。勿論かくの如き關係は、勞働組合運動の階級鬪爭化を企圖する社會主義者から見るならば、甚だ慨嘆すべき事情であるに相違ない。併しながら前段樓述した所の如く、一般勞働階級に於ける階級意識の未だ普及しない今日に在りては、如何ともすることのできない事情であると認めなければならない。

八

上記の如き關係に基いて直に起り來る重要なる一問題は、勞働組合運動の社會道德である。言ひかへれば勞働組合は其運動の目的と手段とに於て、如何なる程度まで公衆の社會生活の安寧を尊重すべき義務を課せらるべきであるかといふ問題である。これは勞働組合運動を總て階級鬪爭として觀察しやうとする人々に取つては比較的簡單なる問題である。何となれば彼等は普通の意味に於ての資本家或は勞働者にあらざる者と雖、必ず間接直接何れかを擁護すべき關係に在りとし、從つて全社會はブルジョアとプロレタリヤとの二大集團に橫斷せられ、相互に對立して抗敵しつゝあるものと考ふるがゆゑに、箇々の勞働爭議は悉く此階級鬪爭の一部面と看做されることになる。さうだとすると、此爭議によつて公衆の日常生活に及ぼす所の苦痛は、公衆中のブルジョアに取つては敵の攻擊に因る當然の苦痛として之に堪ふるの外なく、又プロレタリヤに取つては味方の奮鬪に基く當然の犧牲として之を忍ぶの外はないと言へるからである。從つて爭議當事者からすれば、敵の苦痛は却て此方の喜びであり、味方の苦痛は階級全體から寧ろ感謝を以て受取らるべき筈で

あるから、其處に對社會の道德的義務に拘束される虞れは絕無であるか、さなくば稀有であると見て差支ない、丁度國際間の戰爭に從ふ軍隊が、其戰鬪行爲によつて生ずる自國民及敵國民の損害に對して、何等の道德的義務をも負擔する必要がないのと全く同一である。併しながら私の信ずるが如く、過去の勞働爭議は階級鬪爭にあらずして、一箇の單純なる經濟的鬪爭であつたとするならば、爭議當事者と其他の公衆との間には、個人的の同情以外に、何等敵對方たるべき關係を有せざるが故に、爭議當事者が唯自己の利益を擁護することのみに熱中して、公衆の損害を顧慮しないやうな行動を取ることは、公衆によつて認容さるべきでない。社會は爭議當事者の道德觀念に訴へて先づ之を制止し、若し聽かれなければ政治機關の發動に俟つて、立法又は行政の手段を通じても之を抑壓することが、必要已むを得ない自衞の途と感ずるであらう。例へば他人に迷惑を及ぼさない野原の中の喧嘩ならば、當事者の勝手に放任して置いても差支ないが、町の群集の中では通行人を傷ける虞れがあるから、警察は公衆保護のために之を制止しなければならぬのと同樣である。勞働爭議の原因としては、非違が工場主にあらうとも、被傭者にあらうとも、彼等は何れもそれがために爭議に無關係なる公衆の安全を危殆に陷らしむべき權利を有するものではない。從つて公衆の安全を尊重することが爭議當事者當然の社會道德として遵奉されなければならないのである。

右の如き社會道德は獨り勞働組合に對してのみ課せらるべきでないことは勿論である。傭主が勞働者當然の要求を却けて行ひたる工場閉鎖に對しての責任は、被傭者が不當なる要求を拒絕されたるために發したる同盟罷業に對しての責任と輕重はない筈である。元來公衆の立場から見れば勞資の鬪爭は私鬪である。從つて公衆は如何に其鬪爭が激甚であつても、それが自分等の生活上に苦痛を及ぼさない限りは、冷靜にこれを觀過するのが常であるけれども、萬一それが自分等の安全を脅威する程度に發展して來ると、即時に此鬪爭を停止して、舊來の常態に復さんことを希望するものである。

しかも此希望は工場閉鎖又は同盟罷業によつて公衆が感ずる苦痛が大なれば大なるほど、强くなりまさることは勿論であるから、飲食物、交通機關、燈火、燃料等の如き生活必需品の供給が停止するやうな勞働爭議の發生に當つては、公衆は自己の生活の安全を慮るのあまり、爭議の原因及經過の如何を顧ず、又其非違が勞資何れに存するかを究むるの暇なく、ひたすらに就業の常調に恢復せんことをのみ强要するが如き態度に出づることは免かれ難い所である。しかも過去の統計の示す如く、勞働爭議は大部分の場合、先づ被傭者の傭主に對する要求條件の提出によつて火蓋を切られ、其結果が同盟罷業となるのが普通の順序であるから、爭議の內容には關知しないで、唯單に同盟罷業によつて阻害される生活上の便益にのみ交渉を有する一般公衆の心理としては、作業停止の責任は常に被傭者の側に在ると速斷し、從つて之に原因する公衆の不安を取除く方法としては、速に被傭者を抑制して復業せしむるより外にないと感じ易いのである。而して此公衆の感情は何時しか行政の當局者や言論の機關を動かし、心中公平を期しつゝも、知らず識らずの間に罷業者側を制肘し、彼等の行動に干渉を加へ、延て傭主側を曲庇するが如き結果に陷り易い傾向の存することを否むわけには行かないのである。

若し公衆並に其利益を代表すべき地位に在る官公吏が、常に公正不偏なる審判者であるならば、勞働組合は安じて其爭議の裁決を官公吏の手に委ねたかも知れない。併しながら勞働組合は官公吏の公正不偏を信じない。それは必ずしも官公吏の人格を疑ふからではない。それは同盟罷業によつて生ずる生活不安の責任を、いつも爭議の發端者たる勞働者に課せやうとする公衆の無理解なる批判に動かされ易い官公吏の心理を疑ふからである。これは勞働組合としては決して不當なる疑ひではない。この疑ひこそは過去に於て經驗されたるあらゆる種類の强制的勞働爭議審判制度に對し、勞働組合が終始强硬に反對し來つた所以である。勞働組合に對して如何に社會道德を尊重すべきことを力說しても、彼等

の行爲が公衆の立場から不道德であるか何うかを批判すべき標準が、眞に公正不偏なる形態に於て確立されない限りは、勞働組合は決して此要求に服さないのみならず、却て彼等をして現社會制度を呪詛せしめ、階級鬪爭思想宣傳の素地を開拓せしめるに過ぎないであらう。現社會は勞働者のために存しないやうに、資本家のためにも存しない。あらゆる一部のために存せずして、唯全體のために存する以上は、階級鬪爭の修羅から社會自らを濟ふの途は、只各人が全體としての利益を一部の利益の上に置いて、あらゆる社會現象を批判するといふ一事の外に何があり得やう。勞働組合運動を階級鬪爭思想の浸潤から庇護して、現代社會生活の缺陷を各人の理性と愛情とによつてのみ革新しやうと志す者は、深く思ひを玆に致さなければならない。

原首相暗殺者

中岡艮一の刑の量定に關する予の辯論

今村力三郎

序論

中岡艮一の辯護人として辯論の焦點は一に刑の量定如何に存す。死刑か無期刑か或は有期刑か殊に現行刑法は殺人罪の法定刑が、三年の懲役より死刑に至る廣き範圍なるが故に、一層刑の量定が困難の問題となるのである。即刑の量定に關係ある各方面の資料に依て詳細の意見を述ぶることが辯護人たる吾輩の任務であると信ずる。殺人罪に於て被害者の有せし社會上の位地は勿論刑の量定に多大の關係がある。現に法律に於ても被害者の位地に依て法定刑を異にしてある。

東京區裁判所に於て最近面白い實例があつた。堺利彦を殺害せんとして殺人の豫備をして捕へられて公判に附せられた被告に、立會檢事から其意氣を壯とするとの論告があつて、判決は懲役六ケ月で執行猶豫になつた。其後間もなく岡警視總監を暗殺せんとして殺人の豫備をしたものがあつた。同じ東京區裁判所は懲役五ケ月に處して執行猶豫を與へなかつた。

堺利彦と岡喜七郎と何れが偉いか。現在は一は社會主義者の首領、一は警視總監で極端なる正反對に立つて居る。天下後世文化史思想史を書くものは又各其見る所があらう。夫れは別問題として被害者に依りて刑の量定を異にするとは此一例に依ても判る。

一國の總理大臣を暗殺したのであるから刑の量定は重かるべきことを豫想するが、併し其被害者たる總理大臣が如何なる政治を施したか。暗殺は被害者自ら招きたる傾向はなかりしや否、又其被害者の死去は一國の政治上に如何なる損害を與へしや、其損害の程度如何等の問題を研究して、之を刑の量定の資料に供し、更に既往に於ける他の類似の事件の判決を援用して比較研究を爲し、猶歴史に遡つて暗殺の史的考察を爲す等が私の辯論の範圍である。

辯護人は、原氏暗殺の事あるや直に暗殺に關する社會心理を

研究せんと欲し、全國の友人に依頼し、各地の新聞の之に關する評論を蒐集したが、其數實に二萬種に近いものが集まつた。然るに其後に至り、同郷の先輩中邨彌六博士（被告中岡艮一は博士の姉讀子の嫡孫なり）より中岡の辯護の依頼を受け、偶然先に蒐集せる全國の新聞が、私の辯論の資料となつたのである。

多くの新聞紙中には勿論原氏を偉大なる政治家として之を謳歌するものもある。最大級の讃辭を呈するものもある。併し其反對に原氏の政治的施設に攻撃を加へたるものも亦頗多い。辯護人は原氏を攻撃するもの〻みを材料とすることを不公平の様に考へないでも無い。然れども原氏崇拜謳歌の論を擧示するとは寧ろ原告官の仕事であると思はれるのと、辯護人が贊成反對兩派の説を援用すれば議論が錯雜して甚聽苦しくなることを恐れたのと、又原氏攻撃の説を引用するも、之を以て原氏の公人たる生涯を判斷決定するのでなく、唯社會の各方面に斯様の説のあることを記憶して頂く爲めであること等に依り、原氏に不利益なる評論が自然多く引用せらる〻ことになつた。

原氏に對する社會の反感は驚くべきほど強きものがあつた。其一例を擧ぐれば、山陰方面の某新聞は原首相誅せらると題して號外を出した。四國と九州では號外賣が萬歳々々と叫けんで暗殺の號外を賣つて歩いた事實がある。

辯護人は苟も暗殺を稱讃したり或は暗殺を煽動するが如き言葉を用ゆることは注意して之を避けるのであるが、或程度迄の批評や、他人の爲したる評論を紹介することは許して貰ひたい。

大隈家では、來島恒喜の追悼會や年回のある毎に、金員を贈つて其費用を助くることを例としたと承るが、暗殺者と被害者と敵同士であつても、其志は國家に存し私怨でないからである。原氏の遺族及同政黨の人々も大隈家の雅量を以て辯護人の評論を許されんことを望む。

原氏の遺言狀に就て

原氏を平民宰相として最後に絢爛たる光彩を放たしめたるものは遺言狀である。榮爵を辭すると、葬式を質素にするとから、死亡廣告の文按に至るまで、近來流行の虚榮を避けたるとは、原氏が平民宰相を以て自任し、平民宰相を以て終始したるものとして何人も好感を以て之を迎ふるのである。然るに此何人も好感を以て迎ふべき筈の遺言狀に就てすらも必ずしも世評が一致したるもので無い。

辯護人は試みに其代表的のものを擧げて見る。

第一　遺言狀は原氏の政治上の施設と矛盾せることを指摘する説

十一月九日「九州日報」の社說に（前略）顧みて前首相が身後に薄葬を希望したのは一應質素情白らしく聞へないでも無いが、生前に於て資本主義貴族政治に終始し、民衆生活に理解と同情とを持たない原氏の遺言狀は、其政治的生涯と氷炭相容れざるものである。若し遺言狀の前文に尼港七百の同胞が慘殺せられて其遺骸は曠野に遺棄された事を思ひ、或は物價昂騰の爲め生を聊んぜず死に喪すること能はざる同胞の多き事を考へると、吾生前の施設に想到して慚愧恐懼措く所を知らず、責ては死後の葬儀を質素にせよと書添へたら或は意義を爲すかも知れぬ。

吾人の推測する所を以てすれば、原氏は資本家擁護政治なり、貴族政治なり、民衆生活に理解なき政治なりとの非難を抹殺するの目的を以て身後の葬儀を簡易質素にして、平民政治家であつた一身の榮達名利を希望せざる公人であつたと思はせる積りで、偖こそ生前と死後と斯く釣合はない事をしたのであるまいか。

昔宋の王安石が宰相と爲り新法を施行して宋の天下に害毒を流し、晩年退官して隱栖して居るとき、一日數尾の生魚を貰つたが安石は仁義の心之を喰ふに忍びずと云つて詩を賦し、物我皆苦を畏る、之を舍て寧ろ茹を喫むと言つたら、當時の識者は之を嘲つて惡政に因り、天下を毒して置きながら小魚を放すも何の甲斐もあるまい。昔梁の武帝が兵を窮め殺を嗜みながら、晩年佛教に舍身して牛羊豚の生物を犧牲にするに忍びずと麵類を、代りに用ゐたと同じであると笑つたことがある。爲政者は天下萬民を濟ふの道を講ずべきで、此天職を等閑に付し死後の棺槨墓銘なぞ心配するは安石が生魚を放ち梁の武帝が牛羊豚の犧牲を麵類に代へたと類を同じふするものである。

第二　政治家に死の覺悟は當然のことであるとの說

原氏を謳歌し稱讃するものは一死を覺悟して國政に當つたことを偉大なる政治家たる名譽を擔ふべき一方面と見て居る。

伊藤公爵が統監時代に長谷川好道將軍が警衞を嚴にすべきことを献策したとき、博文の一身は國家に捧げて居る、生死何かあらんと一喝して之を斥けたと好一對で、政治家たる風格が現はれて居る。然るに此死の覺悟に就ても識者は無條件に賛成する人のみで無い。

法學博士神戸正雄氏は雜誌「解放」に、

暗殺は何れの世何れの時代にもある。殊に政治家に刺客は隨分關係が深い。生命が惜しければ政治家なぞに始めから成らない方が安全である。苟も國家の柱石を以て任じ、國民の休

成に與るところの政治家は先づ生命を抛出して政務を執るべきである。而して白刃を踏んで懼れず、俯仰天地に愧ちざる公正博大の心事を以て自家の任務を行へば宜い。反對黨は何の政界にもある。正義を行むとすれば不正の徒輩は必禍害を與へんとする。夫れを恐れて左顧右眄するやうでは政治に參する資格は無い。本當に政治家の恐れなければならないのは自己の生命でない。自己の行爲が正義に悖らざるや否やの點にある。若し暗殺さるゝものに不正あれば暗殺者を咎むるより先づ己れ其途にあつて己自身を責むべきである。個人の道徳上より然あるべきのみならず、政治道徳の見地よりして又左樣でなくてはならぬ。即國家の爲より謂へば、不正を當然事とし、不正に麻醉し、不正を看過する輩よりも、不正を憎み、不正に驚き、不正を看過し得ざる者の存在する方が可いからである。前者は衰亡の端、後者は興國の兆である。

第三　死を決して地位を守つたことを千慮の一失とする說

三宅雪嶺博士は「中央公論」に死を決して位置を守つた所千慮の一失と云はうか、何と云はうか、隨分思ひ違ひをして居る。場合によつて飽くまで頑守すべきであるが、現在の政局は頑守するが可いか頑守せぬが可いか、尼港事件、普選事件、疑獄事件、司法官交迭事件など人の疑を解き得ない事が積み重り、夫れで頑守する必要が何處にあるか。[illegible]身を以て事に膺らねばならぬと云ふであらうが、責任を踏み付けにしてまで踏止まるべき危急の場合であるか。前總裁は伊藤公でも西園寺公でも逃げ足が迅い。伊藤の第四次内閣の如き腰の弱いのも餘りであつた。然し夫故伊藤が原より臆病と云へるかどうか。去るべきに去るを知つたのではあるまいか。誰が何處で殺されぬとも限らず、伊藤も哈爾賓で禍に罹つたが、國内では一度も刄を向けられなんだ。腰の弱いのは褒めた事でないとしても、唯徒に腰を強くして居るのが國家に利益あると云へるか。頑守して屈せず平氣で維持し何時死んでも可いと覺悟する所立派さうであつて、餘計な騷を起した譯になつて居りはせぬか。刺客は出るか出ぬか知れず、出ねば尚幾年か安全に續け得たらうと云ふが、非常な場合の外餘り人並み外れた事を爲ぬ方が可いでは無いか。今の日本は原氏が職に斃れねばならぬ程切迫して居らず、人物が拂底して居らぬ。法律に餘儀なくされぬ間、何をしても構はぬぞと云ふように見へる振舞は公人として深く戒しむべき所に屬する。原氏は其邊は譯らぬ筈はないのに、有象無象に押立てられ、餘計な事を爲るやうになつたのであらうか。死に重きを置き過ぎるは良い習慣でなく、死ぬ覺悟よりも如

何にするのが政界の爲、國家の爲、最有利であるかを考へるに若くは無い。立憲政治は本來闘爭を緩和するを旨とすべきものと見て宜い。或期間を經て内閣が更迭するのも、二大政黨が互に權を得るのも、餘計な騷が、起らぬ樣にしようとするのである。今の日本で政黨政治が思はしく成立たず、政府黨が何時でも總選擧に勝ち、位置を保たうと思へは何時までも保つて居るので自ら加減して進退せぬと兇暴を以て迫る者が出るようになる。

原氏が遺言狀まで書いて死を決して國政に任んじたと云へば一應偉人らしく聞ゆるのであるが、現代人は斯る行爲の外形のみを以て直に其行爲の價値を判斷することを許さぬ。進んで其行爲の動機や精神を究めて之を是非するのであるから、原氏の遺言狀に關しても如上の批評があるのである。辯護人が爰に原氏の遺言狀に關する批評を援用するのは二つの理由がある。其第一は遺言狀の如きは社會的關係の薄きものであり、且多數人の好感を以て迎へらるべきとを豫想したるものでさへも、斯の如く深刻の批評がある位だから、原氏の一般政治的施設に關し各方面の批評あるとは當然であるとの說明に供すると。第二は原氏が遺言狀を認め死を決して責任を踏み附け、其位置を頑守したとが暗殺を招いだとすれば、被告の責任は輕減せらるべき道理があつて、此點より刑の量定に關係があるからである。

第四　遺言書は政友會內の不純不正の分子が書せたとの說

十一月十二日の「大阪毎日新聞」に原氏の成程と題し

原首相は最初自分に刄を加へやうとするものがあらふなどゝは考へても居なかつたが、昵懇者から首相の身邊に危險が起る樣だと說かれて「成程」と合點し、以來さうした覺悟を有つたといふ。あの透徹な頭腦と比類稀な剛愎との持主が、他から說れたからと云つてあやふやのまゝ夫れに從ふ筈がない。自分で考へた末が成程になつたものに相違ない。

原さんは何う考へて其成程に行き當つたか、政友會の勢威隆々普通手段では之に當ることが出來ないから何處から何者が飛出して理不盡な卑怯な方法を取るかも知れぬと思つたのか。

そんな考もあつたであらうが、だが徹底せずんば已まない原さんの頭腦は、夫れだけの考へで行詰つて了ふ筈はあるまい。もつと考へて隆々たる勢威の政友會內に幾多の不純が藏せられて居ることをまざ／＼と見たであらう。

あの剛愎な原さんの目に「靑く光る刄の切尖」が幻のやうに映り初めたのは、透徹した其頭腦で政友會內の不純不正の分子が總裁原さんに「暗殺或は來らんとす」と覺悟させたのだ。

更に露骨にいへば政友會内獅子身中の蟲が總裁を刺客の的にさしたのだ。

あの簡朴な遺言狀を書くとき、原さんの胸中に徂徠した黑い影は未知の刺客の姿でなくして「おれを犧牲にするあいつらの顏で」あつたであらう。

多士濟々たる政友會員中總裁原敬氏の寵位に面して疼しからざるもの夫れ幾人かある。

此說は原氏を殺したのも原氏に遺言狀を書く決心を與へたのも政友會内の不純分子獅子身中の蟲共であると云ふに歸着し、世上に於ける一部の觀察を代表したものである。

曾て星亨氏が暗殺せられたる際に於ても、丁度原氏暗殺の時に於ける如く東京市に瀆職事件があつて、其中心人物に政友會員が連坐した爲に、星亨を殺したものは伊庭想太郎にあらずして彼等不純分子であるとの說があつた。星亨でも原敬でも彼等の乾兒に不正不純の輩がなかつたならば、決して暗殺の災禍を招く事はなかつた。夫故政友會内獅子身中の蟲が原氏を殺したとの論斷は敢て誇張された結論ではない。是亦被告に對する量刑の參考たるべき強き理由である。

暗殺を不謹愼の言論の罪とするの非を論ず

暗殺の原因を論ずる人々の内にて、之を不謹愼の言論の罪とする人が少くない。此種の說に依れば、中岡艮一は不謹愼なる言論に誤られて大事を決行するに至つたのである、不謹愼の言論が無ければ中岡の犯罪は發生せぬと云ふに歸着するのであるから、中岡の罪よりも不謹愼の言論の罪となるので、刑の量定に於て中岡の利益となるべき外觀を呈するが、結局不謹愼の言論に誤られて輕卒に大事を決行したるの責任甚輕からずとの論結に到着すべき事は察するに難からず。現に立會檢事も春秋の筆法に依れば過激の言論が原首相を殺すなぞと言ひつゝ、被告に死刑を要求したのである。故に辯護人は更に進んで彼等の所謂不謹愼の言論とは何を指すか。中岡は果して輕卒にも此不謹愼の言論に誤まられたるものなりや否を論究する事を必要と信ず。

暗殺の責任を不謹愼の言論に歸するの議論は、地方に於ける政友會の機關新聞に多く見出すところであるが、辯護人は就中其代表的にして最權威ある鈴木檢事總長の高說を拜借し、一言の批評を呈する事にした。

十一月七日の「中外商業新報」に言論を愼しめ、艮一が好い手本、過激な言論首相を殺すと題し、鈴木檢事總長談と銘を打ち、原首相暗殺者中岡艮一に關する犯人搜査の件は、其當

日其筋より報道を禁止されて居たが、昨夜八時に至り解禁されたので、鈴木検事總長を麹町三番町の自邸に訪へば、總長は「豫審の内容に就ては絕對に語ることが出來ないが」と前置きして慨然たる面持にて語り出す「原首相を刺した犯人は何の思慮も主義も無い少年で、言はば泡の如き生半可な男であつた。其彼が斯の如き大事件を惹き起したのは過激なる言論に惑はされた結果で、而して其結果たるや國家に損害を與へ、人心に動搖を釀し、誠に遺憾千萬の極みである。故に言論を發表するものは飽まで注意して貰はなければならない。併し過激な言論をなす人と雖ども當人は何も直接行動に出よと煽動し、又さうした考へで書き或は叫ぶのではない事勿論であるが、多數の國民中には却々に曲解者も多からうし、危險此上もない。現に彼こそ其一人である。故に之を春秋的筆法を借れば過激なる言論を爲すものは今回の犯罪を製造したとも云ふべく、換言すれば過激なる言論原首相を殺すとも云へる。實に愼むべきは言論である。一例を擧ぐれば假に今回の犯人が現内閣の失態秕政など言ふが如き言論を見て、今回の慘事を演じたとしても、無思慮で淺薄な彼は何處に失態があり何處が秕政か何等答ふる事は出來なからう。强て云はすれば唯徒に阿片滿鐵の名を擧げるに過ぎなからう。されば彼こそ過激な言論に惑はされた生た證據である。自分は幾度でも繰返したい。過激なる言論は世を惑はし人を惑はし惹いて國家社會を毒するものであるから。最冷靜に細心な注意を拂へと。而して當局としては之が取締に對し今後一層嚴密に又重大視して心を盡くす決心である。

被告は檢事總長の相像の通り原内閣の秕政の一として阿片事件を擧げて豫審判事に答へて居る。

若し原内閣が尼港問題、滿鐵問題、阿片問題にて世論の攻擊を受くる事がなかつたならば、首相暗殺の如き忌むべき事件は發生しなかつたであらう。

其處で我々の研究すべき事は、滿鐵問題や阿片問題で世論が攻擊するやうなことは原内閣や政友會に毛頭事實は無いのであるか、滿鐵問題阿片問題は原内閣の罪惡でもなく秕政でもないのに、新聞雜誌が曲筆して原内閣の罪惡である秕政であると攻擊し、被告が之に惑はされて大事を決行したのであるか。若し左樣とすれば、檢事總長の言の如く過激の言論不謹愼の言論が原首相を殺したとの結論に到着するのは無理とは云へない。

若し又之に反し、阿片問題、滿鐵問題が果して原内閣の秕政であり、政友會の罪惡であつたならば、之を攻擊することは苟も言論に從事するものゝ當然の責任であつて、罪惡と知りながら

之を辯護したり默認したりするものが却て惡に與する事になるのである。

自分が惡政を行ひながらも、他人の攻撃を喜ばぬは人情である。如何に惡事を行つても一人も之を攻撃するものが無かつたならば、爲政者には都合が好いかも知れぬが國家の正義は滅亡する。

過激の言論や不謹愼の言論を排斥する事は何人も同意であるが、罪惡を行つたものが名を不謹愼に藉りて己れを攻撃より免れんとするは卑怯であり狡猾である。

惡政を行ひながらも人民をして己れを攻撃せしめざらんとするは古の官僚思想であつて、今日之を夢見るものは一人も無い。更に問題の中心點に戻つて、果して然らば阿片事件や滿鐵事件が原内閣に關係ありや否の點を回顧せねばならぬ。阿片問題に關する公判廷に於て立會檢察官安岡靜四郎氏は被告中野有光に向て大正九年の四月五日になつて急に阿片の拂下が多くなつたのは、政友會の總選擧費用になつたのであらうと詰問した事もある。又阿片事件の辯護人等が當時の民政長官杉山四五郎氏を證人として申請したら、安岡檢察官は寧ろ原敬を證人に喚問した方が良く判ると述べた事もある。

又滿鐵事件の豫審決定書に

被告人直登は南滿州鐵道株式會社撫順炭礦庶務課長なりし所大正九年四月上旬頃同會社事務所に於て同會社老虎臺採炭所長福田政記に對し**搭連炭礦買收の金は政友會の選擧運動費に充てらるゝものなる**旨を告げ又同月十四日比右事務所會議室に於て撫順炭礦長井上匡四郎同次長田島楷吉前記福田政記及被告人列席の上搭連炭礦採礦に關する權利買收價格に付協議をなしたる際右匡四郎が被告人等に對し**搭連炭礦を買收し遣れば滿鐵の增資案の通過に都合好き**旨を説示ありたる事を知悉しながら右中西清一被告事件に付云々とある

搭連炭礦の買收が何故に政友會の選擧運動費となるのか、搭連炭礦を買收すれば何故に滿鐵會社の增資案の通過に都合宜しきや、何故に阿片の拂下と政友會の選擧費用と關係ありや、何故原氏が阿片事件に證人たるべき關係ありや、世間普通の道理に於て之を説明する事は出來ないと思ふ。明るい所で語ることも出來まい。言ふ迄もない原氏は政友會の總裁である。原氏は如何に之を説明するを得る乎。

由來官僚思想は、新聞や雜誌を輕蔑して其言論に重きを置かないから、辯護人は檢事總長の同僚たる安岡檢察官の言や豫審決定書の記載を拜借して茲に立證に供するのである。

帝國の司法官憲が公開の法廷や豫審決定書に斯く迄言明して

あるからには、此事件が原內閣と政友會と全然無關係であること斷定する事は困難である。公開の法廷に於ける檢察官の言明や東京地方裁判所の豫審決定書を過激の言論不謹愼の言論なりとする事は更に困難である。

滿鐵問題や阿片問題で、原內閣を攻擊したのは過激でも不謹愼でも無いとすれば、被告は決して過激や不謹愼の言論に惑はされて大事を決行したのではない事となる。併しながら阿片問題や滿鐵問題がなければ今回の大事件は起らぬ、內閣總理大臣原敬就任以來國政を用ゆるに私慾を挾み云々の斬奸狀を書くべき材料は無くなる譯である。果して阿片事件滿鐵事件がなければ今回の大事件が起らぬとすれば阿片事件滿鐵事件を作つたもの若くは之れに關係を有しながら責任を負はなかつた人達が今回の事件を惹起したものと云へる。

過激の言論不謹愼の言論が原首相を殺したのか阿片事件滿鐵事件のやうな攻擊材料を提供したものが此兇行を呼んだのか左程判斷に苦しむ問題でもあるまい

原氏は力の政治家なり

原首相遭難の翌々日なる十一月六日廣島市發行の「藝備日々新聞」に次の記事があつた。題は原敬論として蘇楚と云ふ記者の物語りである。

忘れもしない明治三十年斯く申自分が大阪放浪中の事であつた。其當時大阪在住の辯護士新聞記者其他あらゆる階級の人々が集つて京都天龍寺の峨山和尙を招じ、北野寒山寺で臨濟錄の提唱を聽聞した。自分も寒山寺の一室に假寓して居つたので提唱の席末に列したが、つい隣席に白髮赭顏仙臺萩の演劇に見る仁木彈正のやうな風釆の一紳士が居つたので、知人に「アレは誰だい」と尋ねると、其れは當時「大阪每日新聞」の社長原敬氏だと云ふことであつた。自分が原氏を見たのは此時が最初であつた。

偖提唱が終つた後、會衆は皆峨山老師の室に集つて雜談に耽つて居ると、老師は突然原氏に向つて「原サン先度の公案は解けたかな」と云ふと、原氏は如何に考へてもドーも浮びませぬと答へた。スルと老師は「お前さんは我が強いから解けんじやらう。我の強いものに禪は駄目ぢやから止めなさい併しお前さんも其我が取れんと其れが爲に身を誤るやうなことが出來んとも限らんがな」と云はれて原氏が苦笑して居つたのは今尙自分の記憶にアリアリと存して居る。其當時自分は老師もあまり口が過ぎると思つて居つたが、今にして思へば老師は流石に老師で眼の球が光つて居たのである。（下略）

此挿話と原氏遭難の當時新聞に傳へられた原氏が或時閣僚の一人に「參禪までしなければ自分の心が定まらぬやうでは駄目だと」云はれた話を對照すると、原氏は峨山和尚にお前さんは我が強いから駄目だと云はれたから、禪で我を取ろうとしないで禪を止めて我を通し、夫れで終始して遂に閣僚にまで禪を蔑すむ樣になつたのであらう。

禪を一歩踏超へて其上を行うとする所に原さんの傑出した點を認るが、此強い自我が政治上に各方面に力と爲つて彰はれた事を甚遺憾とする。

辯護人は先に陳述せし如く原氏遭難の翌日、全國の知人に依賴し此記事に關する新聞を蒐集したので、北海道九州朝鮮に至る迄大小二百種の新聞と都下に發行する有力の雜誌とを集めて其記事を精讀したのであるが、政友會の機關新聞が最大級の讃辭を呈するもの丶外、悉原氏は力の政治家であるとの斷定は一致して居る。政治家に力の必要なる事は言を俟たないが、力のみに偏する事は遂に自他の禍となる。

原氏は力の信者たるのみならず力の強弱を比較するに明察であつた。

尼港で同胞が七百人虐殺されても飽く迄無責任で押通した。

浦潮で一米人が衞兵に射殺されたら、直に旅團長に責任を負はして待命だか豫備だかにした。

尾崎氏の軍備縮少の建議案は卽決否決にしたが、其後半年経ぬうちに米國の軍備縮少會議に贊成した。

普選案を口實に議會を解散して絕對多數を占めた。

原氏は自己の力の充實せさる時は桂公とも寺內伯とも提携した。一旦自己の力が賴むに足る程度に達すると宥赦なく戰つた。

原氏は力を比較し強きものとの爭を避け弱きものには飽くまで強かつた。原氏の貴族院に於ける態度と衆議院に於ける態度が能く之を說明する。

原氏が白耳義の大宰相であつたなら決して獨逸と戰を開かなかつたであろう。

原氏が力のみの政治家であつたとか、原氏は政黨を率ゆるに封建時代の遺物たる親分乾兒の關係を以てしたとか云ふ批評は日本國中に普遍的に行渡つた識者の一致したる意見であつた。

力の政治家と云ひ、親分乾兒の政治家と云ふは、畢竟二にして一つで、力の政治家と云ふは原氏の政治が外部に對する關係を見て云ふものであり、親分乾兒の政治家と云ふのは原氏が內部を統率する關係を見て云ふものである。併し何れにしても經世家若くは立憲的政治家と云ふ意味とは距離がある。

原氏が力の政治家でも、親分乾兒の政治家でも、之を暗殺して宜しいとの結論は生れぬ。然らば辯護人が斯ることに論及するは無用の辯の如くであるが必ずしも然らずである、其論は力を以て立つものには自然力の敵を招くのであるから、即被告の兇行は他の力に招かれて玆に至つたと見る事が出來る。此意味に於て刑の量定に多大の關係がある

辯護人は此點に付自己の卑見を述べるよりも、識者先覺者たる數氏の意見を紹介する事が、最有力にして公平と信ずる。

德富蘇峯氏は明治廿三年以來原氏と舊識であると云ひ、十一月六日の「國民新聞」紙上に原敬君と題する故人の批評中に

君は政治家的天分過多にして經世家的天分は過少であつた。此一點に於ては君の先輩陸奥君とは大なる相違がある。陸奥君は大なる缺點あつたに拘はらず、猶ほ是經綸の才であつた。君には國家の大經綸と云ふが如きものは不幸にして無かつた。(下畧)

德富氏は原氏の長所短所を十項に分つて評論してあるが、其第六項に

君には一種の親分氣質があつた。餓鬼大將でも輕薄なる餓鬼大將もあれば執着なる餓鬼大將もある。君は前者にあらずして後者であつた。一たび君と交を締したものは其同輩と後輩とに拘はらず必ず一旦緩急あれば君に竢つ所があつた。而して君も亦必ず之に酬いた。若君が大なる汚點を我憲政史上に殘したことありとせば其理由の一半は之に存す。

此結論に

記者は返す〲も君程の人物にして國家に殉せずして黨派に殉したるを遺憾とすると結んでゐる。

德富氏は一代の文豪であるから、用語も洗練せられ、言廻しも婉曲であるが、地方新聞になると極端な文辭で露骨に言顯はしたものが少くないが、辯護人は一々之を列擧するの煩を避ける。唯原氏の黨畧本位の政治が此災禍を招いたとの言論が、北は北海道より南は九州の端まで甚多くあつた事を言明するに止める。

次に中野正剛、尾崎行雄、犬養毅、江木千之、後藤男爵、諸氏の意見を紹介する

中野正剛氏は十一月七日「國民新聞」に描き出せる現政界と題し

(前畧)端的に言へば在朝政治家の無恥横暴と在野政治家の無力無經綸とは遂に今回の慘劇を演出せしむるに至つた。原内閣は權力と金力とを濫用して下院に二百八十名の大多數を制し得た。政權爭奪の覇道に於て彼等は確に當代の雄なるも

のである。乍去國家人民の爲に彼等は畢竟何をしたか。巴里講和會議以來外には日本同胞の活路を縮むるのみであつた。内には唯不自然なる積極政策にブルジョア政治の害毒を流し國民生活の基礎を脅威するのみであつた。物價問題、二枚舌問題、阿片問題、滿鐵問題等總て日本中の識者不識者をして當局者の悖德不信腐敗墮落を憤らしむる事件が續出した。然るに政府及與黨は所謂實力政治の福音を信じて囂々たる世論なぞ鐵牛に蚊が螫した程にも感んじなかつた。

（中略） 滿天下の心あるものをして議院政治に威信なしとの感念を抱かしむるに至づた。そこで短慮なる國民中には追々直接行動を唱ふるものを出すに至つた。先に安田を刺すもの今復原首相を刺すものを出すに至つたのは大勢の行詰りで激する所に外ならぬ。

兇手は與黨の中にあり

刺客の不可なるは論ずるを俟たぬ。文明國にては法律を以て人を殺す死刑の當否すら問題になつて居る。乍去權力を握る在朝政治家が單に議會に多數を制するを恃み、政權に依りて金權を私し、滿天下に腐敗の害毒を流して得意なるに及んで遂に熱狂敢死の人を出すは、已むを得さる必然の悲慘事である。

中岡某なる青年狂客が、兇暴にも勢威赫々たる首相を刺したとて徒らに是を憤るのは未だ着眼の狹小なるを免れない。劍に依りて天下を得る者は劍に依りて倒れろ、暴力を以て天下を保たんとするものは暴力に依りて倒れねばならぬ。原敬氏は政治家としての覇業天下に冠たるものがあつた。個人としては財利に淡く友情に厚かつた樣である。乍去其財利に淡いことも、友情に厚いことも、單に政權を握り暴力を養はんとする親分的機界の發露であつたら、氏の乾兒ならざるものが之に感服せざるは當然である。加之原氏の溫情に浴した乾兒なるものゝ醜態はどうであるか。氏の四天王三羽烏が悉破廉恥罪の嫌疑者たるに及んで、原氏は斷じて道德上の責任を免れぬ。原敬氏の暴力政治に就ての信念が、他の暴力的兇手を呼んだので無いとすれば、原氏を團繞する有象無象の破廉恥漢が間接に原氏を殺したと解せねばならぬ。

刺されたる原敬氏には同情する、乍去原敬氏の生死によつて原敬氏の政治に對する批評を二つにすることは出來ぬ。活きたる原敬氏を醜怪黨の巨魁となし死したる原敬氏を識見ある大政治家となすは同情に似たる輕薄である。己れ文明人たるを衒ひ己れ溫情家たるを示さんとす。卑しき虚僞的思想の發露である。

中野氏の説は原氏の暴力政治が他の暴力を招いたか、或は原氏周圍の破廉恥漢が間接に原氏を殺したのであるとの點が眼目であつて辯護人は此理由を假りて、被告は寧ろ他の暴力に招かれて此兇行に及んだのであるとの情狀を訴へて諸公の刑の量定の資料に供せんとするのである。

江木千之君は簡單なれど十一月五日の「東京日々新聞」に左の如く述べて居る。初めに江木氏と原氏との公私の交際を語り次に

（前畧）政治上に於ける原君の昨今の態度は兎角黨利黨略本位であつた如く感じた事は多年の友人として實に遺憾に思ふのみならず、貴族院議員としてこの立場からも此點は感服出來なかつた。（下畧）

簡單ではあるが一國の首相の政治上の施設を黨利黨益本位と斷定したる事は隨分强い言論である。貴族院に於ける重鎭江木千之氏の言論は國民の敬聽すべきであると考へる。

次に尾崎行雄氏は

十一月十四日の「東京朝日新聞」に

我輩は曾て星亨君が兇刄に殪れた恰度一周間程前に當つて星君の使の人が訪ねて來たので、恰度の此部屋で「星君が殺されはしまいかと思はれる」と注意した事があつた。此度の原君の横死に對しても昨年頃から我國の現狀より考察して幕末當時其儘の世相が現はれて居るので、何人かゞ伊井掃部頭の役割を勤めなくてならないことを觀察して居た。（中畧）如斯非立憲の蠻行が生じたのは甚だ悲しむべき事象であるが今日の政治其物が非立憲の甚しいものである。即立憲政治の下で封建政治的の蠻風が實在して居るのである。立憲政治では道理の下に政治を行ふのであるが、今日では議會の内外を問はず既政黨は唯數を力として道理を踏み潰して居るでは無いか。（中畧）

議會に於ても唯多數を以て無理押しに押し、投票のみを以て勝敗を決するで、何等討論の正理に基きての勝敗では無く力の勝敗である。是をしも立憲政治と云はゞ時代錯誤甚しきものである。殊に前々議會よりして政友會は多數を頼んで極めて露骨なる行動を採つたことは國民に對して如何なる觀念を起さしめたか。彼の懲罰事犯に於ても自黨より懲罰事犯を起せば無罪となし敵黨より出せば直に除名處分に處せんとするが如き唯力に依りてのみ押通さんと試み、道理を履みつけて力の濫用をした。此結果が社會に反映し、暴に代ゆるに暴を以てせんとの思想を與へたのである。原君を刺したことは即暴力を濫用した表現であると考へる。斯の如き力を以て道理

を敲き倒して進む空氣が社會に感染して氣狂を出し兇漢を生むに至るのである。(中畧)

正理を事實として形めば、兇漢の如きは出現しないのである。

尾崎中野兩氏の説は原氏の暴力政治が他の暴力を招いたとの點に於て一致して居る。我々は兩氏が政治上原氏の反對の立場にあるが故に惡言を放つものと解する事は出來ない。何んとなれば兩氏の所説は何人も推拒む事能はざる現在の事實に立脚して居るからである。

次に辯護人は犬養氏の所説を援用する。

十一月六日「萬朝報」「やまと新聞」其他に

暗殺行爲は民心鬱結したる場合に起る。政治に暗き影の伴ふあらば暗殺の跡亦絶へず。不當なる官權の行使を廢止純粹の言論によつて政治を議する時代を作れば、暗殺行爲は自ら其跡を絶つべし。(下畧)

犬養氏の説は簡單なるも暗い影の伴ふ政治を行つたものが暗殺を誘起したりとの點に於て强き意味を有す。其説く所粗と密との相違あれども、其趣意の存する所は中野尾崎江木犬養の諸氏悉く一致して居る。

次に男爵後藤新平閣下は十一月十二日の「萬朝報」に

原首相の兇變は如何にも氣の毒なるも、多くの新聞紙が政友會機關新聞なるかの如き調子あるは、如何なる故にや、氣の毒なる爲め平素の主義政策に對する反對を帳消しとしたる譯にあらざるべし。されば首相の葬儀終了後は、各新聞も其立場より種々議論するならん。一體首相暗殺事件は單なる殺人事件と見るは如何なるものにや。春秋の筆法を以てせば何とか言はざるを得ざるべし、彼の滿鐵阿片其他の疑獄事件を惹起さしめたる原因、夫れに關聯して俄に檢事總長を更迭せしめたること、及上下兩院の多數團體を擁して無理押しを爲したる爲め輿論沸騰し居ることなれば首相暗殺に關しても、後世の史家は種々評論せるならん。(後畧)

後藤男の所説は、各新聞が死者に諂ひて正々堂々たる評論を下さゞるを歯痒ゆしと思ひて此言を爲したるものなるも結論は前に擧げたる諸氏と同一に歸し、原氏の無理押が此暗殺を惹起したりとする點に於て一致して居る。專門政治家は口癖のやうに我々を政治の門外漢として、我々に政治を談ずる資格なきものと見て居られる。又檢事總長の如きは被告中岡艮一は何の思慮もない泡の樣な少年だと見て居られる。夫れで我々は自ら政治門外漢たる事を甘んじ、其代りに有力なる門内漢の言を借りて原氏の政治的施設に評論を加へたのである。以上諸名士の

所見が悉く原氏の暴力政治や與黨の破廉恥漢が今回の兇行を招きたりとの一致せる意見は傾聽に値するものがあると信ずる。

原氏は責任を顧みざる政治家なり

原氏が政權に執着して一世の攻撃を受くるも退く事を爲さず當然負擔すべき責任あるものと輿論の認むるものに就ても何等の責任を負はざることが此兇變を招きたりとの識者の批評も甚少くないのである。

杉山茂丸氏は十一月六日「九州日報」に

首相の兇變は意外と云へば意外であるが、實は遲くとも阿片問題や滿鐵事件、東京市疑獄事件の如き不祥事の續發に顧みて其時に進退を決して居たら今日の兇變には遭はなかつたと思ふ。慢性の政權慾病が原氏を死地に導いたの感がある。星享の遺口と共通した點が最後の運命を同ふしたとも今日から見れば見られぬでも無い。(下畧)

慢性の政權慾病とは奇拔であるが、原氏の場合に能く適中した言葉である。

大石正己氏は十一月七日の「東京朝日新聞」其他に

實に氣の毒の至りぢや。日本人の習慣として斯んな場合兎角の批評を下すと云ふ事は甚氣が進まぬが、然し公人たる原敬に對して忌憚なき批評を試みるのも決して禮を失するやうな事はなからう。

原の功罪　原君逝いて後に社會的政治的に何物を殘して居るか若何物をも殘して居ないとすれば政治家としても價値の無いものである。我輩をして言はしめば原君の功罪の大なるものが二つある。其功績と思ふのは政黨政治の確立である。眞に政黨政治らしくなつたのは原君の力である。政友會に對する善惡の批評は別として、政友會を政黨らしく守り立て、其基礎を斯く迄鞏固に築き上げたのも原君一人の力である。板垣から伊藤西園寺原と續いて來たが、原君以外の黨首にして黨の基礎を確立したものがあるか。西園寺にしろ伊藤にせよ出來得なかつた事業である。立憲政治の運用は政黨にあるのである。其政黨を眞の政黨らしく作り上げたのは原の政治的功績の大なるものである。又一面に於て閥族官僚明治年代を一貫して跳梁して來た官僚閥族に對し大打撃を加へたのも原君の功として良い。併し今日までの原君は積極的には何物も殘して居ない。原君として或は是から積極的に働く考へであつたかも知れぬ。今少し生かして置きたかつた。實に殘念である。次に原君の罪惡と信ずる方面を云へば、原君が逝いて無責任と云ふ事象を殘して居る。此事實は社會各方面に惡い例を貽

したものである。藩閥政府の絕頂時代に於ても、彼の黑田の拓殖拂下事件でも又湖南事件でも不可抗力の事件であつたが併し時の政府は責任を引いて其道を明かにして居た。然るに原内閣は例の尼港事件に於ても重大なる責任があるに關らず責任がないと稱して押し通して來た。又社會は腐敗し綱紀は紊亂其極に達し、而も政府の高官にして法律上の犯罪に問はれて居るにも拘らず、尙且責任を負はないで居る。之れは國家社會に對し惡例を殘したもので、實に原君の爲に惜しみても餘りある事である。

辯護人惟ふに伊藤公の憲法に於ける、山縣公の軍政及地方自治に於ける、桂公の日露戰役に於ける、一代の政治家たるものは皆國家に積極的の功を殘して居る。原氏に至りては實に大石氏の評する如く政友會の基礎は確立しても國家に一の積極的功績を殘して居らぬ。或は原氏をして今少し壽を保たしめたならば何か國家の爲め功績を殘したであらうと言ふ人もあるが、伊藤山縣桂の諸公は悉皆原氏の年齡以前に大仕事を遂げて居る。岐阜で板垣さんが相原に刺されたとき、板垣さんは板垣死すとも自由は死せずとの名句を吐ひた。此時に不幸にして板垣さんが死んだら、日本人は今日の政局を見て、若し板垣さんが生きて居たならば必我々を救て呉れたであろうと回顧するであらう。然るに板垣さんは幸に岐阜で死なゝかつた。而して板垣は死せず自由は死んだ生きた板垣さんは死んだ自由を救ふ事は出來なかつた。

原さんは過渡期の變則政治家であるから官僚の打擊以外に恐らくは何事も爲し能はなかつたであらう。

立憲政治は責任政治である。立憲政治に無責任の事象を貽したことは畢竟立憲政治の叛逆である。

原氏が無責任の爲め禍を買つたことは甚遺憾であるが要するに自ら招きたる傾向と認めねばならぬ。

三宅雪嶺博士は「解放」十二月號に

安田氏は自ら殺されると思はなかつたらうが、原氏はいつ殺されるかも知れぬと腹をきめ遺言まで認めて置いた。原氏は夙に覺悟して居つた。何故に爾く覺悟するに至つたか流石に聰明である丈斯くすれば斯くなることゝ考へたであらう。斯くすれば斯くなるものと知りつゝ尙押し通さねばならなかつたかどうか。辭職さへすれば何事も無いに定つて居る(中畧)若原氏が退くべき理由なく大命を拜して猥に辭する譯にゆかぬとあれば判かつて居るけれど自ら危險を感じたのは何の爲か。世間では剛情過ぎると思ふて居ろうと察したのではないか。剛情とは退くべきに退かぬのを意味するところなきか。

(中略)尼港事件に今少しく何とかせねばならず、選擧法改正も五大國の一に相當するに力むべきである。普選と云ふ程でなくても日本より人口の少ない英國で婦人六百萬に選擧權を與へた際、日本で總選擧にも此婦人選擧人の半分に止めて置くなど決して善いことでない。(中略)

普選案が少數で、否決せらるゝに定つてをるに拘はらず、衆議院を解散し總選擧で黨員の大增加を行つたのも剛愎と見えぬでも無い。酷いことをすると思はれる矢先、疑獄に次ぐに疑獄を以てし、政友會員に關係多く、中にのつぴきならぬものもあるのに矢張平氣でをり、事件が漸く發展したと見へる頃司法官は更迭し、人をして思はず知らず怪しいと云はしめた。(中略)政府關係者は滿鐵事件を以て大山鳴動して鼠一疋飛出すものと稱した。副社長の有罪は鼠一疋と云へるであらうか。(中略)

政府當局者は久しい慣れで特別に感ぜぬかも知れぬが、世間は相應に神經を惱まし、原首相を指して不知身と稱するに至つた。何があつても感ぜぬと云ふのである。世間の彼是云ふのに一々聽いて居つてたまるものか不知身で結構と云ふやうになつては聊か逆上氣味と云へぬでなからうか。氏ほどの聰明を以て何故に其邊のことが判らぬか。是程迄剛情張つては只ですまぬと思ひついた所が死を覺悟した所以でないか。死を覺悟するよりも强て無理をするものでないと云ふことを世間に明にする方が善かつたでなからうか(下略)

雪嶺翁の見所は、原氏が責任を蹂躪し强て無理を押通さんとする爲め原氏が暗殺を豫期して此遺言書を書いたのであるが、死を覺悟するよりも責任觀念を明かにした方が善いと云ふに在つて、原氏を無責任とする點に於て大石氏の說と一致する。

次に地方新聞の最單純露骨なる批評を紹介するが、此類の批評は頗多いから其代表的のもの二三に止める

「長崎新聞」十一月六日原敬論と題し

政友會は原敬氏に依つて大政黨となつた。而かも原敬氏の德望によりて政友會が大を爲したかと云へば何人も否認するに躊躇せぬのである。政友會總裁として原敬氏の傘下に集まるものは原氏の權勢に阿附して利益を漁る有象無象の群小政治家に過ぎないのである、原總裁の率ゆる政友會に加擔する地方黨員は鐵道港灣學校道路等地方的利權を餌にして誘拐せられたるに過ぎぬ。大なる德望あるものゝ下には德望あるものゝ集るは自然の道理にして、原敬氏の下に古賀廉造阿部浩中西淸一其他累紲の辱を蒙る如き鼠輩の多く集るのを以て見れば原敬氏の德望も推して知らるゝでは無いか。

世人往々彼を以て德川家康に比するものがあるが、彼が克己心の強き點に於ては實に慶長元和の狸爺と同様に明治大正の白頭狐と云つて差支ない。而も其利害の打算に明敏にして國家の政治を黨略本位となし政友會の黨勢を擴張すれば國家の利益も顧みざる點までが恰も德川家康が幕府本位で德川家の勢力安泰に何物も犧牲としたのと同一轍である。之を以て原内閣創立以來の施設を通觀すれば國家の爲に何等靑史を飾るべきの功業なくして、彼の千歲一遇の歐洲大亂後の講和會議も大失敗に終りたるが如き、德川時代に幕府の顚覆を恐れて何等の功業を成す能はざりしと好一對にして原敬氏の肚の中では巴里會議よりも總選擧の方が遙に重大視した事が想像せらるゝのである。

原氏が積極的に政治上の功績を擧ぐる能はざりし事を論難する點は大石氏の說と其揆を一にする。

次に「大分新聞」十一月六日原敬氏の横死と題し

（前略）原内閣に依りて流されたる害毒は朝に物價の昂騰朝に官紀の紊亂朝に黨弊の助長朝に言論の壓迫朝に官權の濫用其他僂指すれば殆んど際限が無い。國民は憤然として其非を叫び叫を擧て其暴擧を責めたが、原氏は更に之に耳を藉さず、依然として亂暴極まる政治に沒頭した。政友會は一絲亂れず此暴擧を助けた。斯くて望月の虧なき振舞はいやが上にも國民の怨府となつた（中略）

憲政の常道に依つて内閣を取つた原氏が、憲政の常道に依つて屑く内閣を投出したら實に名政治家として謳はれたであらう。政友會も亦將來永く生きたであらう。實に惜しいことである。

原氏が政權に執着せることを惜しむの情に於て雲嶺翁の所說と同一である。

次に「信濃日々新聞」十一月六日の社說に

（前略）權力家が無權力者に殪さると云ふのは怎いふ理由であらうか。一言に約すれば權力濫用の結果である（中略）權力の爲めに言論が用を爲さず所謂無理が通つて道理引込む時に於て刺客は現はれる。

權力者の權力濫用の爲に正義が世に行はれず弱者が虐げられる時弱者の反抗が刺客を生むのである。故に刺客は强者に對する弱者の反抗心であると云ひ得る。暴惡無道天人共に怒るとき突如として刺客は現れる。

權力者の暴威暴行が無名子の頭にまで浸込んだ時が危險である。

言辭に修飾なく婉曲を欠けども其說く所は一面の眞理である。

次に「福井新聞」十一月六日首相の兇變と題し

舊き專制政治は所謂力即正義と云へる觀念を基礎とし、力ありて政治の實權を握りたる以上は、其握りたるものに絕對の權力あり。其權力の命ずる所は總て正義にして生殺與奪も唯思の儘なりと爲し、有らん限りの專橫を敢てして顧みざるが故に、權力なきものが之に對抗するの道は唯直接行動の外は無いのである。故に專制時代に於ては刺客を放ちて之を仆すか、一揆暴動を起して之を斥けるかの記錄は歷史に其筆を絕たないのであつた（中畧）

然るに今や忽此凶變を見る所以のものは、其れ或は今の政友會內閣が立憲政治の名に於て專制政治の實を行ひ、力即正義と云へる舊き觀念のもとに餘に多く氣隨氣儘を敢てした結果端なく專制時代に於ける刺客を招き出したるにあらざるなきを得んや（下畧）

天下知名の政治家哲學者より社會の木鐸たる都鄙大小の新聞紙が論ずる所は、原氏は力の政治家なり、原氏は政治上に積極的の功績なし、原氏は無責任の政治家なり、原氏は政友會本位の政治家なり、而して原氏自ら此兇變を招きたりとの點に於て殆ど符節を合するが如きものあるを見る。

原氏の永眠は國家に如何なる損害を與へしや

原氏が暗殺せられて國家の一大損失であるとは敵も味方も異口同音に叫んだのである。果して原氏の死が國家の損失であるならば、其損失を與へたもの言ふ迄もなく被告中岡艮一であるから、被告は其責任を負はなければならぬ。從て原氏の死が與へたる國家の損失の程度如何の問題を研究する必要が起つて來る。

然れども此問題を徹底的に研究して損害の程度を計數的に明白にすることは到底爲し得べからざることである。又原氏を薨去せざるものと假定し、若し原氏が永へて居たならば國家に如何なる有益の政治を施したかと想像することも到底不可能のことである。夫故辯護人は原氏の生前に於ける政治的手腕と同氏死後に於ける政機の推移との兩方面から國家の損失程度を觀察して見たいと思ふ。

第一　原氏の生前に於ける政治上の功績如何

原氏の內閣組織以來實際政治の上に如何なる功績を樹てしや。閥族及官僚の勢力を驅逐し、政友會の大を爲したることは敵味方共に之を認む。而して閥族及官僚の驅逐が立憲政

治に進む第一歩なるを以て、此點よりして原氏の功績を稱揚するは敢て過言にあらず。然れども更に一歩を進め外交に內治に實際政治の上に如何なる施設を爲したりやと問はゞ之を數ふるに甚寂寥を感ずるのである。

杉森孝次郎氏の如きは「改造」十二月號に於て原氏の外政及內政の能力を甚輕蔑して「原氏の突然の死は政友會の損失である程に國家の損失でない」と論斷して居る。此種の議論は他にも甚多いのであるが、是を極論することは故人を傷けることになるから之を避けたいと思ふが、議論の順序であるから爰には單に「倫敦タイムス」極東通信員の通信を掲げるに止める。

此通信は京都發で倫敦タイムスに出たのを更に倫敦から日本へ電報せられ十一月十三日の日本の各新聞に掲載せられたものである。其全文如左、

タイムス極東通信員は京都發として左の如く述べた。自由を愛する分子は久しく原氏の隱退を希望し、同氏の死は進歩主義者流に新たなる機會を與ふるものである。日本の政治は官僚と改進派との爭鬪である。政友會は政權に戀々たるあまり先年の官僚軍閥派に買收せられて以來進歩的理想を代表せずと認めらるゝに至る外、最近頻發せる官吏收賄は黨の目的の爲之を揉消せる事無しとせるも、外には對支、對西伯利政策に軍閥を助けて內外の攻擊を招き陸海軍に歲入の半を浪費して教育費及公共事業費は爲に餘儀なく制限せらるゝの有樣である。事態斯くの如くであるから不滿の聲は既に深く、原氏の死は國家の爲め更に忠實なる新內閣の組織を見るの好機を與ふるものであると露骨に評せらるゝとの趣旨を報じて居る。

此タイムス通信を讀んで私は考へる。是迄我々は外國の內閣に關して斯の如く最惡の通信を受けたことがあるかと。日本人が常に輕蔑して居る隣國の內閣に關しても是程の惡評を耳にした事は無い。唯一つ背紐育の醜團體たる「タマニーホール」に關して時に之に類した報導を聞いた事あるのみである。倫敦タイムスに此通信の出たことは日本の政治上の恥辱を世界に暴露したものである。僅に衆議院と貴族院の一隅に多數を擁しても夫れで國民の耳目を蔽ふ事は出來ぬ況んや全世界の批判を免かるゝ事は出來ぬ。原內閣の政治上の効績如何は國民の正しき批判のある事であるから多く言ふを俟たない。

第二原氏薨去後に於ける政機の推移

原氏が政友會の勢力を扶殖し擴張するに急にして、其反面に於て著しく弊害を助長し、遂には原氏自身も黨弊に對する反

撥力の爲に禍を招きたる事は世上の識者の議論の一致する所である。從て今後の日本の政治家は政事舞臺より黨弊を除去する事が當面の一大任務である事を考へねばならぬ。

原氏の薨去後之に次で内閣總理大臣と爲り政友會總裁と爲つた高橋是清子は此黨弊除去に就て如何なる考を有つて居らるゝか。

原氏は時代の必要から政黨の力を强めた。從て其弊を招いた。

高橋子は原氏の後を受けて黨弊を除くべき役廻りを引受けたと云へる。辯護人は高橋内閣の產婆役を勉めて三浦梧樓將軍の談話を拜借する

大正十一年一月十七日の東京朝日新聞に觀樹將軍縱橫談と題し

改進黨といへばあの黨の出身のものはドウも虛榮心が多過る。今の憲政會はその改進黨の連中とそれにあの穢多村と云はれた連中との寄合世帶だから何時までもその臭味が取れぬ。そして理窟が多い。見渡した所憲政會に誰か一人でも此男はと云ふ賴もしい男があるか。それから見ると政友會の中には自由黨以來の氣風がイクラかあつてイザとなれば原の馬前に打死すると云ふ賴もしい所があつた、あの村野常右衞門と云ふ男は一番の人物だよ。役に就きたいと云ふ虛榮心はなく、そして何か事ある場合には第一に飛出さうと云ふ男だ。さう云ふ氣風の男のあるのが政友會の强みだ。たゞ政友會に惜しむべきは餘りに黨利黨略と云ふ點に走り過ぎた事だ。併し今度の總裁高橋と云ふ男が此點に就いちや大分考へて居るよ。原は黨利黨略を計つて政友會の頭數を殖やした奴ぢやが今度の高橋はアベコベに其頭數を減らすことの出來る男ぢやよ。早既に豫算に於ても治水費や鐵道費に就て黨利黨略を刎ね付けて居るが、此調子でやつて遣りぬいて政友會を立派な政黨に爲すことが高橋の任務ぢや。彼も十分此任務を解し愈と云ふ場合は二十人や三十人を逃したつて構はぬと云ふ意氣込であるから見よつて見ろ。

政黨刷新の事も一番先に高橋に依つて爲されるに違ひない。原の存命中閣議の時など高橋が原に對し「そんなに黨利ばかり考へてはイカン」と喰つて掛るには原も手古摺つた。さうだ何時か宴會の時高橋が原を始め閣僚に向ひ「俺は奴隷から腕一本で叩き上た人間だ。君方のやうな伴食大臣と一つにされてたまるか」と啖呵を切つたが面白い奴さ。此内閣も存外永く持つかも知らねが、併し彼はイザとなるとイツ何時でも投出す男で「誰でもやれるならやつて見ろ」と來るのだ。此議

論は面白からう。
教育問題では中橋が褒められるだらうが、今度の高橋は原のやうに中橋の面倒は見てやりはせぬよ。中橋も學校を殖したり、金を掛ることばかりするが、夫よりも大體當世の教育と云ふものは何だ。物知りを作るのみで國士を造ると云ふ考がチツともない。夫だから下らぬ理窟を並べる奴ばかり殖へて氣魄のある奴は出來はしない（中略外交界人物評）
日本内地で三政黨の首領中犬養はどうだ。今度の師團半減論は好かつた。好かつたが併しなぜあれを二三年前に唱へなかつたか。兎も角遲れながらもあゝ言ふ風に旗幟を鮮明にしたのは結構だ。所が實はあれは今犬養が云ふを待つ迄もなくチヤンとやることになつて居るよ。高橋が此前參謀本部廢止論を唱へたのも、參謀本部のみを廢止すると云ふのではないて一たいあの男脱線するが彼のは大な脱線が出來る。後藤などの脱線は小さい。大隈が死んでから後藤が大隈のお株を受繼ぐと云ふがまあ小大隈かね。
此觀樹將軍の談話は一月十七日の新聞に出て居るが實は大正十年十一月原首相薨去後高橋内閣成立の際に於ける高橋子爵と將軍との間に交換された談話の一節を將軍が本年一月になつて新聞記者に洩したものと見るが至當である。

原は黨利黨益に重きを置き過ぎた。原に政友會の頭數を殖やすことのみ考へた。高橋は黨利黨益は考へない、頭數は減つても構はぬ。
原は中橋の面倒を見たが高橋は中橋の面倒まで見ない。中橋は學校を殖やすことのみ考へて大體教育がなつて居ない。一言にして之を盡せば原の親分乾分的政黨政治の弊害を除去するが高橋の任務であつて、彼は此抱負を持て内閣の首班に立つた。
原氏の政治は黨弊の絶頂に達した。輿論の包圍攻擊を受けた。併し政友會の頭數を殖やすことのみを知て減らすことを知らぬ原さん、政權を握つたら放すことを知らない原さん、之は此日本の政治を黨弊から救ふことは出來ない。其處で黨利黨益のみを考へない、政友會の頭數を減らすことの出來る高橋さんが原さんに代つたことは寔に偶然ながら日本の幸福であつて此交代は正に交代の必要と時期とを得たものであると言ふべきである。
以上の抱負を以て内閣の首班に立つた高橋子爵は、此四十五議會中に如何なる仕事を爲したか。果して觀樹將軍と語つた黨弊除去に着手したか。
先高橋首相の宿志の一端の現はれたのは昇格問題である。
三月一日の貴族院の豫算秘密會に於て高橋總理大臣は昇格問題が縱令失敗しても中橋文相のお相伴をして連帶責任を負はね

と言明した。之を聽た仲小路廉君が喫驚して

此れは意外の事を承るものである、原首相は内閣は一蓮托生なりとして昨年の議會に於ても極力文相を庇ふことに努めたにも拘はらず、高橋首相が學校問題は文相一人の責任なりとするは人情としても言へないことでは無いかと詰寄ると、

高橋首相の答は甚冷靜である。

仲小路氏は人情なぞ口にせらるゝも、此點は余と全然所見を異にする。苟も政治上に人情なぞを加味することは斷じて不可である。余は國政は預つてゐるけれども内部に於ける不法弊害までも曲庇しなければならぬと認めない。政治上に情實は禁物である。是余の信念である。從て官吏の任免に就ても最公平でなければならぬ。予は日本銀行總裁として其他に於ても多年財界に關係してゐたのみならず大藏大臣も數次歷任して幾多の經歷を有するけれども、今日まで乾兒といふが如きものを一人も有してゐない。夫れに見るも余の信念は諒察せられたいと答へた。

仲小路氏は高橋首相が官吏の任免は人情に捕へられず公平にしなければならぬと云つた點に付て古賀拓殖局長官の任用に就て責任を負はぬかと詰寄せると、

高橋首相は當時予は古賀の何物であるかを知らなかつた。若其人と爲りを知ると今日の如くであるならば必當時に於て反對したであらうと答へて居る。

高橋首相の言明は世間で脫線と嘲笑して居るが、是れは豫定の行動で決して脫線ではない。親樹將軍が語られる通り高橋子爵は大命を拜するとき一蓮托生を拋棄したのである。

政治上に人情を加味することは斷じて不可であるとか、予は一人の乾兒を有たぬとか言葉鋭く言明するところ、高橋子爵は原さんの親分乾兒政治黨弊政治情實政治の弊害を明白に看取して之を刷新せんとするの意志が判然と讀まれるのである。是は高橋子爵が大命を拜したときの抱負の一端を此昇格問題を機會に言明したのである。然るに世論が脫線と嘲笑して高橋さんの黨弊に眼覺めた點を認めないのは私は高橋さんの爲に惜しむ。

辯論が橫道へ這入かけましたから再び黨弊問題に戾る。

原さんが黨弊を看ると高橋さん同樣の明があつたなら今日の如き黨弊を助長することは無い。又原さんが封建政治の遺物たる親分乾兒の政治を止めて高橋さんの樣に一人の乾兒を作らないか或は出來た乾兒は止むを得ないとしても官吏の任免に情實を加味することを爲さなかつたならば、古賀や阿部の如き問題も起らず、滿鐵や阿片の問題も發生しなかつたであらう。從て原さんが禍に罹ることもなく、中岡艮一も此重大なる被告となつて死

刑を要求せらるゝことも無かつたであらう。

高橋首相は豫算總會で抱負を言明し、其抱負は時弊を救ふに適當なる良策であつたが、敵も味方も政爭に熱中して居るから之を正しく解釋することが出來ないで、自黨の政友會から反對論が出た。政黨は親分乾分である。中橋が辭職すれば内閣が瓦解して政權に離れる。夫れのみ心配して居る政友會は高橋さんの情實排斥論や乾兒無用論に服從することの出來ないのは當然である。而して高橋さんも遂に黨の大勢に制せられて前の言明を取消して二枚舌の汚名を買つた。

併し高橋さんは之が爲全然自己の抱負を拋棄したものとは見へぬ、夫れは三月十日の政友會茶話會に於ける彼れが總裁としての演說に顯はれて居る。

演說に曰故原總裁は過去三ケ年間餘冷靜自重の態度を以て大局を維持し、今日に於て大機正に堅確に動かんとするの機會に於て更に其政策の上に一大進轉を試みんと欲するの刹那に悲むべき兇變に依て幽明所を換へたは返す〳〵も遺憾云々。

玆に大機正に動かんとするとか、一大進轉を試みんとするとか言ふのは、原さんの意中にあつたとか、夫れとも高橋さんが原さんの名を藉りて今迄の樣な遣方では不可ない、是からは大に眼を覺さなければならぬと黨員に警告したのか、原さんの意中を知らない我々は寧ろ高橋さんが原さんの名を以て自己の意中を黨員に告げたものと見るのを相當と思ふ。

猶其演說の終りに又曰、

時代の進運に伴ひ政務黨務に刷新改善を加へ、國家内外の政策に一進轉を劃すべき時機は刻々として迫り來り居るのであります。

とあつて之を觀樹將軍の談話や高橋さんの豫算總會の言明と彼此對照すれば、高橋さんは依然として原時代の黨弊を認め其刷新を急務とするの抱負が現はれるのである。其後に起つた內閣改造問題も暗に玆に胚胎せられて居る。

高橋總理大臣の政務黨務に一大刷新を施さんとする第一着手として内閣改造が企てられた。是は黨內から反對が起り、改造の犧牲に擬せられたる大臣が辭職を肯んぜざる爲め中止になつた。辯護人は高橋さんが飽く迄親分乾兒の黨弊を除き情實を排斥せんとする誠意を多とすると同時に高橋さんが黨の大勢に制せられて一蓮托生打切も内閣改造も悉其抱負を實現する能はざりしを惜しむのであるが、高橋さんの目的として實現せんとする所は國家の爲大に欣んで迎へなければならぬことと思ふ。更に適切に之を言へば原さんの政治は政友會本位であり、高橋さんの政治は國家本位である。即政治の目的が彼よりも是が優つて

居る。惜しむ所は實行力の伴はぬ點である。

内閣改造問題の囂々たるとき政友會の人達は盛んに愛黨々々と云ふた。改造派も非改造派も愛黨の精神より出て居ると辯解するのであるが、一人も愛國とか人民の爲とか云ふ言葉を聞かなかつた。是が原さん以來養成され來つた政友會の傳統的精神であつて、彼等は如何なる場合にも愛黨を先にするのである。然れども高橋さんの口から一度も愛黨の語を聞かなかつた。是が高橋さんの原さんや其他の黨員と異なる所であつて國家の爲め何れを採るべきであらうか。

原さんは政友會本位の政治を行ふに力が餘りに多かつた。高橋さんは黨弊刷新情實排斥乾 無用の政治を行ふに力が過少であつた。一長一短一得一失、從つて其間に是非の論が起るのである。

茲に至つて我々は原氏の薨去が國家に如何なる損害を與へたかを顧みる時が來た。力を以て惡政を強行するが非乎、縱令力は無くとも國家本位の政治を目的とするが是乎。

原さんの政友會本位の政治と高橋さんの黨弊刷新の政治と國家の大局より見て其得失如何。之に對する答が國家の損失の程度を示すものである政友會の人と其他の人とは答が違ふかも知れぬ。又辯護人が私見を以て斷定を下すも固より何の權威を持たぬ。私は唯謹で諸公の透徹せる判斷と國民の公平なる答を聽きたいのである。

新時代展開の爲に舊勢力を除く

松村介石氏の主宰する「道」と云ふ雜誌の大正十一年三月號に新人飛躍の秋と題し次の如く論じてある。

昨年十一月四日に原敬氏が兇刃に斃れて僅かに二ケ月ばかりにして大隈侯が永眠し夫れから間もなく山縣公が此世を去つた。之れは決して偶然ではない。或は天が我日本に一大革新の時機を與へんと欲するが爲かも知れぬ。此の如く舊時代の勢力の代表者を一時に三人迄も奪ひ去ると云ふのは天意が我日本に新人物をして十分に其手腕を揮はしめんとするにあるかも知れぬ。

三代表的人物の永眠

政友會は現在大政黨であるが、其爲す所は甚良くない。然るに其總裁たる原敬氏の存在する間は之を革新する事は困難であつた。然らば之を打ち碎くことが出來るかと云ふに原氏の生存して居る間は容易に打ち碎くことが出來なかつた。會内には相當に立派なる人物もあり正義を思ふ國士もあるが時の勢で黨利主義黨略主義が勝を制し最早如何ともすることは

出來ない。而して此勢を作つたものは原氏であるから、彼れが健在である間は政友會の革新は望まれなかつた。夫れが一朝兇刃に斃れた以上政友會は今後一大革新の行はるべき者で若之を行はないならば四分五裂となるべきものだ。

閥族官僚も亦山縣公の永眠に依て其中心を失ふた。如何に輿論が攻撃を加へても山縣公が小田原の古稀庵に坐して號令をかけて居る間は容易に落城しない。何しろ維新以來五十餘年に彼が築き上げたる勢力は牢乎として拔くべからざる者がある。昨年の宮中重大問題に際して原氏が極めて意地の惡い手段を取つて山縣公を苦しめた、又種々の方法を以て貴族院を懷柔したので、貴族院に於ける山縣公の影は大分薄くなつて居たが、夫でも彼が愈政友會を制御する氣になれば相當に强い力もあり、樞密院と云ふ奥の院は全然彼の勢力範圍で用心堅固の者であるから、彼の存在して居る間は閥族官僚の勢力は決して絶滅するものでは無かつたが、彼が永眠しては最早や仕方は無い。然るに又大隈侯と云ふ一種の勢力があつた。之れは閥族と政友會に對抗する大勢力で此三派の勢力は我政界に鼎立して種々の波瀾を生じてた居のだ。夫れが一時に此三大勢力の代表者を失ふたのだから政界は眞に奇妙なものになつて來た。是從來の一切の舊勢力を打破して新人の大活動を爲すべき新天地が展開したのでは有るまいか。天意は此新天地を展開せんが爲めに此三人を日本から取り除いたのではあるまいか。

實に宗教家らしき觀察である。人事は何事も神の御心の現はれであると考へる宗教家の觀察に從へば日本に新人活躍の時機を與へんが爲め新人活躍の邪魔になる三大勢力を取除いたのは天意である。

宗教家として斯の如き觀察が許さるゝならば被告の責任は大に輕減せらるべきである。時代は既に新人の登場を待つて居るでは無いか。

私は神人交感の信仰を持ちませぬ。從て人事の解決を舉て天意に歸せんとする宗教家の所說に贊成も反對もありませぬが、どちらかと言へば彼も天意是も神慮と一切萬事を神に押付ける事は考へやうに依ては誤解や危險が伴ふことがないとも限らぬと思ふ。然るに中岡事件の辯論後に偶々明治憲政史（工藤武重氏著）を讀んで明治十年五月廿六日木戸孝允か鳳輦に扈して京都に客死し、同じ年の九月二十四日に西郷隆盛が城山に殪れ、翌年五月十四日に大久保利通が清水谷に刺され、僅一年間に維新の三傑が相次で死んだ

のを見て更に原大隈山縣の三氏が殆んど時を同じうして此世を去つたことに聯想を及ぼすとき、其處に何か神秘的な因縁がありそうにも思はれる。讀者諸君が斯る顯著なる人事の變化を名々の頭で詩化したり宗教化したりして考へるのも一の興味ある事と思ふて後から爰に附記したのです。

暗殺の史的考察

暗殺を稱贊するものは一人も無い。縦令心に之を稱贊しても公然之を口にするものは無い。然るに玆に暗殺を稱贊し却て被暗殺者を攻撃して少しも憚からないものがある。夫れは何であるか。歴史即是である。

歴史は過去の事實を批判し、少しも現代的の法律の支配を受けないから、暗殺者被暗殺者の行事と精神を人道上より批評する超法律の學問であるから、現行の法律を現在の事實に適用する裁判には直接の關係は無い様であるが、過去の歴史上大臣大官の暗殺に就て歴史が如何なる批判をなせるかは現在の裁判に多少の參考となるべき事と思ふ。

總理大臣級の大官で暗殺せられたるものは蘇我入鹿、井伊直弼明治に大久保利通大正に原敬等である。

入鹿の暗殺に就ては暗殺者たる中大兄中臣鎌足等を暗殺者若くは刺客と呼ぶ歴史家は一人も無い。逆賊入鹿を誅して社稷の安泰を保ちし國家の大偉人大忠臣として稱贊するものゝみである。入鹿の誅戮に依て蘇我氏が滅亡して歴史は誅戮者側の手に書かれた爲でもあるが、又一方蘇我氏が横暴を極めた積悪の報であるとの觀念が旺んである爲め、歴史は古今通じて被暗殺者たる蘇我氏を罵倒し誅戮を加へたる鎌足等を稱贊して止まないのである。

井伊直弼に至りては明治時代に入りて暗殺者たる水戸浪士や薩摩の有村治左エ門に贈位の御沙汰があり、又招魂社に合祀された事を考へると、歴史は暗殺者の行爲を是認し國家に功勞あるものと賞賛したる事は爭ふべからざる事實である。

大久保利通の暗殺に至りては政治的の意味が少く、寧ろ復讐的の行動であるから刺客に同情するものは少い様である。明治天皇が東下せられたる明治元年戊辰十一月五日大石良雄等に金幣を賜ひしときの勅宣に

汝良雄等固執主従之義復仇死於法百世之下使人感奮興起朕深嘉賞焉今幸東京因遣使権辨事藤原献弔汝等之墓且賜金幣宣とある。

明治大帝は超法律の聖慮を以て暗殺者たる大石義雄等の行爲

と精神とを嘉賞し玉ふたのである。

井伊や大久保は暗殺せられたりと雖も、一も彼等が政權を擅にして私曲を行へりとの批難はない。井伊氏の如き勅許を待たずして開港を斷行したり、安政の大獄を起したりとの批難はあるも、井伊氏の政治は強く自己の意見を行ひたりと云ふに止り、彼に私曲を行ふたゝ暗黑面は無い。

蘇我の入鹿や井伊直弼や若くは赤穗義士等の事跡を借り來て、之れと本件とを對照し批判する事は後世歷史家の筆に讓るべきであるから、辯護人は此點に彼此一言を挿む事を避けるが、唯吾人人類が時として超法律の行爲に出づる事も止むを得ない。而して聖天子も亦或場合には此超法律の行爲を嘉賞し玉ふものなる事を一言し、刻下の問題を判決する諸公が此點に留意せられん事を望むに止める。

星亨と原敬　伊庭想太郎と中岡艮一

兇變以來星亨と原敬とは多くの新聞雜誌に比較對照して評論せられた。而して此兩者が多くの類似點を有する事が評論家の興味を惹いたらしい。

其類似點は星亨が世間から押し通ると異名を附けられたる如く剛愎であつた。原敬も剛愎に於て星亨と相匹敵して居る。星も原も政治上に金力の應用を解して居る。星も原も自ら奉する事頗清廉であつた。星も原も乾兒を愛し一度自己の配下に屬したるものは能く面倒を見てやつた。星も原も部下の不清廉不潔白を大眼に見た。姓名が二字で、共に口髭がなく、夫れから最後に刺客に斃れた、星の刺客に斃れたときに星の部下に東京市瀆職事件があり、原の凶刄に刺されたときに市瀆職事件滿鐵事件阿片事件があつた、唯兩者の異なる所は星とは讀書家であつたが原は讀書家でなかつた一事のみである。

伊庭想太郎と中岡艮一とは世人の比較評論に上らないが辯護人の見る所にては伊庭も中岡も立派な家系を有する點が相類して居る。伊庭も中岡も公憤の爲め身を犧牲にして國家の爲に害を除かんとする。彼等の主觀は全然一致して居る。伊庭が星を殺さんとする動機は主として教育問題であつて、市參事會の瀆職事件が其副因を爲して居る。

中岡が原氏を殺さんとするの動機は滿鐵事件阿片事件市瀆職事件尼港事件太平洋會議に於ける德川全權問題等に存する。

中岡艮一は豫審判事に對し、原氏が太平洋會議の首席全權に德川公を任命したることを批難して居るが、當時世論は德川公の任命を以て寧ろ原氏の成功と看做して居たのに中岡は何の見る所があつたのか、他に適當の人もあらうに情實を以て德川公

を任命したのは宜しくないやうに申立て居る。中岡が原氏を刺したのは十一月四日で太平洋會議は同月の十二日から開催したので中岡の兇行の時には徳川全權の能力は未だ外部に顯はれないときであるが愈十二日から本舞臺が開かれて見ると、不思議にも徳川全權の失敗が續々として電報せられて來た。中岡に先見の明がある筈もないのであるが、國家の爲には不幸なる偶中である。辯論が餘談に走つたから再び本問題の比較研究に戻る。星時代の參事會瀆職事件は汚物掃除事件、水道量水器買上事件水道用鐵管事件、水道用鉛管事件等であるが其贈收賄の金高は全部合計一萬七千圓に過ぎない。之れが星の政治上の運動に費消せられたりと認むべき廉は一もなく、寧ろ星は毫末も此汚れたる金錢に手を觸れて居ないのが事實であつた。

原内閣の下に起りたる阿片事件滿鐵事件は金額に於て星時代の瀆職事件と比較にならざるのみならず、其金が政爭の必要より計劃された事按であるものと世人は信んじて居る。現に阿片事件の立會檢察官は阿片賣下の利益が政友會の選擧費用になつて居るかの如く法廷に於て言明した。甚しきは原敬を證人に呼べとまで極言して居ることは前に述べた通りである。

此點は伊庭と中岡が共に公憤に出發して居ながら、公憤を發すべき原因たる事實に大なる相違がある。

本件の如き殺人事件が公憤を發生すべき原因たる事實の如何を參照して刑を量定すべきものとすれば、伊庭よりも中岡の方が有利なる量定を受くべき情況にある。

伊庭は嘉永四年の生れであるから星を刺した明治三十四年は方に五十一歳であつて、神身共に圓熟老成した人である。中岡は明治三十六年十月生（伊庭の兇行後二年）であるから、大正十年十一月は方に滿十八歳の青年である。一方は老成の人、一方は感激し易き青年である。

伊庭想太郎は兇行に先ち市參事會室に星亨の在ることを確め、一たび市廳を出で懷中せる斬奸狀を郵便函に投じて新聞社に送り、再び參事會室に戻り來りて星を刺したのであるが、大事を前にして悠然たる態度は實に凡人の企て及ばざるものがある。中岡は東京驛に原さんを刺さんとするとき下駄を穿いて居たが兇行前には愈兇行の刹那には下駄を脱で跣足になつて實行しようと考へて居たのに、其場に臨んで原さんに飛び蒐るときは兼ての考を忘れ、下駄の儘夢中になつて飛びついたのである。此伊庭の沈着と中岡の夢中とが老成の人と青年との心理の表顯を具體化したものであると考へる。法律が刑の量定に年齡を斟酌する精神を顧みるとき、中岡は伊庭より更に有利なる量定を受くべき理由があると信ずる。

伊庭の判決書には「被告の所爲は豫め謀て星亨を殺害したるものなるを以て刑法第一百九十二條に豫め謀て人を殺したるものは死刑に處すとあると該當す。而して被告は偏狹の見を懷抱し輕々しく事相を臆斷し敢て此犯行に及ぶ。其罪固より大なりと雖も、然れども其情狀に至り原諒すべきものあるを以て同法第八十九條及第九十條に依り酌量して本刑に一等を減じ、無期徒刑に處し」とある。爰に輕々しく事相を臆斷しとあるのは伊庭が星が汚れたる金錢に手を觸れたりと臆斷した事を指すのであろうが、中岡の阿片事件や滿鐵事件に於ける感想は輕々しく事相を臆斷したとの批難はない。此點は前に述べた不謹愼の言論云々の題下に辯論した所を參照して頂けば自ら明白になると信ずる。從つて伊庭に對して酌量減刑を與ふる理由があるならば中岡に對して一層其理由が强さを增す譯になる。

伊庭も中岡も公憤よりして犯行に及んだ一事は同一であるが、被害者の政治的施設に於ける不透明の現象が星亨の時より原氏時代に於て甚濃厚なる事を參酌するときは、伊庭と同一の無期刑に處するは當を得ず。故に辯護人は中岡艮一を有期刑に處すべきものなりと主張するのである。

伊庭の第一審判決は裁判長望月源次郎陪席水原親次野村美策檢事古森幹枝の立會にて明治三十四年九月十日に判決せられたるものなるが、總て刑罰は文化の進步に伴つて輕減せらるゝが天下の大勢である。明治三十四年以後に日露戰爭あり、世界大戰あり、刑法の改正あり、斯の如く社會的大變動あり、大進步ありし我國の裁判所は中岡艮一を伊庭想太郎と同一の無期刑に處する事は出來ない。是辯護人が有刑期を主張する第二の理由である。

次に是れは辯護人の平素の持論であるが、現行刑法は死刑の宣告を受けたるものでも三十年逃げて居れば時效に依て刑の免除を得るのである。然るに無期刑の言渡を受けたるものは三十年は愚か五十年六十年監獄に繫がれて居ても刑の免除は得ないのである。刑の執行を逃れさいすれば監獄外にて如何なる罪惡をしても三十年で免刑される、是が時效の功果である。之に反し監獄内に在りて人生極度の苦痛を忍び謹愼して居るものは、三十年五十年を經ても免刑にならぬ。是は誰が見ても不公平である。夫故辯護人は常に無期刑の廢止すべきものと信んじて居る。卽本件に於て有期刑を主張する第三の理由である。

稲田和五郎と中岡艮一

稲田和五郎は大隈總理大臣の暗殺を企て、爆彈を自動車に投じて不發に終り失敗したのである。未遂であるが時の總理大臣の

暗殺を企てたる點に於て中岡と同一轍である。福田は東京地方裁判所に於て十五年の懲役に處せられ、控訴上告して名古屋に移され、再上告の際爆發物取締規則が改正せられ、大審院にて懲役七年に減刑せられ、今は假出獄の恩典に浴して居る。

辯護人は福田和五郎の事件に於て被害者が憲政會内閣の總理大臣大隈重信であるから、政友會を基礎とする寺内内閣の時代に爆發物取締規則が改正さたたり、原内閣の時代に假出獄の恩典に浴したりしたものであると邪推するものでない。又世人も斯様な邪推をしてはならぬ。凡重刑主義は其國の非文明を示すものである。我々は能く歴史を讀んで一錢を盗むものも斬に處すとある事を見るが、夫れは必文化の幼稚なる時代である。刑罰の輕きは其國文明の誇りである。

帝國の總理大臣の暗殺を企たる被告人でも裁判所は寛大の取扱を爲し、餘り重刑に處せぬことは我國の誇りであつて、其先例は福田和五郎事件に於て開かれてある事を諸公の聰明に訴へるのである。

辯護人は既に當代の儀表たる政治家碩學及び國民の代表たる全國各地に於ける新聞紙の輿論に依て原氏が力の政治家たり、責任を顧みさる政治家たり、政權に執着する政治家なりし事を論證し、原氏の行動が此災禍を招く一部の原因を爲せる事を明にする事を得たりと信ず。而して政治に門外漢たる辯護人は絲毫も私見を以て政治家たる原氏を評隲する事を避けたり、依て此結論に於ても先賢の語を借りて私の辯論を結ばんとするのである。

明治二十二年十月十八日、刺客來島恒喜が外務省の門前に於て時の外務大臣大隈重信に爆彈を投じ、大隈の條約改正を阻止せんとせし事は今尚國民の耳目に新たなる所である。此日此時忠誠硬直を一世に信頼せられたる子爵谷干城は自己の日記に左の如く識したのである。

祖宗在天の靈蓋し手を來島に借るものなるべし。輿論は即天意なり。天意豈恐れさるべけんや天日未だ落ちず猶幾多の來島を生ずべし。

辯護人は谷將軍をして今日に在らしめば此日記を繰返し幾多の來島の生じ來りし事を祖宗在天の靈蓋し手を來島に借るものなるべしと識るさるゝならん謹んで此句を三唱して辯論を結ぶ。

經濟政策を刷新せざれば國運は傷つく

法學博士 堀江歸一

原高橋に共通する失政

私は先年原內閣成立の當初から、同內閣の經濟政策に大なる過誤があり、又其政策を支配する思想にも許す可からざる謬妄のあることを認めて、常に攻撃の手を緩めなかつた。而して原內閣に次いで現はれた高橋內閣に對しては、其首班に居る高橋是清子こそ、原內閣の大藏大臣として、同內閣の經濟政策に於ける進路を誤まらせた發頭人なのであるから、私は一方に高橋と云ふ人物に一種の滑稽味を感じつゝ、尙ほ高橋內閣を攻撃し、一日も早く之を倒潰しようとする勞を惜まなかつた。料簡方の狹い與黨の輩や、與黨の門犬走狗を以つて居る者の如きは、何か私が故意に原、高橋等の內閣を傷けるが如くに想像したようであるが、斯の如きは人の心事を忖度するのに、己れの心を以つてするものであつて、私は原の如き白狐の頭をした者に對しても、高橋の如き豚の恰好をした者に對しても、他の人々に對すると同じく、何等の好惡を感ずるものではない。唯彼等の經濟政策が一部少數者殊に金權者流の階級に私するに急であつて、毫末も民衆の利害を念としない點に於て、先づ私の反感を刺戟するに至つたのである。此一事は原高橋兩內閣に共通する秕政の根元であつて、原が東京驛頭に非業の最期を遂げた一因も、高橋が柄にもない內閣首班と爲つて、僅に半年の後に投げ出しの已むを得ざるに至つた主因も、盡く此に在り、と認めざるを得ない。

高橋は過般陛下に辭表を上るに當り、特に首相として內閣不統一の責を負うと云ふことを擧げたようである。內閣官制に據れば、「內閣總理大臣は各大臣の首班として、機務を奏宣し、旨を承けて、行政各部の統一を保持す」とある。內閣總理大臣の職責の重き、且つ大なることは、此一條に依つて、之を知るを得るであらう。然らば其總理たる者が一度び內閣の改造を企てゝ成らず、之を再びして、又成らない、飽くまでも首相の改造意見

に反對する閣僚が三名までも頑强に異議を唱へ、何としても閣議の一致を得ないとすれば首相が統督不能の責を負うて、引退するのは當然の所爲としなければならぬ。此見地からすれば、高橋は正に引退す可き時に引退す可き理由を得たものと見られるが、此點は存外高橋の卑賤なる境遇に居つた時代に仕上げた一種の智能の潜み閃く所であつて、私をして忌憚なく批判せしめれば、高橋内閣は政策上の行詰りから、進むに進まれず、退くに退かれぬ兩難の地位に陷り、其儘野斃れ死にの醜態を曝す外に道のなかつた際、幸にも閣僚不統一の事實を生じた爲めに、之に藉口して總辭職を企て、斯くて政策行詰りの窮狀を免かれようとしたのである。時事に迂濶なる者は或は之を以つて欺き得られるかも知れないが、多少時勢を見る明のある者であれば高橋内閣の政策行詰りは夙に洞察する所であつて、如何なる理由の下に辭職しようとも、之に對して下す可き判斷を誤まるものではないのである。

原内閣求めて恐慌を招く

元來物價調節を必要とする政策は寺内内閣の當時から世間の議論に上り、原内閣や、高橋内閣は前任者から此事を遂行す可き任務を引繼いだ形と爲る。寺内内閣に於ても、物價の調節に就ては、之を試みて意の如く爲らさるものが多く、殆ど勞して效なき趣きを免かれなかつたが、其れにしても物價を調節しようとする誠意は確に認められたのである。然るに原内閣に至つては、當初から物價を調節しようとする誠意を持たなかつたばかりでなく、却つて物價騰貴の勢を助長して、人爲的に經濟社會に好景氣を裝はしめようとした。是れは最も卑む可き黨派的根性に左右されて、經濟政策を黨勢擴張の用に供する爲めに、求めて針路を誤まらせた結果であつて、政黨政治の醜惡なる方面は圖らずも原内閣に依つて、我國に誘導されるに至つたのである。然らば斯る物價騰貴を眼目とする經濟政策は實際に如何なる效果を奏したであらうか。物價の騰貴しつゝある間に於ては、如何にも經濟社會は繁榮を極めるやうに見へた。然し是れは投機熱勃興の然らしめる所であつて、其裏面に於ては、不自然なる虚業を奬勵しつゝあつたのであつて、一旦信用が枯渇すると共に、經濟社會は其總てを擧げて崩壞せさるを得さるに至つた。大正九年三月の恐慌は要するに前述の關係から、政府自身の經濟的秕政に依つて、醸成されたものであつて、誠に求めて平地に波瀾を惹起した所の譏を免かれないのである。

不景氣に處する策を誤まる

恐慌後不景氣に陷つた經濟社會に對して、政府は果して速に**恢復の機運に赴かしめるだけの施設をしたであらうか。經濟社**會をして不景氣の狀態を脫して、好景氣に向はしめようとする以上は、何は措いても不景氣の影響を充分に社會到る所に徹底せしめる工風に出でなければならぬ。不景氣時代に經濟社會に現はれる特徵は何であるかと云へば、其第一は物價の下落であり、其第二は金利の低落であり、其第三は物價下落に關聯して、賃銀の引下げられることであり、其第四は前三者の働きに依る生產費の減少であつて、斯る事相が現はれゝば、投機熱勃興時代に攪亂された經濟社會は自ら整理の緒に就き、其整理の終ると相前後して、新しき機運を喚び起すことゝ爲るのである。然るに我國に於ては不景氣の狀態に陷つても、政府は依然たる高價政策を持し、或は財政を膨張した儘にして、縱に物資や勤勞に對する需要を起したり、或は通貨收縮を回避して、膨張した狀態に置く爲めに、物價は著しく下落せず、物價が下落しない爲めに、金利も低落せず、不景氣時代に少しも不景氣の特徵が現はれず、斯くて經濟社會の恢復をして百年河淸を待つの嘆あらしめるのである。高橋自身なり、高橋に歸依し、阿附する輩なりは、自家の秕政を辯護する資料として、今日の不景氣が啻に我國に止まらず、世界一般に行はれる事相であることを主張して已まない。如何にも今日は英國と云はず、合衆國と云**はず、何れも不景氣に襲はれて**居ることは、爭ふ可からざる事實であるが、其れにしても諸國に於ては物價は我國以上に下落して居り、金融は緩漫であり、隨つて賃銀は容易に切下げられ、生產費は次第に縮小しつゝあるに對して、我國に於ては一も是等の事相を見ることが出來ず、寧ろ反對の方嚮に向つて、經濟社會が動いて居るのである。然らば世界的不景氣と稱される間に於て、諸外國は今や明に不景氣を脫却せんとしつゝあるに反し、我國に於ては其暗雲の次第に濃密ならんとする趣きを示しつゝあるのであつて、此事實は我國に於ける經濟的秕政が如何に酷烈であるかを語る有力なる證據と爲り、當局者の世界的不景氣を揭げて、我國不景氣の由來を抹消し去らうとする議論を三文の價値なきものたらしめるのである。

國內を見て國外を知らず

私が原高橋兩內閣を通じて、秕政の最も甚だしきものと認めるのは、彼等の秕政に依つて、社會階級間の利害に衝突を來さしめた一事である。始め原內閣の成立に際し、原高橋が物價騰貴政策を立案するや、此騰貴に依つて、利益す可き資本家農業家等の利害のみを顧みて、一般消費者殊に中流以下の階級に屬

ずる者の利害に至つては、全然之を念頭に置かなかつた。唯之に對して原、高橋兩内閣の爲めに損する者は繼續する物價の騰貴に依つて、總て全國の産業は繁昌する。此間に多少不利益の地位に立つ者は定額の俸給に依賴して衣食する輩であるが、是等に對しては政府なり、彼等を使役する銀行會社なりに於て、增俸の處置に出でれば、以つて全體の利害を調和するを得るであらうと主張したのである。單に國内だけの關係に就て考へると、物價の騰貴に比例して、之に相當する增給を人々に與へると云ふことは、社會の各員に公正なる待遇を認め、社會階級間に於ける利害の衝突なからしめる所以であるかも知れないが、是れは唯國内限りの事である。今日の經濟生活は獨り一國内に蹈躇するものに非ずして、國際間の廣きに及ぶものである。我國が法外なる程度に於て、物價を騰貴させる、假令ひ其國民生活に及ぼす影響は俸給なり、給與なり增額に依つて、緩和されるとしても、一方に諸外國に於て、物價が次第に下落の步調に就き、我國に行はれるものよりも、低廉に爲る傾向に爲つたならば、結局我國經濟に於ける破綻は國内よりも、寧ろ外國との關係に於て起らざるを得ないであらう。現に最近我國の外國貿易が常に輸入超過に依つて、脅されつゝあるのは、何を吾人に語るであらうか。又近頃獨逸の商品が頻に我國の市場に出現し來つたことを目擊するが、世人は之に對して如何なる感を懷くであらうか。我國市場に獨逸商品の出現したことの如き、或る程度まで爲替相場の關係に基く一時的事相であるとも見られるし、又獨逸の經濟が何時に爲つたら多量の物資を繼續的に又組織的に外國に輸出するを得るまでに、恢復するかどうかは、今日に於て豫期するを得ないが、之を全體から觀察して、我國の經濟政策が從來原高橋兩内閣に依つて實行された如き粗笨を極めたものであり、物價騰貴政策の下に、總ての物資の生產費を增高せしめ、其代價を騰貴せしめる以上は、外國に於ける販路の次第に狹められるのも、敢て異とするに足らない、

代價の高直と品質の粗惡とは誠に我國輸出貿易の販路を沮害する二個の原因である。而して是等二個の事實の間には、餘程因緣の深いものゝ存することを知らなければならぬ。即ち近年の如く生產費が增高する場合に、輸出向の物資を生產する製造業者が增高しただけ全部の費用を代價の上に掛けたならば、需要は著しく減退して產業の衰微を招かざるを得ない。生產費が增嵩した場合に、代價の之に伴つて引上げられることを防がうとするには、當業者は物資の品質を粗惡にする外に、取る可き道あるを知らないであらう。歐洲戰時我國の輸出貿易品は特に粗製に流れたとか、濫造に陷つたとか云ふような話を耳にした。

是れは戰時外國市場に於ける需要が如何にも急迫して居つて、物資の精粗に對する餘裕を持たなかつたり、又自ら粗製品を濫造しても、外國の競爭品に排斥される恐れのなかつたりしたことにも依らうが、同時に國内に於ける生産費の増嵩が當業者を驅つて、玆に至らしめたことを認めなければならぬ。即ち政府は物價の騰貴と粗製品の濫造とに依つて、貿易に逆調を來す運命を開いたのであつて、經濟社會今日の悲運は政府自ら之を作爲したものと云はれても、辯解の辭を見出すを得ないであらう。現に貿易逆調の結果、國際貸借の狀態を我國に不利ならしめて居るではないか、一時非常の勢を以て蓄積され、我國經濟上の實力を代表するものと、當局者自ら誇稱した内外の正貨は日に月に減少しつゝあるではないか。而して世人は一般に此狀態に對して、大なる恐怖を感じて居るではないか。斯る場合には政府自ら物價下落の大勢を誘致する政策を施し、自動的に貿易の趨勢を我國に有利に爲るように展開せしめなければならぬ道理であるのに、政府の爲す所は纔に爲替に對する干渉に依つて、奢侈品の輸入を抑制するの一事に止まる。斯の如き些細なる處置に依つて、貿易の大勢を左右しようとするが如きは、思はざるの甚だしきものとせざるを得ない。

財政緊縮の必要

歐洲諸國中英國や合衆國に於ては他の諸國に於けるよりも早く、又大なる程度に於て、物價の下落する勢を示すに至つた。而して私は其原因を求めて之を財政整理、經費緊縮の効果に存するものとしなければならぬ。蓋し今日國民經濟の立て方から考へると、國の如何を問はず、一國に於て最も大なる程度の下に、物資を購入し、勤勞を雇傭するものは、即ち政府に外ならない、斯る購入雇傭は國家の職務を履行する上に於て、必要已むを得ざるものであつて、一錢一厘の微と雖も、之を省約するを許さないと云へば、其れまでの話であるが、我國現在に於ける如く、十五六億圓と云ふ巨額の歳計を營んで居る場合には、當局者の決心如何に依つて、經費に或る程度の節約を施す餘裕のある可きは勿論であり、又物價騰貴時代に經費を支辨するよりも、其下落時代に之を支辨する方が經費の効果を大ならしめるし、又財政と國民經濟との間に於ける關係の圓滿を保つ道理である。數年に亘る歐洲の大戰爭が終熄して、戰時財政から平時財政に移らうとする際に、心ある財政當局者は何を爲したかと云へば、經費の節約に全力を擧げたのであつて、此事に於ける成効が國民經濟の調節に資する所のあつたことは少なしとし

ないのである。思ふに華盛頓會議に於て海軍縮小の計畫の大した故障に接せず、關係諸國の間に協定の遂げらるゝに至つたことも、極東に關する九個條條約が成立して、支那に對して列國の行ひ來つた帝國主義的經濟政策が跡を絕つに至つたことも、今日世界に澎湃たる平和的思潮の勢力の動く結果であると見られるが、同時に財政の緊縮に依つて、從來經濟上に加へられた束縛を解除すると共に、政府の需要する物資勞力を節約し、斯くて物價下落の大勢を馴致しようとする希望に基いたものであることを知らなければならぬ。

然るに從來我國に於て原高橋の兩內閣が實に爲した所は如何であつたかと云へば、盡く以上の要訣に反したものであつた。積極主義とか、積極政策とか云ふことは、從來政友會が政策上の標語とする所であつたが、彼等は如何なる意義を之に附會したかと云ふに、詰り政府を中心として、種々の方面に仕事をする、鐵道を敷設すれば港灣も改修する、河川も浚渫する敎育も完備する、而して是等に要する經費は其れ〳〵財源を求めて、之を調達するものに外ならない。往年民間政黨が總て民力休養經費節減の一天張で、政府に對抗し、消極主義以外に、何等國務を擔當として行く用意の存しなかつた際、政友會が積極主義を標榜したことは、珍中の珍とす可き所であつて、日露戰爭前に於ける軍備擴張の如き、實に政友會の援助に依つて、完成され、時の政府と協力して、經綸を立てた効績は私と雖も、之を認めるに吝ならざる者である。然しながら此積極政策なるものが近年に至つては、甚だしく其度を超へ、國家の經費を地方的利害を有するに止まる事業に分配する理由に供されて、一方に經費の膨脹を招くと共に、他の一方には國民に對する負擔を重くし、幾分なりとも此負擔を緩和する必要に迫られゝば、經濟社會に好景氣を誘導する手段を講じ、其極まる所投機熱を煽揚するに至たのは、政友會內閣なり、政友會を基礎とする內閣なりに、常に見る所であつた。斯の如くして政友會は地方に黨勢を張るを得たかも知れないが、積極主義の窮極は經濟の攪亂であり、財政の破綻であり、而して是等兩者に挾擊されて、內閣其もの〻潰滅と爲るのは、毎度の沙汰であつて、異とする所はないのである。

原が生きて居つても

高橋內閣に於て改造是非の問題が起り、內閣の運命が日に蹙まるように爲り、高橋の無能無策なることも亦世間に暴露されるに至つてから、政友會の大小陣笠共は頻に「原が生きて居つたならば」と云ふ嘆聲を發したさうである。然し私をして冷靜に觀察を下さしめれば、高橋內閣の瓦解は實に原の遺策に依

て醸された積弊に禍されたものであつて、原こそ内閣の運命を極まらしめた罪人であり、高橋の如きは一の下手人たるに過ない。原が生きて居たならば、同じ改造を遣るにしても、手際好く成し遂げたかも知れず、或は改造などけ之を試みないで氣の利いた時に局を去つたかも知れない。原と高橋とを比較して違う所は此一事だけであつて、原其人が經濟社會を今日の窮地に陥らせる政策を敢行して、憚らなかつた、否高橋を慫慂して之を實行せしめたものである以上は、原が生きて居つた所で、内閣の進退兩難と爲るのは當然であつて、何としても免かれ難き運命に屬するのである。私は高橋内閣成立の當初、高橋が遠からず窮地に陥り醜状を示す可きことを豫想したので「總理大臣に榮進して、生き耻を曝す高橋が幸福か、暗殺されて一切の責任から解除された原が幸福か、孰れとも分らない。」と云ふ趣意を述べたことがあつたが、誠に人間萬事塞翁の馬であつて、高橋の如きも、今日の如く積年に及ぶ秕政の責任を一身に引受けては、死んだ原を羨望する念なきを得ないであらう。

積極から消極への推移

流石の高橋も近年に爲つて、漸く積極政策の非を悟り、消極政策に移ることに腐心し來つたようであつた。俗に云ふ「下司の智惠は後から出る」と云ふのは、此事であらうか、經濟に財政に散々の行詰りを告げてから、今更ら消極政策が必要とは、何たる證文の出し後れであるか、又何とした血の巡りの遲い事であらうか。私の唯呆れざるを得ざる所である。私は曩に歐洲諸國に於て財政の整理緊縮に努力しつゝあることを述べた。直接に、又大規模に戰爭に干與した諸國に取つては戰後の今日或は軍事公債の利拂が増加して居るとか、或は軍人に對する恩給金が増加して居るとか、或は一般物價の尙騰貴して、舊時の狀態に復するに至らないとか云ふやうな種々の事情が輻輳しつゝあるのであるから、經費の縮少を斷行することは、甚だ困難とする所であらねばならぬ。然も此點に於ける各國の決心の如何に鞏固であるかは、最近ゼノア會議の經濟財政委員會の決議中、通貨に關するものゝ項に於て、國家歳計の不足を補ふ目的を以つて、準備なき制令的通貨を發行し、又銀行信用の設定を爲しては、通貨の安定を期するを得ないこと、歳入に要する課税は適當なる程度に止め、經費の節約を勵行することの二個條の存する事實に依つて、之を類推するに難しとしない。

然らば此點に就て高橋内閣は從來何事を爲したであらうか。華盛頓條約は假令ひ批准されるまでに若干の日數を要するとしても、其適用され可き狀形の如何は頗る明瞭であるに拘はら

ず、爲めに幾何の經費が節約されるに至るかを示さず、海軍が縮小され、殊に支那に對する外交方針が根本的に一新されなければならぬ狀勢と爲り、加ふるに世界を通じて、平和の風潮の强き今日に於ては、陸軍縮小の行はれ可きことも亦當然の數であるのに、高橋内閣は是等の問題に對して、單に議會に討議の行はれるに任せ、自ら何等の計畫も希望も公にしない、却つて海軍縮小に依つて、節約される資金は之を一般歳計に供しないで、海軍部内の經費に用ひようとする。陸軍部内も亦之と同樣であつて、一方に兵役年限の短縮其他に依つて、經費に餘裕が生じたとしても、彼の如き陸軍の大世帶であるに拘はらず、其は四千數百萬圓位のものであつて、然も大部分を其兵器の改良に投じようとして居る。我國が封建制度を破壞してから、年を經ること、僅に數十年であり、然も其數十年の間に於ては、明治初年に於ける徴兵令の制定を始めとして、社會を擧げて封建制度と同じ武裝的狀態に置くことに勉めて、渝らなかつたとしても、平和的思潮の徹底せず又經濟振興の要求を閑却することも、亦甚だしきに至れるの嘆を免かれないのである。

歐洲諸國に於て此程來頻に金融が緩漫に爲り、金利步合も亦低落し、次第に事業の振興を促さうとする徴候の厭然たるに至つたのは、何の爲めに然るかと云へば、要するに政府が一方に物價下落の勢を助成し、他の一方に於ては經費の節約に依つて從來政府の力を以つて、束縛して居つた資金を自由に解放する結果に外ならない。然るに我國に於ては此點に於て、今日果して如何なる狀態に居るであらうか。積極政策の餘弊は深く財政に浸潤して居る一方に、無意義極まる西比利亞出兵を今日に至るまで繼續して居る爲め、年々の歳計に於て巨額の公債募集を必要とし、然も民間に於ける應募力の不充分であるに拘はらず、之を募集しようとする爲めに、金融市場に大なる壓迫を加へて、已む所を知らない。歐米諸國の金融緩和、金利低落に對して、我國の金融は頗る繁忙であり、文明諸國全體を通じて、我國が金利步合の最高國であるが如き、要するに年々の公債募集に依つて、金融市場を壓迫する結果であるとしなければならぬ。隨つて斯る財政方針が一新されて、公債募集の必要が消滅しない限り、金利步合は低落せず、金利步合が低落しない以上は、事業を振興して、景氣を恢復する望を持つを得ない、此點に於ても私は原高橋兩内閣の經濟的秕政を見逃すを得ないのである。

私は原高橋兩内閣の政治を以つて、徒に國民生活に壓迫を加へ、特殊の階級に利益を與へ、社會階級間の利害に衝突を惹起さしめるに至つたことを論斷した。而して此種の衝突の最も甚

だしく醸成されたものは、實に資本家對勞働者の關係であつて金權政治の結果として、兩內閣共に資本家の利益を擁護するとのみに腐心し、勞働者の利害の如きは、之を資本家の利害に從屬せしめる爲に、種々の壓迫や束縛を加へることを怠らなかつた。好景氣時代には、生活費の膨脹に依つて、不景氣時代には失業に依つて、共に苦しめられるのは我國勞働者の實狀であつて、近年の事實は明に其然ることを實際に暴露して、餘す所ないのである。固より此點に就ては勞働問題に何等の理解を有しない床次竹次郎氏の如き人が內務大臣の椅子を汚したことを以つて、間違ひの發端としなければならないが、兎に角勞働者が原高橋兩內閣を以つて、偏頗なる階級政治を行うものであると考へ、又政府と資本家と合體して、勞働者の利害を脅かすものであると信じたことは、明に將來に於ける政治運用を困難ならしめる一原因としなければならない。

政治家の誠意を疑ふ

私は以上數千言を列ねて、原高橋兩內閣に攻擊を加へた。今日に爲つて、兩內閣を非議するが如きは、死屍に鞭つの類であつて、私の衷心爲すを欲せざる所であるが、然も之を敢てするは、斯くしなければ、今後我國に於て行はれなければならぬ經濟政策の針路を明にするを得ないからである。而して我國經濟政策の過誤が悉く原高橋兩內閣に依つて行はれたものである以上は、高橋內閣瓦解の後に於て、政友會を基礎とする內閣や、少なくとも政友會に依つて支持される內閣の組織されるが如きは、經濟上の見地から考へて、百弊あつて、一利の伴うもののなきことを斷言せざるを得ない。私が本論を執筆しつゝある際（六月十日）に加藤海軍大臣を首班とする內閣組織の計畫が最も強く人目を惹いて居り、同氏の一諾に依つて、事の決定される模樣を示し來つたが、私は同氏が原高橋兩內閣の閣員であり、兩內閣の秕政に對する聯帶責任を負う可き一人であるの故を以つて、加藤內閣の出現に反對する。蓋し斯の如きは內閣の更迭をして全然無意義のものたらしめるからである。

私は從來現在の政治家なるものに、欺かれた感を懐いたこと一再に止まらないのである。彼等が野に在るや政府の施設なり、政策なりを論難し、吾人と同樣極めて公正なる意見を發表する。隨つて私は斯る在野黨こそ、誠に天下の經綸に任ずるに足るものであると考へて、其政權を獲得して、局に當ることを希望し、言論を以つて援助を與へることを辭しない場合があつた。然るに其在野黨が一旦朝に立てば、在野時代の言論は殆ど忘却したものゝ如く、之を高閣に束ねて、御都合主義の下に、

一時を糊塗することばかりに忙はしい。是れは既成政黨の賴むに足らざる所以であり、又私をして殆ど歷代の政府に對して、反對の態度を持するの已むを得ざるに至らしめる次第である。隨つて私は今日の如き場合に臨んでも、尙は如何なる政黨に政權を託するのが至當であるかを斷言するに躊躇し、寧ろ何等の情實に捉へられず、又如何なる貪慾にも制されない政治家の出でゝ、局に當ることを希望して已まない、唯見渡した所で、今日內閣組織者に推されて居る人が何れも此要件を備へて居らないことを遺憾とするものである。

經濟政策一新の規準

私は現實の政治論から離れて、經濟論に立戾る。何人が高橋內閣を襲いで政治の局に當るを問はず、如何なる經濟政策を以つてしたならば、最も善く時勢の要求に適うを得るとするであらうかと云へば、私は

第一時代の大勢に順應すること

第二政友會內閣の下に釀成された積弊を一掃すること

の二點を以つて、答へるの外ないのである。何を以つて今日の大勢に順應する政治であるとするか、一言にして之を云へば、民衆の勢力を承認し、又民衆の利益を發揚するものは、卽ち其れである。原高橋兩內閣の如く、一部金權者階級の利益を保護することを急なりとし、一切萬事此信條に基いて、政治の方針を定めて行つたならば、政治は倒施逆行の狀態に陷らざるを得ない。

或は斯う云ふ說もある、今日に至つて遽に原高橋兩內閣の經濟政策を覆したならば、經濟社會に大なる動搖を來して、再度の恐慌に接するかも測り難い。寧ろ政友會を基礎とする內閣の下に徐々に遷善改過の實を擧げるを可なりとすると。此說は思ふに政友會の色彩を帶びたり、又は政友會の援助を受けたりして成立する中間內閣に對して、經濟社會の贊成を得る爲めに、唱へられる次第であらうが、是れは高橋內閣を以つて、閣僚不統一の爲めに倒れるのであつて、政策の行詰りに基くものでないと云ふ誤解に胚胎する議論とせざるを得ない。我國現在の狀況を觀察して、何處に積極政策を繼續して行く餘地があるであらうか。全然其餘地の存しないことは、高橋內閣自ら行政財政の整理を必要とし、其倒潰する少し前に委員會を組織した一事を以つてしても、之を推察するを得るではないか。唯從來積極主義を唯一の信條とし、我國の財政經濟に亂暴の限りを盡した高橋內閣が今日に至つて、如何に政策に行詰つたからと云つて、行詰りの責を負はず、却つて飜然消極政策に豹變しようと

したことの如き、厚顔無恥の甚だしきものであり、立憲政治の根本義に反するものであるばかりでなく、徹底的に消極主義の下に財政行政を整理し、斯くて國民經濟を振興せしめる所以でない。此議論は政友會を基礎とする一切の中間內閣にも總て適用されるのであつて、私が此種の內閣を喜ばざる理由亦此點に存するのである。

恐慌再來の虞れあるか

然らば今日我國に於て消極政策を實行することは、果して恐慌の再來を招く所以であるから、何としても之を避けなければならぬと云ふ議論は正しいと見ることが出來るであらうか。大正九年の恐慌、之に續く不景氣の結果として、我國の事業界に整理が行はれ、淘汰の作用の働きつゝあることは、掩う可からざる事實であるが、一方に物價の騰貴しつゝあることは、此整理淘汰に對して、大なる妨害を加へて止まない。國民生活の安易に爲る可くして容易に爲らないのも、不景氣時代に金融が逼迫すると云ふ變態を生じるのも、不景氣の三年も續けば、資金は自ら增殖されて、生産事業の振興を促す可き筈であるのに、我國に於て毫も此種の徵候を認めるに至らないのも、要するに[illegible]政策の基礎が確立しないからである。今日消極主義が

世界一般の步み方であることは、軍備の縮小や、其他の整理に依つて經費の削減されつゝある一事を以つて、之を證明するを得るではないか。消極主義の下に、我國の物價が今日以上に低廉に爲ると云ふことは、或は不景氣の上塗りをするものであるやに見へるが、不景氣の强烈に爲ることゝ、恐慌の突發することゝは、自ら別種の問題に屬する。投機熱の爲めに、經濟社會が膨脹し來つた際に、其一端に損傷を生じて、傷口の擴がつたものが恐慌であり、恐慌の起る可きは何處まで其れが傷口を擴げるか分らない點に在る。然るに今日の我國に於ける如く不景氣が三年も續き、投機輕佻の風は殆ど無くなり、退嬰姑息を以て、諸般の事の律されて居る場合に、不景氣風が一層强く吹き荒んだとしたならば、或は商店の破産するものはあるかも知れない、銀行の支拂を停止するものはあるかも測られない、商品の投げ賣りや、整理賣出しは行はれるであらう。然も當業者一般に二年餘に亙る不景氣時代を通じて緊縮節約を旨とし、事業に整理を施して居つた以上は、不景氣上塗の犧牲と爲るものは、限られた數に止まる可きであつて、之を以て不景氣の慘害濃かなりとするは、當つて居らうが、恐慌の再來と見る可きものではない。而して經濟社會に對して、此洗禮を施し、此試錬を經させて、物價を其ドン底まで低落させない限り、經濟社

會に一陽來復の好景氣を迎へるを得ないことは、私の敢て斷言しようとする所である。經濟社會整理の時代に財政經濟の局に當る人に就ては、經濟社會發展の時代に處すると違つて、臨機應變の才能は之を必要としないかも知れないが、冷靜なる頭腦と牽固なる意思とが備はつて如何なる悲風慘雨にも堪るだけの氣力を持たなければならぬ。其上に透徹した知識を蓄へて居ることを必要とする。後繼內閣組織者の顏觸れを見て、果して斯る資格を具備した人の局に當ることを望み得るかどうか、私の心細く覺へる所である。此事たる、畢竟民衆の意思の存する所が社會全體に徹底するに至らず、輿論も作られなければ、又其れが實現されようともしない結果であつて、今度の政變の結果如何に拘はらず、我國經濟政策を刷新するに就て、吾人の將來に爲す可き道は多々ありとしなければならぬ。

右の如く記し終つた際偶々配達された新聞號外は加藤海相が內閣を組織するに決定したといふことを報じた。若しも華頓盛條約の實行だけが、我國現時に於ける國務の全體であるとすれば、加藤の內閣首班亦不可なりとしないであらう。此以外に重要なる國務山積し殊に經濟政策の一新を必要とする今日に於て、原高橋兩內閣の一員であつた加藤が政友會を背景として、內閣を組織して、能く何事をか爲し得るであらうか。從來の秕政を一新するだけの見識が加藤にあるかどうかも、疑問であるが、假に相當の見識があり、立派な輔佐者があつたとしても事々に政友會に掣肘されて、結局何事をも爲し得ないことゝ爲りはしないであらうか、啻に然るのみならず、政友會が多數を擁して、加藤內閣を援助する其代償として、種々の利權を獲得するに勉めたならば、其弊は寺內內閣と政友會との間に釀成されたものと異ならざるに至るであらう。然らば加藤內閣の成立は單に高橋內閣を延長して、其政治的罪惡を大ならしめるに止まりはしないであらうか。國民の要望する經濟政策の刷新の如きも亦一片の空望に屬し、加藤自ら間違つた政策を繼承して、其間違である所以を知らず、益々國家に不利なる結果を齎すに至るであらう。經濟政策の紛糾甚だしき今日、海軍行政以外、何事をも知らざる人を內閣の首班に置く、閣員は之を原高橋兩內閣に與し來つた貴族院議員ばかりに求めて、一人の政黨に根據を有する者を見ない。斯る超然內閣であり、貴族院內閣であり、政友會延長內閣であるものが今日の如き多難なる時局に臨んで、如何ほどの時功を擧げるを得るであらうか。私は高橋內閣に止めを刺したことを欣快とするが、加藤內閣に對しては、姑く其爲す所を見た後でなければ、是非の評を下すを得ない。

（六月十一日夜脫稿）

[illegible]

其後新聞紙に掲げられた市來新藏相の談話なるものに徴すると、市來氏は必ずしも政友會の經濟政策を踏襲する意見を持たない、自己の意見もあり、世間の要望もあることであるから、適當の機會に於て、獨自の政策を案出し、又實行すると云ふことを斷言したようである。是れは市來氏が自家の體面を裝ふ爲め御座成り式に述べた言であるか、深く信ずる所あつて、公にした論であるか、新聞紙の記事甚だ簡單に失して、之を確めるを得ないが、私が一ツ注目する所は氏が世間の要望に副うと云つた一點である。如何にしたならば、今日の經濟政策をして世間の要望に適せしめるを得るかと云ふことに對しては、自ら種々の意見もあらうが、意見の異なる所は些細の事柄であつて、之を大局から觀察すれば、世人は今日の經濟社會に對して、物價が調節されて、其宜しきを得ること、國民の生活が安定して有形的方面から生活に脅威を感ずる虞れなきに至ること、財政が整理されて、公債政策の爲めに、金融市場を壓迫するに至る危險を杜絶することの如きを最も重要なるものと考へて居り、更に多少將來に亘る政策としては、稅制の整理にも亦着目して居るであらう。

然るに以上の諸點に就て、市來氏が新政策を樹立すると云ふことは、既往數年間政友會と研究會とが上下兩院を縱斷して、政界の一勢力と爲り、斯くて原高橋兩內閣を擁立して、實行せしめた政策を根柢から覆すものではあるまいか。物價調節固より結構であるが、政府が多少なりとも物價の決定に、權力を用ひ、其效果の現はれんとする場合に、從來物價の騰貴を以て、經濟社會に唯一の利益を及ぼすものであると信じて居つた政研兩會が默視し得るであらうか。國民生活の安定を期するには、金權者階級に對して、或る壓迫を加へなければならないが、由來金權者階級に結託し、阿附し、彼等の歡心を結ぶに忙はしき政研兩會が加藤內閣の斯る方針に向つて、政治を行うことを看過するであらうか、共に疑問とする所である。

若し其れ財政上の關係に於て、公債政策を廢棄して、財政の基礎を鞏固にし、一方に公債發行の爲めに、金融市場の壓迫される弊を除くと云ふことは、財政策として何人も必要とする所であらうが、抑も斯る弊害を我國財政の上に釀成するに至つた根元は盡く原高橋兩內閣の積極政策に存するのであつて、隨つて在來の弊害を一掃しようとするには、西比利亞撤兵も必要であり、公債財源の諸事業に要する經費に大整理と大緊縮とを加へることも、必要であり、華聖頓會議の決議として實行される

海軍縮小に依つて節約された經費を何處までも節約の趣意に基いて、處分し、他の財源に供用しないことも亦必要である。然し市來氏に是等の事を斷行する力があるかどうか、信念はあるとしても、力が伴はなかつたならば、信念のなきと異なる所はない次第であるが、私は同氏に此信念ありとしても其實行力に就て二ツの疑を持たざるを得ない。

第一右の如き政策は世間に所謂消極政策なるものであつて、之を實行することは、自ら不景氣の上塗りと爲らざるを得ない。此不景氣の上塗りこそ、他日景氣の恢復を求めるに就て、一旦通過しなければならぬ筋道ではあるが、世間は相當に苦痛を感じるであらう。此苦痛に就て、物議の起つた際に、之を押切つて、何處までも所信に邁往するには、財政當局者に鞏固なる意思の存することを必要とするのは勿論であるが、更に必要なるは、有力なる政黨があつて、當局者に共鳴し、充分なる援助を與へることである。世評に據れば市來氏は意見の鞏固なる人であるようであるが、其鞏固なる意思に依つて、如上の政策を施した場合に、政研兩會が氏に援助を與へるであらうか。此點に於て私の第二の疑問が起らざるを得ない。積極政策に政研兩會の傳統的に信奉した所であるが、近時に於ては、瑕疵百出の狀に陷つた。高橋内閣が縱續して居つたとしても、此政策は改新されなければならぬ破目であつた。高橋内閣が原内閣から繼承した積極政策を自ら立てゝ、自ら毀つと云ふことは、其間に矛盾はあるとしても、倘ほ之を行ふに易かつた。研究會も亦之を諦めたかも知れない。然るに今加藤内閣に依つて、無殘にも此政策が廢棄されると爲つたならば、政友會は果して晏如たり得るであらうか、積極政策打切りの爲めに、直接に損害を蒙る地方黨員の如きが、幹部を動かして、加藤内閣に反噬を試みるに至りはしないであらうか、少くとも反噬の機會を早めはしないであらうか。市來氏には薩派の後援があると云ふが、今日の時代に國務大臣に地方色を帶びた後援があつたとした所で、公務の上に幾何の資する所があるであらうか。私は其處に何ものゝ存することを知らない。斯の如きは鹿兒嶋出身の人々が源氏山を後援して横綱に盛立てるよりも、效果に於て疑はしくはあるまいかと思はれる。

市來氏が新聞紙に向つて積極政策を踏襲する譯でもなく、左りとて之を廢棄しようとするのでもなく、極めて曖昧の言を弄して、當面を糊つて居るのは、一面に將來に於ける財政當局者の行路の多難なることを暗示するものと推測して間違なからう。灰色内閣に此灰色殘相を見るのも、亦已を得ざる所であるが、吾人の餘り快しとしない所である。(六月十四日記)

概念法學の沒落と新法學の基調としての理想的及び現實的傾向

東大教授　高柳賢三

（一）

さしも一時旺盛を極めたドイツ式な概念法學も今や我國に於て孤城落日の狀況に陷つた。そして一層血の通つた新しい法學が建設せられんとするの曙光が仄見ゆる。

我が民法々典が制定せられてから後それ以前に行はれて居つた英法派、佛法派、獨法派の爭は殆んど獨法派の勝利に歸した。そして當時新進氣鋭の學者は、競つて獨乙の大學に遊學し歸朝と共に獨乙法學を我國に傳播した。そして是等の人達が齎したものは獨乙法學中一番學問的には價値の少い註釋法學であり概念法學であつた。我國の法典の意味——文字的意味——を了解するが爲めには此方面のドイツ法學が一番便利で且つ都合が宜かつたからであらう。そし此ドイツ式註釋法學概念法學輸入の當然の結果として日本人民の日常生活を規律すべき筈の民法や商法の原則までが人民には沒交渉なそして一般人にはとても理解し兼ねる樣な幾多の抽象概念の莊嚴なる羅列となつて了つた。概念法學は堂々と大學の講堂で說かれた。然し若し大學の講堂丈で智的訓練（メンタル・トレーニング）として卽ち概念分析の練習として概念法學が行はれるに止つて居つたのならば其弊害は或は少なかつたかも知れない。然し由來記憶の宜いので有名な大學出の秀才達は之を立法行政司法各々實際方面にその養成された概念法學的空氣を輸入した。斯の如くして法律と國民生活との離隔は益々甚しくなり理論と實際との距離は著しく感ぜられる樣になつた。然しながら『大學の權威』は此學術的に價値の少いドイツ式概念法學派に我國法律學に於ける『正統學派』たる地位を與へて了つた。東西帝國大學の獨法兼修科は英法兼修科及び佛法兼修科に對比して未曾有の盛況を呈するに至つた。そして一時はドイツ法學を修めずば一人前の法律家でない樣に思はれた

若し法律家が概念遊戯に巧妙でないとてんで相手にされないと云ふ有樣になつた。そして最も巧妙なる概念遊戯者が卽ち最も頭の好い天下の大秀才と目されるに到つた。

然しながら世界大戰殊に獨乙の敗北は多大の影響を我が國の思想界に及した。元來戰爭は人生と社會との根本問題を人々の前に提供する。我等は我等の愛する數千の同胞が戰場の露と消えるのを目擊して涙の內に人生・社會・國家等の問題に就て嚴肅に考へさせられる機會を與へらるゝ。露と消ゆる人生の意義は果して如何。社會と國家とは何が故にかゝる悲慘なる犧牲をその構成員から要求せねばならぬか。是等の問題は戰爭の悲哀と共に必然的に人々の胸中を往來する。戰爭中各國に於ける哲學の興起は此消息を物語るものであらう。そして法律學者にも亦その日常從事する硏究の對象に就て之れと同樣な根本的の懷疑が鮮かな形で呈出されるのである。かゝる懷疑の眼を以て從來の正統派とされて居た概念法學を眺めて人はその皮相であつて眞理探究者の一人である法律學者にとつて相應からざるものであつた事を知らなかつた事に驚かざるを得なかつた。それ許りでなくその崇拜の對象であつた獨乙が戰に敗れた。あり得可からざる事だ。然し大黑柱は確かに倒れた。獨乙萬能の夢は破れざるを得ない。概念法學は搖ぎ出した。法學者は概念遊戲が無益なる閑人の事業であつて此多端なる時勢に掉す法學者の爲すべき正當なる仕事でない事を自覺するに至つたのである。

我國の法律は今や大々的變遷の途上にある。從て我國現在に於て近き將來に解決を要する緊要なる法律學上の問題は頗る數多い。今その中で數個の問題を例示的に擧げると左の如くである。

第一民法の改造　現行の民法々典中財産干係を規律する部分は十九世紀文明の結晶である個人本位の社會哲學に基調を有つ。卽ち絕對的、獨占的、排他的な所有權の觀念、契約自由の原則、過失なければ責任なしと云ふ原則は我が財産法の骨子を爲して居る。個人にその財産を自由に使用處分を許す個人所有權制度そのものは根强い人性に基いて居り且つ相當に重要な社會的意義があらう。然し現在の樣に强烈な獨占的、排他的色彩を認めると云ふ事は果して今日の時代思潮に合し又社會全體の福利を增進する所以であらうか。個人所有權制度の廢止は恐らくユートピヤに過ぎまい。然しその獨占的、排他的色彩を緩和する事が進むべき道程ではあるまいか。契約自由の原則にも相當な社會的意義があらう。然し現在の樣な標準化（standardise）されつゝある社會では契約の自由が反て契約を締結する當事者の一方に不當な利益を與へて他の一方を壓迫する事が少く

ない。名義上は自由であつて實質上は強制である場合が多い。契約自由の原則を全廢して封建的な關係本位の法律に立歸ると云ふ事は必竟行はれまい。然し標準化された幾多の法律關係を相當の範圍に認めて契約自由の原則を制限する事が契約法の進むべき當然の道程ではあるまいか。契約の標準化が近く契約法に來るべき變遷であらう。又過失（故意又は狹義の過失）なければ不法行爲上の責任がないと云ふ原則にも充分な社會的意義がある。そして日常生活の範圍では妥當な原則で吾々の正義觀念に合する。然し例ば大企業の雇主と雇人との關係に此原則が適用されると何時も雇人は不當なる損害を被る事になる。ある人の主張する樣に所謂過失責任を全廢して原因責任や公平責任に立ち歸る事は矢張りユートピヤの誹を免れまい。過失責任と原因責任又は公平責任との併存を認めて其兩者の適用範圍を確定する事が不法行爲法の進むべき道行きであらうか。兎に角我民法の規定する財產法が個人本位であり、現在の社會思潮が社會本位を要求して居るが爲に法典から論理的に導かれる法律的解決が社會一般の人達の正義觀念に合はないのは爭はれない事實であらう。親族關係の法に於て我民法は家族本位と個人本位とを併存せしめて居るが寧ろ財產法とは反對に封建的色彩が強過ぎて現今に於ける個人の人格的覺醒と逆行して居る樣にも見える。戶主と家族、親と子、夫と妻との關係に付て家族・子・妻の人格的要求が餘りに無視され過ぎて居りはしまいか。又相續法に就ても『家の保持』と云ふ封建的觀念を偏重し長子の利益保護に厚くしてその他の子供の財產的地位を保護する事が薄過ぎはしまいか。これは果して日本の社會全體の福利を增進する所以であらうか。疑なきを得ないのである。要するに親族關係の規律に就ては關係者全部の人格的要求を充たす事と家產の均霑を一層公平にする事とが必要なのではあるまいか。封建的色彩を弱めて行く事が親族法相續法の進むべき針路なのではあるまいか。これは大問題である。兎に角國民の日常生活の大原則たる民法全體が現代の要求と合はなくなつて改善を要するものである事は事實である樣に見える。

第二立法の改善　立法が國民の生活に甚大な影響を及ぼすものである事は云ふを俟たない。立法には強い社會統制の力が內在して居る。國民全體の生活を一定の方面に指導して行かんとするのが立法の目的であるのだから立法は頗る愼重な態度で爲されなければならない。然るに從來我國の立法は頗る非科學的なものであつた。立法の材料となる資料は主として外國の立法である。勿論立法に際して充分に外國の立法を參照すると云ふ事は缺くべからさる一要件である。然しながら立法は我國民の

生活を規律するのであつて、外國民の生活を規律するのでない以上、立法の基礎は我國民生活の徹底した研究にあらねばならない。又外國の立法を參考するに當つては常にその立法の背後にある社會事情と社會思想とに照して之を觀察すべきものであつて又外國立法が其國の社會に及した影響を如實に觀察せねば無意味である。然るに我國の立法は一面立法に依て規律せんとする我國社會の研究が充分でなく又その參照せんとする外國立法の背景的研究が充分でない場合が多い様に見られる。單に外國立法の條文を參照し之に幾分の形式的變更を加へて我が國の立法とすると云ふのが現在の狀況ではあるまいか。この點は國民と共に大に熟考して見なければならぬ點であると思ふ。將來我國の立法は模倣の域を脫して創意の域に進まねばならぬ。そしてその前提要件は我が國の一層完全なるソシヤル・サーヴェーと又外國立法の背景的研究とであると私は考へるのである。

第三裁判の社會化と簡易化　人民に保障された法律上の權利は畢竟裁判所で終局的に決定される。民法や商法に如何に公平な規定が置かれたとしても若しも之に依て保護される權利が裁判所で保護されないとしたならば民法商法の規定は畢竟スクラツプ・オヴ・ペイパーとなつて了ふ。民法や商法で定めた權利義務が一片の紙片となる恐れは實際上二つの方面から來る。一は裁判官が法の適用を誤る事で他は訴訟の複雜高價遲延と云ふ事である。裁判官が法の適用を誤ると云ふ問題はフランスやドイツや日本などの様な法典國で殊に問題とされて來た。卽是等の法典國では裁判官が事實關係の忠實な研究と社會思想の理解とを充分にしないで法文の文句を機械的に三段論法的に其儘生きた人事關係に適用すると云ふのである。それで此傾向に對する反動として自由法運動なる者が法典國に起つて我國でも近來盛に唱へられて居る。卽ち裁判官は法文の文句と形式論理とに拘泥する事なく事案の具體的妥當性に著眼して自由に裁判すべしと云ふのが此說の骨子である。自由法說中のあるものは幾分極端に走り過ぎ裁判官が皆な大岡越前であるべき事を前提とした點に於てユートピヤに過ぎないものとも云へようが然し概念法學に對する淸涼劑たるの効果は大にある。兎に角法律的安定を害しない範圍で社會の正義心にかなつた具體的妥當性を裁判に實現すべき事は至當の要求である事は勿論である。此點に就て裁判の社會化卽ち裁判を社會の正義心と調和すると云ふ事が必要であると云へよう。第二に訴訟の複雜、遲延高價も亦法律で保護された國民の利益を實際上保護しないと云ふ結果を齎して居る。ある人の利益が他人に依て不當に侵犯されたとしてもその人は之を裁判沙汰にすると云ふ事は先づしない。第一訴訟を

やるのは面倒だし、年月を要するので非常な辛棒を要するし、それに辯護士に對して多大の費用を支拂はねばならない。それ故通常人なら先づ仕方がないとして泣寢入で濟ませるのである。殊に小額事件に付て左樣である。『富者と貧者とは法律の保護が均等でない』(One law for the rich, another law for the poor) と云ふ不平は必ずしも素人の迷想ではない、實は鋭い現代の裁判制度の素人的批評である。この事態は果して之を改善する事が出來ぬ性質のものであらうか。アメリカの都市で設けられた小額事件裁判所 (Small Claims Court) の樣な特別な簡易裁判所の設立も一考案かも知れない。然し根本問題は訴訟手續全體の簡易化ではあるまいか。時勢は之を要求するのではあるまいか。

第四行政の民衆化　國民の日常生活が最も頻繁に法律と實際に接觸するのは行政である。行政の民衆化と云ふてもアメリカの樣に行政官を人民から選擧せよと提唱するのでない。只從來の『お役人根性』を一掃して一層民衆の利益本位にし度いと云ふ問題なのである。『封建的なお役人根性』と『概念法學』とは相結んで行政を著しく官僚化したのではあるまいか。法の行政的執行は一層民衆本位であつて欲しい。一層人民の爲めの行政であつて欲しい。法規の執行を器械的に行つて善良な人民を苦めるのは封建思想と概念法學の餘弊ではあるまいか。法規の行政的執行に付て滯歐中私は英國と獨乙との著しい對照を感じた。前者が民衆本位で頗る親切であるに反し後者が著しく官僚式で不親切であるのを目撃した。執行される法律は同じでも執行の態度が非常に違ふのでその結果に多大の差異が來される。ドイツ式からイギリス式に移るのが我國でも當然進むべき方向であらう。

第五法律教育の改善　我國の實況として立法司法行政各方面に於ける長所も短所も共に大學に於ける法律教育にその淵源を發する。故に立法司法行政各方面に於ける弊害を匡正せんとするには先づ斧を大學教育其者に加ふべきであらう。大學に於ける法律教育の對象は法律の解釋に偏重して居る傾は無からうか。殊に法律の制定を研究する立法學の缺陷はその最も著しい短所であると云ふ事を得まいか。時勢は日に日に進步發展する、新しき立法の必要は益々增加するであらう。大學の法律教育に於て立法學の無い事は多くの立法の質を惡くする事甚しい。社會統制の手段としての立法の効用範圍、社會統制の手段としての立法と判例法との優劣及職分、立法の技術、等は是非共將來の法律教育にその地位を見出す可きものであらう。又法律教育の方法に就ても從來の學生の個性を無視した注入的な

マツセンハフトな教育方法から開發的教育方法に移る可きであるまいか。教師の學說を教へ教師の人生觀を學生にお說教すると云ふ態度を止めて學生自身の異つた傾向を善導し否學生獨立に考へる事を敎ゆべきではあるまいか。教師と學生とが共同研究者として眞理を研究すると云ふ方面に進むべきではあるまいか。私は法律教育に於ても一層リベラリズムの精神の必要を感ずるのである。

要するに我國の法律も法律學も共に過渡期の徵候を表はして居る。法律學の現況も解決すべき幾多の難問に逢着しつゝある。概念崇拜の法律學は倒れた。然らば之に代る可き將來の法律學は如何。私は法學界現在の混亂の内に二つの見逃す可らざる潮流を看取せざるを得ないのである。その一は卽ち法律學上に於ける理想的傾向であり他は卽ち法律學上に於ける現實的傾向である。私は此二つの傾向共に新法學建設の基調として重要な傾向であると考へるのであるが故に以下少しく兩者に就て語らんとする。

(二)

概念法學萬能の衰退と共に起りつゝある一面の現象は法律的理想の追及である。一部の人達は形式的成文法的概念構成と云ふ皮相な法學方法論に滿足しないで法の本質、法の目的、法の機能を徹底的に了解せんと勉めて居る。法律哲學的趣味が若き法學研究者の心を躍らせて居るのは最近の我國に於て注目に價すべき現象の一であると云へよう。歐米に於ける法理學者の所說が專門雜誌に數多く紹介せられるに至つたのは時代徵候の一つである事は疑なき處である。

私は此傾向は時勢に伴ふ當然の事態であつて毫も怪むに足らないと觀察するのである。蓋し急激なる法律變遷の過渡期に於て人々が根本問題に立ち歸り其の活動の根柢を確立せんとするのは新しきあるものを生み出さんとするに必要な『生みの苦み』であるからである。同樣の現象は法律史上點々として指すべきものが數多くある。我國の法律學に於ける理想的傾向法理學的傾向は未だ研究も少いし頗る幼稚の域を脫しないのであつて其間未だ渾然たる日本式融合と云つた樣な色彩などは到底見られない。

現代ドイツの法理學を大觀して一番吾々の眼に入るのは其の『哲學國』『カント・ヘーゲルを生んだ國』の法理學たる面影であらう。

十九世紀の終頃からして一時世人から嘲弄せられて居つた法律哲學が再びドイツで復興するに至つた。そしてその復興は一

面『カントに歸れ』と云ふ運動となり他面『ヘーゲルに歸れ』と云ふ運動となつて現はれた。前者は新カント派の法律哲學となつて結晶した。後者は新ヘーゲル派の法律哲學を生み出した。

新カント派の闘將は何と云つても矢張り伯林大學のルドルフ・フオン・シユタムラーであらう。同じ學派に屬しつゝ少しく毛色の異つたラートブルツフや墺のケルゼンや又伊のデル・ヴエキオ等も近頃大に其の頭の好い所を見せて來たのであるが然し新カント派の重鎭は依然としてシユタムラーであると云へようか。

新カント派の特色は其組立てた法理學大系が著しく形式的であり主理的である點にある樣に思はれる。由來カントの哲學體系には幾何學的論證を讀む樣な精確さがある。それ丈又形式的、主理的な特色が有る。ルドルフ・シユタムラーの思想體系も亦此形式的、主理的な面影を有する。

新カント派はカントの法律哲學を近代化した。カントは法律を無上命令の原則即ち各人の自由が他人の自由と調和するが如き自由の普遍的原則であると觀じた。其所には十七八世紀自然法を『合理法』に轉換したと云ふ樣な絶體的なそして永劫的な考方が顯著である。然しながら又個人の自由を出發點とした所に十九世紀式色彩が顯著である。シユタムラーもカントの無上命令に似た正理法 das richtige Recht を主張する。然しカントの樣な絶體的永劫的意義で之を主張するのではなく時代と場所とに依てその內容を異にし得ると云ふ相對的意義を認めるのである。彼の言として屢々引照せらるゝ『內容の變化する自然法』(Naturrecht mit wechselndem Inhalt) は即ちこの消息を靜かに物語る。その『內容の變化する』と云ふた所に法の相對性と云ふ近代的精神が攝取されて居つて十九世紀以來發達し來つた諸方面の社會科學的研究の必要を認むる伏線がある。此點でシユタムラーにはカントに於けるよりも一層近代味があり現世味があるものと云へよう。又此點で哲學として徹底しないと云ふ非難を受ける。然し彼が人間行動の形式的基準である正理法をその系統の中核として高調する所にカントが生きて居る。

シユタムラーは又行爲の妥當性の標準を社會理想に求める。そしてその所謂社會理想は『自由意志を有つた人々から成る社會』であるとする。『自由意志を有つた人から成る』と云ふ事をその要件とする處にカント式の個人人格尊重の考方が殘つて居るが『社會』を他の要件とする所に二十世紀式傾向が見える。兎に角シユタムラーの學說は人間の理智性と理想性を滿足する樣な形式で提供されて居るのであるから將來ドイツでも追從者

を出す事であらう。

〔註〕 シユタムラーの著書中注目すべきものは下の如くである。
Stammler, Ueber die Methode der geschichtlichen Rechtstheorie (1888); Wirthschaft und Recht (1896, 2 Aufl., (1905); Die Gesetsmässigkeit in Rechtsordnung und Volkswirthschaft (1902); Lehre von dem richtigen Recht (1902); Wesen des Rechts und der Rechtswissenschaft (in „Die Kultur der Gegenwart" 中島愼一「法律及法律學の本質」), (1906); Systematische Theorie der Rechtswissenschaft (1911); Rechts und Staatstheorien der Neuzeit (1919)

シユタムラーの批評に就ては
Berolzheimer, System der Rechts-und Wirthschaftsphilosophie, II, § 48, iii (The World's Legal Philosophies, 398-422); Kantorowicz, Zur Lehre vom richtigen Recht; Geny, Science et technique en droit privé, II, 127-130; Binder, Rechtsbegriff und Rechtsidee (1915); Vinogradoff, Historical Jurisprudence (1920), 146.

又シユタムラーよりも一層心理的傾向の強い新カント派は
Radbruch, Grundzüge der Philosophie des Recht, (1914); Miceli, Principii di filosofia del diritto (1914)
尙 Kelsen, Ueber Grenzen zwischen juristischer und sociologischer Methode (1911) 木村龜二『ケルゼンの社會學的方法論』(法學志林二六卷二號　); Del Vecchio, I presupposti filosofici della nozione del diritto (1905); Il concetto del diritto (1903); Il concetto della natura e il principio del diritto (1908); Del Vecchio, The Formal Bases of Law (English translation by Lisle, 1914)

新カント派の機關雜誌としては Holldack, Joerges. 及 Stammler の主幹になる Zeitschrift für Rechtsphilosophie in Lehre und Praxis, (Bd I, 1914) がある但し近頃廢刊になつたと聞く。

新カント派の紹介恒藤恭『批評的法律哲學の研究』(大正十一)

新ヘーゲル派の主唱者は伯林大學教授故ヨセフ・コーラー氏であらう。勿論少しく傾向を異にした故ベロルツハイマーも可成な勢力があり又伊太利でもバリラリやモナステリオなどがあるにしても戰線の第一線に立つのはコーラー教授であると見て差支あるまい。

新ヘーゲル派の特色は其の組立てんとする思想體系の著しく動的な點にある。由來ヘーゲルの哲學體系が此點で著しいのであらう。ヘーゲルは合理性は卽ち實在であり、實在するものは合理的であると云ふ立場に立つて、合理性たるイデアが諸種の豐富な形式、形態、現象となつて外部的に發展するものとする。その汎神論的精神は讀む人に彼の體系に如何にも動的な色彩が豐富だと云ふ感じを與へる。ヘーゲルの此方面の面影は新ヘーゲル派の驍將たるヨセフ・コーラーにも見られないでない。コーラーがその『法律哲學入門』に於てシユタムラーの思想體系が非歷史的であると批評して居るのはヘーゲルがカントの

無上命令が『有機態』を欠いて居ると批評したのと異工同曲であつて靜的と動的と云ふ兩派の特質を道破したものとして趣味深き言であらう。

新ヘーゲル派はヘーゲルの法律哲學を近代化した。コーラーはヘーゲルの汎神的精神と發展思想とを收受してそのスコラスティックな機械的に微妙な論法を排除した。人類の文化は絶えで發展し變化する、無限の差別の中に統一がある。人間は生物學者の考へる樣な單純な進化した動物ではなくして神性を具有して居る神の片割れである。文化の發展は人が神と協力して之に與る可きである。法律は文化の一方面なのであるから法律家の任務は法律のあらゆる部門に就てその擔當に應じてその其專門とする所の發展に依て文化發展に貢献すべきである。彼のかう言つた樣な汎神的の思想は殊に彼の晩年に於て彼を支配し彼はその上にも安立してその全勢力を傾倒して此目的の爲めに働いた。

コーラーの中心觀念は『文化（クルツーア）』と云ふ事にある。そして彼の云ふ文化とは『人間に內在する機能の人類運命を表示するが如き形態に於ける發展である』（Moderne Rechtsprobleme, §1）この點はヘーゲルが『法律は文化の一現象である』としたのを繼受したであらう。然しながらコーラーはヘーゲルが文化の發展を以てイデアの論理的發展であると云ふ考方には承服しなかつた。從て法律は文化現象なりと云ふ前提から單純な演的論法に依てその系統を建設せんとはしなかつたので土俗學比較法、比較法律史の基礎の上に實證的にその系統の內容を充實せんとした。彼は文化の發展を以て相對的なものであり生氣潑剌たる經驗的發展であると考へたからである。

コーラーはヘーゲルの發展思想を收取したのだから他面から觀察するとサヴイニー一派の獨乙歷史派の精神を承繼したものであるとも見られよう。只歷史派が稍もすると——サヴイニー自身に就ては議論があらうが——法律を以て言語と同じく國民性の自然的な發展であると考へる結果法學悲觀論（Juristic Pessimism）に陷る傾向があるに對しコーラーは文化を以て單に過去に於ける國民文化の生產物と觀ぜず現在の文化への調節の試みであると考察するが故に『調節の努力』を無視しない。否な國民文化の法律的のポステユラートは之を發見すべきものとなし、かくして發見せられたる法律的ポステユラートと現在の法律とを調節せん事を高唱する所に『法學樂觀論』的色彩が顯著なのである。然し又彼の歷史家的素質は彼の『法學樂觀論』をして『法律萬能論』に墮落せしめはしなかつた樣である。

兎に角コーラーの體系は如何にも雄偉であり且つ活氣滿々

るものがある。加ふるに彼の詩人的氣質は彼の體系に血と肉と涙とを供給する。人間の性情の內にロマンテイツクな氣分がある以上彼の動的な法律哲學體系は讃賞者を絕たないであらう。

コーラーの法律哲學的著書としては

Kohler, Shakespeare vor dem Forum der Jurisprudenz (1883); Recht, Glaube, und Sitte; Zur Urgeschichte der Ehe (1897); Einführung in die Rechtswissenschaft (1905, 5Aufl., (1919); Rechtsphilosophie und Universalrechtsgeschichte, in Holtzendorff, Encyclopoedie der Rechtswissenschaft (6Aufl. 1904; 7 Aufl. 1915); Moderne Rechtsprobleme (1907 2 Aufl. 1917); Lehrbuch der Rechtsphilosophie (1908) (英譯 Kohler, Philosophy of Law, 1914 by Albrecht)

コーラーの批評に就ては Geny, Science et Technique en droit privé positif, II, 111-126

ベロルツハイマーに就ては

Berolzheimer, System der Rechts-und Wirthschafts-philosophie, II, § 48 iv (The World's Legal Philosophies 422-431 邦譯中村萬吉『法律及經濟の文化史的考察』); Berolzheimer, Zum Methodenstreit in der Rechtsphilosophie der Gegenwart, (Archiv für Rechts-und Wirthschafts philosophie, IV, 56)

この派に屬するイタリヤの學者ではバリラリ及モナステリオがある。

Barillari, Diritto e filosofia (1910-1912); Monasterio, L'elemento morale nelle norme giuridiche (1912)

新ヘーゲル派の機關雑誌としては元コーラーとベロルツハイマーの主幹して居つたArchiv für Rechts und Wirthschafts philosophie, (1 Bd, 1907-8) がある。

ドイツの法理學にもキルヒマン、イエリング、などの實證論的傾向はある。そしてそれが相應の勢力を法律家の間に有するのは勿論である。私は只『哲學の國』『カント・ヘーゲルを生んだ國』の法律哲學として相應はしいシユタムラーとコーラーとを說いたのである。ある意味でシユタムラーが十八世紀式自然法をカントの哲學的範疇の中に入れ之れに近代的衣裳を纏はしめたものであると見る事が出來るならば、コーラーは歷史派の精神を受け之をヘーゲルの哲學的範疇の中に入れて之に近代的な衣裳を着させたものとも見られよう。

（三）

現代フランスの法理學を大觀して一番吾々の眼に入るのは『革命的理想主義の國』『ルソーを生んだ國』『メタフイヂツク嫌ひなコントを生んだ國』の法理學と云ふ印象である。

『新自然法の復活』『法律的新理想主義の復興』は十九世紀末から二十世紀の初に亘つてフランスの法學界に見られる最も目醒しき現象と云ふ事を得よう。

フランスに於ける理想主義の興起は一面歴史派に對する反動であり他面は實證派乃至社會學派に對する反動であると見る可きであらう。十九世紀に於けるフランスの歴史派はドイツに於ける程有力なものではなかつた。フランスには法典があつた、そしてその法典は十九世紀の終までは唯一の模範的法典として各國の模倣する處となつて居つた。かゝる狀況の下にあつてフランスに於ける歴史派の唯一の事業は十八世紀式自然法と戰うと云ふ丈を目標とすれば宜いのでドイツに於けるが如く法典編纂反對と云ふ目標の下に奮戰する必要に迫られないのであつた。從てその事業が困難でない代りにさうした勢力を法學界に振ふ事を得なかつた。然し實證論者と舊式の社會學派は非常なる勢力をフランスで振ふ樣になつた。勿論形而上學的な研究〔例ばCourcelle Seneuil, Preparation à l'etude du droit (1887); Beaussire, Les principes du droit (1888); Vareilles Sommiéres, Les principes fondamentaux du droit (1889)〕も無かつたのでは無いけれどその勢力は微々として振はなかつた。

歴史派も實證派も共に『法學的宿命論』『法學悲觀論』に陷つた。割合に靜止狀態にある時はかゝる考方で人々が滿足出來るのであるが十九世紀から二十世紀に亘つては急激な法律革進の時代であつてかゝる時代には『努力の效能』が高唱せられねばならぬ。主意的な傾向が顯著とならねばならない。そして主意的な傾向はその活動の基礎となる可き『理想』を論究せねば止まないのである。フランスに於ける理想主義の興起は當然の道行きであるとも見られよう。

此新理想主義の先驅はジエニーの『解釋方法論』(Methode d'interpretation en droit privé positif, 1899, 2ed. 1919)に求むる事を得よう。卽ち裁判は自由に現在の利益對立に基いて解決すべきで傳統的な利益對立解決の結晶である成文法の論理的開展に基いて解釋すべきでないとする所謂自由法を主唱したジエニーはフランスに於ける新理想主義の先驅者であると云へよう。又サレイユの『歴史學派と自然法』〔L'ecole historique et droit naturel d'après Quelques ouvrages recents, Revue trimestrielle de droit civil, I, 80 (1902)〕と云ふ論文でシユタムラーの『經濟と法律』を紹介したのはシユタムラーの『內容の變化する自然法』の觀念をフランスの學界に知らしめ新自然法の興起に與つて力あつたものであらう。そして歴史派の驍將であり又比較法の指導者であつたサレイユに依て理想主義的な法律哲學がフランスに紹介せられたと云ふ事は注目すべき點であらう。フランスの新自然法は十八世紀式な固定的な凝固的な自然法でなくして歴史と比較法に依て醇化された自然法であ

る。

フランスに於ける新理想主義の法理學を提唱する學者はその數頗る多い。然しデュギー・ジェニー・シャルモン・デッモーグは殊に水際立つて輝いて見える。是等の人の根本思想が何であるかは必ずしも發見する事が容易でない。又その傾向にも幾分づゝ差異があるかの如くに見える。

レオン・デュギーは自らは徹底的なリアリストであると主張して居るけれどもシャルモンが指摘した樣に彼は『無意識的理想主義者』であると云ふ感じが彼の所說から得られる。故に彼を以て新理想主義者の内に數へるとしても大過なきものと見て宜からう。

デュギーの中心觀念は『社會相倚』(Solidarité social)である。そして法は社會相倚と云ふ根本的事實から導かるべきものであるとする。そして社會相倚には利益共同に依る相倚と分業に依る相倚とがあるとする。彼は曰ふ

『各個人、各個人の集團はそれが一國の主宰者であるにせよ、田夫野人であるにせよ、又それが政府であつても、全能な議會であつても、又單純な社團であるにしても社會團體と云ふ大きな工場で果すべき職分を有つ。此職分はその人その集團が社會團體に於て事實上占むる地位に依て決定される。彼は權利を有せない。權利は實在の無い抽象觀念であるから權利を有せないのである。然し社會の一員であると云ふ事實其物から彼は社會的機能を果すべき事實上の義務を有するのである。そして彼がこの目的に依て爲す行動は社會的價値があるのであつて又社會的に保護されるのである。』(Duguit, L' État et droit objectif et la loi positif, pp. 30-52)

デュギーはデュルケムの『社會心』と云ふ觀念を排斥する。そして總てが『個人心』から出發せなければならんとする。故に社會相倚の觀念に於ても社會と個人との相關を主張し社會化と個人化とは畢竟相矛盾するものでないとする。從來云ふ樣に權利とか國家の人格(權利主體としての人格)とか云ふ事を假定して個人と國家とを對立せしめて相爭はしむる事は實は皆事實に基かざる空想なのである。實在するものは社會相倚丈である。客觀的法(une règle de droit)丈であるとする。

デュギーが社會相倚と云ふ事實から法の拘束力を導き出すプロセスに就ては一般のソリダリストと趣きを異にして居る。デュギーは通說の樣に社會相倚の事實に道德的價値を與へんとせない。社會相倚には何等命令的分子を包含せないとする。彼は曰ふ

『吾々は協同がそれ自身善であると云ふ理由で社會相倚に協働

せねばならぬと云ふのでない。人間が社會相倚に協働せねばならぬのは彼が人間であるからである。相倚に依らねば生活出來ぬからである。私は相倚に協働する行爲が善であると云はぬ。協同行爲には社會的價値があり社會的結果があると云ふのである』

彼が『事實の世界』と『價値の世界』との橋渡をするやり口には彼の他の點に於ては極力排斥するデュルケム一派の社會學派の影響が強く見えないでもない。

兎に角彼はこの社會相倚と云ふ根本的事實に立脚して彼の系統を組立てんとして居る。そして彼が鋭い論法と流麗なる文章を以て論及する『權利否定論』や『國家人格否定論』は十九世紀の法學が『個人』と『國家』とを凝結的に考へて相爭はしめたのが誤であつたと云ふ事を示した點に於て一大貢獻をなした事は疑ひない處であらう。

フランソア・ジェニーの力を盡して居るのは法律解釋方法論であり從て法の淵源の問題である。彼が舊來の法典解釋の方法を攻擊して新しき方法を建設せんとして居る間に彼の理想論傾向の根本思想が閃いて居る。

彼はその著『解釋方法論』で先づ從來の解釋方法を排斥して法の淵源を詳論し解釋の新方法論の提唱を爲して居る。

彼は先づ解釋者の第一の義務が成文法の解釋と云ふ事にあるのでその方法は他の文書に表示された意志の解釋と異る事がないと云ふて居る。故に單に成文法の文句を無視して當該事件の必要に應じて法を解釋するのは不可であるとする。成文法に明文の無い場合には慣習、傳說、判例、學說に依らねばならないとする。ジェニーは是等の間に輕重の差を置き、そして解釋者の行使する自由の範圍を限定する。此自由は既に法律の豫期した範圍外である故事實上無制限である。故に解釋者は自由に且つ科學的に解決を求めねばならない。外部的影響に左右せられないから自由であり又かゝる自由探究が獨斷であつてはならぬ故科學的なのである。そして彼の科學的自由の基礎は理性と良心でなければならぬ。法律の補助科學でなければならぬ。又社會生活の觀察に依りて體得するを得る置かれたる事物の性質 (nature des choses positive) でなければならない。裁判は正義と功利とを人類生活に實現するを目的とする。功利とは最大多數の最大幸福であると輿論の認むる處であり正義とは良心の聲であり理性の直觀であるとする。

ジェニーの『置かれたる事物の性質』や『正義』の意味は必ずしも明瞭ではない、然しある意味で十八世紀式『自然法』の觀念からその凝固性を奪つた形であらうか。又正義は良心の聲であ

る理性の直感であるとして『科學の補助』のみならず『感情への訴』を以て正義の信仰の基礎となし純正理性を實踐理性で以て補はんとする處にカント式色彩が見えないでもない。

要するにジエニーの傾向は理想的法理學中でも殊にネオ・スコラスティツな傾向が顯著である樣である。

ルネ・デュモーグの傾向を略說する事は頗る困難である。彼は多元論者(プリュラリスト)らしい才氣煥發の一面がある。リアリストとしての鋭さがある。イムプレショニストらしき一面がある。彼が同一事物の諸方面の見方を活人畫の樣な鮮さで畫き出し複雜な實在の色合を示すあたりは、到底他人の追從を許さざる處である。然し彼はその奥に存する『理想法』の存在を信仰する。然しその理想法は人類の達し得可からざるもので只社會生活の調和を達せんとする努力として人間が追及する事が許される丈であるとする。十八世紀式自然法とも異るが又デュギーの『客觀的法』やジエニーの『置かれたる事物の性質』ともその趣を異にする。デウモーグの理想法に對する態度は如何にもアグノスティックな態度である。然も理想法を認める處に新理想派の有力なる一人である彼の傾向は心理的分析に富んだ新形而上學派とでも云ふべきであらうか。

ジオセフ・シヤルモンの思想は積極的に彼自身が之を言明しないので、之を知る事は容易でない。只彼が社會連帶主義や、プラグマティズムや、ジエニーの自由探究論や、デュギーの權利否定論に加へた論評の間から、彼が極端なポジティヴィストでも、又極端なアイディアリストでもなく、先づ合理的自然法の信者であるらしく見える丈である。彼は新傾向の中に個人權と社會權との調和的傾向を多大の趣味を以て傍觀し將來兩者の調節された合理的正義の系統が生れ出づる事を信ずる樣である。然しながらかゝる合理的正義の系統が果して經驗の蒐集と分析とに由て達せられるのであるか將た哲學的考察に依て達せられるものであるかを明かにしないので彼の立場は甚だ鮮明を缺いて居る。

(註) Duguit, L'état, le droit objectif et la loi positive, (1901); Le droit social, le droit individual et la transformation de l'état (2ed 1911); Les transformations générales du droit privé (1912; 2 ed 1922); Traité de Droit Constitutionnel, Tome I (2ed. 1921),

Gény, Méthode d'interprétation et sources en droit privé positif (1899, 2ed, 1919); Science et technique en droit privé positif (1913—)

Demogue, Notions fondamentales en droit privé positif, (1911)

Charmont, La renaissance du droit naturel (1910); le

droit et l'esprit démocratique (1908)
Modern French Legal Philosophy (1916) in Modern Legal Philosophy Series.

我國に於てフランスの法律思想の熱心なる研究者には牧野英一博士がある刑事學叢書に集められた氏の論文及法學叢林中の氏の論文此れである。

（四）

限を轉じてイギリスを眺めて見る。私は少くも法律學の範圍内では其處にシュタムラーやコーラーの樣な哲學者と法律家の混合兒を發見することが出來ない。又フランスのデュギー・デュモーグ・シャルモン・ジエニーを中心とする idéalisme juridique のグループに似たあるものゝ發見するに苦しむ。

元來イギリスは實務家中心主義の國の樣である。『學校の爲めに非ず人生の爲めに』(non scholae sed vitae) と云ふ諺はイギリスの大學生活で最も能く實現されて居る。智識を與へるのが學校の目的でない、人物を養つて實生活で充分に活動する素質さへ開發してやればそれで充分だと云ふ考はイギリスで一番徹底して行はれて居る樣だ。イギリスの法律學の特質はオクスフォードやケンブリッチの法律學校には存せずして辯護士養成を目的としたロンドンのインズ・オヴ・コート附近の空氣に之を見出す可きであらう。然しこれ丈でイギリスを飛ばすのは不公平だ。元來イギリスには學者の數は少いがその少い中からは他國にも比を見ない偉い學者が出て來る。變な國である。

イギリスの法律學は從來分析派と歷史派とに分れて居つた。分析派の驍將はジョン・オースティンで歷史派の明星はサー・ヘンリー・メーンであつた。分析派の態度は文明國の法律を分析してその共通原則を發見せんとするのである。歷史派の態度は野蠻人の社會からの法律發達を分析して進化の原則を發見せんとするのにあるのである。イギリスでは形而上學派なるものが法律學上極めて振はない。只スコトランドは神學の國哲學の國として獨逸に輪をかけた處があるとされて居る丈にロリマー・ミラーの一派が形而上學派を代表して氣焰を擧げて居つたが近頃はスコットランドの大學から法理學に就て一向消息を聞かない。又歷史派にしてもメイン一派の英國歷史派はドイツのサヴィニー・プフタ一派の歷史派の哲學的歷史的と云ふ色彩がとれて了つて分析的歷史的と云ふ色彩に變つて來る處が面白い。メーンも一種の觀念の歷史的發展と云ふ一寸ヘーゲル式な考方をする學者であるけれどその觀念がヘーゲリヤンの觀念の樣な哲學的色彩がなく政治的色彩に豐富な處は頗るイギリス式と云ふ感じを與へる。かの有名な『身分より契約へ』(from status

s concrete)と云ふメーンのジェネラリジエーションにしても觀念の歴史的發展を考へる處は至てヘーゲル式であるけれど云ひ方が政治的色彩を帶びて居る處がイギリス式である。

近頃盛に英語に飜譯される大陸の法律哲學的著作に對して『大陸の屑物』(Continental rubbish)の名稱を與へて居るのは英人の大陸の哲學的法學に對する心理を表現して居るものであらう。

勿論イギリスでも例はダイシイの「英國憲法論」「十九世紀に於ける法律と輿論」の兩者それからジエスロ・ブラウンの「近代立法の潜在原則」などは幾分一寸英國離れのした哲學的な書物で大陸人から喜れる書物だがそれとても獨逸式の近かより難い形而上學的色彩はない。只最近手に入れたヴイノグラドフの『歴史法學』はメーン古代法以來の大作であらう。惜いかな未だ第一卷丈しか出版されて居らないのでその雄大な系統を大觀する事は出來ないのであるけれどその內にあらはれた彼の思想は最も注意すべきものであらう。ヴイノグラドフはオツクスフオード大學の教授で生れはロシヤ人である。彼は法制史家としてイギリス初期の法律狀態を明かにするに就てメートランドと共に偉大な効績がある。そして彼は『法律史』と云ふ立場から一歩を進めて『歴史法學』と云ふ方面まで進んで來た。そして彼の歴史觀の間に彼の法律に對する態度が窺はれないでもない。

彼の立場(少くも歴史觀に現はれた)を一言にして云へば彼はイデイオロジカル・プルラリストであると云へよう。彼は法律史と歴史法學との差異は前者が年代的であるに反し後者は觀念的(ideological)でなければならないとする。そして彼のこの立場はメーンやコーラーと同じであらう。然し彼はメーンの樣に『身分より契約』へと單純なジェネラリジエーションを敢てしない。彼には一層時代精神であるレラテイヴイズムの思想が横溢してゐる。又コーラーの樣な文化發展と云ふ大きなそしてメタフイジカルな觀念の內にゼネラリジエーションをするヘーゲル式考方にも追從しない。彼は社會の典型と之を規律する法とを歴史的に觀察して(1)トテム式社會に於ける濫觴(Beginnings in totemistic society)(2)部落法(tribal law)(3)都市法(civil law)(4)中世法(寺院法及封建法)(5)個人主義的の法(Individualistic jurisprudence)(6)社會主義的の法(socialistic jurisprudence)とに分つて各典型の社會を規律する特種にして複雜な法律思想を書き出さんとするのである。例へば所謂原始文化の復雜性を主張して生物學的發生論的な『單純より複雜へ』と云つた樣な機械的な考案から脫して居る處は流石ヴイ

ノグラドフの樣な法律史家中の第一人者にして初めて實證する事が出來ると感心する。彼が「エアリヒ」の法律社會學やパウンドの「社會法學」に歷史的のパースペクテイヴが足りないと批評して居るが兩氏共ヴイノグラドフの豐富な具體的な歷史の智識の前には頭を下げる外あるまい。此所いらはヴイノグラドフの獨舞臺であらう。兎に角オタスフオードに於けるメーンの光輝ある講座を繼受してメーンの精神を體得し之を二十世紀のレラテイヴイズムの衣裳の下に發表したものが氏の『歷史法學』であるとも云へようか。

（註） Austin, Jurisprudence (1832.e5 d 1911); Holland, Jurisprudence (12ed. 1916); Pollock, First Book of Jurisprudence (4ed. 1918)

Maine, Ancient Laws 1861 ed. by Pollock 1906); Early History of Institutions (1874); Early Law and Customs (1883)

Lorimer, Institutes of Law (2ed. 1880) Miller, Lectures on the Philosophy of law (1884); Miller, The Data of Jurisprudence (1903)

Dicey, Law and Public Opinion in the 19th Century (1905 2ed. 1914) Brown, Underlying Principles of modern Legislation (1912)

Vinogradoff, Common Sense in Law (undated); Historical Jurisprudence (1920).

（五）

アメリカの法律學にはイギリスとも異つた又ドイツ及びフランスとも異つた一種の色彩がある。

アメリカ法律家の傳說的な法律思想は十八世紀式な自然法的傾向とそれに依つて色どられた歷史派的傾向であると云ふ事が出來よう。十八世紀式な自然法觀は一面ブラクストンの『英吉利法釋義』から來たし他面は歐大陸から公法家の書物即ちプウエンドルフ・グロチュス・ヴアテル・ブルマークイ等から來て居る。そして米國憲法が十八世紀式自然法を憲法の條項として保障して居り、之に依て議會の立法權を制限して居ると云ふ關係上米國法律家の內に今尙ほこの觀念が可成り强い。そして一般法律家の歷史派的傾向はコンモンローの合理性普遍性を信ずると云ふ自然法的觀念の影響に依て色どられたものである。

然し之に對立して反對に立つ傾向がある。それは主として新立法殊に社會立法とコンモンローとの關係と云ふ問題を中心とて起つて居る。正統派はコンモンローの合理性普遍性を信じ之を以て理性の結晶であると考へる結果新しく議會が制定する成文法を無視又は輕視して裁判官は其適用を拒否又は少くも其適用範圍を最少限度に極限せんとする。之に對し新派の方はコン

モン・ローにも立法にも同等の地位を與へて成文法の主旨を達成せしめんとする。新派に屬する學者の中最も顯著なるものは米國聯邦裁判所判事オリヴア・ヴエンデル・ホルムスとハーバード大學教授ロスコー・パウンドの二人であらう。

オリヴア・ウエンデル・ホルムスは恐らく現在世界中の裁判官中で一番學識と聰明とを具有した人であると云ふても言ひ過ぎはしまい。彼の下す判決中の意見は歴史的眼光に於ても、社會的考察に於ても、又その警句に滿ちた文章に於ても、又その論理の生き〳〵とした鋭さに於ても、超然として他の裁判官等の群を拔いて居る。そして彼の下した判決の全體を通じてホルムス式の人生觀があらはれて居る。彼は彼自身の獨特な哲學を持つた人であつて他人の模倣を許さざる底のものがある樣である。

彼は疑ひもなくアメリカ法學の諸種の方面の新傾向の先驅者である。そして現在アメリカに燦然として輝いて居る法律學者迄で彼の影響を受けないものは少なからう。彼の所說を一層完全な形式で包んだのが最近の『社會法學』であらう。物理學理や生物學理や心理學理の一方に偏しない綜合的社會法學であらう。十九世紀のアメリカで旺盛を極め今尙ほ勢力を法律家の思想として振つて居る形而上的歴史派に對して社會法學は諸種の點に於て異つてゐる。そしてそれ等の諸點は皆ホルムスが早くから透見して居る處であつた。私は最近集められた氏の論文集を繙いてその感を深くした。

第一に哲學的の歴史派は歴史を理想化し之を哲學的理論で保障せんとした。そして歴史に追從する事を義務と考へた。之に對して社會學派は歴史的繼續は一の必要であつて義務でないとする。義務はむしろ新しい一層よきものを創造するにある。只創造に當りて歴史を利用し之を材料とする事が實際必要であると考へるのである。この態度はホルムスの八十年代になした歴史的研究の到る處に之を發見する事が出來るのである。

第二に社會法學は裁判方法論と、法律論理の範圍、性質と云ふ問題を盛に論爭する。そして此方面の最も顯著なる代表者はフランスのジエニーの『解釋方法論』エアリヒの『法律論理』であるとされる。然し是等の諸著書が永々と說く處をホルムスは既にずつと早くから一層の鋭さを以て說いて居る。そしてその頃からして『法的安定』と『具體的正義』との二點の鋭い對照を見逃しては居らない。

第三に社會法學は『法律の性質』と云ふ盡きない論爭から一步を進めて『法律秩序の目的』を攻究し觀察せんとする。言ひかへれば法律の分析的又は發生論的な考察から機能的考察に遷つて居る。ホルムスの論文には此思想が早い頃から到る所に見

える。

第三社會法學は法律學を他の社會科學と連關せんとする即ち法律のクリテイツクとして諸科學の進歩に依頼せんとする。そして彼の論文には早くから此主張が見える。

云ひかへるとホルムスは既に千八百八十年代頃から時代思潮からずつと進んだ考を持つて居つて二十世紀の法學は彼のプログラムの實現に過ぎぬと云ふ形になつて居る。『次のジエネレーションの人達は私が五十年前初めたる業を繼續した』とホルムスがその論集の緒言に述べて居る所であるが誠にその通りであらう。

ホルムスはその幾多の名判決で米國裁判所を指導した許りでなくその含蓄の豐富な暗示で新しき法律學を惹起した事は否み難き事實である。然し彼の根本思想を捕捉する事は仲々困難である。彼はカント學派でもヘーゲル學派でもない、又フランスに起りつゝある新自然法派をも嘲笑して居る。彼にはホルムス式の哲學がある。人生觀がある。私は先づ彼の根本思想はラディカル・エンピリシズムで背後にミステイシズムの自覺が强い色彩が有るのであると言ひ度い。彼の論文集に收めてある『理想と懐疑』(Ideals and Doubts)『自然法』(Natural Law)の二篇は彼のこの種の人生觀を雄辯に物語るものではあるまいか。

ロスコー・パウンドはハーバード大學の法理學の教授として名聲頗る高い。氏が公刊を約束して居る『社會法學』(Sociological Jurisprudence)を待つて居るのはアメリカの法律家許りではあるまい。然し愼重な氏は幾度か稿を代へて練りに練つて居るのである。そして出版と同時に世界的の『クラシツクス』としようと云ふのであらう。

パウンド氏の法律思想は純プラグマテイズムであると云へよう。彼は『すべての人間の欲求はそれ自身に於て善である』。『善の本質は單に要求の滿足にある』(William James, The Will to believe, 185-206)と云ふ觀念を彼の系統の中心核子とする樣である。この立場から組立てた彼の利益調節の法則はイエリングの利益論よりも更に一歩を進めてゐる。

彼のプラグマテイストの哲學には米國の社會學者たるウオードやキデイングスやスモールの影響も少なからずあらう。然し彼の法理學に『努力の効用』(efficacy of effort)と云ふ樂觀的な色彩が强いのは現代アメリカの社會氣風、コンモン・ローと社會立法との對立に付ての彼の採つた態度、哲學的歴史派に對する彼の挑戰等がその主な原因を示して居る樣に見える。

彼はホルムス程新カント派や新ヘゲール派や新自然法派に對

し冷酷ではない。彼は統合的法律社會法學の建設者として總て是等の理想運動に對して同情を表する。そしてその長所を利用せんとする。然し彼は必竟メタフイジシヤンでなく法律家である。現代をより宜き世界とする事が彼の努力の中心である、法律改革法學改造が彼の生命である。彼にはアメリカのベンサムども云ふべき面影がある。彼は美しき哲學的概念のお城の内に眠る事は出來ぬ。彼は（idealisme juridique）の美はしき詩に酔つて居る暇を有たぬ。彼は卑近ではあるが効力の強いプラグマチイズムの法理學をモツトーとして哲學的歴史主義と鬪つて居るのである。

（註）舊形而上的歴史派の態度を代表して居るのは
Carter, "Law: Its Origin, Grouwth, and Function (1907)
Holmes, The Common Law (1881) Collected Papers (1920)
Pound, "Do we need a Philosophy of Law Columbia Law Review, Vol 5. 389; (1905); The Scope and Purpose of Sociological Jurisprudence (Haward Law Review, Vol 25 (1911); The Spirit of the Common Law (1921); Introduction to the Philosophy of law (1922)
穗積重遠「法理學大綱」牧野英一、山本[illegible]市「法律裁判及實生活」高柳賢三、高橋錸「米國に於ける法律哲學」（法學協會雜誌、三三卷）參照

私は以上獨佛英米の法理學の趨勢に就て各國各々その地方色がある事を示さんとした。更に我國を顧みて見ると未だ遺憾ながら見る可き多くのものを發見するに苦むのである。我國の法理學は未だ飜譯時代にあるのであらう。輸入時代にあるのであらう。丁度イタリヤ初期の法理學が獨逸法理學の輸入に急がしかつたのと同様であらう。然しイタリヤでも今ではイタリヤ式な特色のある法理學を生み出された様に我國に於ても將來實質的日本的色彩を放つ様な法理學が生れよう。

日本式の法理學を生み出さんと努力せんとしたのは筧克彥博士一人であらう。氏の盛んなる意氣は下の引照に現はれて居る。

『吾人ノ生活經驗ハ既ニ數千年ニ遡リテ擴張セラレ遠ク歐米ニ推シ擴ゲラレタリ其根據ヲ失ハス其ノ基礎ノ上ニ時ト處トニ於テ人類ノ發達特色ヲ分擔スルコトガ吾人内部ノ「無上命令」ナリ東洋人トシテ人類ノ發達ヲ日本人トシテ東洋人ノ發達ヲ法律政治經濟生活ヲナス各個人トシテ日本人ノ特色發達ヲ分擔スルコトカ權限ナリ苟モ此ノ擴張セル大精神ヲ失ハザレハ活キタル創設力ハ深キ内部ヨリ湧出シ混混トシテ已ムコトナカルベシ』

（筧克彥、法理學第二卷西洋哲理上、六七一頁）

以上は必ずしも法理學の範圍丈で日本色を出して世界に貢獻

せんとする主旨ではなく更に廣い意味なのであらうが博士の法理學は卽ち氏の分擔する方面に於て日本色を出さんとするのであらう。

然し博士の思索方法に果して日本色が出て居るか私は疑問を懷くのである。博士は曰ふ。

『皇國行政の法理ハ神隨ラノ道ノ顯現ナリ……斯ノ道ハ徒ラニ固定シテ存スル形式デハナク萬古不易ノモノデアリナガラ日ニ日ニ新ナルモノ以外ニハ存在セス永遠ニシテ然モ一貫セル普遍ニ外ナラス』（皇國行政法規言）

思想の行き方は形而上歷史主義で嘗ヘーゲル派を想起させる處である。そして氏の哲理の開展方法表現關係獨立關係論はヘーゲルのイデアの論理的發展と酷似して居る。新ヘーゲル派の文化理想の經驗的發展とも趣を異にする。

筧博士が日本色を出さんとし歐米から渡來して一時我國を風靡した實證論萬能の空氣と孤軍奮鬪を續けられたのは誠に壯觀であつたが氏の哲理の組立方法其者はドイツ式殊にヘイゲル式であつて日本色が出て居るものとは考へられぬ。

要するに我國は未だ歐米より盛に學ぶべき時代なのであらう。各國の法理學が忠實に傳へられて我國將來の法理學の材料とせられねばならぬのであらう。實は日本色は忠實に眞理を探究する間に自ら出るべきもので出すべきものではないのであるかも知れない。

（註）筧克彥、『佛敎哲理』（明治四四）『西洋哲理』（大正二）『古神道大義』（大正元）『續古神道大義』（上卷大正三、下卷大正四）『皇國行政法』（大正九年）

（七）

以上私は概念法學萬能の衰退と共に起つた理想主義追及の傾向に關連して各國の法理學の狀況を說いた。然しある意味で之れと全く反對な傾向が概念法學萬能の失墜と共に起りつゝある。それは『法典』の規定よりも一層實生活に近接する『判例研究』の氣運であり更に進んで『生きた法律研究』の氣運である。卽現實的傾向（リアリスティッシェテンデンツ）此れである。卽ち法學界に於ける一部の人達は無味乾燥な條文の概念的研究から離れて一層色彩の濃厚な社會生活の中に動く生きた法律を研究せんとしつゝあるのである。

我が民法々典が實施せられてから既に二十有余年になる。民法々典は大體に於てドイツ民法第二草案に基いて居る。外國で發達した法律が果して國情を異にする我國に行はれるか如何かは一大疑問であつた。法律が國民精神の發現であると云ふ歷史派の所說が動かす可らざる眞理であるとすれば當時の外國法典

の模倣であつて國民精神の發現でない民法々典が我國に行はれ得らる可きやは法學上趣味ある題目となつたであらう。然し我國民の生活――殊に外部的生活が漸次歐化した爲めに法典も相當に宜く行はれ且つ法典に依つて生活の歐化が助長せられた樣である。然し法典の文句は不變凝固であつても社會生活は日々に變遷した。法典を解釋する裁判所は一面法典の內容の缺陷を補ふと同時に社會生活の變遷に應じて法典の運用を調節せねばならなかつた。裁判所は立法するものでなく法を解釋適用するものであると云ふ事は十九世紀に廣く行はれ我憲法も採用した所である。三權分立の原則と法の完全性と云ふ考から來る理論であつて一の擬制に過ぎない――勿論裁判官の專斷を防ぐ有用な擬制には相違ないが――我裁判所も『法の完全性』と『解釋適用』と云ふ擬制の下にある程度までは巧みに立法を行つた。內緣の妻に關する法律關係、水利に關する法理、賣渡抵當、不動產物權の第三者に對する要件等は解釋適用の名の下に立法を敢てした顯著なる例證であらう。そして判例も亦民法の淵源であると云ふ事は、二三の反對者あるに拘らず、今や我國の通說となつたと云ふて宜からう。それ許りでなく判例は實生活に起つた利益衝突を解決した記錄であるが故に判例に世相の一面が現れて居る。從て日本社會の實證的な研究の立場から云ふても頗る趣味ある資料であると云はねばならないのである。かゝる事情の下に於て概念法學に倦んだ法學者が眼を此趣味深く且つ法の淵源として重要欠く可らざるに至つた判例の研究に向つたのは當然の道行であると云はねばなるまい。

『判例批評』と云ふ事が非常に流行し出し、又其質が漸次改善された樣に見られる。これも判例研究熱の反映であると云へよう。判例批評と云ふ事は我國で明治三十五六年頃から故梅謙次郎博士が開始せられてから以來盛に諸學者に依て行はれて居つたのであるけれど、然し何しろ概念法學旺盛時代の事であるのだから、それの遣り方も事實の研究に注意を怠り只表面に表はれた形式法理の批評にのみ拘泥したので其批評は多く當らず、賢明な裁判官は學者先生達の迂なるを笑て居つた。然し東京帝國大學法學部民法研究室に於て穗積末弘兩氏を頭目として少壯の民法研究者が創始した民法判例研究會が法學協會雜誌々上で發表するに到つた判例批評は此點に於て從來の判例批評の方法に一步を進めた物であつて、我法學界の爲めに祝すべき現象であると云はねばならない。夫れかあらぬか、我大審院も最近の『大審院判例集』に於て從來の判例の體裁を變更して第一審第二審に於ける上告人、被上告人の關係を明かにし、且つ係爭事實の要點を示すに至つたのは大なる進步である。只今少しく事實の

複雜性を明らかにして貰い度ひのと論點を全部示して戴き度い事は總ての忠實なケイス・ロイヤーの希望する處であらう。アメリカの樣に判例の過多に苦む國では判決錄の簡易化の運動があるのは否まれぬ事實である。然し反對に判例の少きに苦む我國では反て判決錄の複雜化を希望せざるを得ない。判例法に熱心な人達はオフイシヤル・レポートに對してプライヴエト・レポートを出して市場に之と覇を爭はんと夢みて居るそうである。

判例法の研究に就ては判例法國たる英米兩國がその研究方法に付ても判例集編纂のテクニツクに就ても遙かに群を拔いて居る。イギリスの『ロー・レポート』の如きは判決錄として恐らく模範的であらう。又アメリカのウエスト・パブリツシング・カンパニーが數多い聯邦裁判所と四十有余の州最高裁判所の判決をナショナル・レポーター・システイムとして出版する手際にはアメリカ式企業的天才の面影が仄見える。

判例研究の範圍は未だ擴張の余地がある。第一審裁判所第二審裁判所判決も當然對象たる可きもので更に此方面の完全な判例集が欲しく感ずる。又裁判所まで行かないで辯護士事務所で終る事件も判例研究とは違ふが研究の對象とすべきであらう。然し此方面の系統的な研究は實際上頗る困難であらう。只京都帝國大學の雉本朗造氏が大阪に設立された『日本法律研究所』は此點から非常に有益な施設かとも思はれる。

(八)

現實的傾向は判例法の研究と云ふ事で止る可きでなく又それ丈で止まらないであらう。成文法と判例法とは必竟社會生活を實際上規律する法の輪廓に過ぎないのであり又其一小部分に止まるのである。判例法は裁判所が强制する法規である。然るに裁判所その他の國家機關が私人の利益保護の爲めに其活動を求めらるゝことは比較的稀に起る場合なのであつて多くの規範は人間自らが其社會生活に於て當然拘束力あるものと認むるに依て生ずる。故に起りつゝある現實的傾向は判例法から更に一轉してこの方面に向ふのであらう。勿論所謂法律實務家即ち裁判官や辯護士などが職分上一番手近に必要なのは成文法と判例法とであらう。從てこの意味の實益といふ點から云へば成文法と判例法とが其學習の中心として一番重ぜられる事は將來に於ても繼續する事であらう。然し學者の學術的良心は卑近の實益のみに執着する事無くその研究範圍が更に擴大せられて所謂『生きた法律』の研究にまで及ぶ事も亦豫見するに難からざるものであらう。

從來此態度を以てした研究が我國に著しく缺けて居る樣に見られる。例へば公法の範圍に就て見ても英米ではブライス卿の『米國共和國』(James Bryce, American Commonwealth)が動いて居る米國の憲政を詳說し、ローの『英國統治論』(Low, Governance of England)が英國議會政治の活況を描寫して居るのである。同樣な書物が殆んど我國には見當らない。多くは憲法條文と行政法規との文理的又は概念的解釋に過ぎないのは非常に物足りなく感ずる處である。動いて居る我國の憲政の狀況を法律家の鋭い分析のメスを振つて描寫し度きものと考へて居る。又訴訟法關係の書物でもかのボストンの辯護士スミス氏の著した『裁判と貧乏人』(Smith, Justice and the Poor)やニユーヨークの檢事トウエーンの著『裁判法廷に於ける被告人』(Arthur Twain, The Prisoner at the Bar)と云ふた樣な法律家に依て書かれた裁判實際を知らしむる書物が我國にはない。前者は民事裁判の運用の貧人に及す結果を寫實的に研究して居り、後者は刑事裁判の實際の運用を面白い筆つきで記述して居るのである。我國でも右兩書の樣な記述が欲しく思ふ。又刑事學でもヒーリーの『各別犯罪人』(Healy, Individual Delinquent)やシカゴの[illegible]裁判所精神病理實驗所で發表された年報に現れた樣な各種犯人の實驗に基いた研究が無い樣である。

ある人は所謂『生きた法律』なるものは畢竟するに『慣習』又は『道德』に過ぎないものであつて法律ではない、從て法律家の研究範圍外に屬すべきものであると云ふて生きた法律研究に水を注ぐかも知れない。成程法律を以て國家が裁判所その他の國家機關に依て强制する法規に限るとする從來の法律の概念から云へば此抗議には一應の眞理を包含する。然し慣習又は道德であると云ふても生きた法律であると云ふてもそれは只概念上の爭に過ぎない。實は道德又は慣習と法律の區別を長々しく論ずる事が野暮な議論なのである。慣習又は生きた法律が成文法又は判例法と頗る密接な關係を有する事に就ては兩論者共異議なき處である。生きた法律は屢々成文法を打ち破る。その實例として屢々引照せらるゝのはフランス民法の妻の行爲能力であらう。フランス民法では妻は著しく其行爲能力が制限されてあつて極めて輕微な取引をするに付ても夫の同意なくしては之を爲し得ざる事となつて居る。然し實際生活ではフランスの婦人はイギリスの婦人と同じ位自由に取引をする。妻の爲した行爲も當事者に依て適當に履行せられて裁判所から之を取消すと云ふ事は稀に起るに過ぎない。又裁判所は成る可く夫の同意を擬制し默示の同意があるのだとして事實上夫の同意の無い無効なる行爲を有効とするのである。即ち生きた法律が判例法に變遷

せんとするのである。かく如く生きた法律又は慣習又は道德は國家の强制する法規と頗る密接な關係を有するものであつて法律家が之を研究すると云ふ事は頗ぶる適宜な事だと云はねばならない。生きた法律は成文法又は判例法と頗る密接な關係を有して成文法及び判例法の充分な智識なしには之を正確に認識する事が頗る困難なのである。從て之を道德家や經濟學者や政治學者や社會學者にお依頼するのは頗る危險であつて矢張り法律家がかゝる仕事に就て一番適任であると云はねばならぬ。生きた法律はそれが法律なりやと云ふ樣な概念論に捕はれるのは愚であつて當然法律家の研究題目に入る可きものとするが正論だと考へる。

ある人は所謂生きた法律は法律實務家が實務上之を獲得し得るものであるから別段學問として研究するの價値は有るまいと云ふ。果して左樣であらうか。私は左樣考へぬのである。現在の社會生活、法律生活は複雜紛糾を極めて居る。農業、工業、商業及び取引の關係は到底數年の實務に依て了解し得る程簡單ではない。且つ實務家の體得する生きた法律の智識はその人の死亡と共に葬られて了ふ。假令法律實務家が「追想錄」を書いてその經驗談を後世に殘したとしてもそれは畢竟斷片的文書として止まるであらう。故に生きた法律は如何しても充分なプランを立て、科學的に系統的に研究せねばならない。そして此事業は一人の能くする處でない事は勿論であるからどうしても team work でやらねばならぬ。或は國家が特別調査機關を定めるのも一案であらうし又は統計局の事業を此處まで擴張すると云ふのも一案であらう。

ある人は生きた法律を研究しても實際役に立たぬと云ふ、成程辯護士として生きた法律の智識よりもむしろ成文法と判例の智識の方が一層その執務上直ぐ役に立つのは事實であらう。そしてこれが殊に私法の範圍に於て、即ち所謂 lawyer's law の範圍に於て研究が怠られて居つた最大原因であるとも見られよう。然しながら生きた法律の研究は法律學に貢獻する事が多い。日本の法律學として世界に示し得るには日本のロウカル・カラーが現れて居らねば駄目である。そして此ロウカル・カラーを出すには如何しても日本社會を規律する生きた法律の研究を基礎とせねば駄目であらう。それ許りでなく實際上にも非常に役立つ事と思ふ。裁判に就ても裁判官「世間知らず」と云ふ非難は裁判官に生きた法律の智識が豐富であれば之を避くる事が出來よう。又立法に就ても從來の空漠たる比較法を基礎とする事なく日本社會の實狀に照して之を行ふ事を得る事になる。從來とても利害關係者に諮問すると云ふ事はやる事があ

る。然しこの諸問なるものは利害關係者に爲されるので立法は彼等の利害關係に直ちに影響する處から彼等の證言には信憑力が薄い。從て立法の基礎とするに不充分である。又從來の經濟學者や社會學者の研究などにその材料を得る事の出來ぬのは云ふまでもない。是等の研究は多く法律の智識なしに爲されて居るのであるから法律家の知り度い點が書いて無い事が多い。將來立法の基礎は如何しても生きた法律の研究に俟たねばならないのであらう。

生きた法律の提唱者として世界的に有名なのは舊オーストリヤのチエルノウイツ大學（今はルーマニヤに屬する）の教授オイゲン・エアリヒ氏であらう。エアリヒ氏はチエルノウイツチ大學に生きた法律研究室（Seminar für lebendes Recht）なるものを設け一定の問題表（Fragebogen）を作つて置いて大學の總ての學生が要求さへすれば大學の事務室で之を受取る事が出來、學生が之を利用して報告をなし、その結果が集積して非常に貴重なる結果が收められたのである。この企ては非常にアメリカの法律家の注意を惹いた。そしてアメリカ法學校協會は千九百十四年にエアリヒ氏を招聘して講演を聞く事になつて居つたのであるが大戰の爲めに妨げられた。エアリヒ氏よりの近信に依れば生きた法律の研究所がルーマニヤにも設けられる樣になつた相である。

私は瑞西に滯在中エアリヒに會見する機會を得た。氏は大戰の結果職を失ひスウイスに放浪の生活を續けて居つたので、チエルノウイツ大學で創始したこの有益な事業を中絶せねばならぬ情況に置かれた事を非常に遺憾として居た。私は氏に『生きた法律』研究の對照を法學協會雜誌に寄稿せられん事を依賴した所氏は喜んで承諾して與れた。そして左に揭ぐる處は即ち私の特に注文した所に對する氏の回答である。少し長いけれど引照を許されたい。將來我國の生きた法律研究の資料として有益だと考へるからである。

『法律學者の研究すべき對象は成文法に止まるものではない。廣く全部の法律生活を觀察し、其法律生活が成文法と一致せるか成文法に反せるか或は成文法の缺を補へるかを研究すべきである。之れを分説すれば次の如き研究方法を採るべきである。

一　親族法に就ては法典の規定のみに止まることなく、夫及び妻、親及び子が如何なる權利を互に主張し、如何なる權利を任意に相互に認むるかを觀察せねばならぬ。此方法に依つて(a)法典に規定せられざる多數の親族的權利の存在すること及び(b)成文法の諸種の規定が實際の親族生活に於て實行せらるゝものであるか又は唯比較的稀なる場合に即ち裁判官が親族上の爭訟に就

て判決を爲す場合に適用せらるゝに止まるものであるかを明にすることが出來る。

二　團體法に就ては法典の外定款、設立契約並びに社團法人、社團及び他の團體の實際の生活を研究せねばならぬ。卽ち機關及び職員の地位、業務管理の組織及び活動、委員會の記錄、總會の記錄等、要するに實際の團體生活に關する總ての材料を研究せねばならぬ。

三　土地制度に就ては法典には殆んど何物も規定せられて居らぬが次の如き事項に注目すべきである。(1)土地所有の分配（廣大なる土地所有、狹小なる土地所有）(2)土地に關する法律關係（所有、物上收益權、賃借權）(3)土地の經濟的利用（耕作、葡萄栽培、牧畜、狩獵、漁業、殖林）(4)事業經營の方法所有者自らの經營賃借）(5)勞働の組織、農業者が土地所有者として或は小作人として自己の親族と共に農業に從事する場合には其勞働の組織は其農家の親族の組織と一致する。廣大なる土地の所有に就ては其土地所有者と管理人及び勞働者との關係を研究すべく、而して此關係を定むるものは之等の者との間に締結せらるゝ契約の內容及び其實行である。又土地所有者が土地を賃借する場合に就ては賃貸借契約の內容及び賃貸せられたる事業の組識を觀察せねばならぬ。(6)土地の產物の利用（自己消費、管理人及び勞働者に對する產出物の供給、商人及び消費者に對する賣却）。

四　契約法に就て法典の規定する所は羅馬法に基き而して羅馬に於ける契約の意義及び內容は今日のそれと全く異つて居るから實驗上殆んど用ふるに足らぬ。新時代の法律學者は諸種の契約を其現代の社會に於て有する作用に從つて分類し又觀察せねばならぬ。而して現代の契約法は次の如き事項を包含するものである。

(1)勞働の組織　國家及び公法人――その勞働組織は官吏の任命と小部分は强制的勞働とに依つて成立して居る――と家族的組織の農業とを除外すれば、農業工場、製作所、銀行、商店、事務所等に於ける勞働組織は總て皆管理人、勞働者、店員、代理人等と締結せらるゝ契約に基くものである。

(2)農業、工場、製作所等に於ける財貨生產の組織　此點に就ては次の諸點に着眼すべきである。(a)原料、機械、機具、動力の供給、(b)生產品賣却に關する契約(c)生產品及び附物の貯藏の爲め又は煤煙及び臭氣の侵入の爲めに他人所有の場所を使用することに關する契約。

(3)財貨交換の組織卽ち商人が商品を買入れ之れを轉賣することに關する一切の契約。

(4)自由なる營業的勞働の組織即ち獨立なる營業者（運送業者を包含す）が其勞務を提供することに關する契約。

(5)信用組織即ち金錢が少數者（銀行）の手に蒐集せらるゝことに關する契約及び信用を與ふることに關する契約。

(6)危險分配の組織即ち保險契約及び危險の負擔に關する契約。

(7)住居使用の組織（賃貸借契約、家屋使用規則）。

(8)最終需要に關する組織（飮食等生活に缺くべからざる需要を言ふ、譯者註）此のことは今日に於ても尙通常家庭に於て爲されるので契約としては旅館の主人との契約及び僕婢との契約が問題と爲るのみである。

現今に於ける契約の硏究が上に述べたる要求を充たすに足らざることは賣買契約を一瞥することに依つて明である。通說に依れば物と金錢とが交換せらるゝならば常に同一の契約である。然るに實際に於て穀物商人と農業者との間に於ける穀物賣買と、機械製造業者と鑛業者との間に於ける鐵の賣買と、消費者と小賣商人との間に於ける食料品の賣買とは其法律上の內容に於て賣買が賃貸借又は交換と異るが如く異つて居るのである。

五　相續法は近世の法典殊に獨逸法の最も進步に後れたる部分である。遺言、婚姻契約（普通には相續に關する定めを包含する）相續契約、財團、養子緣組、遺產分配協定を硏究することによつて初めて今日相續が如何に行はるゝかを知り得べきである。」

（註）Ehrlich, Erforschung des lebenden Rechts, in Schmollers Jahrbuch für Gesetzgebung, XXV, 190, 191 (1911); Grundlegung der Soziologie des Rechts (1913); Das lebende Recht der Völker von Pokowinn (1913); Page, Professor Ehrlich's Czernowitz Seminar of Living Law, Proceedings of Fourteenth Annual Meeting of Association of American Law Schools, 46 (1914); Ehrlich, Die juristische Logik (1918)

鳩山秀夫『成文法ト生キタ法律』（法學協會雜誌三八卷十二號）高柳賢三『法律社會學』（法學協會雜誌四十卷一號）田中誠二『エアリヒの法律社會學』（法學協會雜誌四十卷六號以下）

（九）

法律の現實的傾向は更に一步を進めて日本法律史の現實的硏究と外國法の現實的硏究とを喚起するかも知れない。從來と雖も法律史の硏究に就ては條文法學的傾向よりも寧ろ生きた法律硏究と云ふ傾向の方が强かつた樣である。否。生きた法律硏究はある意味で法律史家が過去の社會に對し使用した方法を更に

現代社會の研究に擴張せんとする企であるとも見られないでもない。そして現代日本社會の生きた法律の研究が益々完成すると共に同樣な寫實を日本法律史の各時代に付て得んとする欲求が益々强くなるであらう。又外國法の研究も單に外國法典の研究と判例の研究と云ふ一面丈でなく更にその社會事情と云ふ背景の下に生きたそして動狀に於ける外國法の研究と云ふ方面に向うであらう。『譯讀外國法學』は『概念法學』と共に墜落の運命にあらうか。

現代日本社會の生きた法律、過去の日本社會の生きた法律、諸外國の生きた法律等の研究が益々完成するに及んで日本法學は益々その光輝を發するであらう。外國人に誇示するに足る日本法學が建設せられるであらう。日本法律家の爲すべき事業は將來益々重大なものと云はなければならない。

（十）

新しい法律學が生れんとしつゝある。そしてその基調としての理想的傾向と現實的傾向との徵候が仄見ゆる。新法學の基としての兩者は互に相爭ふべき性質のものでなくしてむしろ相補ひて發達せらる可き性質のものであらう。

『騎士（ナイト）』に向てその愛慕する婦人（レイディ）は非常に美しい娘だと云ふ丈では騎士は承知しない。彼女は神樣の御造りになつた一番美しい娘であると云はなければ騎士は決鬪を申込むであらう』とは小說の物語りであつて又實に人情の機微に振れた明言である。

人間はスーペラティヴを好む。法律の理想の追求に就ても亦この人情が發揮される。然しながら昔の法理學を大觀して私は理想追及の相對性に打たれるのである。新カント派も新ヘーゲル派も新自然法派も皆な絶對の眞理ではない。眞理追求の不完全に滿ちた努力の跡なのであらう。私は法律學上に於ける理想の追求に同感である。然し結局吾々は人間の生活が改善される樣な理想を要求する。我國民の法律生活を改善に導く樣な理想を求める。現在の法律狀態を批判すべき基準となる有力な理想を求めるのである。與へらる可き理想は當然相對的であつて絶對的であり得ない。我々は必竟『非常に美しい娘』で滿足せねばならぬ。『神樣のお造りになつた一番美しい娘』を求める事は宜しいとしてもを探し出す事は不可能であらう。

然し普通の法律家の大部分は成文法判例及び生きた法律の探究にその時間の大部分を費さねばなるまい。それが實に法律家に一番相應しい仕事なのであらう。この意味で殆んど未開の天地なる生きた法律は學者、裁判官、辯護士、否世人一般と共に研究せらる可きである。（完）

市政肅正運動の波紋

法學博士　渡邊鐵藏

（一）市政肅正運動の經過

此數年來滿鐵問題、阿片事件等を動機として國の政治の各方面に於て、綱紀肅正の運動が起つて、帝國議會に於ても、言論機關に於ても、亦一部の政治家も此點に就いて熱烈な議論をしたり、運動を起したりしたやうであるが、未だ其効果の現はれたるものを見ないやうである。然るに他方、地方自治政の方面に於ても、特に重要な帝都である東京市に於て彼の忌しき砂利事件、瓦斯事件等の大疑獄が起つて市會議員の多數が之に連坐した有樣である。斯くの如き、狀態に國民として、市民として心あるものは皆眉を顰めて慨嘆して居るのである。

斯樣な國政の腐敗、市政の腐敗を改める事は一朝一夕にして之を實現する事は困難な事ではあるが、少くとも帝國議會の腐敗若くは缺點、市會の腐敗の如きは總選擧の際に當つて國民、市民が十分に覺醒し、眞面目に立憲政治と自治制度の運用に關して考慮すれば改善の實を擧げる事は必しも困難な事ではないのである。併し國民の間に斯くの如き精神を鼓吹し、政治的の教育を授ける事は勿論平素より十分の準備をなして徐々に行ふ事が必要である。今私は國政の問題に就いては論及しないが、自治制の問題に關しては數年來都市計畫事業の研究をなし、且つ都市研究會に關係して居つた行きがゝり上一言なきを得ぬ。

我々の生活の幸福に最も直接の交渉の起るものは其住んで居る自治體である。自治體の事業の良否は直ちに日々の我々の生活の幸不幸に重大な影響を與へる。此事業を計畫し其財政を切り盛りをするものは市の理事者並びに市民を代表する市會である事は云ふまでもない。然るに東京市に於ては、從來市會議員の大部分の素質が不良であつて、眞面目に誠意を以て市民の爲めに理事者の計畫を監督し翼贊する事を忘れて、徒に擧げ足取りをしたり、自己の虛名を張る事を努めたり、甚しきに至つては自己の勢力を張つて利益を逞くする事のみを心がけて居つた

者もある。市會が斯くの如き狀態であつては市の施設が一向進捗しないのは當然の事である。斯かる市會議員を市會に送つた事は其責任は市民にあるのであるから、必しも悪議員のみを責める事は出來ない。市の理事者と市會と市民の三者が總て自治に目醒めて其本分を發揮し、三位一體となつて初めて自治制は完全に進行するのである。此意味に於て市會の改造を圖らんとする者は必ず先づ市民の自覺を促さねばならぬ。都市研究會は數年前から都市の事業並びに財政に關する研究を續けて居つたが、最近一兩年は主として市民に對して自治精神を鼓吹する目的を以て東京市全般に亘つて自治講演會を開催する事を第一の仕事として居た。此種の講演會の効果は暗々の中に市民の多數に對して自治に對する自覺を促した効果が少くないものと考へられる。併しながら理想に目醒めても事實之を現はさねば實際の効果はないのである。此時に當つて大正十一年六月初め、東京市に於ては新たな選擧法に基いて市會議員の總選擧が行はれる事になつた。如何に自治精神を鼓吹し、亦如何に選擧制度の改良を說き、又其制度が改められても今回の如き總選擧、重要な時期に際して事實上の効果を擧げる事に關する努力を怠つたならば、何等改造の華も、肅正の實も結ばれずして徒に選擧後の新市會に對して怨嗟の聲を上げるに止まり、學者政治家は無益に其後又十年、二十年に亘つて自治精神の鼓吹、選擧制度の改良等に就いて、口を酸くして叫ばねばならぬ事になる。理想の鼓吹と實效運動とは兩者必ず相伴はねばならぬ。徒に議論に仕放しで實效を收める事を怠れば總ゆる目的は收獲を得ずして終る事になる。今日の如く新選擧法に依る總選擧を行ふ重要な時機に對して、數旬の實際運動をなす事は、五年、十年の議論をなす事と其効果に於て劣りはないと思ふ。此意味に於て我々は國政に關して綱紀肅正の運動が起つたやうに、市政に關しても、亦此千載一遇の好機に肅正運動の起らん事を切望して居つた。然るに目前に醜惡なる疑獄事件を見た市民の憤りは終に何處かに勃發せでは止まぬと見えて、東京市に於ける第一流の言論機關が申し合せたやうに奮起して、我々一部學者と協同して市政肅正の運動を起さうと云ふ議が起つた。六月中旬の事である。野村淳治博士と私は都下の大新聞、東京朝日、東京日々、國民、中外商業新聞等の有力な記者諸氏と會合して期せずして市政肅正運動を起す事となつた。そして種々談合の結果、朝日新聞、國民新聞、萬朝報、の三編輯局長、野村博士、大島工學博士、泉博士及び小生等が發起人代表となつて市政肅正の宣言書を發表する事となつた。併し其後最も肅正運動に對して獻身的努力をされたのは朝日、日々、國民新聞の諸氏である。平素一

致の行動をなしかねる言論機關が斯く迄に協同の精神を以て奮起した事は、如何に市民の間に市政肅正の必要が痛感せられて居たかを證據立てるものである。此樣にして起つた市政肅正會は其旗幟として今回の市會議員の總選擧に際して、自治に目醒めた優良議員を選出する前提として、從來の議員中所謂如何はしい者は絶對に之れを再選せしめない事を期し、市政改造の適任者を選擇する事は市民の公平な判斷に訴へるより他に途はないが、只其要件として第一に、純眞にして能力ある人である事を求め、第二には舊勢力の排斥を主張し、第三には所謂職業的議員を斥ける方針を主張した。政黨員であるからと云つて自治政に關係する事を排斥する事は出來ないが、併しながら譬へ中央政治に於ける政黨に屬する者と雖も、市政に關しては無黨派であつて公平不偏の心を以て誠心市のために努力する事を要求し、「清き新しき」候補者を選べと云ふ事を標語としたのである。勿論此會は決して特定の候補者を援助する目的を有するものではないので、單に一般的に市政の改良、自治の向上に微力を盡したいと思つたのである。

　市政肅正會では趣意書を發表すると同時に寄附金の募集に着手し、芝口の某所に事務所を設け、神田、四谷、本郷、淺草、下谷、京橋、等各區に亘つて肅正演説會を開き「清き新しき候補者を選べ」とか「人格第一、義理や人情で投票するな」とか標語を印刷し、宣傳ビラ數十萬枚各區に亘つて之れを撒布した。又言論機關一齊に此運動に共鳴して市政肅正の必要を力説するに至つた。各區に於ける演説會の効果は意外であつて、殊に下谷區の高橋義信の町內で演説會を開催した時の如きは、山口潤二氏が私と共に出席したが、我々は最初から大に彌次られ、或は多少暴行をも豫期して居たが、事實は之れと正反で聽衆は頗る緊張して演説者の言に傾聽して一語の彌次を發する者なく、熱誠と感謝の拍手を以て我々を迎へる有樣であつた。我々は此意外な狀況に驚くと共に市民の覺醒、事實を感づいたやうな思ひがした。他の各區に於ける演説も之れと同樣な成效であつた。加之演説會の後では種々の投書が舞ひ込んで其の總てが眞面目に市政の現狀を憤慨し、肅正運動を感謝して居るが多くは更に孰れが良い候補者であるかを知る事に苦しむ旨を訴へ、或者は肅正會に於て東京市十五區に亘つて一二級候補者の定員丈け良候補者を指定して、之れを數日間新聞紙上に廣告してくれと云ふ者があり、或は又肅正會自ら候補者を立てて、之れを市民に推薦せよ、然らずんば肅正運動は佛を作つて魂を入れ無いと同じ事であると論ずる者が多かつた。他方寄附金募集は一千餘名の人々に募集書を發送したに拘はらず此運動の眞意

を解しない爲めか、又餘り突然で前例のないためか、寄附者の數は少かつたがそれでも即時に熱誠の籠つた同情の手紙を添へて寄附金を送り越した人もあり、又私の友人や同僚の中でも特に此運動の爲めに寄附をして鞭撻をして吳れた人もあり、又意外の特志の寄附者も現れた。此會では言論のみを以て運動を續ける積りであつたが、市民の希望に副ふため特に候補者の素質を一目の下に瞭然たらしめ、比較考慮せしむる便宜を與へんとして選擧展覽會を開く事にした。此展覽會は六月一日から五日まで星製藥會社の樓上で開かれたが候補者の學歷、經歷、職業、宣言、意見等を各候補者に就いて全部展覽して市民に選定の材料を提供し、且つ市政の腐敗に關する諷刺畫を揭げて市民の注意を喚起した。其効果は意外に著しく毎日觀覽者で埋る有樣であつた。一方肅正運動の効果は意外の邊に波及して、多數の候補者は自ら之れを我田引水して、餘り芳しくない者までが清き新しき候補者と自稱したり、或は廓清演說會と號して立候補演說をする者が多々生ずるやうになつた。斯る現象を生ずるに至つたのを見ても如何に肅正運動の効果が著るしかつたかゞ窺はれて同人の心竊かに微笑んだ所である。

（二）理想候補者推薦事情

四月末に都市研究會で自治講演會を各區に亙つて開く相談のあつた時、來會者中の或名士から斯かる講演會をしても好い候補者を立てる實際運動をせねば無意義であると云ふ發案があつたが、それは都市研究會のやうな研究團體のなすべき事ではないと云ふので、有志が別の團體を作つて之れを實行しやうと云ふ話し合ひがあつたが、其事も何の故か知らぬが其後立消えになつた。然るに赤坂區では右の話に刺戟されて根津嘉一郎、黑田長和、野村龍太郎其他數氏の發起で理想候補者を赤坂區より立てやうと云ふ意味で、區內有志の會合を求め、赤坂區革正會が成立して結局一級より二名の候補者を推す事になつた。併しながら此目醒めた運動は悲しい哉他の區に波及する事なく赤坂區一區に止まつた。元來歐洲の都市では市會議員と云へば必ず何人も認めて適任と考へる德望のある一流の人が選擧されるのが常であるが、我國に於て、殊に東京市に於ては必しもさうではない。寧ろ右の選擧展覽會に展覽されたやうに、東京市の初期の市參事會、市會には一流の立派な人物が議員となつて居つたに反し、候補者、素質は最近に至つて漸次下向する傾がある。殊に今回の總選擧に當りて出揃つた候補々の顔振れを見ると適任と見るべき者は寥々たるもので、市民の失望するのは無理もない次第である。此狀態では東京市會には貨幣論に云ふ

「惡貨は良貨を驅逐する」と云ふ所謂グレーシアムの法則が行はれる事となつて、良からぬ人物と齒するを好まない紳士は市會議員となる事を厭ふやうになるに相違ない。此儘で放任しては從來市會に出た優良な議員は再び候補に立つ事を欲せず、又有能な優良市民は候補者となつて爭ふ事を欲しないと云ふ有樣になつて結局眼の當り市會をグレーシアムの法則が支配する事になる。斯かる狀態では到底市會の改造は絕望であつて市民の不幸は此上もなく、先般の如き大疑獄が起らぬ迄も市會の沈滯した我利的な空氣は市民を煩はす事少くはあるまい。此故に今回の如き總選擧に際して起死回生の術を施すに非んば東京市政の前途は暗雲に包まれる事になる。併しながら既に東京市全般に對する候補者推薦運動は失敗に歸し、纔に赤坂革正會が山手の一角に微光を燦めかして居るに過ぎないのであるから、逡巡すれば市政改良の此好機を空しく逸する事になる。さればと云つて市政肅正會は最初より特定の候補者を援助する者ではないと云ふ事を宣言して居るのであるから直接に立候補運動をする事も出來ず、而も市民の切なる要求と同人の苦衷とは何等かの活路を見出さねば止み難き狀態であつた。そこで適當な候補者があり、且つ適當な候補者推薦團體が成立すれば、時遲れたり雖も尙數名の理想的候補者を市民に推薦する事は寧ろ眞に市政の改良自治の向上に忠實なる所以ではあるまいかと云ふ議論が起つて突如として別に理想候補者推薦の運動が起つた譯である。

從來の東京市會には專門的智識を具へた者が鮮い。財政經濟や、法律、土木の技術、理化學、衛生、等に關する智識が少ない。市の事業計畫を監督したり批評したりするのみならず、進んでは建策の出來る位の智識は一人位は是非共市會に欲しいものだ。又市の土木事業に關して最新の智識を具へて、之れを批評し、進んで助言までなし得る程度の工學者もあつて欲しい。又實業家方面に於ては外國の都市に關する智識があつて理想的都市の標本を明瞭に腦裡に收めて居るやうな人が市會に出る事が望ましい。又契約其他、市と外部と種々の法律上の交渉を生ずる事であるから此方面の練達者も欲しいものである。此種の人が市會の內部にせめて一人づゝでもあれば、市の理事者の計畫に就いて正確な批評が出來るのみならず、進んでは之れを援助する事が出來、又一面他の議員に對して各々の專門の方面から市の理事者の計畫提案の理解を速かならしめ、又平素他の議員を啓發する効果もある。勿論此種各專門に優れた人々は他に公務や多忙の仕事があつて市會の爲に全力を盡す事は出來ぬが、必要に應じて時々此種の人の智識と意見を徵する事丈けで

も市民にとつて莫大な利益である。學者は勿論市の日常問題の爲に自ら奔走したり、絶へず市民と接觸したりする事は比較的困難であるが他の方面に市民と絶へず直接關係を持つて活動する議員は自ら多々存在する。併しながら他方に專門的智識を具へた議員が居ると云ふ事は常に理事者を刺戟し、又他の市會議員に裨益する所鮮くない。又之等の專門的智識を以て立つ議員と雖其或者は又積極的に市民の爲に活動する時間を割き、努力を惜むものではない。勿論市理事者の中には總ゆる專門的智識が網羅してはあるが、市會の內部に於て此種の智識を具へる者が存在する事も亦必要である。然らずんば智識なき市會議員は徒に市の計畫提案を盲評したり、或は不知の間に妨害する事もあり得る。理事者を誘導し得る程な有能な市會議員のある事と、理事者の足手纏ひになる市會議員の多い事とは孰れが市民の爲めに幸福であらうか。殊に道德の點に於て信賴するに足る人格者が幾人か市會の一隅に厳然と割據する事は市會の空氣を緊縮せしむる點に於て大に効果があらう。有能者にして人格のある者が議會の一の中心勢力をなす事と、無能にして我利的の者が市會を左右する勢力を持つ事とは市政の實績に甚大なる影響を與へる者である。今回の總選擧に際して理想候補者推薦者の團體から推された候補者は此意味を持つたものである。此候補者を推薦する議の起つたのは前述の如く默し難き市民の要求に基いて突如として起つたものであつて、其議は五月廿八日に初めて問題となつた。そして廿九日の午前に宮島氏、山崎氏、卅日の午前に堀江、末弘兩法學博士、三十一日の夜に寺野博士の立候補の承諾を得たのであつて、澁澤子爵、坂谷男爵、土方博士、其他の推薦者は此間に全部纏まつたのである。併しながら右の候補者は孰れも多忙な方であるから當選すれば市民の一人として辭退はしないと云ふ意味で候補者となる事を承諾されたのである。此候補者は財政經濟の堀江博士、法律の末弘博士、工學の寺野博士、歐米の事情に精通した山崎、宮島氏、孰れも得難き良候補者であつて斯くの如き候補者を得た事は市民として喜ぶべき事であつた。其他にも候補者が物色されたのであつたが、時日がなくして右の五名の方で思ひ止つたのである。此諸氏は總て一級候補者として推薦される事になつたが。末廣博士の如きは當然本鄕の二級より、堀博士は芝の二級より立候補を願ふべき筈であつたたが、當時理想候補推薦運動の仕事に助力せんとした人々は多くは前述の市政廓正運動に關係して居た爲め、既に連日の奮闘に疲勞困憊の極に達して居つた。加之ず右の五候補者は土方博士に依つて六月一日午後四時に初めて發表され、二日より實際運動に着手する手筈であつて二級

の選擧期日までは餘す所僅かに三日に過ぎなかつたのである。一奔走者の努勞と人手の不足と時日の切迫のために遂に一萬の有權者を有する二級より候補者を擁立する事が事實不可能で僅に千數百の有權者數を有する一級を擇ぶの外策が無かつたのである。尙私自身に何故候補者として立たないかと云ふ非難を間々耳にするが、既に右の肅正運動を起し、寄附金募集までなして居る際に私の立つ事は自己の立候補の準備として斯かる運動をすると誤解をする人も起るであらうし、肅正運動の權威を傷けてはならぬと思つて辭退したのである。

一部の人は理想候補の推薦者に一流の名士が名を連ねた事は時代錯誤であると云ふやうであるが、突如として五人の候補者を市民に紹介し、而も其候補者自身が自ら陣頭に立たざる事を要件として居る以上は此候補者の優良なる事を市民に紹介し且つ之れ等の候補者が當選の上は市會議員として其責務を盡す意志ある者である事を證明するためには勿論東京市民の信賴の最も厚い紳士の紹介に俟たねばならぬのである。此理想候補者――或人は標準候補者と呼んで居る――の顏觸れが六月二日の朝の都下の各新聞紙に掲載されるや、著しく世の耳目を聳動し市民の多數は其運動の効果に就いて刮目して居る有樣であつた。

（三）　二級戰の結果

（上杉博士に聞く）

市政肅正會は五月中に其演說會を打ち切つて、六月になつては單に選擧展覽會を開いて居るのみであつたが、新聞紙上に現れたる肅正運動の効果は前述の如く意外に著るしく、其際六月二日に至つて一方理想候補者が五區に亘つて出現したのであるから、今回の總選擧に對する市民の好奇心と期待は餘程高潮したやうに思はれる。六月五日愈々二級候補者の投票となるや市民は不安と希望と二つの思ひに胸を躍らして其結果の如何を待つて居たが、夕刻開票の結果を見れば、果然從來醜類と目せられて居つた部類の人々は頭を揃へて失脚し、大體に於て殆んど豫期以上の肅正の實を擧げ得たやうである。此結果を見て雀躍した者は單に肅正運動に參加した者のみではなからう。抑々今回の總選擧は三級制度を二級に改め、有權者の數は從來に比して約三倍半となつたのであつて、殆んど普通選擧と云ひ得べきものであるから、此總選擧の結果如何、殊に二級の選擧の結果如何は市民の自治に對する自覺の程度を示す試金石であると共に、新選擧法の可否を判斷するに就いて具體的の實證を與へる

ものである。若し二級の結果が不良であつて、再び良からぬ議員を跋扈せしむる事があつたならば、階級撤廢に就いて疑を起す者が生じたり、選擧權擴張に就いて反動的議論をするものが起つたであらうが、幸にして今回の如き良結果を擧げた事は選擧法改正の徒爾でなかつた事を語ると共に、市民の自治に對する覺醒の曙光を認め得たものとして喜ばねばならぬ。併しながら二級戰に於ける棄權者數は、有權者の約四分の一弱に及ぶ事は未だ之れを遺憾とせねばならぬ。遮莫一葉落ちて天下の秋を知る。此二級戰の成功の跡を見たものは何人と雖も一級戰の結果に就いて多大の期待を屬したに相違ない。

此　に當つて甚だ奇怪な事件が起つた。六月五日の夕方數箇の新聞社の記者が私の處へ驅け付けて示した謄寫版で奉書紙に刷つた小印刷物を見ると、それは小石川の自治會の名の下に、上杉愼吉博士、大井玄洞氏其他總代として八名計りの連名で各新聞社及び小石川の一級有權者に出したものであらうが、其内容は理想候補者推薦に對する批難であつて小石川區の一級より突如理想候補者として寺野精一博士を澁澤子爵其他小石川區住民ならざる者が推薦したるは小石川區自治の蹂躙であると云ふ趣旨である。思ふに上杉愼吉氏は自ら小石川區の一級の政友會候補者である菅沼氏の推薦者となつて居り、大井玄洞氏は鳩山一郎氏の門下生である關係上、憲政擁護と云ふよりは寧ろ政友候補擁護の意味で、肅正運動と理想候補出現に魂を寒からしめて居る所へ二級戰の結果を見て錯措愕く所を知らず、窮餘の策として斯る卑劣なる手段に出たのであらうが、私は次の三點に關して上杉博士に尋ねたい。

一、今回の選擧は市會議員を選擧するのであつて、各區で候補者を出す事は定員の割當てをなすに過ぎない。競爭の結果十五區からなるべく優良な候補者が選出される事が市民のために利益である。其區の住民に適當な人がなければ、止むを得ずんば他より輸入しても好い。況んや適當な候補者と見れば東京市民は何人と雖も進んで之れを推薦して差支へないと思ふ。得難き候補者であれば市民が擧つて推薦者となつて何の不都合があらうか。市會議員は東京市民の爲めに選ぶのである。小石川區の爲めに選ぶのではない。況や寺野博士は帝國大學教授として、航空研究所長として學識深く、人格一世の範とするに足る人である。小石川區民は自己の區内に斯かる立派な住民を有して其人が市會議員候補者として立つに際して、他區の市民が之れを推薦したからとて何の自治の蹂躙と云ひ得やうぞ。我々は小石川區の市會議員を選ぶに非ずして東京市の爲めに市會議員を選ぶのである。勿論慣例としては區内の住民を區内の人が推

薦するのが普通の例ではあるが、今回の如き時機に際して特に理想的候補を五區に亘って包括し、推薦したるに對して、單に小石川區のみ、否、上杉、大井二氏の一派のみが特に自治の蹂躙と極言するのは何故であるか。

二、上杉博士等が右の如き理論を以て理想候補の推薦に反對するならば、右の理想候補者の發表された日の直後に於て、即ち二日の午後より三日四日の間に何故に之れを公然と問はなかつたか、一級投票日の前日、而も我々が既に公に辯駁すべき時間も機會もない切迫した時機に於て、我々に直接公然と論戰する事なく、竊かに新聞紙及び小石川區の有權者に對して斯かる宣傳をなす事は頗る卑怯であると云はれても辯解の辭はなからう。

三、六月五日の夜小石川區の江戸川亭に於て、寺野博士推薦演説會が開催されて、田中館　塚本、斯波、佐野諸博士が寺野博士の爲めに眞情の籠つた演説をなされて居る所へ、突如として德永爲次と名乘る立派な紳士が同區の住民として飛入り演説を希望された。同氏　憤慨して語られた所に依ると小石川自治會の名の下に上杉博士等の發送した印刷物の中には、總代の一人として德永氏の名があるが自分は全く關知しない所である、彼等が自己の名義を恣に濫用して、かゝる無謀の印刷物を撒布した事は甚だ不都合の所爲であると非難攻擊をされたとの事である。贊成せざる人の名義、知らざる人の名義を恣に濫用する事は紳士の執るべき道ではないと思ふが此點如何。

（四）理想候補推薦運動と一級戰の結果

理想候補推薦運動は單に一回推薦者連名の推薦狀を各候補者に就いて發送し、後に葉書を以て猶ほ一回依賴狀を發し、其他は五區に亘つて二回づゝ演説會を催したに止まる。二日より運動に着手して五日まで纔かに四日間に於て、僅かに十數名の人手で五人の候補者の應援運動をなした事であるからこれ以上には手が廻りかねたのである。併しながら幸にして宮島、寺野、堀江三氏のためには少しく遲れて別派の推薦者の團體より別に推薦狀を發送し、又京橋區、日本橋區、芝區の如きは三四回の演説會を開催し、又慶應の學生諸君は堀江博士のために熱烈なる運動を開始されたやうである。併しながら今回の理想候補者は孰れも自ら市會議員となる事を希望して自己推薦のために全力を盡すと云ふ立場の人でないので、候補者當人に演壇に立つ事を願はない方針で進んだ。其ため我々の計畫した推薦演説會は一段のハンデキヤツプがあるのであるが、土方博士を初め、野村、河津、高柳博士、慶應の田中、阿部博士等を初めと

じて各々新聞の記者の方々が非常に奮闘したものである。特に京橋區に於ては築地精養軒に山崎鶴吉氏の推薦演說會を開いたが此時には坂谷男爵が出席して市政改造の急務を說かれ、時弊の窮極する所之れを救濟する者は自ら神佛の力が加はるものであるとし、多くの社會改革の運動は反つて平素冷靜である大學に其端を發するのであつて、改革や革命の源泉が大學より出た事は、歐洲の歷史を見る者の均しく知る所である。今回の總選擧に際して市政改造の運動が大學の一部より勃發した事は矢張り神佛のなさしむる所である云々と論ぜられたり、激越の口調に双頰紅を呈して、一時間餘に亘つて最も聽者を感動せしめた誠に紀念すべき演說をされ、又此種の會合には出席されない澁澤子爵が特に來場されて一場の挨拶をされた事は大に來會者を動かしたやうである。又土方博士が三十年來自治制に不熱心であつた、罪亡しと稱して都市研究會の自治講演會を最初として市政肅正運動の演說會、特に理想候補者推薦演說會には老軀をも厭はず連日參會奮鬪された事は、矢張り時勢が自ら斯くの如き現象を生ぜしめたのであつて、坂谷男爵の言葉を借りて言へば矢張神佛の力であらう。私自身も市政肅正運動を言論機關の方々と一緒に起し時には成行上始終世間の誤解批難を招いたり思はぬ痛手を負ふ事もあるかも知れぬと思つたが、左様な事は無頓着で盲進したのであつて、野村博士と雖も御同樣であつたらうと思ふが、意外にも大學方面に於てさへ却つて同情の言葉を聽く程であつて、之れも亦市政の現狀に對する不滿が泌々と感ぜられて居る故であると思つた。併し勿論我々の運動は出來る丈理想的に、上品にやらねばならぬし、又軍資も乏しいのであるから選擧の玄人から見れば殆ど兒戲に類して居つた事と思ふ。小石川區の第一回の演說會、本郷に於ける末弘君推薦の演說の如きは、演說者不足のために失敗に歸し、殊に第二回目の如きは手違のため途中で散會になると云ふ大失態を演じた。此時より我々は本鄕は最早不成功と悲觀した。猶ほ私は此運動に學生を利用する事を避けた方が宜いと考へて居つたので、特に其方面の運動はしなかつた。僅かに一人の卒業生に依賴して、投票前日に至つて末弘君推薦の立看板を增した位である。選擧當日本鄕を受け持つた私は、自働車を驅つて區役所傍の大幕張へ出向いたが、各候補者の立看板の林立して居る有樣、運動員の群集して居る有樣、各候補者の自働車、人力車が各候補者の名前を貼り紙して右往左往に走せ違ふ有樣を見て、此中に自分が飛び込むのは如何にも厭な感じがした。併しそれも瞬間で、既に双を拔いた以上は戰ふべきであると直ちに自動車を走らせて大學門內銀杏並木の下で自働車に貼り紙をして末弘君の名前を

書いて艤裝を始めた。我々が或意味に於て神聖視して居る森嚴な銀杏並木の下で、選擧運動の下走りをして、自働車に貼り紙をしたり、況や自らそれに搭乘する事は心に汗の出る氣がしたが、矢張拔いた刄の勢でせつ〳〵と仕事をやつて居ると、折から姉崎博士が見えて「渡邊君、次でに君の帽子にも末弘と書いてはどうか」と笑つて冗談を云はれたが、それが一寸皮肉のやうに耳に響いた程此大學門內を選擧のために騷がす事は如何にも濟まないやうな氣がした。其間に周圍に集つた數十名の學生の胸にも何と思つて居るであらうかと氣づかはれたが、漸く艤裝を終へて出發をすると學生が拍手を以て送つてくれたので、此十分間の心配も幸にして泡の如くに消えて、安心して車を區役所傍へ走せる事が出來た。折から昨日歸京した山田潤二氏が本郷に應援に來て、此車を以て自ら大學へ出かけて十數名の學生を運れてくる。宣傳ビラを區內の隅々まで撒布すると大活動をしたが、其奮鬪と學生の眞面目な同情には感謝せざるを得ぬ。併し二回の泥を付けた演說會と、當日になつて纔か一臺の自働車の宣傳ビラ撒きとでどんな結果が得られるかは選擧通でなくとも我々同志の凡そ推察し得た所である。當日投票締切間際に至るまでに末弘君の推薦事務所を訪れた名刺は僅かに四枚、小石川區を訪ねて見ると寺野博士の推薦事務所を訪れた名刺は僅かに三枚、之れでは一體五票入つたのか、十票入つたのか、百票入つたのか、一向見當が付かぬ。それに引きかへて他の候補者の事務所には名刺が山をなして居る。さて六日の午後六時頃になつて愈一級戰の結果が發表された。二級戰の結果と共一級戰に及す影響に望みを掛ける者は何れも一級の結果に於ても又二級に劣らぬ好結果を擧げ得る事と思つて居た。然るに開票の結果は意外にも一級に於ては舊勢力が最も優勢であるのみならず、二級の如く廓正の效果が十分に現れたとも見えない。殊に我々は最初最も優勢であると認めて居た本郷區が運動の失敗の爲めに最も不成功とは考へて居たが、學者候補者が皆失敗して居るとは夢にも思はなかつた。殊に選擧當日は小石川の如きは、素人觀と嗤はれるかも知れぬが、寺野博士は必ず當選すると思ひ、芝區も慶應學生の熱烈なる運動の結果、堀江博士は當選すると思つて居た。然るに實際の結果は日本橋區の宮島氏、京橋區の山崎氏が當選したのみで學者候補者三名は揃つて落選の悲運に會した。固より選擧前僅か四日間に五區に亘つて總ゆる運動を行つたのであるから、時日もなし、手不足でもあり、十分の效果を期待するのは無理であるかも知れぬが、せめて學者の中一人でも當選して居ればまた慰めるに足るのである。殊に小石川の如き結果を見るに至つては憤慨せさらんとするも得

ぬのである。但し本年、芝は僅かに十數票の差で失點となつたのであるから幾分か慰めるに足りるとも云へる。例し逢ふ人毎に理想選擧の結果に就いて批評を乞へば皆成功と云ひ、又或人は大成功と云ふ。成程今回の肅正運動の效果は十二分であり、理想候補推薦運動も僅か數日の活動に依つて五人中二人の當選者を出し、其他の三名も見苦しからぬ成績であつた事は確かに成功と云へやう。併しながら二級選擧の結果と一級選擧の結果を見れば後者に於て大なる遺憾を感ずると同時に、學者候補者を若し二級より推し立てゝ居つたならば必ず當選して居たであらうと云ふ憾みがないでもない。だが既に述べたやうな事情で二級より押立てる事は不可能であつたので此際は止むを得ぬ事と諦めねばならぬ。それにしてもつくづくと感ぜられる事は一般選擧權者の情實に動かされる事の甚しいのと階級撤廢の急務である事である。以下今回の總選擧に關して得た感想を述べて見やう。

（五）階級撤廢の必要

右の一二級選擧の結果を比較して直ちに階級撤廢を呼號するのは早計と考へる人があるかも知れぬが、既に數年前より階級撤廢を主張して居る私としては今度の一戰で階級撤廢を一日も早く實現せねばならぬと云ふ感じをまざまざと與へられたと云ふ事を主張しても早計ではない。階級撤廢の可否に就いては既に理論上に於ては多く爭ふ者がなく、只選擧民の覺醒の程度、地方の事情に應じて漸次に撤廢をしやうと云ふに過ぎないのであるから、今日の選擧の結果の如く一級よりは寧ろ二級の方が好成績を擧げたと云ふ事を見ては寧ろ階級撤廢を一日も早く實現せしめねばならぬと云ふ事は多數の人の同意する所であらう。殊に一級の候補者の中で非難の聲の大きい者は階級制度がなければ當選し得なかつたと思はれる者もないではない。反對に我田引水かは知らぬが落選した三名の學者側理想候補者は階級のない候補戰であれば勿論當選した事と思はれる。恒産のない又或は智識の低いと認められて居る二級選擧民、就中今日新に選擧權を得た十萬の有權者が選擧權の行使を或程度迄正當に行ひ得たと云ふ事は一級選擧の思はしからぬ結果に比較して、寧ろ階級撤廢の必要と選擧權擴張の勝利を語るものではなからうか。

（六）投票私約は非立憲

今度の理想候補者推薦が期日切迫して遅れて發表されたゝめに實驗した問題であるが、此事の解釋如何は將來議員選擧、

自治體選擧に於て有權者の最も考慮すべき重大なる問題であるから、特に識者の考究と批判を煩はしたいと思ふ。五人の理想候補者は孰れの點より見ても立派な候補者であつて、公平な眼から見て、他の候補者と比較して後から出た此理想候補に投票をしたいと考へる人は多々あるべき筈であると思ふ。然るに或人は既に或候補者のために投票する事を約束してあるから譬へ後で好い候補者が出ても變更する事は出來ぬと云ふ。候補者に優劣がなければ勿論普通の道德に依つて前約を守る事も宜からうが、元來投票の私約は立憲の趣旨から云つて決して遵守せねばならぬものではない。我々が市會議員を選ぶのは候補者の利益のためにするのではない。選擧權を有する者が市民を代表して市民のために優良なる候補者を選擧すべきものである。他より何等の壓力を受くる事なく市會に最も優良なる議員を送る事は有權者の義務である。選擧權者は投票の權利を有すると同時に、市民に對して此責務を負擔するものである。其ため特に無記名投票の方針が執られて居るのであつて、有權者は選擧場に入つて初めて投票用紙を受け取り、投票函の傍に記入場所が設けられて、其處で初めて最も適任者と信ずる者の姓名を記入し、無記名で直ちに之れを投票函に投入するのである。斯くの如き制度の精神、方法の用意を顧みずして、單に投票の約束をなしたりとて、優秀なる候補者が後に現れたのに拘はらず、先の私約を守つて劣等なる者に投票する事は公私を混淆するものであつて正しく立憲の思想、自治の精神に正面から背反するものであると思ふ。投票を貨幣に代へて賣つて或候補者に投票の私約をなす事は勿論選擧法違反である。黄白の收受なくとも徒に投票の私約をなして市民のために優良なる候補者を市會に送る事を妨げる者は、即ち私情のために公の義務、否公の制度の精神を破壞する者である。世間の凡庸なる者は通常の人情として同じく投票の買收を受けても五圓より十圓、十圓よりは二十圓を吳れた者に投票をすると云ふ。或者は之れを人情の美點と云ふかも知れぬ。又黄白を受けずとも投票の私約を重ずる者は一度の戶別訪問よりは二度、二度よりは十度を重しと見るかも知れぬ。併しながら之等は最も卑近な人情である。所謂義理、人情、約束の遵守と云ふ事は勿論普通の場合には從遵すべき道德であるかも知れない。併し其行爲が一方公の制度公の道德と關聯して居る場合には果して孰れを主として見るが正しい事であらうか。斯くの如き事は云はずして明かな事であるが思ひきや猶ほ私約尊重説を墨守する者が數多くある。斯かる幼稚なる誤解があればこそ我々が肅正運動を起すやうな必要も起つてくるのである。肅正運動の一の印刷標語の中に「人格第一」、義理

や人情で投票するな」と云ふのがあつた事は前に述べた通りである。此明かな道理を辨へずして當人の依頼、親しき友人の依頼に依つて輕々しく投票を私約する如き者が多いから、斯く一票が純眞、無垢、神聖にならずして濁りが出來て來る譯である。私約の爲めに優良なる者を顧みずして平凡なる者を選ぶ者は、劣悪なる者と知つても私約を守つて優良なる者に代へる事を欲しない事になりはしないか。投票は一票が重りて千票になるものである。一票の持ち主は一票での差で甲が當選する事にもなり、乙が當選する事にもなると云ふ事を思はゞ、公平無私何等の私情を交へずして投票場の筆硯に面して、初めて意中の候補の名を記し、之れを用紙に記して直ちに投函すると云ふ無記名投票の精神を忘れぬやうにせねばならぬ。勿論便宜に依つて投票を約束する事もあらうが、正しい理由で之れを變更する事は立憲の精神であると云ふ事は腦裡に刻して貰ひたい。併し此點は普通の道徳の交渉になる重大な問題であるから、私の議論が正しくないと思ふ方があるならばどうか十分に社會の人と共に此點に就いて徹底的の議論を戰はして貰ひたい。併し今回の選擧に際して實例を見ると、本郷の或る候補者は選擧當日四百枚の名刺を受け取つて二百五十票の投票を得たと云ふが、末弘氏は四枚の名刺、寺野氏は三枚の名刺、山崎氏は七八十枚の名刺を得て何れも二百票以上の投票を得て居る。之れを見れば先約を翻して立憲の趣旨に從つて優良候補者に投票した實績が或程度迄明かなやうに思はれる。只今後のため理論として十分に此點を徹底せしめて置きたいのである。

（七）　理想選擧の方法

理想選擧の意味は固より明確ではないが、少くとも黄白の力に依つたり、權力の濫用に依つたりして選擧を爭ふ事が理想的でない事は今更云ふ迄もあるまい。次に只情實因縁を辿つて投票を漁る事をのみ主眼とする事は又理想的方法とは云へぬ。候補者自身が有權者の門口を戸別に訪問して、低頭平身して歩くと云ふ事は勿論理想的行動ではない。元來議員候補者は單に自己が議員として適任者である事を有權者に示す方法を執り、之れ等の者を推薦し同情する者もまた其方針に出づれば好いのである。然るに候補者自身が戸別訪問をなす如きは有權者に哀願憐憫を乞ふ者であつて候補者の人格を傷くる事甚しく、斯くの如き事を選擧運動の一方法として多くの候補者が執るに至れば眞に市民の希望する如き優良なる候補者は決して選擧場裡に立つ事を潔しとせぬに至るであらう。此故に優良なる候補者を得んとすれば候補者自身の戸別訪問は絶對に禁止することにせね

ばならぬ。然らずして或者が斯かる方法を執れば戰に當つて敵軍が潜航艇を用ひ、毒瓦斯を發射するに際して獨り國際公法の精神を守つて對抗手段を執らぬのと同じ事で戰に必ず負ける事になる。從つて最初は理想選擧を標榜して立つた者も、他の者の運動が卑劣であれば勢ひ戰の習ひとして之れに應ずる防禦策を講ずる事になり遂には自らも戸別訪問をなすに至るのである。私が過日の選擧の日に本郷區役所前に於ける立看板の林立、運動員の蝟集狂奔の様を見て誠に厭な感にを抱きながらも、忽ちにして自ら大學の銀杏並木の下で自働車に貼り紙をすると云ふ心理狀態に變化するのと同じ事である。戰は勝つに手段を擇ばずと云ふ事は實際の戰爭に於ても避けたい事であるが、選擧戰に於ては殊に之れを避けねばならぬ。自由放任すれば選擧戰は益識者の嚬蹙する方法に進む事と思はれるが、之れを制限して戰に作法を示すことは即ち優良なる候補者の出現を誘ふ道にあつて、而も此事は國内の法規を以て容易に實現し得る事である。要するに候補者の戸別訪問は單純なやうな事柄であるが、優良なる候補者を選擧場裡より驅逐する。即ち市會をグレシアムの法則を以て支配せしむる最大の原因であると思考する。此點に關しては内務行政の當局に對して特に熟慮を求めたい。而て出來得べくば次の國會議員總選擧までに何等かの具體的の方法を講ぜられんことを切望して止まない。

理想選擧と稱しても候補者自身の能力、意見、人物等を親し知る事が出來ねば有權者は其投票に迷ふ次第である。今回五人の理想候補者に關しては強ひて立候補を御願ひしたのであるから壇上に立つて自ら演説をされる事を希望する事を避けたのであるが、候補者が有權者に顔も見せねば、意見も發表しないと云ふ事は選擧の效果に重大な影響がある。今回の候補者は特に意見の發表を乞はずとも市民が其最も適當な候補者であると云ふ事を承認する事と思つて、候補者自身の出陣を乞はず、一の新な試みを行つたのであるが、將來の理想選擧に際しては候補者自身に演壇に立つ丈けの犠牲と努力は拂ふ必要はあらう。今回の市會議員選擧の一般的結果に見ても大體は言論戰が最も有效であつたと認められるので、理想選擧と雖も市民の皆等しく翹望するやうな優れた候補者であつて、而も豫め相當な準備をなして居る場合の外は、候補者を演壇に立たしめないで選擧に成功する事は甚　困難であり、又必しも理想選擧を左程まで極限せずとも宜からう。要するに將來理想選擧としては優良な候補者が、或程度まで自ら演壇に立ち、而も戸別訪問を廢し、主として言論戰に依ると云ふ事より外はあるまい。

（八）選擧費の支辨

選擧費の支辨は將來我國の選擧制度を如何に改良するかと云ふ事に就いて最も重大な、具體的な問題の一であると思ふ。今回の市會議員の選擧に當つても少くは一二萬圓、多きは四萬圓の選擧費を費して居るとの事である。斯くの如き狀態では候補者としても優秀なる市民でも候補を爭ふ事を避け、又犧牲を忍んで選擧を爭つた者の中でも、間々巨額の費用を後で補償する意味で私益を圖る者がある。或者は初めから之れを見込んで選擧費の多きを厭はぬ事もあるであらう。斯くの如きは全く名譽職の意味を沒却する者である。そこで選擧の革正を圖り、有能なる候補者を廣く求むるためには選擧費の負擔に就いて何等か特別の方法を考へねばならぬ。過般滿鐵事件がつて、之れ等は選擧費用捻出の犧牲に供せられたものであると云ふ聲があるが衆議院議員の選擧にせよ、市會議員の選擧にせよ、選擧費收集に就いて何等か特別の方法を講じなければ必ず弊害が生ずる。純正公平なる議會政治は行はれぬ。選擧費用を公然の寄附に俟つと云ふ考へもあるが、併し此方法のみでは寄附者は恐らく少ないであらう。一の考へとしては衆議員選擧費用は國家で之れを負擔し、市會議員選擧費用は市民が之れを負擔すると云ふ事は各自の代表者を選ぶと云ふ事から理由ある事である。併しながら如何なる候補者にも無限に金錢上の援助をする事は出來ぬから、或一定の候補者に對して政見發表に要する會場、印刷物の費用を國民、市民が負擔すると云ふ事は一の方法であらう。今回の選擧に就いて私の考へ浮んだ事は、選擧費用を縮少せしむる事と其一部を市民が負擔する事とである。印刷物の配布演說會等は選擧費を大ならしめるものであるから、先づ演說會場としては小學校を開放すべきである、それには何等の弊害を見出さず、費用の節約が出來るのみか東京市の現在の如く寄席や貸席で選擧演說を開くよりは如何に有權者に對して眞面目な考を喚起せしむるか知れない。各候補者に對して抽籤を以て期日と時間を指定して、小學校を演說會場として割り當てればよい。勿論無料で貸すべきである。次に一定の時期までに候補者をして適宜な自己紹介及び宣言を申し送らしめて、之れを全部區役所に於て同一の長さに取り纏め一の印刷物として同時に有權者に對して送附すればよい。此印刷物は區費を以て一回乃至二回之れを作製し、其郵税は無料とせしめて發送する方針を立てるがよからう。猶ほ小野塚博士の話に依れば既に外國に於て行はれて居る事であるが、區役所の前に揭示板を新設して各候補者に一定の面積の使用を許可し、隨時に其欲する所を此所に記載

せしむるのも一の方法であらう。但し選擧費を總て市民の負担とすれば猫も杓子も面白半分候補を名乘り出る恐れがあるから、譬へば落選者に對しては其の數に相當する選擧費用の全部若しくは半額を負担せしむる事とし、而て或は猶ほ各落選者中に於て得票數の少い者に多少重い割當をかける事にすればひやかし的候補の輩出を防ぐ事も出來やう。

(九) 將來の運動

以上述べた所に依つて平凡な事ではあるが市政肅正運動及び理想候補者推薦運動の經過に依つて得た感想を簡單ながら現はし得たと思ふが、此運動は選擧界に對して一の石を投げたものであつて、其波紋は何處まで及ぶかは之を將來に俟つて見ねばならぬが、次回の市會議員の選擧と云はず大正十三年に迫つて居る國會議員の選擧に之を徴したいと思ふ。我々としては今回の運動は理想候補者五人が全部當選し殊に學者候補者が皆最高點で當選することを以つて理想としたのであるから今回の結果は不成效と考へて居るが世間の多數の人は之を成功と云ひ、且つ此運動に依つて投げられた波紋は可なり大きく、市民の覺醒して居る事が證據立てられたと同時に、將來の理想選擧に對し一縷の光明を與へたものと云ふことができる。竊かに思ふに現在政黨の國民の利害を忘れた如き行動に慊らい者は都鄙の到る處に充滿し、殊に青年の心中には其不滿が鬱勃として居る事と思ふから、次の選擧に際して組織的大規模に今回の如き運動を起す者があれば或程度の議會改造、國政肅正の實を擧げる事は必しも不可能な事ではないと信ずる。



綠陰閑語

相馬御風

○

誰やらの句に櫻の花が散つて葉がこんもりとして來ると、今迄何となく騷ぎ廻つてゐた小鳥たちもさぞ落ちついて休むやうになるだらうと云ふやうな意味のがあつた。私はそれをひどく面白いと感じた。青葉の季節になつて落ちつくのは鳥ばかりではないであらう。花が咲いたり散つたりしてゐる間は、何となく慌たゞしい氣持になりがちであるが、いよ／＼咲くだけの花が咲き、そして散るだけの花が散つてしまつて、大地が見るかぎり一樣に鮮やかな綠の色に包まれると、いつとなしに氣持がしつとりと落ち着いて來る。そして一味の快い憂鬱をさへ混へた潤ひのある靜けさが、いき／＼と燃え上る心全體をふうわりと包むやうに感じられる。

盛春の花は心を浮き立たせる。初夏の若葉も一面に於て心を燃え上らすには違ひないが、しかしそれと同時にその燃え上らうとする心を、ともすれば憂鬱にまで沈ますことがあるほどの、しつとりとした潤ひのある靜けさを以て包むやうに感じられる。いたづらに上へ／＼と燃え上るのでなく、いたづらに外へ／＼と溢れ出るのでなく、内に漲りこもつて溫みと潤ほひとに充ちた、心の靜かさ――青葉の天地の與へるさうした氣分を私は愛せずには居られない。

總じて樹木の風姿は、開花期に於ては何となくおちつきがない。樹木の本當の風姿を見ることの出來るのは、青葉時に於て

どあるやうに思はれる。これも私だけの偏した趣味からかも知れないが、どうも私には花の咲いてゐる木の姿よりも、青葉時の樹木の姿が安らかに眺められる。

○

里や里近い小山が悉く青葉に包まれる頃になつても、北國では遠山の雪がまだ消えない。綠の野を越え、青葉の森や小山を越えて、向ふの空には眞白な山の連なりが高く聳えてゐる。燃えるやうな若葉の森の梢の上に日に輝く雪山の姿を望む時、私は云ひやうのない崇高な感に撲たれる。

大空高く嚴そかに聳え立つた雪山の美は、おそらく太古の人々も讃歎せずに居られなかつたところであらう。そして今の此の文明の世に於ても、おそらくこれを讃仰しない人はないであらう。

苗代の苗あを／＼と伸びにけりみやまはいまだ雪の
しろきに

北國の高山は里に苗代の苗が伸びる頃になつてもまだ雪が白い。田植の頃になつてもまだ白い。それに奇妙なのは毎年ある一定の時期に、高い山の消え殘りの雪が毎年同じ物の形を現はすことである。私の地方について見ると、燒山の蝙蝠、黑姫山の臥牛、駒ケ岳の奔馬などがそれである。それらが見え出す頃になると、人々は

「そら、もう燒山の蝙蝠や黑姫の臥牛の見える時分だぞ。」

など云つて小供達にその形を搜させる。そしてその事が小供達の心にどんなに神秘的な感じを與へるかわからない。大人の頭で考へて見れば何でもないことである。しかし、小供心にはそれが不思議でならないのである。私達も幼い頃、毎年それについてどんなに空想に耽つたかわからない。

おそらくこれなども遠い昔からの言ひ傳へなのであらう。そしてどの山には何の形が毎年きまつて現れると云ふことをたしかめる爲めには、如何に多くの人々が如何に深い思ひを寄せてそれらの山々を眺め樂しんだことであらう。しかもそれぞれの山に現はれるそれ／＼の物の形についてそれ／＼さま／＼な傳說さへもあるところから考へると、如何に多くの人々の如何に雜多な空想がそれらの山々に寄せられて來たことであらう。

いつの時代に何人が命名したともわからぬながらに、どの山にもそれ／＼の名のあることも、時には興味深く感じられる。私の家の窓から眺められる山々だけについて見ても、或は蓮華山と云ひ、或は火打山と云ひ、或は雨飾山と云ひ、或は阿彌陀峯と云ひ、或は駒ケ岳と云ひ、或は明星ケ嶽と云ひ、或は黑姫山と云ひ、或は白鳥山と云ひ、いづれも漫然とつけられたやうな名で

はなさゝうである。しかも、いづれもいつの時代に何人が如何なる理由でつけたのかわかつて居ない。それにも拘らずいつとなしにそれが通稱となつてゐる。それが私には面白いのである。

○

五月半ばの或日の朝、私は或地方新聞の片隅に掲げられた一つの記事に、近頃にない快い涙ぐましさを覺えた。その新聞には社會上さまざまの重大な事件が報じられて居た。支那の戰爭の再び開始せられたことも書いてあつた。「ゼノア會議愈々終局」と云ふ大きな見出しも目についた。東京の博覽會のことも何かと書いてあつた。どこかで強盜の捕はれたと云ふやうなことも書いてあつた。東京の大相撲の勝負も報じられてゐた。しかし、私の視線はそれら雜多な記事の上を例によつてさつさと通り過ぎてしまつた。そして更に附錄の所謂閑文字の上をも殆んど同じ調子で走り始めたのであつたが、ふとそこに掲げられた一つの寫眞のところに來ると、不思議にもそれに吸ひつけられるやうな氣がしたのであつた。その寫眞と云ふのは、山中の岩石の斷層らしい崖の下の四角の大きな石の上に一人の老爺と一人の少年とが金槌のやうなものを振り上げて石切りに從事してゐる光景をうつしたものであつた。そしてその上欄にかなり大きな活字で「石切る父と子」と題された短い記事が添へられてゐた。私の視線はその寫眞の上に注がれたと殆んど同時にその見出しの上に引き寄せられたのであつた。私は何心なくその記事を讀んで見た。

「チン、チン……チン」と、靜かな山氣を貫いて鋭い響が森閑とした山奥の湯治場の裏山から洩れて來る。暗い杉林と明るい若葉の雜木とに蔽はれた日向に大きな石切場がある。浴場の硝子窓から躑躅や苺や杜若などの花盛りの裏山を削つた岩石の斷層が見える。父と子であらう。四十裏の男と、十二三年の美少年とが陽炎の燃え立つ日向の石切場に黑い影を投げて默々として巖を削つてゐる。可憐な少年が歡樂境から離れて父の手傳へに小さな努力のありたけを盡して大磐石を夢中になつて削り刻んでゐる。流れ來る汗を甲手に拭つて目に焦けた上に充血した顏を上げ鉢卷の下に輝く黑い瞳は珍らしさうに我々一行を凝視してゐる。

「ソラ寫眞を撮つてくれるとよ!」

父親に囁いてニコニコ笑つて重い金槌をおつぽり出した美少年の純眞な愛らしい表情と動作とに心を惹かれた。」

これは其の新聞の記者達が、ある山奥の溫泉場を視察に行つた記事の一節らしかつた。しかも其の記事はある有名な女流教育家の「婦人と社會教育」と題された講演筆記と、「新らしい洋服の

理」と云ふ見出しのついた長い記事と、「名流勝繼閑恭」の報導との眞中に挾まつてゐるのであつた。かうして私はさう云つた風な雜多な社會記事の眞中に埋れて、それらとは全く無關係な山奥の谷蔭に働く一人の少年の姿を見出した事に深い興味を覺えずにはゐられなかつた。

記者は更に其の少年が一昨年から石工の見習ひとなつたものであること、それからかうした人間離れの生活にひたすら勤勞をのみ事としてゐる彼にはたゞ夏が來ると海が戀しくなるのみであるといふことなどを書き添へて、最後にスカンヂナビヤの山境に「海戀し」「山戀し」を唄つたビヨルンソンのアルネよりもいぢらしい此の山奥の少年の爲めに幸多からむ事を祈ると書いて其の記事の筆を止めてゐた。

私は其の新聞の同じ紙面に掲げられたさま〴〵の社會上の出來事の報導の雜然とした印象と、此の閑文字に近い一つの記事の印象とを比べ考へて、暫くの間何とも云ひやうのない瞑想に沈んだのであつた。

○

今年の正月の「中央公論」に載せて貰つた私の『愚庵和尚の生涯』についての感想文が緣となつて、最近故人正岡子規が愚庵和尚に寄せた一通の珍らしい手紙が、まだ世間に紹介されずに居た事を知り得た。私は偶然にもその手紙の所藏者（熊本市浦氏）から其の全文の書寫をおくられたのであつた。

「御手紙拜誦仕候。其後御快方之由奉賀候。此兩三日大分暖かに覺え候。御地も同じ事と存候。歌の事につき御教誨を被り難有存候。

梅が香云々の事、歌に詠まれぬといふにあらず、勿論趣味深きやうに他の配合物を擇んでよまば梅が香の歌、千も萬も面白き者出來可申候へども、從來の歌の如く梅が香を闇とか月とかいふ位の事ばかりを配合して同じやうな事詠み候を誹りたるまでに候。

雅語と俗語の事に付きては、固より俗語を善しとするには無之、雅語の可なる場合には雅語を用ゐ、俗語の可なる場合には俗語を用ゐんと申す者に有之候。雅語を用ゐたりとて歌が雅になるとも限り申さゞるべく（今の所謂歌よみの如き雅語を用ゐて隨分俗な歌を作り申し候）俗語を用ゐたりとて必ずしも歌が俗になる者にても無きかと存候。お姫樣のぬらくらとして善いも惡いも芋の煮えたも知らでおはさんよりは、乞食の子のかひ〴〵しく親に仕へたらんこそたふとけれと被思候。雅語は形の上にもあれど、心の雅俗が一層注意すべき事かと存候。御書面中にある俗語の例など私は面白く覺え候。

ベラボーメくそをくらへと君はいへど
　(こん畜生にわれたらなくに)

試みにツケ申候。

といふ歌を短冊に書きても「心あてに折らばや折らむ初霜のおきまどはせる白菊の花」などいふ歌を短冊に書きたる程には見苦しからずと存候。ベラボーメの歌の方が調が高しと存候。又ベラボーメの歌趣向とてもなけれど躬恒の歌の趣向のいやみ多きには勝ると存候。之を喩へ候はんに、躬恒の歌は金殿玉樓の中に住む貴人のいゝ加減な法螺を吹きて氣取りたるが如く、ベラボーメの歌は市井の小兒の善も知らず惡も知らず天眞爛漫のまゝに振舞ふが如し、私は後の方がよく覺え申候。

漢語につきても同樣の事に候。漢語ならでは言へぬ事は勿論、國語にも漢語にもあることにても、ことさら國語を捨てゝ漢語を取る方が面白き場合は屢有之かと存候。例へば、ふかみくさといはずして牡丹と詠む方が善き場合などは、私は屢實驗いたし候。八大龍王にても之を「八つの龍のおほきみ」(七の賢き人の例に傚ひて)と言ひ得べしとするも、猶八大龍王といふ方がまされるかと存候。「阿耨多羅三藐三菩提の佛だち」の歌にても、これが漢語や國語に譯し得らるゝ者とするも、猶佛語を用うる方がまさり居候と存候。日本語などに譯し候はゞ恐らく興味索然といたし候はんが故に、私の存じ候は漢語でも梵語でも用ゐて善き場合には用うるが善しと存候。

三代集を誹る事につきての御叱り恐入候。兎に角何百年間たて物とせられたる古今集や貫之や躬恒やをひつつかまへて味噌の糞のと申候事、私の身の上より申さば固よりあるまじきわざと存候へども、今の歌人のあまりに意氣地なさに腹が立ち候まゝ、斯る事にも及び申候。併し貫之以下の歌につきては如何御考へ被成候や。歌として見候はゞ趣味ある歌(一二を除きては)小々と存候。既に萬葉の歌を善しとする上は、古今集以下の歌は善しとは思はれぬ譯と存候。(實朝卿のは特別に候)

私どもがくだらぬ歌などつくり候へども、これが歌の唯一の體と存候には無之候。固より一體として存すれば善きものに有之候。古來の歌の想を破壞すべしなどと申し候も畢竟古今以來今日に至る迄の弊風をいふものにして、萬葉の歌の想を破壞せんとする者には無之候。萬葉調は大に興すべきものと存候。

ものゝふの八十氏川の歌につきては、他日新聞にて辯明す

つもりなれども、あの歌を左程誤りたるものにては無之、不圖思ひつき候事有之候まゝ引合に出し候へども、八田の歌などゝ並べしは惡かりしと存居候。あの歌は善き歌として異論無之候。素人が歌や詩を評せしを例にあげて御誡め被下候はチトなさけなく存候。固より私等歌の學問を深くしたる譯にもあらねば、間違ひは澤山可有之候へども、間違つた事は分り次第漸次に相改め可申、兎に角どこ迄もやるつもりに有之候。局外者が一寸試みたるデモ評とは、精神に於いて異り可申候。

今度の事にても一朝一夕の出來心には無之、數年來の計畫機を得て一時に發したる者に候。今迄歌の事といふと、いつも先輩と意見を異にした爲めに、愚見を十分に吐露するを得ずして終り候。それ故此度ははじめより羯南翁に請ひて歌論及び拙作掲載につき承諾を得申候次第に候。併し掲載後も翁よりは常に注意を受け居候。

湖村子先夜參り漢語の事につき話有之、其說に(五畝の宅)とか「御歌を吟すれば」とかいふ位は可なれども、餘り澤山用ゐては困るとの事に候。其外いろ／＼話しあり候。夜の二時に及び候事も有之候。

右御返事旁相認候。失禮の處は御海容被下度候。實は御返事出すをも如何すべきと存候ひしかども、默々に附するは禮にあらずと存じ又御返事出す上は心に不服あるを隱して表面いゝ加減に申置き候も良心に咎むるところあり、終に思ふ存分申述べ候まゝいよいよ失禮の言多かるべくと存候。衷情御察可被下候。謹言。

三月二十六日　　常規

和尚様

副伸

御示しの御歌面白く候。

病氣に就いての御注意難有候。實を申せば其後も夜を更かす事多く、昨夜も三時に及び候。畫といふものを見ると、只面白き者とのみ思ひ候へども、畫師は之を職とする故に非常に骨折可申候。歌も詩も俳句も慰みにやれば面白き一方の者なれども、私などがやるのは職業の如き者なれば、からだのために悪いと知りつゝも歌の研究に思はず夜を更かすに至り申候。これも執着の迷なるべく候。私の如き煩惱のはげしき奴は執着の極點に達するか、大惡事を爲したる後かに非ざれば、到底解脱致間敷や候はん。天下の事が順當に行つてくれゝば善く候へども、生來の多病にて遂に不具に迄なるが如き不幸に沈み候へば滿心の不平はやる方

なく從つて惡口なども出がちに相成候が宿業にや候べき。

これは子規が當時に於て抱いてゐた短歌についての意見を知る上の大切な資料の一つであることは云ふまでもないが、それ以上に私は彼の性格研究の資料としてまことに貴いものであると思ふ。

○

子規が此の手紙を書いたのは、彼が非常な抱負を以て『歌よみに與ふる書』を新聞『日本』で公にしつゝあつた明治三十一年三月の二十六日である。彼はその月の十八日にも桃山の愚庵和尙に宛てゝ手紙を出したことが、『子規遺稿』中の書簡集によつて知ることが出來る。その手紙は私が嘗て『愚庵和尙の一生』中に引用したところのものである。その手紙には彼がその頃血痰を見るに至つたことと、湖村氏と歌の話をして夜の二時頃まで起きてゐたこと、『歌よみに與ふる書』を書き初めた頃から每夜二時三時まで寢ないこと、甚だしきは徹夜することもあることなどが書いてある。「此頃歌をはじめ候處餘り急激なりとて陸翁はじめ皆々に叱られ候へどもやりかけたものなら死ぬる迄やる決心に御座候」など云ふことも書いてある。其の熱心さには全く驚歎の外はない。しかも彼は最後までその態度を持續したのであつた。

たゞしその頃の子規は論議に於て花々しかつたけれども、歌そのものはまだ生硬の域を脫してゐなかつた。

もののふの屍をさむる人もなし菫花さく春の山陰（余州城外所見一首）

後夜の鐘三笠の山に月出でゝ南大門前雄鹿群れて行く

武藏野の冬枯芒婆々に化けず梟に化けて人に賣られたり

普陀落や岸うつ波とうたひつゝ柄杓手にして行くは誰が子ぞ

榛の木に鳥芽を嚙む頃なれや雲山を出でて人畑をうつ

橘の花散る里の紙幟昔忍びて鳴くほとゝぎす

敦盛の墓弔へば花もなし春風春雨播州に入る

無論いゝ歌もないではなかつたが、時にはかう云つたやうな面白くない歌さへも捨てることの出來ないのがその頃の彼であつた。しかし、一年一年彼の歌は著しく純化の度を高めて行つた。病勢が募るに從つて彼の歌はます〳〵澄んで來たのであつた。

○しひて筆を取りて

佐保神の別れかなしも來ん春にふたゝび逢はんわれならなくに

いちはつの花咲きいでて我目には今年ばかりの春ゆかんとす

病む我をなぐさめがほに開きたる牡丹の花を見れば悲しも

世の中はつねなきものと我愛づる山吹の花ちりにけるかも
別れゆく春のかたみと藤波の花の長ふさ繪にかけるかも
夕顏の棚つくらむと思へども秋まちがてぬ我いのちかも
くれなゐの薔薇ふゝみぬ我病いやまさるべき時のしるしに
薩摩下駄足にとりはき杖つきて萩の芽つみし昔おもほゆ
若松の芽だちの綠長き日を夕かたまけて熱いでにけり
いたづきの癒ゆる日知らにさ庭べに秋草花の種を蒔かしむ

以上は彼の終焉の年の前年即ち明治三十四年の春の作であるがこゝまで來るともう彼の歌は本當におちつくべきところにおちついたと云ふことが感じられる。此の頃の彼の歌がどこかに愚庵和尚の晩年の作と相通ずる趣のあるのもおもしろい。

○

子規が此の世に遺した功績の大部分は彼が八年間の病床生活の所産であるが、それにしても彼の永い間の病床生活の如何に苦痛と懊惱とに充たされたものであつたかは、想像することも出來ないやうに思はれる。その事に思ひ及ぶ毎に私は彼が永眠の二日前まで稿を續けてゐた『病牀六尺』中の左の如き一節を思ひ出さずには居られないのである。

「病床に寐て、身動きの出來る間は、敢て病氣を辛しとも思はず、平氣で寐轉んで居つたが、此の頃のやうに、身動きが出來なくなつては、精神の煩悶を起して、殆んど毎日氣違のやうな苦しみをする。此の苦しみを受けまいと思ふて、色々に工夫して、或は動かぬ體を無理に動かして見る。愈々煩悶する。頭がムシヤ〳〵となる。もはやたまらんので、こらへにこらへた袋の緒は切れて、遂に破裂する。もうかうなると駄目である。絕叫。號泣。益々絕叫する。益々號泣する。その苦その痛何とも形容することは出來ない。寧ろ眞の狂人となつて仕舞へば樂であらうと思ふけれどそれも出來ぬ。若し死ぬことが出來ればそれは何よりも望むところである。併し死ぬることも出來ねば殺して吳れるものもない。一日の苦しみは夜に入つてやう〳〵減じ僅に眠氣さした時には其日の苦痛が終ると共にはや翌朝寢起の苦痛が思ひやられる。寢起程苦しい時はないのである。誰かこの苦を助けて吳れるものはあるまいか。誰かこの苦を助けて吳れるものはあるまいか。(二十日)

「二十日」とあるは明治三十五年六月二十日で、即ち彼の終焉に先だつこと約百日であつた。私は『病牀六尺』を讀んで此の一節に至るごとにいつも戰慄を禁じ得ない。『誰かこの苦を助けて吳れるものはあるまいか、誰かこの苦を助けて吳れるものはあるまいか』と云ふ悲痛な叫びが如實に聞こえるやうな氣さへ

するのである。

しかも、子規自ら其の翌日の日記にこんなことをさへ書き加へてゐるのである。

「如何にして日を暮らすべきか」「誰か此苦を救ふて吳れる者はゐるまいか」爰に到つて宗教問題に到着したと宗教家はいふであらう。併し宗教を信ぜぬ予には宗教も何の役にも立たない。基督教を信ぜぬ者には神の救ひの手は屆かない。佛教を信ぜぬ者は南無阿彌陀佛を繰返して日を暮らすことも出來ない。」

「苦しいといふより外に仕方もなき凡夫の病苦談」と子規自らも云つてゐるが、彼のかうした苦痛の訴へは殆んど常に號泣に類するものであつた。

一、人間一匹

右返上申候。但時々幽靈となつて出られ得るやう以特別御取許可被下候也

明治三十四　月　日　何がし

地水火風御中

これはそれより少し以前に戯れに書いたものであると云ふが、茲に至つては彼の苦痛は殆んど絶望的自棄の域にすら突入してゐるのである。

けれども、一方に於てさうした悲痛此上もない號叫を抑へることの出來なかつた彼でありながら、他方に於て死の間際に至るまでも藝術に對する熱愛に終始することを得た點に子規その人の特異な面目が存する。「苦しいと云ふより外に仕方がない」と自ら告白しつゝも、彼はつひにその苦痛の爲めに全體としての自己を傷け破り亂さなかつた。「余に在つては精神の煩悶といふのも生死出離の大問題ではない、病氣が身體を弱衰せしめたゝめであるか、脊髄系を侵されて居る爲めであるか、とにかく生理的に精神の煩悶を來すのであつて、苦しい時には、何とも彼とも致し樣の無いわけである」と彼自らも云つてゐる如く、彼の苦痛の叫びは結局彼の肉體が發する叫び以上に出なかつた。

彼は更に云つた。

「併し生理的に煩悶するとても、其の煩悶を免れる手段は固より『現狀の進行に任せる』より外は無いのである。號泣し煩悶して死に至るより外に仕方がないのである。たとへ他人の苦が八分で自分の苦が十分であるとしても、他人も自分も一樣にあきらめるといふより外にあきらめ方はない。此の十分の苦が更に進んで十二分の苦痛を受けるやうになつたとしても矢張りあきらめるより外はないのである」

かくの如くして、彼のたましひは結局その靜けさを失はなかつ

たのであつた。そしてそこから藝術に對する彼の熱愛も醸されたのであつた。子規その人の貴さは實にそこにあつた。

たましひの靜けさ――子規はそれを「あきらめ」と云つた。彼は又其の「あきらめ」に「以上」と「以下」とのあることをも云つた。更に彼は彼と同じやうに永い間の病苦の生活を續けた兆民居士を評して、兆民はあきらめる事を知つてゐるが、あきらめるより以上の事を知らぬとも云つた。そして彼はその所謂あきらめるより以上と以下との如何なることであるかを、次の如く説明した。

「こゝに一人の子供がある。其子供に、養ひの爲めに、親が灸を据ゑてやるといふ。其場合に當つて子供は灸を据ゑるのはいやぢやといふので、泣いたり逃げたりするのはあきらめがつかんのである。若し又其子供が到底逃げるにも逃げられぬ場合だと思ふて、親の命ずるまゝにおとなしく灸を据ゑて貰ふ。是は已にあきらめたのである。併しながら、其の子供が灸の痛さに堪へかねて灸を据ゑる間は絶えず精神の上に苦悶を感ずるならば、それは僅にあきらめたのみであつて、あきらめるより以上の事は出來んのである。若し又た其子供が親の命ずる儘におとなしく灸を据ゑさせる計りでなく、灸を据ゑる間も何か書物でも見るとか自分でいたづら書きでもして居るとか、さう云ふ事をやつて居つて、灸の方を少しも苦にしないといふのは、あきらめるより以上の事をやつて居るのである……(中略)……病氣の境涯に處しては、病氣を樂むといふことにならなければ生きて居ても何の面白味もない。」

(明治三十五年六月二十六日)

病氣の境涯に處して病氣を樂む――ここまで來れば、それは無論「あきらめ」以上でなければならぬ。子規は一方に於て「苦しいと云ふより外に仕方ない」と云ひながらも、彼の心は結局この「あきらめ」以上の境地まで到入してゐたのである。そしてそこから彼の藝術が生れ、そこに彼の貴さがあつたのである。

子規も亦いつとなしに芭蕉などの到入したたましひの靜かな世界に足を踏み入れてゐたのであつた。

○

「仰臥漫録」と題する子規の日記中明治三十四年十月十五日のところに、左の如き遺言狀めいたものがあると云ふことである。

「吾等なくなり候とも葬式の廣告など無用に候家も町も狹き故二三十人もつめかけ候はゞ柩の動きもとれまじく候

何派の葬式をなすとも柩の前にて弔辭傳記の類讀み候事無用

に候
戒名といふもの用ゐ候事無用に候曾て古人の年表など作り候時狭き紙面にいろ〱書き並べ候にあたり戒名といふもの長たらしくて書込に困り申候戒名などは無くもがなと存候自然石の石碑はいやな事に候
柩の前にて通夜すること無用に候通夜するとも代りあひて可致候
柩の前にて空涙は無用に候談笑平生の如くあるべく候」

これは果して子規自身も遺言狀のつもりで書いたかどうかわからぬが、さう見れば見られぬこともない。明治三十七年に歿した愚庵和尚もこれに類した遺言狀を書いた。二人とも死後のことまでも氣にしないで居られなかつた人だつたのであらう。そこへ行くと、弟子達から辭世の句を求められながらも、生前の句悉く辭世であると云つて斥けた芭蕉の方が遙かに徹底してゐたやうにも思はれる。

子規の最後の句は次の三首であつた。

糸瓜咲て痰のつまりし佛かな
痰一斗糸瓜の水も間にあはず
をとゝひのへちまの水も取らざりき

これは彼が永眠の十二時間前即ち明治三十五年九月十八日午前十一時病床に仰臥して書いた絶筆だと、『子規随筆』の編者は書いてゐる。『子規随筆』の卷頭にそれの石版刷の複製が掲げてある。それを見て私のいつも先づ驚嘆してやまないのは、その書の暢達してゐる事である。永い年月の間の病苦の果てに今將に死に就かうとしてゐる人が仰臥のまゝ書いた筆蹟だなどゝはどうしても思はれないほどに暢び〱した、點一つにも力のこもつてゐる其の書風は、正しくこれ子規その人のたましひの靜けさと朗らかさを示すものでなくて何であらう。

彼は又『病牀六尺』と題する随筆を一日一章を課として永眠の二日前即ち明治三十五年九月十七日まで書き續けた。前に掲げた三つの句を彼が書いた時の有様は、その當時枕頭に看護してゐた高濱虚子氏によつて次のやうに述べられてゐる。

「晩年には病床の唯一の慰めとして草花を寫生して居つたが、その寫生する紙の板に張り付けてあつたのが枕頭にあつた。それを居士が取れと言つたので、傍に在つた者がそれを渡すと、居士は筆を執つて三つの句を默つてそれに書きつけたが、其の紙も居士一人で持つて居ることが出來ないで、他の者が持ち添へて居る位であつた。書き終ると筆を落して了つて別に何も言はなかつた。それから居士は殆んど何事も言はずに、十二時を過ぎて夜半の一二時頃であつたと思ふが、眠るが如

く呼吸を引取つたのである。別に辭世と居士自ら名乘つたので無いけれども、事實は辭世となつたのである」

「書き終ると筆を落して了つて別に何も言はなかつた」と云ふ。その後に續いたあたりの沈默は、どんなに嚴粛なものであつたらう。かくして遺されたあの句！　あの書！　私はいつもそれに對すると深い敬虔の念にうたれずには居られないのである。

子規は更に終焉の四日前『九月十四日の朝』と題する左の如き小品をさへ書いたと云ふことである。

「余は四五日前より容態が急に變つて、今迄も殆ど動かす事の出來なかつた兩脚が俄に水を持つたやうに膨れ上つて一分も五厘も動かす事が出來なくなつたのである。そろり〳〵と膝皿の下へ手をあてがうて動かして見やうとすると、大磐石の如く落着いた脚は非常の苦痛を感ぜねばならぬ。余は屢種々の苦痛を經驗した事があるが、此度の樣な非常な苦痛を感ずるのは始めてゞある。それが爲めに此二三日は余の苦しみと、家内の騷ぎと、友人の看護旁訪ひ來るなどで、病室には一種不穩の徴を示して居る。……窓の前に一間半の高さにかけた竹の棚には葭簀が三枚許り載せてあつて、其東側から登りかけて居る糸瓜は十本程のやつが皆痩せてしまうて、まだ棚の上迄は得取りつかずにゐる。花も二三輪しか咲いて居ない。正面には女郎花が一番高く咲いて、鷄頭は其よりも少し低く五六本散らばつて居る。秋海棠は尚衰へずに其梢を見せて居る。余は病氣になつて以來今朝程安らかな頭を持つて靜かに此庭を眺めた事は無い」

永い間苦しみつ惱みつ悶えつ叫びつして來た果てつひに自らの運命の底までも見抜いた彼は、始めてそこに未だ嘗て經驗しなかつたところの廓然たるたましひの靜けさと安らかさとを得たのであつた。「余は病氣になつて以來今朝ほど安らかな頭を持つて靜かに此庭を眺めた事は無い」と云つた彼の言葉には、限りない安らかさと靜けさとがある。その時の彼の靜かな心に映つた萬象の美しさは、おそらく彼にとつては最初にして最後の美しさであつたであらう。そしてその時彼の眼に映じた彼の狹い庭は、おそらく限りない廣さをもつた自然そのものであつたであらう。運命のどん底までも見抜き得た靜かな安らかな心眼にこそ、まことの自然の美しさが映じ來るのであらう。

○

『井月の句集』と題する書物を其の書の編者からおくられた。編者は下島空谷氏である。編者が此の井月と云ふ人の句集を編纂した動機の一つは、良寛和尚の生涯と藝術とに興味を覺え、それが井月の生活と藝術とを思ひ合はさせたにあると緒言に明記

してある。井月と云ふ名はこれまで私は全く知らなかつたが、以上の如き緒言に接したので格別の熱心を以て『井月の句集』一冊を通讀したのである。

井月はもと越後長岡の出身であるとの事であるが、四十歲頃に飄然として信州伊那の地に現れ、そのあたりに漂泊してゐた二十餘年間の彼の生活以外何事もたしかには知られてゐないとの事である。尤も「越後獅子」と題する彼の手記の句集（諸國で接した俳人の一句宛を集めたもの）によつて、彼が信州伊那に來る前に北越から奥羽を經て上州から江戶に出で次で東海道諸國を經廻つて近畿地方に入り、更に伊賀伊勢美濃等を經て來たことが朧ろげながらわかるとの事である。要するに井月は生涯たゞ漂泊を以て終始した逸民で、殊に晚年信州伊那地方にありての彼は文字通りの乞食爺で、其の最後の如きはのたれ死に同樣であつたらしい。彼の歿年は明治十九年であるが、享年の如きも六十七八歲位と推定されてゐるに過ぎない有樣である。

井月の人となりについて句集の編者の書いてゐる中から特に印象の鮮明な一節は「彼は元來、極端な沈默家であつたばかりでなく、口をきいても低音で、而も舌がもつれて何を言ふのか明瞭に分つたことが少かつた。或は酒精中毒の故もあつたであらうが、初めて伊那の地へ現はれた頃、即ち比較的若い時分から、この點などは餘り變つてゐないとの說もある。また酒を飮んで差して興奮する樣子もなく、多辯になるでもなく、只グズグズ、ヒヨロヒヨロの度が加はる許りで、餘り平常と變つたことがない。否、井月許りは、平常すら醉つてゐるのか、醒めてゐるのか、時として、死んでゐるのか、生きてゐるのか、理の分らぬことが多かつた。只言語で吾々に分るのが一つあつた。それは、千兩千兩——と言ふのである。これは井月の有名な言葉であつて、謝詞、賞讃詞、賀詞、感嘆詞として使用するは勿論、今日は左樣ならの挨拶にまで、只この千兩千兩——を以て濟す場合が多いと云ふ程の、有名さを持つた言葉である。」と云ふにある。

云ふまでもなく井月の衣食は彼方此方で惠み施されるもの丶みであつたらしい。句吟に長じてゐた事と、書が優れてゐた事と、此の二つの特色が、辛うじて彼を生粹の乞食の群に投ぜしめなかつたに過ぎない。しかも、二十餘年の永い間、信州の伊那、しかも多くは上伊那の地の狹い範圍に生活を持續することを得たのは、どこか彼に右の二事以外いゝところがあつたからに違ひない。彼はその狹い上伊那の地方を、彼處に一泊此處に二泊と云ふ風に、生涯浮浪しつゞけた。時には路傍で野宿することもあれば、野宿することもあつた。『井月の句集』に掲げられ

てゐる彼の逸話はかなり多くあるが、その中から私の最も興味深く感じたのを一つ二つ紹介すると次の如くである。

「或年の冬のことである、井月が二三日逗留中（下島氏の實家に）衣類が餘りに薄くて寒さうであるからと云ふので、祖母が古い綿入羽織を着せてやつた。その日祖母は自分の生れた栗林の里へ行つたのである。三日許遊んでの歸途、伊那村の諏訪社の前で井月に出逢うたが、着せてやつた筈の羽織を着てゐない、不思議に思うて如何したのかと聽いてみると、乞食が餘り寒さうに見えたから呉れてやつたと平氣なので、祖母も殆んど呆れてゐた。」

「或る夏のことである。學校から歸るが早いか、大笊を提げて獨り天龍川原へ飛び出した。（これは句集の編者自身幼時のことを云つてゐるのである）夫は雜魚を掬ふためなのである。天龍の支流深つ川の河べりを漁りながら上つて行くと、三四株柳の茂つてゐる蔭に井月が坐つてゐるのである。午後四時頃の西日を浴びて何をしてゐるのかと近寄つて見れば、襤褸の襟の邊から虱を摘まんで前の石の上に並べてゐるのである。これは妙だと見物してゐたが、如何にも悠々緩々探つては並べ、並べては見てゐると云ふわけで、私も小半時見てゐたが人が居るとも感じぬらしい。私は何時結末がつくかわかりさうもないので、また雜魚を掬ひに取かかつた。夫から四五日して私の家へ來たのを覺えてゐる。」

これらの逸話には、たしかに風外とか桃水とか、または良寛とか云つた人達を聯想させる趣がある。おそらく井月の心境にも多少それらの人々と相通ずる一點があつたのであらう。鳴雪翁は此の句集に題するに

秋涼し惟然の後に惟然あり

の一句を以てしてゐる。さう云へばどこかに惟然らしいところもある。

句集の中から私の注意を惹いた句を少しばかり取り出して見る。

長閑さや柳の下の洗ひ臼
永き日や野守も牛の遊びつれ
夜に入りて雨となりけり彌生盡
春風や碁盤の上の置手紙
春雨や鏡に向ふ雲旅籠
春雨や寢て聞く桶のこぼれ水
山里や雪間を急ぐ菜の青み
手元から日の暮れ行くや凧
腰かけて夢見て春の旅路かな

蛙なく夜の淺みや貰ひ風呂
遠い田に蛙鳴くなり夕間暮れ
雨やめば冴え持つ空や梨の花
そよ風や青田の色の美しき
葉のゆれを花の押へる牡丹かな
咲いたのは動いて居るや蓮の花
白牛を見に行く家や罌粟の花
朝暾(あさひ)を鳩のなき消す茂りかな
秋風や三方が原の大根畑
霧深し竈から捨てる梅の實
足のして手のして落ちて行く水か(豐年)
魂棚や拾はれし子の來て拜む
落栗の座を定めるや窪たまり
雲切れの日あしをこぼす寒さかな
冬されや壁に挾みし柄なし鎌
夜に入りて松に落つく時雨かな
初雪や雛の出て來て田に遊ぶ
淡雪や軒に干したる酒袋
初霜の心に鐘を聽く夜かな
桐の實の鳴る程なりて冬の月

酒さめて千鳥のまこと聽く夜かな
冬の蠅牛に取りつく意地もなし
鳴かぬ蚊の日向を飛ぶや石蕗の花

一寸見ると平凡のやうで居て、よく噛みしめるとしみ〴〵した味はひに富んでゐる句の少なくないのは、井月の俳句に於ける第一の特色であるやうに思はれる。「徳川末期から明治の初期へ掛つた、謂ゆる俳句の墮落時代にありながら、その影響も被らずに、超然として本質的な特色のある諷味を遺したのは異とすべきであつて、これは云ふまでもなく、時代などに關係のない、彼の超脫的自由の境地に安住或は漂住してゐた結果と見るのが至當であらう。が、要するに芭蕉歿後の追隨者として明治俳句復興期の前を飾るべき、類のない程の、奇特な俳人であつたと思ふのである」と句集の編者の云つてゐるのも、さまで過褒の評とも思はれない。

しかし『井月句集』を通覽して私の第一心を惹かれたのは、卷頭に掲げられた井月その人の筆蹟であつた。就中「幻住庵の記」と題された俳文の書の溫雅な、しかも才氣や衒氣などの汚れのない美事さには、讃嘆を禁じ得なかつた。高古清淡など云ふ趣はないが、幽雅のうちに高い品格の備はつた懷しい書である。彼も亦大分の豐かな人であつたに違ひない。

更に彼の如くしかく貧しいむさくるしい生涯を送つた人であつて、しかもよくかうした品格の高い、よごれ氣のない、おちづきのある藝術を遺し得た事は、意味深い事實である。此の事を考へさせられただけでも、私は『井月の句集』の編者に感謝しなければならない。

井月の終焉の有様を叙した句集の編者下嶋空谷氏の文章は、讀む者をしてホロリとさせずには措かない。「時は明治十八年師走某の日、信州上伊那郡伊那村の路傍乾田の中に、身には襤褸を纏ひ、糞まみれとなつて倒れてゐる井月を發見した。多分死んでゐるのであらうと近寄つて見れば、生きては居たが、最早身動きもならぬ病體であつた。そこで、當惑の結果が、成るべく村の厄介にならぬやうにと、村人數名が戸板に載せ、芭蕉の松茸の句碑で有名な火山峠を越え、隣村富縣村字南福地の某地點に置いて歸つたのである。福地の村人某これを見つけて、舊交の深かつた竹松竹風と云ふ老人に告げた。竹風老人はまた村人三四人を頼み、縁故の深い、隣村河南村押出の六波羅霞松老人の處へ擔ぎ込んだのである。そこで霞松氏は豫て井月入籍の家を知つてゐたので、また若い人達の肩を借りて三峰川を渡り、美篶村末廣の太田窪、鹽原梅關氏方へ送り屆けたのである。即ち「落栗の座を定むるや窪たまり」の家である。茲で腰も立たず、口もきけぬ悲慘な病軀を横たへてゐたが、翌十九年二月十五日、霞松老人の勸めた一盞の燒酎を飲み、眠るが如く往生を遂げたのである。年齡は勿論不明で、或は六十七八歳ぐらゐであつたかと思ふ。……死去二時間前、俳友六波羅霞松氏が辭世の一句を請うてみたが、僅に頭を左右に動かすのみであつた。然し、强て筆を握らせ白紙を顏前の空間へ擴げてやつて、辛うじて書いたのが、「何處やらに鶴の聲きく霞かな」の句である。この句は、以前の吟咏で、辭世などではない。只此時偶ま浮んで來たので書いたものと見える。然し何となく辭世らしい感じがする。」

此の文字通りの行路病者の死と、此の「どこやらに鶴の聲する霞かな」の一句との關係がいかにも味ひ深く思はれる。

○

越後の名物の一つに瞽女（ごぜ）と云ふものがある。これは安物の三味線一挺を元手にして、村から村へと唄ひ歩くことを生業としてゐる盲目の女達の總稱である。中には腰の曲つた白髮の婆さんもゐる。まだやつと十四か十五の小娘もゐる。よく案内をそらんじた場所では彼等は手引なしに戸別に廻り歩くが、遠出をしたり又はよく案内のわからぬ村などでは、彼等は二三人に一人づゝ目あきの手引人を連れてゐる。手引人は多くは十二三歳

の小娘である。

瞽女のうたふ唄は、どんな唄であつても不思議に哀調を帯びてゐるやうに感じられる。私達の幼い頃は、わけて此の瞽女と云ふものが多かつたやうに記憶する。わけて正月の祝日などには、一日のうちに幾組も幾組もの瞽女がやつて來た。中にはゆつくり茶の間へ上り込んで、永い時間種々樣々な唄をうたつて行つたものもあつた。明らかにおぼえては居らぬが、私達の幼い頃彼女たちの最も多くうたつた唄は「くどき」のやうな悲しい物語唄であつたやうに思ふ。唄の筋などはよくはわからなかつたが、幼な心にも妙に悲しくなるやうな事も度々あつた。母や女中などが時々唄に聞きとれて涙をこぼしてゐたのを折々見たこともあつた。瞽女の最も歡迎されるのは無論農家や漁家の最もひまな冬季間なので、彼女たちは目の見えない不自由な身でありながらも、毎年深く積つた雪の上の細い道を辿つて、寒い風に吹かれながら廻り歩かなければならないのであつた。

此の瞽女と云ふ舊時代の遺物は、今日でもまだかなりに多く存してゐる。越後の瞽女の第一の根據地は高田市であると云ふことである。高田の瞽女の最も有勢であつたのは明治十年代で、その頃には五千戸の町に三百人餘の瞽女が住んでゐたさうである。そしてその頃の彼女たちは、丁度雁のやうに春雪が消えると十人二十人と群をなして旅稼ぎに出かけ、冬になると故郷に戻つて來て近隣の村々をうたひ歩くのを常としたさうである。しかもその頃は數がそのやうに多かつたにも拘らず、收入は今日よりも遙かに多かつたと云はれてゐる。今日では高田市に於ける瞽女の數は百名内外に過ぎない。しかも、それは悉く明るい世界を暗く渡る盲目者ばかりで、その上いづれも極貧者ばかりであると云ふことである。

それは兎に角、此の瞽女と云ふものが越後の高田と云ふ格別雪の多い町を第一の根據地とするやうになつたのにはどんな因緣があつたかについて、此の頃一寸とした傳說めいた記事が目に觸れたから、それを書きとめて置くことにする。

慶長年代の事であつた。京都祇園の程近い處に住む深崎與市といふ按摩があつた。彼は日頃祇園の家々へ出入して鍼按を渡世の業としてゐたが、此の男は盲人に似せず容貌が美しく歌舞音曲にも秀でゝゐたところから、ふと祇園の一美妓に想ひを寄せられることになつた。女の名は秀と云つた。此の不思議な緣に結ばれた二人はその後いろ／＼の事情に迫られて、つひに手を引き合うて北陸道に落ちることになつた。そしてあちらこちらを流浪し廻つた果てに越後路に入り、流れ／＼て高田の町に落ち着くことになつた。

それは恰度慶長三年のことであつたが、生活の脅威は昔も今も同じことで、いつまでも座食の氣樂さは續かなかつた。それでも初めは秀が身につけた品々を金に代へて辛うじて其日其日を過してゐたが、やがてはそれも盡き果てゝ、つひには明日の糊口にさへ窮する身の上となつた。そこで與市は以前と同じく笛を鳴らして按摩の仕事を求め、秀は眼明き盲の差別なく細民の子供を貰ひ集めて音曲を仕込み、それらを追ひ立てゝ町家の門に立たせザレ三味線をかいなでゝ一文二文の惠を受けさせ、それを代にかぼそい活計を立てることにした。しかも、かうして出來上つた弟子達は、或る年限の勤めを果てた後から、つぎつぎに三味線一棹を買つて別家させて貰ふのであつた。そして弟子は更に弟子を取り、年一年と彼等の仲間は多くなつて行つた。

これが高田の瞽女の沿革だと云ふのであるが、眞僞のほどは私にはわからない。假にこれを事實だとして考へて見ると、見るかげもない一人か二人の人間の偶然の運命でも、斯くも大きな結果を生むやうなことがあるものかと、今更ながら或る驚きを覺えずには居られないのである。

瞽女のうたつて歩いた唄を昔からずつと保存してあつたら、それにもさぞいろ／＼な面白いことを知ることも出來、味ふことも出來、考へることも出來たのであらうが、それが殆んど全く傳つて居ないのは殘念である。瞽女唄のはじめはおそらくその時々に世間の噂の種となつたロマンスなどを歌つた物語唄の類が多かつたであらうが、今日ではたゞその時々の流行唄をうたひ歩いてゐるに過ぎない。私たちが幼い頃聞き慣れたあの哀調を帶びた物語唄は、今日ではもう聞くとが出來ないのである。

○

角兵衛獅子も昔から越後の名物の一つに數へられてゐたが、これは今日では絶無となつた。此の角兵衛獅子の產地は、西蒲原郡の月潟村に限られてゐた。月潟村と云ふのは信濃川の支流である中之口川の沿岸にある農村であるが、治水のうまく行かなかつた昔にあつては、此の村の如きは殆んど毎年のやうに洪水に襲はれてゐた。隨て田畑の收穫の如きも、あてにならぬ年が多かつた。ところがいつの時代のことか此の村へ或る年一人の浪人がやつて來た。そしてその村を暫しの隱れ家として世を忍ぶことにした。浪人の名は角兵衛と云つた。彼はその村に足を留めてゐた間、村の子弟を集めて讀み書きのわざを敎へるのを仕事としてゐた傍、面白半分に、望む者共を集めて輕業や早業のやうな事の稽古をさせた、ところが此の偶然にやつた事が村人達には豫期しなかつた功徳をもたらした。或る年此の村が

稀有の大洪水で農作物が殆んど皆無に歸したほどの困窮に陷つた時、窮餘の策として村人達の考へ出したのは、日頃角兵衛から稽古して置いて貰つた輕業の藝當を見せ物にして他の村々を廻り歩いて見てはと云ふ妙案であつた。そこで饑餓に瀕した村人達は五人十人と組を分けて、各地を巡業することになつた。しかも、その結果は案外にも彼等をして多額の收入にありつかせることになり、つひにはそれを彼等の副業として末永く繼續させるやうにさへなつた。これが名高い角兵衛獅子の起源だと云はれてゐるのである。

けれども、その初めは消極的に村の困窮を救ふ爲めの應急策に過ぎなかつた角兵衛獅子の巡業も、つひにはそれが專業化してしまつて、甚だしきは何處からともなく子供を貰ひ集めて來て、それを殘酷に使役して私腹を肥すことを專業とする者さへ少なからず出來るやうになつた。全國に亘つてあの單調のうちに云ひ知れぬ哀れをこめたやうな角兵衛獅子の太鼓の音の聞かれるやうになつたのは、おそらくそれがさう云つたやうに專業化するに至つてからであつたらう。しかも、それすら時勢の變遷につれて、今日では全く其の跡を絕つてしまつた。

私は先年此の月潟と云ふ村へ行つたが、今日の月潟村は所謂新潟梨の有數な產地として、驚くべき富裕な狀態にあるのを見た。無論角兵衛獅子になるものなどは今日では一人もないのであるが、それでもまだ此の村の子供達が他の土地へ行つて「お前の村はどこだ」と問はれた場合に、「私は月潟のものです」と答へるのに兎角躊躇しがちであると云ふ話も私はその時聞いた。

冬の夕方なんかに町の角や橋の上で、幼い角兵衛獅子の子供が親方に叱られて、シク／＼泣いてゐるのなどを見て自分も悲しくなつた少年時代の記憶が、時たま何かの機會に今でも私の胸に浮ぶことがある。その角兵衛獅子も今日ではもう全く見られなくなつた。

○

經濟雜誌社から出てゐる『大日本人名辭書』に良寬和尙のことをこんな風に書いてある。

「良寬。僧なり本と越後長岡の藩士、姓は小川、作左衛門と稱す幼にして不群長じて嗜欲寡なく生產を治めず陳腐習ひと爲り襟を整へて人に接する能はず年二十餘病に托して致仕す一日諸友と妓院に遊び歡呼酣醉して百金立ところに散ず乃ち髮を剃り自ら良寬と號す、西京師に遊び三四年を經て歸り小庵を結び長岡山中に居て逍遙自適す云々」

これは『事實文編』の記すところに據つたものだと云ふが、

あまりに甚だしい誤謬である。ところが、大倉書店から出てゐる『日本人名辭典』にも矢張これに據つて記されてゐる。機會があつたら訂正してもらひたいものである。

○

越後出雲崎町の良寛和尚誕生の家の跡に建てられる事になつてゐた良寛寺も、いよ〳〵去る四月十一日起工式が擧げられて、目下盛に工事中である。起工式には私は折あしく行くことは出來なかつたので、歌數首を送つて僅に祝意を表した。

待ちまちて待ちえし今日のよろこびを禪師のみまへにいかに告げまし

けふの日のけふのよき日のこのさまを禪師はいかにか見そなはすらむ

あつさ弓春のよき日のけふの日にひびきて高き斧のおとかも

高らかに鳴らせたくみらけふの日の斧のひびきは常ならなくに

とこしへにゆるぐ期あらめやも諸びとのまごゝろこめて立つる柱は

堂の建築様式は安田靫彦氏の工夫になるもので、建てられる場所は日本海に接して、煙波縹渺の間佐渡の島山を望み得る景勝地である。そこに又

いにしへにかわらぬものは有磯海とむかひに見ゆる佐渡が島なり

と云ふ良寛和尚の歌を石に刻んで建てたらばと云ふ議もある。

○

遠山には雪がまだ白いけれども苗代の苗は日に日に伸びてゆく。毎年此の季節にめぐり合ふ自然の風物の中で、いつも變らずなつかしいものゝ一つは蛙の聲である。それも夕ぐれに寢ころびながら聽く遠蛙の聲である。良寛和尚の歌にも

草の庵に足さしのべて小山田の山田の蛙きくが樂しさ

と云ふのがある。和尚もさぞかし此の頃の季節には、あの山の上の草庵でのび〳〵と體を横たへながら、たゞ獨あの縹渺として夢のやうな遠蛙の聲に耳傾けてゐたことであらう。

あしびきの山田の田井に鳴くかはづ聲のはるけきこの夕べかも

これも良寛和尚の歌である。此の歌について最近太田水穗氏がそれは「地にあると思へば地にあるやうにもきこえる。空にあると思へば空にあるやうにもきこえる。聲の流れが夕闇の世界に瀰漫して、どこにあるとも取りとめられない、たゞ「はるけき」ものゝ感じである。良寛はそのはるけき聲のなかに心をまかせ

てその聲と共にたがれてゐるものである」と書いて居たのも、私には忘れがたい言葉である。

　あしびきの山田のほらに蛙なく獨りぬる夜のいねられなくに

　百鳥の鳴くわが里はいつしかも蛙の聲となりにけるかも

良寛和尚はかうも歌つてゐる。

「いつしかも蛙の聲となりにけるかも」は、私たちも年毎に經驗する感じである。草が萠える、花が咲く、やがて青葉の世界となる。さうした推移のあわたゞしい天地の間にあつて、いつ鳴き初めたとも氣づかないうちに、いつしか——全くいつしかにである——たくさんの蛙の聲が、一つの夢のやうな快いどよもしとなつて聞こえて來る。この蛙の聲のどよもしをフト或る晩氣付いた刹那の感じは、正に「いつしかも」の外に云つて見やうのない感じである。

　いつしかに蛙鳴く夜となりにけり獨やわれのかくはおもへる

　私も斯てこんな歌を詠まずには居られなかつた。私は更に遠蛙の聲に聞き入る感じと若葉の梢をじつと眺め入る感じと、どこかに共通した味はひのあることを思つたこともあつた。いづれにも涙ぐましい靜けさがある。いづれにも夢のやうなはるけさがある。

　ぬばたまの小夜のねざめにむら蛙の鳴く聲をきけばさぶしも

　遠蛙はのかにきこゆ夕ぐれの町のどよみの絶え間たえまに

こんな歌を詠んだのも、つひ此の頃のことであつた。

　蛙鳴蟬噪と云ふ熟語の意味のやうに、蛙の鳴き聲をいたづらにやかましいもの、うるさいもの、代表であるかのやうに取扱ふのは、晩春初夏の夕まぐれなどに靜かな、のびやかな心で、遠蛙のほのかな聲のどよもしを聞いた事のない人々のするわざである。

○

　初夏の夜は、夢のやうな蛙の遠聲に更けてゆく。夜が更けるとほとゝぎすが鳴く。千鳥が鳴く。ほとゝぎすの聲は神秘的な感じをあたへる。千鳥の聲はしみ〴〵としたなつかしさを誘ふ。時々フト蛙の聲のとだえることがある。その瞬間に感ずる夜の靜寂は、何とも云ひやうなく嚴そかである。

○

　古事記の始めのところに「國稚くして浮脂の如くして、海月なす漂へる時に、葦牙の如萠騰る物に因りて……」と書いてゐる。私は此の「葦牙のごと萠騰る」と云ふ一句にいつも驚かさ

れる。物の生成する感じを葦の芽の萠え騰るさまを以て表現しようとした我が上代人の心が懐かしい。毎年春になつて水際の泥土の表に鮮やかな萠黄色をした葦の芽の萠え出るのに、深い愛着の心を寄せずに居られなかつた彼等の心が懐かしい。そしてそれを直に生命の伸長そのものの象徴とまでせずに居られなかつた彼等の纖細にして鋭敏な感受性が懐かしい。

此の意味で私は『日本古代文化』の著者和辻氏が、古事記の中の歌謡の研究に於て、上代人の好んで使用した枕詞や冠辭に特殊の意義と生命とを認めてゐるのに、深く賛同するのである。和辻氏は古事記中の左の長歌を

八千矛の神の命、ぬえ草の女にしあれば、わが心浦渚の鳥ぞ、今こそは千鳥にあらめ、のちはなどりにあらむを……

(記、傳十一)

ぬば玉の黑き御衣を、まつぶさに取り裝ひ、おきつ鳥胸見る時、はたゝぎもこれはふさはず、へつ波磯に脫ぎうて……(同上)

例に引いてから云つてゐる。

『女には「ぬえ草」と云ひ、心には「浦渚の鳥」「千鳥」「などり」と云ひ、黑きを云へば「ぬば玉」、胸見ると云へば「おきつ鳥」磯と云へば「へつ波」を引く。各の表象は殆んど皆それを豐富にすべき他の表象を伴ふのである。しかもその形容の詞は、上代人にとつて新鮮な官能の經驗を含まぬものはない。ぬえ草の柔かく靡く感觸、浦渚の鳥のしほらしい姿、千鳥の鳴く音の急調、ぬば玉の闇に對する鋭い感じ、おきつ鳥が水に浮びつゝ頸をのべて己が胸を見る如きあの恰好、磯波の怒の感情に似た烈しさ――これらすべては自然に近い上代人の素朴な心に強い印象を與へたものである。彼等はこの感覺的經驗を含む詞を以て、歌はうとする表象を豐富にした。これを「冠辭」などと見るのは不當でなくてはならぬ。たとへ一つの詞が聯想によつて他の詞を呼び起してゐるとしても、そこに意味せられるのは、その詞の含む情緒であつて單なる言語の上の遊戯ではない。』

まことに傾聽すべき言葉である。

「わか草の妻」と云ひ、「沫雪の弱かる胸」と云ひ、「白浪のあとなき」と云ひ、「ゆふつくよほのかに」と云ひ、「かげろひのゆふさり來れば」と云ひ、「背の根のながき」と云ひ、「沖つ藻のかよりかくよる」と云ふ風に、よし後代にはそれはたゞ形式的の慣用になつてしまつたとはいへ、その初めに於ては枕詞は決して單なる枕詞ではなかつた。それには一々に上代人の素朴な生き〳〵とした實感が含まれてゐたのである。隨てそれは單に或る

一つの詞が聯想によつて他の詞を喚び起すと云ふ以上に、寧ろ自然に對する彼等の純眞な愛が彼等をして如何なる感傷の場合に於ても、何等かの切實な自然の印象を想ひ起させずには措かなつたのである。自然の印象と人情の動きとが、彼等の素朴な心にありては常に一つに渾融して感じられたのである。

物の生成と云ふことを思ふと、直に葦の芽の萌え騰るさまが眼に浮んで來るやうに、彼等は自分の心の有樣を省ると、それは直に「浦渚の鳥」として觀じられた。騷がしい心は千鳥、平和な心は浮寢鳥として直觀されたのであつた。之れ決して單なる比喩ではない。

『日本古代文化』の著者は更に次の如く述べてゐる。

「上代人がその素朴な驚異の心を以ていかによく自然の美を感じてゐるかは、あらゆる戀の歌に詠み込まれた自然の情趣によつても明らかに知られる。彼等は自然を愛して、そこに渦卷ける生命と一つになる。自然の美は直に彼らの內生である。この親密な自然との抱擁は、自然をば思想の資料とすることを許さない。また自然をば感傷的な主觀的詠嘆の奴隷とすることをも許さない。しかし彼らがその內生を歌はむとする時には、それは必然に自然の印象によつて現はされる。それほどに自然は彼らの心と親しい。」

例へば鳥である。彼らは鳥の音をその心に沁み込ませてゐる。朝の爽やかな心持を思ふ時、彼らの心には青山に鳴くぬえの聲、野にとよむ雉の聲、庭に鳴く鷄の聲が、生き〲として響いてくる。打ちさわぐ己が心を感ずる時には、恰も胸の內に千鳥が鳴くかのやうに感ずる。女が感情に息をつまらせて忍び音に泣く時には、直ちに山鳩の低い音が聯想される。同じやうにまた鳥の姿も彼らの心にしみ込んでゐる。衣裳をつけた自分の姿を自ら見まはす有樣が、直ちに水鳥の頸をのべて胸を見る姿を聯想させる如きは、水鳥に深い親しみを持つた心の出來事でなくてはならない。青い衣の色を見てそに鳥の羽色を思ふのも、そに鳥との親しさに基くのである。」

「太陽は大人にはその眼のみを照らすに止まるけれども、小兒にはその眼と共にその心をも照らす」とエマスンが云つてゐる如く、まともに自然を觀、直に自然と抱擁し得たわが上代人の心は、永久に新らしく生きて居り、永久に私たちを懷かしませる。直に自然の懷ろに入り得た人達はなつかしい。

エマスンは更に云つてゐる。「自然を愛する人は內心と外部との感覺が今も變りなく眞に相調和してゐる人である。成人の時期に至るまでも、幼兒の精神を失はない人である。かくの如き

人には、その大地との交通は常食の一部となつてゐる。現實の悲哀に暮るる身も、自然の面前に立てば、奔放なる喜悦の情が其の身内に流れる。」と。

自然の恩惠には懸け引きはない。又理屈もない。こちらから慕うて行きさへすれば、自然はいつでも私達を抱擁してくれる。この文句なしの感化こそ私達には最も貴い。自然は私達の心を幾つかにこまざきはしない。私達の心のどの部分に特別な愛撫を與へると云ふことはない。自然に對すると私達はたゞ一つのものとなる。そして自然はそのたゞ一つのものとしての私達を、さながらにはごくんでくれる。さながらに伸びさせてくれるのである。

○

またしても遠蛙の聲が心を誘ふ。古人の蛙を詠んだ歌の幾つかを取り出して讀んで見る。

みさびゐて月も宿らぬにごり江にわれすまんとて蛙なくなり
（西行）

雨そゝぐ小田の水口水ましてところえがほになくかはづかな
（蘆庵）

さくら花ちりて流るゝみよし野のなつみの川に蛙なくなり
（幸文）

大原やせがゐの水にすむ蛙くまぬさきにもにごしつゝかな
（景樹）

眞菅生ふる山田の水をまかすれば嬉しがほにもなく蛙かな
（西行）

風わたる池のみくづのかたよりに聲もなびきて鳴く蛙かな
（繁里）

みくりはふ汀のまこも打ちそよぎ蛙なくなりあめのくれがた
（定家）

どうも蛙と云ふものに思わくをもつた歌が多い。やはり良寛和尚の

あしびきの山田の田井に鳴く蛙聲のはるけきこのゆふべかも

草の庵に足さしのべて小山田の蛙の聲をきくが樂しさ

百鳥の鳴く山里はいつしかに蛙の聲となりにけるかな

かう云つた歌の方が、ぬきさしのならぬ感じをしつかと攫んでゐるやうである。これ等の歌には思わくと云ふものがない。それでゐて凡ての思わくを含んでゐる。

「はるけき」「いつしかに」此の二つの詞が、不思議な光を放つてゐる。山里がいつしかに蛙の聲となつたと云ふ驚きのうちに縹渺たる情感の流れてゐる表現もうれしい。

なきかはす二つの蛙一つ止み一つ又やみぬる我も眠くなりぬ

と云ふ故人長塚節の歌も忘れがたい歌である。

愚庵和尚の

　世の人のさかしらよりは吉野川蛙の聲を聞くぞよろしき

と云ふ歌は好ましくないが、

　吉野川川瀬を清み川のぼり蛙聞きつつ一夜ねにけり

はゆかしい歌である。

○

「風流を樂しむ花圃ならで、後の畑前の田の作物に志ざし、白ら鍬を把りて耕やし、先祖の賜と、親の命に怒を盡し、吉野の櫻、更科の月よりも、己が業こそたのしけれ、朝夕心をとめて、打向ふ菜種の花は、井出の山吹よりも好もしく、麥の穗の色は牡丹芍藥よりも腹ごたへあるかと覺ゆ、朝顏よりも夕顏こそよけれ……」と一茶が『勸農詞』で云つて居るほどの意味でなくとも、眺め樂しむと云ふ上からは、風流を旨とした花圃も收穫を目的とした菜園も同じである。觀賞を主にした樹や草の栽培も無論結構ではあるが、心して菜園の美を味はふことも捨てがたいことである。

豌豆の花、胡瓜の花、茄子の花、さゝげの花、唐黍の廣葉、芋の葉の露、菜の花畑、麥の穗並、葱の花…何一つとして愛すべき趣をもたないものはない。季節々々に變つて行く菜園の眺めには、實利と享樂とのいみじき調和がある。收穫にのみ心を奪はれて、自分の耕し培ふ田畑の美しさに全然無關心である農人があり得るだらうか。自分の植ゑた樹木の伸び榮える枝をよろこぶ歡びは、決して單なる打算の結果ばかりではない。そこに農作にいそしむ心の健やかさがある。

○

鮮やかな綠色の葉陰に、ルビーのやうな色をした苺の下の鈴なりに實のる頃の苺畑の眺めほど爽やかな氣持を與へるものは少ない。わけて露に濡れた綠の葉をかきわけて、あのみづ〳〵しい紅玉を摘み集める五月の朝のすが〳〵しさは、多くの年中行事のうちでの最も嬉しい事の一つである。

　わが庭になりし苺を今日もかも摘みてまゐらす永病む父に

これは先年父の最後の病を看護してゐた頃の歌である。父の死後私たちは毎年きまつて苺の初なりをもぐ上は、それをまづ父の靈前に供へることにしてゐるのである。

　わが庭になりし苺のはつなりをもろ手にもれるけさのうれしさ

　朝つゆにぬれてかゞやくくれなゐの苺の上にしくにはなし

　朝な朝ないでゝわが摘むわが庭の苺の玉は神のたまもの

　露しげき葉をかきわけて朝な〳〵子等とわがつむこれの新[illegible]

臓に秘めむほどの資はもたねどもこの紅玉ぞ年々に多き

今年も亦いつの間にか苺のみのる頃となつた。苺畑の垣の外には、昨日今日ひなげしの美しい花が、細長い莖もろとも快い五月の風にゆられてゐる。雛罌粟の花の美しさは無論愛すべきであるが、私は更に此の花がバラ／＼と惜氣もなく其の美しい花片を振り落した後に、くり／＼としたけし坊主のあのあどけない實を結ぶ様子を、妙にいぢらしく思ふのである。

○

夏の川釣りも私の最も好きな事の一つであつたが、四年前の八月五歳になる男兒を亡くしてから、その紀念の爲めに私は釣と云ふ事をふつつりとやめてしまつた。死の前日まで私の釣りのお伴をして歩いてゐたあの子を思ふと、私は今でも胸をかきむしられるやうに悲しい。彼れの持つ小さなバケツの中へ水を入れてやり、二三尾の鮒を泳がしてやると、彼れは何もかも忘れてそれを眺め樂しんでゐた。が、暫くして彼れは何事にかひどく驚いたやうに頓狂な聲で私を呼んで云つた。

「おとうちやん、鮒がバケツを食つてるよ。」

成程、バケツの内側に口をつけてパク／＼やつてゐる鮒の様子は、幼い彼の頭にはさう思へるに充分であつた。釣りに夢中になつてゐた私も、その奇抜な訴へには何もかも忘れて笑ひ興ぜずにはゐられなかつた。

彼れはその日の夕方突然病み出して、その翌日の夕方にはもう此の世のものではなかつた。しかも、それは妻がある近親者の訃に接して他行した不在中の出來事であつた。その子の名は元雄と云つた。

わが元雄なが心地よきわらひ聲ふたゝび聞かむすべなきものか

母の行き慕ひて泣きてとゞめ得ばかゝる嘆きはせざらましもの

とこしへのわかれなりしを何故に母となれとは知らでありけむ

母を呼び母を待つだにあるべきをもだしていにしなれはいとしも

息たえしふたとき前を窓の外のとんぼほりにしなれにやはあらぬ

私がむちやくちやに好きであつた釣りをやめることの出來たのは、全く此の子のおかげである。今ではもう其の季節が來ても、釣りの事など思ひ出しもしないやうになつた。

それから、私がその愛兒の死の悲しみに沈んでゐた時であつた。かねて知り合つてゐた或る禪僧の許から届いた温情のこも

つた細川の手紙の中に、それまで私の知らなかつた良寛和尙の左の如き歌一首が引かれてゐた。

　子をもたぬ身こそなかなかうれしけれうつせみの世の人にくらべて

折が折とて、私にはその歌はわけて貴く推しいたゞかれた。しかも、私は先方への禮手紙の端に左の如き愚詠を添へずに居られなかつた。

　浮世びとわれは子を持ち子にわかれはじめてを知る禪師がこころを

私が釣をやめてから、不思議に私の子供たちも釣りに行かなくなつた。因縁は妙なものである。

○

愛兒の死を紀念するために釣りをやめた私は、父の死を紀念する爲めに桐苗を少しばかり植えつけた。

　ちちのみの父がかたみの裏畑に霜月われは桐苗を植う

　桐苗を植うとわが堀る畑の土はさくさくとして音のよろしき

　ましろなるをちの山なみ眺めつつ桐苗を植う朝のはたけに

それからもう五年過ぎた。桐は驚くべく成長した。しかも、私は此の春（たしか三月の十八日であつたと記憶する）私の愛飼してゐた三羽のチヤボの死骸を、そのうちの最もよく伸びた桐の根元に埋葬して、型ばかりの墓を造つてやつた。

　それらの矮雞は、雛から育て上げたとりわけ愛着の深いものであつたが、一寸の油斷から夜中犬にやられたのであつた。私が彼等の悲鳴に愕いて目をさますなり飛び出して行つた時にはまだもがき廻つてゐたのであつたが、鳥屋の中へ入れてやると間もなく三羽とも死んでしまつた。

　桐の木は年一年伸びて行く。矮雞の墓標となつた一本は、とりわけ今年からはよく伸びることであらう。そしていつとなしにかうした記憶も忘却の底に葬られる頃には、その桐の木もおそらく誰かの手に伐られてしまうことであらう。やはり因緣は妙なものだと云ふ陳腐な考が、今更のやうに新らしく頭に浮ぶのである。

○

　橘曙覽の「獨樂吟」と題した五十餘首の歌を、私は時々おもひ出しては取り出して見る。調子が少々輕快すぎてしみじみとした懷かしさは缺けてゐるが、何となく心をくつろがしてくれる面白い歌が多い。

　たのしみは草のいほりに莚敷きひとりこゝろを靜めをるとき

　たのしみはすびつのもとにうち倒れゆすり起すも知らで寐し時

たのしみは紙をひろげてとる筆の思ひの外によくかけし時
たのしみは妻子むつまじくうちつどひ頭ならべて物をくふ時
たのしみは心にうかぶはかなごと思ひつゞけて煙草すうとき
たのしみはあき米櫃に米いでき今一月はよしといふ時
たのしみは雪ふるよさり酒の糟あぶりて食て火にあたる時
たのしみは錢なくなりてわびをるに人の來りて錢くれし時
たのしみは家内五人五たりが風だにひかでありあへる時
たのしみは物をかゝせて善き價惜みけもなく人のくれし時
たのしみは木芽淪して大きなる饅頭を一つほゝばりし時
たのしみはつねに好める燒豆腐うまく煮たてゝ食せけるとき
たのしみはまれに魚煮て兒等みながうましくゝといひて食ふ時

これらの歌をよんでゐると、いつとなしに心が輕くなるのを覺える。たいくつの時などに、私は時々この歌を探し出しては綻ころびながら讀むことにしてゐる。

○

螢の出るのも間のないことであらう。田園の風物のうちでも螢などは最もさびしみをもつたものゝ一つである。子供たちの螢を呼ぶ聲もさびしい。あの「ほ、ほ、ほたる！」と云ふ「ほ、ほ」の單調な音がさびしいのである。

私の男の子が九歲の年に學校で作つた文章の中に、夜とつて來た螢を籠の中へ入れて眺めてゐると澤山の螢が一つの大きな螢のやうに光つて見えたが、朝になつて見ると黑い小さな虫がひとつびとつにわかれて居た、螢といふ虫は光る時には皆一つになるが、光らない時には離れてゐるものだといふやうな意味のがあつた。私はそれをひどく面白く感じて、時々何かの機會には思ひ出した。

子供の書くものには、時々驚かされる。昨年の暮にも、一人の低能兒に近いと云はれてゐる農家の男の子の書いたと云ふ一篇の童話めいたものにもひどく驚かされたことがあつた。それは

馬よ、馬よ、
今日はねんごつけだ、
今日は早くからねんごつけだ、
くたびんたか馬よ
早くまやへはいつて休んでくれ、
またあした。

と云ふのであつた。「ねんごつけ」は「年貢米を運ぶ日」と云ふ意味の方言、「まや」は「うまや」の意、「くたびんたか」は「くたびれたか」の訛りである。受持教師の話によ る 此の子は

まるで流行の童謠など云ふものを讀んだこともなく、どの學科に於ても成績の劣等な生徒であると云ふ事であつた。そればかりでなく、此の『馬よ』と假りに題された童謠も、もとは行も句切りもなくベロベロと書きつゞけたものであつたのを、教師の手で整頓させて見たのださうである。

しかし、此の純朴な數行の言葉のうちに、何と云ふ温かな情愛の流露してゐることであらう。「くたびんたか馬よ」の一句の涙ぐましさ。「またあした」の一語のあたゝかさ。これこそまことの農人の歌であると、私はしみじみうれしく思つた。主觀的に自分の感情をのべたうちに、彼等の生活の姿がいみじくも描き出されてゐる。

時雨空の下に黒くひらけてゐる刈田の荒涼たる黄色が私の眼に見える。その荒涼たる刈田の中に通じた凹凸の多い細道が私の眼に見える。そのさびしい道を夕暮の寒い風に吹かれながら終日の働らきに疲れた馬を曳きながら自分も疲れた足を引きずりながら、向ふに見える落葉した森がくれの村へとトボ〱と歸つて行く少年の姿が私の眼に見える。やがて夕闇の中でザク〱と藁を刻む音がきこえる。トロトロとあたゝかさうに爐火の燃えてゐる薄暗い茶の間が見える。その爐端に微かにきこえるサクサクと云ふ馬の藁を噛む音に耳傾けながらコクリ〱と快い居睡をやつてゐる。榾火に照らされた陽氣さうな[illegible]年の話が見える。土間の据風呂に浸りながら追分かなんかを小聲で唸つてゐる男の聲もきこえる。流しの方で夕食に使つた食器を洗つてゐるらしい瀬戸物の打ち合ふ音もきこえる。さうした幻想がはてしもなく展開して行くところに。此の童謠の味はひがいよ〱豐かになつて行く。

私は永く此の名も知らぬ少年の詩を忘れることが出來ないであらう。

○

例年のことではあるが、北國に住んでゐる私たちには、春から秋までの間の月日の經過があまりに速かであるやうに感じられる。「春の來るのもぢきだ」などと云つてゐるうちに、いつしか一日の半ばを裸で暮さなければならぬやうな季節になる。「暑い、暑い」と云つてゐるうちに、いつしか遠山の頂が白くなる。

その代り永いのは冬である。隨て「もう冬だ」と感じると同時に、私たちの氣持が不思議にどつしりと落ちついて來る。外部の自然に奪はれ勝ちであつたお互の心が、「冬だ」と云ふ感じと共に申し合せたやうにお互の上に注がれ合ふやうになる。いかにも人間らしい生活が、冬と共に私たちの間に展開し始める。

北國の住民にとりて本當に家の内の生活の存在するのは永い單調な冬季間である。

春が來ると、先づ彼等の心を勞するのは、來るべき冬に焚くべき薪を如何にして山の木々の葉の出ぬうちに集め置くべきかについてである。それが濟むと、いよ〳〵彼等は秋までの間をたゞ偏に來るべき冬に食ふべき食物の產出と蓄積との爲めに勞するのである。

やはり北國生活の眞味は冬に於てゞなければ味はれない。冬は彼等の人間心の故鄕のやうである。北國人にとりて冬は嫌はるべき季節のやうに見るが、實は全くそれと反對である。

此の四五日そろ〳〵田植が始まつた。まだ漸く三寸か四寸伸びたばかりの稻の苗を植ゑつゝも、人々はもうそれからとれた新らしい米で搗いた餅を食ふことの出來る冬籠りの樂しみを語り合つてゐる。（五月三十日）

禮法に關する諸考察と其改善

北川完三

禮法とは個人或は團體が他の個人或は團體に對して心を披瀝して慇懃を示す其表現が統化せられて一定の法式をなせるものをいふ。而して其形式のみ存してこれが精神の失はれたるものを虛禮といふ。

斯う書き出すと少し鹿爪らしいが、要するにこれが私の禮法に對して有つ定義である。そして玆に私がこれから述べやうとする話は先づ此定義を充分に玩味し肯定せられてからでなければ進められない。

●●●●●●●●

偖、禮法——女學校などではこれを、作法と呼んで居るやうだ、行儀といふ字がまた同じ意味に用ゐられてよい言葉と思ふ。此禮法なる文字が、必ずしも面と面と相向つてする挨拶（本來これは禪家の用語で問答に依て學徒の智識を進める事か、來て居るにしても玆では我々の普通用ゐる意味で）とか

會釋とかの法式のみを指すのでなく、容儀・衣服・談話・手紙・訪問・會食・婚禮・葬禮等其他萬般の私生活及び公生活に於て心を披瀝して懇愁を示す法式の全體を含む可き筈であるが、玆にはこれを狹義に解して重に面と面と相向てする會釋を禮法として述べる。

敢て實證的の方法を執つた譯でもないが、私の考察に依れば禮法には二つの起りがある。即ち(一)愛から來た法式のものと、(二)爭鬪後の和睦から來た法式のものとがこれである。

先づ愛から來たものに就て述べやう。愛から來たものには抱擁と「キッス」とあつて其れ以上には出て居ない。

對者に向て心を披瀝して懇愁を示す法式即ち禮法を單に恭しく敬意を表すものであると解する人——現代に於て斯ういふ人は殆どあるまいと思ふが——には抱擁と「キッス」を禮法に入れる事を異樣に感じられるかは知らぬが、願くは冒頭に於て述べたる定義を玩味し更に眼界を世界的に廣く置いて以下述べ行く所を讀まれない。

勿論此の抱擁と「キッス」とは多くは極めて親しい者の間即ち親子兄弟夫婦等の間に於て行はれるものであつて、歐米人の家庭に於て日々最も眼にふれる所のものは小兒が夜の御寢みなさいの禮として親達などとの間に額とか口邊とかに口づけを行ふ事だ。如何にも優しく柔かに親しみの情がこもつて美しい感じを與へるものである。そして其れがほんとうに自然だからよい、なぜといふにやうやく這ふ事を覺へた位の幼兒は既に母の首を抱いて其頬にうるさい程口づけをする事を知つて居る。それは母親の方はもつと早く既に幼兒に何等の意識のないうちからこれを行つて居るにしても、此の抱擁と「キッス」は人間が殆ど本能的に知つて居るものと見てよかろう。其れが節度的に統化せられて親愛なるもの丶間の禮法となつた。全く如何にも自然の行動であるから水のやうに滑らかに行く。親子兄弟夫婦などの禮は斯くの如く親しみを持たねばならぬものと思ふ。

獸類に於ても既に其兒を腹部に抱いて保護し其の體を舐めて愛撫する事をやる。たゞ人間のやうに口と口と接する事は少ないやうだ。猿猴族がどういふ事をするかまだ私は見た事はないが曾て子猿を抱いた——寧ろ子猿の方が親猿の胸の肉を摑んで「だに」のやうにぴつたりとくつ付いて居た——親猿の舉動を數時間見て居つた事があつたが此の短かい觀察では遂に認める事が出來なかつた。

口と口とを接する事は鳥類の多くは兒に餌を與へる時にはやる。そして見 居る人をして輕い感傷的な心持にならしめる

程も此の接觸の際には口と口とを相接して愛撫の表情をする。

人間の口と口とを接する「キッス」の方法は或は親が兒に食を嚙んで口うつしに與へる事から來たものであらうか。

それとも獸類——我々の最もよく目撃する所では母犬と兒犬、兒犬どうし、或は母猫と兒猫又は兒猫どうしが本能的によくやるあの敵に對してなす爭鬪の練習のやうな組伏せ嚙み合ひ、あれと同じものから來たのかも知れぬ。

人間の母親もよく幼兒にこれと同じ嚙付きをやる。幼兒を抱き締めた母親の意味深い眼差しと口邊の微笑、神秘的な愛の最高潮に達した歡びの瞬間は、總て愛兒の柔い首すじや口邊に嚙付く動作に移行する。筋肉に滿身の力をこめながら局所には輕い接觸だけを與へる此の動作の快感は、心臟から脈管を傳ふて波打ち、總身の末梢神經についた痒いやうな輕い痙攣を引起さす。

蓋し「キッス」は親が幼兒に口うつしに食を與へた事から來たと見るよりも此の愛の嚙付きに基因すると見るのが至當であらう。「キッス」が單に口を付けたり吻を接したりするだけではないのだから、「口付け」や「接吻」といふ文字を以てこれに當てたのでは不充分な程複雜な意味を有するものであるが、これが親しき間の禮法として行はれるもの即ち節度的に統化せられたものにあつては單に輕い「口付け」となつて居るものである。

私は「キッス」に付てこれ以上の精しい考察を進めやうとは思はぬ。それは私の主としていはんとする所は第二の和睦から來た法式に存するからである。

和睦から來たものには、(一)武器を放擲して他意なき事を動作を以て宣揚するものと、(二)手を縛せられ俘虜となつて服從宣誓を表示するものと、(三)首を差延べて打首にせられても差支なしとの意を表白するものとの、三つ形の式がある。

今日歐米に於て最も一般に行はるゝ禮法のあの握手は、相對するもの各武器を擲て和睦し手を取合て親密の情を表はした事から出發した禮法で、どこまでも兩者對等のものだ。事實世界の禮法のうちで此の位「デモクラチック」の禮法は他にあるまい。普通の握手は右手と右手とに依つてするものだが、露西亞人などの歡極まつた時の表情には各兩手を突出して握合つて下へ押し付けるやうに強くこれを振り動かす。

何といふ親しい友情の表現だらう此の握手の禮法は、と斯う考へた時、私の頭には偶然にも「刎頸の交」といふ支那の古い言葉が思出された。最も親しい友情に對して「たとひ頸をはねられても悔いない程の交り」といふ、何といふ東洋式のいやな言葉だらう。これだと先きに類別をした其の第三の「首を

差延べて打首にせられても差支なし」との意を表白する事になつてしまうだろう。私の頭では此の言葉から美しい友情などは少しも浮んで來はしない。

擧手の禮は掌をパッと開いて目の高さに擧げ、それ此の通り武器を放擲したといふ事を示す譯なのだが、相手に對してソレ私は此の通り空手です、あなたに敵對行爲はいたしませんと意を通ずるところ、握手に比して稍降伏の意味を持つて居るやうにも思はれる。又羅馬時代を取扱つた劇などで見るやうに、恰度小學生が教室で先生の質問に對して高く手を差擧げるやうなあの擧手の禮も全く同じ意味を持つて居る。

墺太利や土耳古あたりの軍人の擧手の禮は開いた掌を右の眉の上に擧げる事をせず、掌を垂直に立てゝ眉間から鼻梁にかけて當て、所謂「片手おがみ」の法式にする。

以上は總て武器を放擲した表示から成り立つ禮法だが、玆に一つ和約と愛との混合形式のものが一つある。それは弱者が優者に向てなす方法で、あの對者の右手を執てこれに「口付け」する法式のものがそれである。即ち一方が對者に身をうちまかせてサア御存分になさいといふたに對して、對者がこちらを全くゆるして武器を捨てたのを見て、感極つて其右手を押戴いて感謝の口づけをするといふ事から來て居るので、實へ弱者の禮法ではあつてもそう卑屈なものではない。

卑屈な禮法はこれから後に述べる所のものだ。

先づ其の一は、昔の支那人などの行つた――今でも勿論やる――あの腕を拱して如何にも恭して目の上に擧げるあの揖といふ禮法だ。これは私はあなたの俘虜になつて此の通り腕を縛されてしまつた、奴隷になつて如何なる御用をも務めますといふ卑屈なものだ。

我々があの神佛に對してやる兩手の合掌はこれまた前者と同じ起原から來て居る。兩者とも前の類別の第二に屬するものだ。

歐洲の封建時代のものに見る、あの臣下が長上の前に跪いて首を垂れて開いた掌を上に向けて左右の腕を水平に近く兩肩の方に差出したり或は左手を左の膝の上に右手をチヨツト胸に當てたりするあの禮法は、武具を投げ出した、サア首を切るなら御存分に御切りなさいといふ行きかたなのだ。

日本人のやる手をついて首を差延べて床にすり付ける禮法も、サア首を御召しになつて宜しいのですといふ法式なので、前者と共に類別の第三に屬するものだが、前者は立て膝をしてチヨツト首を下げるだけ男らしい所がある。然るに此の方になると平蜘蛛のやうにひれ伏して首を差延べ床にすり付ける所、

極度に卑屈な姿勢たるをまぬかれない。これを以て如何に此國の禮法が世界に於て最も劣等な行き方であるといふ事が出來るのではないか。

斯う批評はするが私もまた此の傳統の内にあるのだから多くの場合殆ど無意識に此の禮法をやる。併し何等かの機會に其所に思到つた時人に向て此の式の禮をするのがどうしてもいやになる。此の折どんなに自ら獨り苦しむか。また人がふたり向ひあふて何かいふては一言めには首を床に付けるのを見て何とも云へない淺ましい感に打たれる事がある。

此の事は獨り座禮とは限らない、立禮でも其丁寧なものになると同樣な感が起る。それもまだ此の國に居る間は左程にも感じないが、一度歐米に出かけて折々停車場などで日本から來た許りの人々の間に取りかはされて居る此の禮法を見て居ると、恥かしくつてどうしたらよいかと思ふ程たまらなくなる。チヨツト離れて見て居ると言葉が聞えないから、一方がサア私の首をお切りなさいといふと、一方がイヤ私の首をお切りなさい、イヤ私の、イヤ私のといつて居るやうにしか見えないのだ。

これを男らしく浩然としながら友情を洩らしてしかも慇懃に充分の敬意をも含ます事の出來る握手の禮と比してどうであらう。これは男子に付ての話であるが女子にしてもまた同樣である可きだ。

小泉八雲氏の書いたものに、何とかいふ友人の横濱からの通信があつた。それは馬丁であつたか車夫であつたか何か過失をして謝罪するのに顏では笑ひながら頭を下げた（たぶんそう書いてあつたと記憶する）。これが其人の感情を害してひどく叱り付ける。ところが叱れば叱る程にこにこ笑つて居るので益々氣をいらだゝせる。遂に憤怒に耐えかねて鞭を以てしたたかたたきつけた。それでもやはり笑つて居つた。と斯ういふ意味であつた。そしてそれに對して八雲氏はこれを日本人の封建時代から永く養はれ來つた忍耐の美しい特性であると辯護をして居つた。それはたしかに八雲氏のいはれる通りである。併し乍ら日本人の斯のやうに如何なる場合にも何かいつては笑つて居る事は、外國人にとつては甚だ人を侮辱したものに感じられるのだ。それは侮辱ではなく日本人の忍耐から來た美しい特性なのだといふ事を承認した人でも、最愛の妻子を亡つた其の葬禮に笑ひ乍ら人々に挨拶をする心事に至つては到底諒解し得られぬに相違ない。譬へこれが日本人特有の美風？にした所が決して世界的の禮法でない事は明瞭である。

話はチヨツと横道に入つたが更に日本人の叩頭の禮法にもどつて、私の親しい友人に禮をする時に決して手を床につける事

をせず然し乍ら丁寧に膝の上に正しく乘せて首も前方に少しかたげるだけの事に自ら法度を定めて居る人がある。こう話をするとチョト高ぶつた態度のやうに聞えるが、それで居て何ともいひ得ないよい笑を浮べてこれをやるので、親しみに於ても其鄭重さに於ても手をついて床に首をつけるものよりは遙に其の中に精神がこもつて居る。

又私の知つて居る或る家庭では家法として主人より女中に至るまで禮法を次のやうに統一して居る所がある。それは双手は床につけるが決して首をつける事はせず、手をついて身を曲めたまゝで對者の顏面をうちまもるのである。併し少し不自然で形が醜い。誰れやらの句に、「手をついて歌申上げる蛙かな」といふのがあつたが、いつも私には此の形を見るとその句が思出される。形式がそうであればやはり卑屈な精神がやどりがちである。

然し乍ら是等はまだ、最も一般に行はれて居る頭を床につける禮法に不滿を感じて、兎に角それから離れて一つの標準を作つてやつて行かうとするのであるからその考に於て大に採る可きところがある。しかも斯ういふ努力をなす人は極めて僅かであつて、民衆の大多數は是等の點に於て全く無自覺と云つて然る可しである。

少し行儀のよいといはるゝやうた人々の對面には其の當初に於て少くとも四五回の叩頭が行は　る。それも昔氣質な丁寧な老婦人などになると七八回以上に亘る事は珍らしくない。私は少年の折何とかいふ少年雜誌に載つて居つた今でいふ漫畫その時分のポンチ繪で二人の女が向合つて坐つて「おじぎ」をして居る圖を見た。左方の人が何かいつて頭を下げて軈て上げて見ると右方の人がまだ頭を下げて居る。それで左の人もまだ上げては惡いのだと思つて更に頭を下げると此度は右の人が頭を擡げ左の人のまだ下げて居るのを見てこれは少し早かつたとまた下げる。此度は左の人が上げて見ると右の人がま　下げて居るのでまた下げる。次に右が上げて下げ、左が上げて下げるといふやうにして居ると、春の日永にいつか睡む氣を催して兩方そのまゝ疊の上へうつ伏せに寢てしまうといふのであつた。誠によく日本の禮法を諷し得たものと感じて永く記憶に存して居る。

達人にあつては精神が形式を作り出すであらうが凡人にあつては形式が精神を生ましめる。卑屈な形式の禮法からは多く卑屈な精神が成長する、若し外形は卑屈に見えても精神は別物であるといふならばそれは虚禮でなくて何であらう。

尤も此の床に手をついて頭をつける禮法は獨り日本のみとは

限らない。回教徒の神に對する禮拜の方法は最も能くこれに似て居る。即ち、恰度日本人のするやうに膝を折り曲げて正しく坐り、少し反り身になつて兩掌開をいて前面を向けて肩幅に目の高さに擧げ、前面をジツト見まもつて、次に其の掌を前に床に伏せて頭をつける。一度ごとに何かつぶやいては此の動作を繰返し〳〵やる。併しこれは神に對して行うので、彼等の中の社會的地位の極めて隔れる者の間の禮こそ見たことはないが、普通の挨拶に日本人流の方法は行はない。

此の如き餘りに叮嚀にしてしかも卑屈なる禮法は、恐らくは極端なる封建制度式のものが太平三百年の德川時代に於て漸次に複雜化せられた繁禮であると見てよからう。そしてこれが其儘明治大正に引繼がれたものであらう。近來デモクラシーの思想が驚く可く此國に普及した事から見ても、此の如き禮はやがてやむに相違ない。對者に私はあなたの敗者だからサア御存分に首を御召しなさいなど、いふ動作は、自覺した人には到底出來るものではない。譬へそうまで考へずとも他國の禮法と比較して速に變更す可き風習だといふ事に異論のある人はなからう。

普通の禮法は對等の握手に限る。生活改善論者はなぜ眞つ先に茲に注意を向けぬのだらう。實はもう研究の必要もないほど明瞭な事柄であり、重なる問題は如何にして握手の禮を普及せしむ可きかといふ實行の方法にあるのだ。文部省あたりでも少しは禮法の改善に關する考究を進めてはだうであらう。

先きに私は日本の禮法が恐らくは德川時代に複雜にせられたものでこれがその儘明治大正に引きつがれたと述べた。併し中には明治になつてから更に複雜化されたものがある。其の一例は次の如くである。

少し鹿爪らしい生活方式を喜ぶ人々の家庭に訪問すると、先づ玄關へ女中が出て來て叮嚀な坐禮をして「どなた樣でゐらつしやいますか」といふ。名刺を出して御主人に御目にかゝりたい由を通ずると「チヨツトおまち遊はしていたゞきます」とまた叮嚀な坐禮をして奥に入り、やがて出て來てまた叮嚀な坐禮をして「どういふ御用でゐらつしやいますでせう」といふ。用向を答へるとまた坐禮をして奥に入り、引返して「どうぞ御待遠さまで御座いました」といひながら坐禮をして、更に「どうぞこちらへお通り遊ばしまして」といひつゝまた坐禮をして座敷へ通す。座布團を出してまた一つ、茶を持つて來てまた一つ、菓子を出してまた一つ、「しばらく御待ちくださいまして」とまた一つもうこれ以上其の動作をかく氣になれぬほど叩頭の濫發を行ふ。これをサア首を切つてくださいといふ動作だと考へる

と寧ろ憎ろしくなる。そう考へないでもこんなうるさい事はない、私などは如何なる人に對しても禮をされてそのまゝで居られぬ性質であるから、それほど叮嚀でなくとも一々これに答禮をする。最初のうちは斯くの如き教育に束縛されて居る女中を憐れむ心も起るが終には斯くの如き繁禮を家風とする此の家の家婦を詛ひたくなつて來る。

斯くの如きは僅かに貴族の家庭に於ける特種の作法の一般中流社會に及ぼしたもので、明治に至つて生じた惡例の一だといふ事が出來る。

而してこれが教養ある中流社會の法式であるところを見ると、きつと女學校あたりで此の如き繁禮を良きものとして教授して居るに相違あるまい、何といふ時代錯誤だらう。

私の宅では主人や主婦の出入にも玄關に家族や女中などが並んで叩頭する事は禁物にして居る。女中に「遊ばせ言葉」を使はせぬし、彼等が兒女をよぶ時にも坊ちやん孃さんなどゝはいはせずに名を呼ばせる事にして居る。但し來客に對しては世間の慣習に余りに隔つて失禮になつてはならぬから玄關に於ける坐禮其他は適當にさせては居るが、出來る丈け省略を心掛けて居る。初めて來た女中などにはよく家の慣習を説明して聞かす、中には此の家は禮儀が覺えられぬなどゝいふのがあつたそうだが、結局家族だちと心の隔壁なく話せるのが愉快のやうにも見える。

それから問題は言葉だが、東京の中流以上あたりの人々の言葉ほど敬語の複雜なものはあるまい。京阪のはずつと簡單だ、江戸時代のも遙かに簡單だつた。今日のあの複雜な敬語は明治になつてから釀成されたものと見てよからう。一つの言葉にして敬語に依つて如何なる變化があるかを示すために例として「斯うして呉れ」といふ句を採る。其の變化は次のやうなものだ。

斯うしろ
斯うして呉れ
斯うしてお呉れ
斯うしてください
斯うしていたゞきたい
斯う遊ばしていたゞきたい
斯うしてくださいまし
斯うしていたゞきたう存じます
斯う遊ばしていたゞきたう存じます

此の外

斯うしてくんな

斯うしてほしい
斯うして呉れ賜へ
斯うしてほしいのです
斯うしていたゞきたいのです
斯う遊ばしていたゞきたいのです

などゝいふ言葉を入れたらまだ中々あるだらう。

偖て、もつと平等主義と簡易主義とが普及して來たら結局此等の中でどの言葉を取る可きかといふ事になる。

英語なぞだと、目下のものにいふ時と對等のものにいふ時とは全く同じものと見てよいやうだし、少し丁寧にして上に「プリース」を付ければすむのだ。一寸した敬語になつて上に「プリース」下に「サア」を付ける。最上敬語だとて身振さへ鞠躬如として發音を吃らすやうな事をして此の「サア」の代りに「何とかエキセレンシー」なり「何とかハイネス」などゝいふ語を一ヶつければすむのだ。つまり恐惶謹言をすればよろしいのだ。併しこんな事も今では儀式のときにでもなければしないそうだ。先達英太子が來られた際、珍田さんがよくローヤル・ハイネスをやつて、太子を苦笑させたといふ事をきいて居る。

日本のものもまあ二三の變化位の所は差支ないだらう。現在のこの複雑さをどういふ標準に依つて簡略にするかといふ其標準を定める事はそう至難の事でもなからう。たゞ實行がむづかしいのだらう。

私共の子供の時分に家庭なり學校なりで敎へられたものは左の四つであつた。

(命令)　斯うしろ
(對等)　斯うしてお呉れ
(普通敬語)　斯うしてください
(最上敬語)　斯うしてくださいまし

此の位の所でよいやうに思ふ。實際今日のやうに複雑になつたのは最近の事だらう、これをもとに返しさへすればよいのだ。尤も斯んな事は文部省あたりでは既に研究が屆いて居つて、小學敎科書などは其の主旨で編纂されて居るのかも知れぬが、實行の上に於て何等の力を注いで居らぬから何にもならぬ。結局生活改善會などで申合せて始めるより外に方法がないだらうが、それにしてもあゝいふ會をもつと有力なものにしなければならぬ。

それにまた此の丁寧な「遊ばせ言葉」が殆ど婦人專用語であり、なほ此外に全然婦人專用の言葉が東京には數多くあるのだから驚く。外國の例はよくは知らぬが英語や獨逸語などには男女に依る言葉の相異が殆どないやうだし、日本だとて昔はそう

であつた筈、今でも田舎で教育を受けぬ女の言葉 男と同じだ。恐らく世界中に於て日本の東京位言葉の複雜した所はないだらう。そして此の發生が近來の事なのだから全く時代錯誤といはねばならぬ。教育者は何をして居るのだろう、何とかしてこれを簡略にする事に努力せねばなるまい。

私の娘などは出來るだけ此ういふ風習に染らせまいと思て、家庭では「遊ばせ言葉」を使はせぬやうにし、學校もそういふ點に於て最も簡單だらうと思はれる所に通はして居るのだが、いつの間にか此の風習に染つて八歳になる娘すらあの萬事煩はしい言葉や身振りなどをするやうになつてしまつた。

複雜な敬語もまだよいとして、中には平氣で自分に對して敬語を使つて居るから驚く。「御手紙を差上げましたが」などゝいふのは無意識に婦女子などのよく使ふ言葉だ。斯の如きはそれこそほんとうに御叮嚀に何にでも「御」字をつけたがる結果知らず〱自分に用ゐた敬語だ。もつと甚だしいのは自分に對して「御坐います」といふやうな最上敬語を使かう事だ。「どうも私は胃腸が弱う御坐いまして……」と一例が斯うだ。自分を「おはします」といふのだから驚く。「惡くつて……」或は「惡くありまして……」でよいではあるまいか。「今日はお天氣が惡るう御坐いまして」は天に向ての敬語として見ればまあ差支ないとして、「あの犬は狂犬で御坐いまして」などは語源を紊して居ると聞くに耐えぬ言葉だ。「狂犬でおはしまして」といふのであるから。

是等は案外無意識に使はれて居るものだが、譬へもとが敬語であつた所が差支ないとしても、徒らに言葉を贅長ならしめるものだ。斯ういふ種類の言葉がまだ澤山あるからそれ等の整理を考究する事が必要である。何にでも「御」字を付けたがるやうな風習は心して眞先きに止める可きものだろう。

話がいつとなく言葉の方へ移てしまつたが再びこれをもとに返して、あの萬歳といふて手を差上げる事は武器を投出した表現である可きだ。芝居などでやる「先づ〱」といひ乍ら片手或は兩手を開いて頭を少し下げるあの方式に、一寸見ると「こちら」は「あなた」より下でサア「あなた」は上席だといふ事から來て居るやうにも見えるが、寧ろ共所に至る迄の過程を、解深く考へて見る必要があらう。

脱帽は兜を取つた事から來て居り、兵士の捧銃は武器を差出した服從宣誓の禮法だ。食卓での乾盃は和議の訂結を意味するものだろう。

日本人の盃の獻酬は支那人が御馳走の際に自分の舐めた箸で食物を挾んで客の皿に取り別けるのと同様、毒を含んでおらぬ

といふ和睦の形式から來たものだろう、これを接吻の形式の變形と見るのは當らない。孰れにしても盃洗で一々洗つて獻酬するに至ては全然其の根源を忘れたものであり、今日に於ては衞生上當然廢せらる可き禮法だ。何とか形式を置かねばならぬのなら寧ろ乾盃にしたらどうであらう。

公私各方面に涉つて禮法に付ていふ可き事は多數にあるが、先づ此の位に止めて、次の話で此の稿を結びたいと思ふ。

私の藏書の內に和本半紙版二十枚程の「西俗一覽」といふ書籍がある。これを本誌の二段組にしたら約九頁の者になる程の內容の極めて短かいものだ。明治己巳刊行其臭社藏梓とあつて明治二年に出來た本だ。卷末に發行所も何も書いてない所を見ると或は賣本でなかつたのかも知れぬ。目次の次ぎ本文の冒頭の下の所に黑川孫四郎譯とある、吉野博士の調べられた所に依ると此の黑川氏は東京帝國大學經濟學部教授の河津博士の父君だといふ事だ。名は西俗一覽だが西洋の禮法を書いたものだ。其の目次を擧ぐれば、身體衣服の事・身體の事・人を識人に引合す事・添書を以て人を引合す事・人を訪ふ事・夜分の集會の事・會食の事・談話の事・往來の事・婚禮の事・元日の事・手紙の事と此の十二項から成る。譯と書てあるが單なる飜譯ではないらしい。今出版してもよい參考になるやうな書物だと自分は思ふ、それが明治二年に出版されて居るのだ。譬へそれが表面的な盲從的な歐化主義から來て居るにしても、如何に盛な風俗改善が當時の人に考へられたかゞわかる。それであり乍らなぜ明治末期に至るほど極端な却て日本式の縟禮を增すに到つたのであるか、それは今自分の論じやうとする事ではない。

（大正十一年六月一日）

隱几録

田中貢太郎

文章は人格也

大町桂月翁の桂月全集第一巻がいよいよ六月から出版配本せられることになつた。この全集出版に就いては、私達が一昨年あたりから桂月翁に勸めてゐたものであるが、はじめの内は生前に全集を出すのはおかしいと云つて承知しなかつた。しかし、他にも例があるので、その例を擧げて勸めてゐると、昨年の春になつて、やつとその氣になり、いよいよ出版することになつたが、此所に一つ困つたことは、桂月翁の著作物は、大半その版權を出版書肆に讓り渡してあるので、何か條件をつけなければいけないではないかと思つて、すこし危ぶみながら桂月翁と二人で關係書肆を廻つてみると、皆一言の下に無條件で承諾してくれた。これは今時には珍らしい現象で、私達は各關係書肆の鴻量を感謝するものである。

共所で出版することにして編纂に著手してゐると、今回の出版書肆から交渉があつたので、素人でやるよりはと依託することにした。それと共に私は桂月翁の言葉に從つて全集の紹介文を書くことにしたが、此所にその惡文を掲げてみる。

『桂月先生は文章人格なりと道破して、三十年間、その主義に終始し、又將來も之と終始して渝らざる人なり。先生は人格の人にして、その文章は人格の文章なり。先生は文章を以て生命となす者なれども、世の滔滔たる文筆の士の美言好辭を連ねて能事終れりとなす者にあらず。先生は文章を以て國家に奉仕し、社會に奉仕し、又青年學生に奉仕する人なり。先生の文を草するや、論評に、敍事に、抒情に、一として世道人心の稗補を以て目的とせざるなし。先生常に曰く、小說は小人の作爲するところのものなりと。その言辭を文字通りに解せんか、聊か不精の嫌なきにあらざるも、その間、先生の文章に對する信念の伺はるるものあるなり。

先生は沒骨的にして圭角なきも、文章は多趣多樣、その日本

を謳歌し、男子の意氣を高唱するや、賴山陽の氣魄を偲ばしめ、その青年學生を訓誡するや、貝原益軒の敦篤を偲ばしめ、その詩酒に閑遊するや、陶淵明の飄逸を偲ばしめ、その山水に放浪して自然と冥合するや、西行と芭蕉の超脫を偲ばしむ。要するに先生は、時として本居宣長の如く、時として山鹿素行の如く、時として蘇東坡の如く、時として李白の如く、又時として寒山の如く、拾得の如し。先生は國士にして仙籍に入れるものなり。

先生今や三十年間の收獲を精選して全集を公にせんとす。その世教に益するは勿論、人格向上の指針となすべく、而して文章の軌範となすべきは余の贅言を要せざるところなり。

庭の苣

私は今年庭の畑に苣を作つた。畑と云つても二坪ばかりある狹い庭の一方の隅へ疊一枚くらゐの置土をした物である。昨年までは朝顏を植ゑたり、鳳仙花を植ゑたり、茘枝を蒔いたり、いんげん豆を蒔いたり、なんでもその時時の氣に向いた物を雜然と作り、秋には秋で蘿蔔や菜種を蒔いて、その花の咲くのを待つてゐた。昨年の秋もその畑に、白菜、春菊、蘿蔔、蕪菁などを一緒くたに蒔いたので、今年の春は白や黄の花が一面に咲いて毎日のやうに蝶がやつて來た。

その畑へは今年は苣ばかり作つた。その苣は昨年の春田舍へ行つた學生に賴んで十本ばかり持つて來て貰つた物の中から種を取つたものであつた。四月頃菜の花が散りかけると共に蒔いてあつたが、生へるか生へないかが疑問であつたから、品川の方にゐる友人からすこし苗を貰つて植ゑたところで、生へて來たので、畑の隙のないやうに植え、殘りは人にも分けてやつた。

苣はもう大きくなつて、飯のたびに摘んで來る五六枚の軟かな葉は、この頃の食膳に新鮮な味を添へてくれる。私は田舍に生れて耕種のことが判つてゐるので、自然とさう云ふことになるかも知らないが、私は庭へ草花を植ゑたり、木を植ゑたり、石を置いたりすることは嫌である。もつとも泉を堀つて澄んだ水を湛へ、苔の生へた岩を置き、木を植え、玉のやうな眞砂を敷いてある庭も惡くはないが、庭の改築の費用は別として、毎日の手入の費用にさへ尠からぬ金を要する庭を作ることは、貧乏人の思ひもよらないことである。理想的な泉石の趣のある庭を作ることが出來ないとすれば、愬かつまらない木を植え、石を置いて、せめてもの心やりとしやうと云ふやうなことは私の好まないところである。私はそんなことよりは雜草も生へ、落

葉も溜り、菱も來、鵁鶄も啼くと云ふやうな野趣を見せた庭が好い。

私が萱を作るのもその野趣のためである。私は朝も晩も暇さへあれば萱を弄つてゐる。土の窪みを直したり、草を引いたり、肥料には朝朝出來る米の洗汁をかけた。陽の強い時には水もかけた。アンモニアの結晶肥料が好いと云ふ者があるので、それも買つて來やうと思つてゐるが、行くのがおつくうであるからそれはそのままになつてゐる。米の洗汁は鉄茶碗でかけてゐるが、日中にかける水は如露が好いと思つたので、家内に云ひつけて買つて來さすと、大きなのが無いと云つて小形のを買つて來た。すると、七つになる女の子と三つになる末の女の子とが、すぐそれを奪ひ合つて、引つ手の蠟をはづしてしまつたので、近くの錻力屋へ行つて附けて貰はふとすると、主人が留守だと云つて一週間くらゐも出來なかつた。ちよつしたことでも世の中のことと云ふものは思ふ通りにならないものだ。

庭へおりないまでも、暇があれば横玄關の三疊に蹲んで、その萱の廣い軟らかさうな葉をぢツと見てゐる。朝見てゐた葉が夕方に見ると、もう五六分も延んでゐるやうに思はれることがある。風の日は白つぽい葉裏をかへして苦しさうに動く葉に光澤が褪めて見える。雨の日にはその葉がちぢれて小さくなつたやうな氣がする。

口の悪い私の友人の一人は、陶淵明が菊を東籬の下に作つたと云ふのは、風流のためでなくて、食用にするためであつたと云つたが、私は食用であつても無くつても、その陶然として世の擾擾を忘れてゐる高逸の人格にはすこしも影響はないと思ふ。私は陶淵明の境地をたまらなく懐しむ者である。張旭は草書の名手であつたが、彼は憂にも喜びにも怒にも草書に心をやつてゐたと云はれてゐるが、この張旭の境地も面白い。

萱畑の右には三尺四方くらゐな蕗畑がある。それも春早早に生へる黄ろな蕗の薹を見たり、青黒い大きな葉に雨の注ぐのを見たいために植えたものであつた。今年になつて又その蕗畑の隅へ一かたまりの芒の根を曳いて來て植えたが、もうそれにも五六本の穗が出て來た。萱を見た私の眼は、その蕗から芒の方へと必ず行つた。その芒に穗が出て、月の夕暮などにふうはりと浮いて見えるやうになるのも間もあるまい。

私はかうして萱を見、蕗を見、芒を見て、煩い對世間のことを忘れながら俳句などを考へる。この俳句を考へる時が私の極樂である。(六月八日)

我が書齋

數年前某雜誌からどう云ふ書齋が好いかと云ふことを聞き合はされたので、『書齋に關しては明窓淨几と云ふ言葉があるが、私もやはりその明窓淨几黨の一人だ。机の他には書籍も額もない無裝飾の明るい室が好い。家屋は洋館でも日本館でも、又二階間でも下間でもどつちでも好いから、家の周圍に樹木のある庭が欲しい。希望としては、室の一方の窓から海、川、湖、青山などが見え、門前に溪川、野川のいづれかが流れてゐて貰ひたい。私が今住んでゐる所は茗荷谷の底で、西向の窓の外は雜木の繁つた崖で、鶯が啼き、蟲が啼き、百舌鳥が啼き、雜草の花が咲き、月が射し、雨が降り、風が吹く。』と云ふやうな返辭を出したことがある。

茗荷谷の谷底にある私の僑居は、汚いながら二階に六疊の室が二つあるので、東向きの室に机を据へ、西向きの室を寢室にしてある。東向きの窓の先には向ふ隣の二階の障子があつて、左の方には五軒長屋の二階の窓硝子が二三軒分見えてゐる。そして、右側にも二三軒の屋根が見える。その右側の屋根と向ふ隣の屋根との間から前を見ると、この附近五軒の總門があつて、その先に街路がすこし見えてゐる。街路の向ふ側は寺の墓地で、石垣が僅に覗かれる。眼をあげると谷の向ふの崖の上に立つた家の屋根が、青葉の間から二つ三つ見えて、夜はその窓から青白い灯が動く。西側の窓の先は大きな崖で、小松があり、漆の木があり、竹があり、芒があり、苺の木があり、虎杖があり、薊があり、蕗があり、十藥がある。崖の上には桐の木もある。西向きの窓の外にあるこの崖は、私の句想を何時も豐富にしてくれる。

春、崖の其所此所に消え殘つてゐた雪が、二三日前の雨に消えたかと思ふと、もう枯草の間から黄ろな蕗の薹が見えて來る。何所かで藪鶯のチヤツチヤツと啼く聲が聞える。土筆が芽を出す。白みがかつた雨が二日も三日も音なしに降る。蒲公英の花のやうな物が見える。蕗の錢葉がほうけた薹を隱すやうに出て來、赤い虎杖の芽が見え、漆の枝にも若芽を吐いて來る。

土筆の坊子があぎて針のやうな杉菜の葉に變る。もう雜草が崖の肌を青めてしまふ。鶯が本音を出して朝早くから啼くのが聞える。蕗の葉が大きくなり、虎杖も芽が長くなる。明るい陽が照る。強い風が吹く。その強い風が二度三度と續く。眼れば つたいやうな雨が降る。崖の上の櫻が前觸れもなしに一時にぱつと開く。

風が吹き、雨も好く降る。その雨と風とは咲いたかと思つた櫻をもう散らして行く。雨と風とが收まると明るい惱ましい陽が見える。何の落花か白い花片が胡蝶のやうに窓の中へ飛んで

來たり、蕗の葉の上に乘つかつたりする。芒の莖は長く延び、向日葵に似たやうな雜草の葉が眼につきだす。崖の右の方に遠く空を支へたやうにして立つてゐる櫟と榎の大木は若葉で飾られる。桐に紫の花が咲く。虎杖の芽が莖になつて、枝が出、葉が出る。莓に黄ろな實が見えて來る。小松の枝先に花が見える。荒いざらざらした風が吹いて、障子の敷居ががしがしと氣味惡い音をさせる。

蒸暑いじめじめする雨が降りはじめる。雨の止み間には蛙の聲が聞える。夜はついすると螢が見える。松の綠が雨の中に氣持好く洗はれ、十藥が白い花をつける。薊も紫色の毒毒しい花を見せる。暑い陽がかつと照る。たけ高い雜草の中に向日葵に似た雜草の葉がますます眼立つて來る。小松や漆の木に這ひかかつた蔓草の葉が朝の微風に動いて見える。

陽の光が日增に炎を增して來る。燃えるやうな陽の下には漆の葉がぐつたりとなり、草の葉と云ふ葉は卷いて見える。その恐ろしい靜寂の中にきりぎりすだけが懶るさうに啼くのが聞える。蟬の聲もする。夜は凉しい風が吹く。雷雨が思ひだしたやうに來て白い大粒の雨が蕗の葉の上に轉がる。赤みの強い銅盤のやうな月が出る。蟲の聲が聞える。向日葵に似た草に黄ろな花が咲きはじめる。芒が穗を出す。朝の凉風に葉末の露がこぼれる。時とすると恐ろしい暴雨が襲ふて來る。漆や櫻の木はその風雨の中に狂亂の姿を見せる。暴雨の治まつた夜は爽な月の光、蟋蟀が室の中へ來て蚊帳の裾に飛ぶ。

油蟬。みんみん。蛁蟟の尻聲が淋しさうに聞えだす。茅蜩の聲が何所かでする。芒の穗が白くなつて來る。月の光が冴へて來る。漆の木に這ひかかつた烏瓜の實の黄ろくなつたのが眼につく。百舌鳥の聲が聞える。白い乳色をした雲が櫟の上を飛ぶ。冷たい小さな雨が降る。

草が一面に黄ろくなつて來る。漆の葉が紅くなる。黄ろな陽が照り、黄ろな風が吹く。櫟の梢に鵯のやうな小鳥が集つて來て啼くのが聞える。漆も櫻も日增に骨張つて來る。

空の色が碧く引き締つて見える。崖は茶色に染つて、櫻や漆の落葉がひらひらと飛んで見える。朝朝霜を見るやうになる。雀の聲が耳につく。烏瓜が眞赤になつて見える。冷たい雨が降る。風が吹く。雨の中に霰が交り出す。霰の後から雪が來る。雪は積んだり消えたりする。崖は荒凉としてやがて蘇生の春を待つことになる。

これが毎年見てゐる崖の四季の變遷であるが、それがやがて私の自然を見る眼となつてゐる。私はこの二階で春を知り、夏を知り、秋を知り、冬を知りながら書を讀み、客に接し、文章

を書き、酒を飲む。そして飽いて來ると、下へおりて行つて、庭弄りをする。しかし、どうせ人間世界に生存してゐることであるから、所縁にまつはられ、煩悩に繋がれるので、絶對の自由はない。時には讀みたくない書籍を開け、會ひたくない客に逢ひ、書きたくない文章を書き、飲みたくない酒を飲むこともあるが、そんなことは雲煙過眼、心を渾沌の世界に遊ばして、神を養はふとする工風に日もこれ足りない有樣であるが、しかし日では一口にさう云ふものの、決してたやすく出來るものでない。其所で俳句と酒とが一時の安息所になるのである。

私は何時も莊子にある渾沌の話を思ひ出す。それは南海の帝儵と、北海の帝忽とが、中央の帝渾沌の歡待を受けて、その德に報ゆるために、人間は七竅があつて、それで物を視、聽き、食ひ、息をしてゐるから、渾沌にも七竅を鑿つてやらうと云つて、日に一竅を鑿つたところで、七日目に渾沌が死んでしまつたと云ふ寓言である。私は眼も無い、耳も無い、鼻も無い、口もない渾沌であつたら好いだらうと思ふ。この頃ある雜誌を讀むと神でも辯が出來てはだめだと云ふやうなことを書いてあつたが、私に云はすと渾沌に辯の出來たものが神である。神とか宗教とか云ふやうなこ　を口にする者は、渾沌に七竅を鑿らうとした儵と忽とのやうな者である。

私は非常に客を好む。客の顏を見れば愉快になつて、話をし、冗談も云ひ、巫山戯もするが、私の本然の性質はそんな放膽な忍辱的なものでない。本然反對な、もそりと吹く風にも吹かれたくない、靜に一人でぢつとしてゐたい性分である。よく人の言ふ逸話であるが、何とか云ふ講釋師が屋敷へ行く時には、滑稽諧謔、煩い世の中に屈托と云ふ物はないやうな顏をしてゐるので、その屋敷にゐた女中の一人が、こんな人と一緒になつたなら面白く世の中が送れるだらうと思つて、結婚してみると、氣のむつかしいむつちり家であつた。私はその講釋師の氣持が好く判る。

私が六七年前に書いた隨筆の中に、こんな文句がある。『余は時ありて人に厭き、家庭に厭き　、一人になりて、何所を的ともなく、足の向くままに行きて、酒を飲み、肉をくらひ、興行物などを見物して、夢の如く一日を暮すことあり。かかる際には、己なく他人なく、又社會にし。ふと寂寥を感ずるままに、飄然として家に歸れば、職業あり、妻あり、兒あり、家庭ありて、貧しき　市民となる。』

又『余が家の二階は六疊二間ありて、上口の一室は客室となり、次の一室は書齋兼寢室となる。余はこの書齋兼寢室にて、夏季の三月を除くの外は、晝夜共に蒲團の中にありて、讀書し、作

文し、時に半睡狀態になりて神を養ふ。小兒の啼泣、階下に起ることあるも、階上は靜寂として、氣充ち、市井の賤民、帝王の如き自己を見て驚くことあり。』とも云つてあるが、兩者共に渾沌を求むる隱逸的な私の僞らない記錄である。

私はこの頃長い間の習慣であつた寢床の中で物を書くことをやめた。それは二三年來眼を病んでゐたために、人に賴んで談話筆記をして貰つたので自然と起きるやうになつた。ただ物を讀む時は、寢て讀まないと頭に入らないやうな氣がするので、それだけは寢て讀んでゐる。枕頭に澤山持つて來てある雜書を手當次第に讀んで、飽いて來るとそのまま投りのけて、又手に當つた書籍を取つて讀む。書籍に飽いて來るとそのまま眼をつむつてぢつとしてゐる。決して物の判斷をしない。

私が寢て雜書を亂讀すると云ふと、室の中に種種の書籍を雜然と積み重ねて、足の踏み所もないやうにしてあるらしく思はれるが、私は他のことにやりつぱなしであるに係はらず、書齋だけはすぐきちんと整理する。それははじめに云つたやうに明窓淨几趣味を持つてゐるからである。眼の屆く所に書籍や本箱があると文章などはとても書けないから、入用の書籍だけ出して、他は押入の中か机から見えない所に置く。この正月まで二階に置いてあつた本箱も、木盜のある中の見えない物であつた。

私の書齋は貧弱な書齋であるが、他人に煩はされずに、渾沌を友として悠然としてゐる時は、それこそ帝王の貴きにかへがたい氣がするのである。

ラムネの王

陰雨模樣をして降つてゐた雨が午過ぎから晴れることは晴れたが、じめじめと暑くてみやうに頭が重くるしい晚であつた。私は服部耕石氏のことを思ひだしたので、江戶川緣に近い東五軒町の宅へぶらりと出かけて行つた。

耕石氏は『日本人』時代からその名を聞いてゐたが、知つたのは三四年このかたである。篆刻が本業であると云ふことを聞いて、なるほど石を耕す人であると思つた。下總干潟の出身であると云つてゐるが、江戶子肌の話の線の細かな人で、聞いてゐても氣持が好い。私の行つた晚には、「高潮」同人の鈴木靜月君が來て雜誌の選句のことに就いて話してゐた。

耕石氏と私との間には篆刻の話がはじまつた。私は馬場孤蝶翁から聞きかじつてゐた翁の祖父になる人のやつたと云ふ銅印の話を持ちだしてみると、耕石氏は銅印を作るには二つの方法があると云つて細細とその方法を說明してくれた。

銅印の話の後で私は芥川龍之介氏から支那土産にと貰つた糸印のことを思ひだして聞いてみた。糸印とは昔支那から日本へ輸入して來た所謂唐糸の行李の中に一つづつ入つてゐた物であると云ふことを聞いてゐるだけで、何のためにそれが糸の中に入つてゐたかと云ふことが判らなかつた。耕石氏はその時机の上に置いた菓子皿の中に指をさした。それには小さな一錢銅貨くらゐの形のある煎餅が入つてゐて、字とも畫とも判らない印形がそれぞれ附いてゐた。

『これが糸印煎餅ですよ、宮武外骨君は糸印に精しいから、宮武君に聞くと判つてませうが、なにしろ、糸印の字は讀めないですね、元は字だつたでせうが、そいつを拵へる時に、都合の好いやうに、劃を彼方へ弄り、此方へ弄つたものと見えますね、百ぐらゐある内で、判るのは、三つか四つですよ。』

『ぢや、糸印は、判らないが本體で、判るのが變體ですね。』

『まあさうですな。』

耕石氏は笑つた。その耕石氏は二三年前奈良へ行つた時、汚い古道具屋の店で糸印を二つ見付けたので、このあたりの古道具屋だから、何も判らないだらうと思つて聞いてみると、一つが二圓五十錢だと云つた。

『そんな馬鹿なことがあるもんか、こんな物は、二十錢か三十錢で澤山ぢやないか。』

と云ふと

『これは安いんですよ、好いのになつたら、十圓も五十圓も、まだ百圓もする奴がありますよ。』

と亭主の氣焔が高い。歸つてその道の者に聞き合はすと、やはり二圓五十錢が通り相場であると云ふことが判つた。

『今は摸造品が出來てますから、そんな物は安いでせう。』

話は支那の傳國の璽の話に移つた。私は九州の松浦家か細川家か家は忘れたが、其所に昔から傳はつてゐた寶玉の話を聞いてゐたのでそれを話した。その寶玉はお家騒動まで起して澤山な人を殺したものであつたが、ある時神保小虎博士に鑑定を請ふた。神保博士はそれをつくづく見てゐたが、やがてナイフを出してそれに突き立てたので、寶玉はもろく割れてしまつた。傍にゐた者が吃驚して博士に詰め寄ると、

『これは松脂だ、こんな玉なら、何時でも俺が拵へてやる。』

と云つて博士が笑つたと云ふ話であつた。すると耕石氏が何か思ひだしたのか笑ひだした。

『それに就いて面白い話がありますよ。』

と云つて話しだした。それは土浦の漁師の話であつた。その漁師がある時、撒網を打つてゐると、不思議な玉が網にかかつ

て來た。漁師は名玉に違ひないから、東京あたりへ持つて行つて賣れば莫大な金になるだらうと思つたので、それから漁にも行かず、毎日酒ばかり飲んでゐた。女房が心配して、

『そんなことをして、毎日毎日酒を飲んでて、どうするんですよ、』

と云ふと、漁師先生、

『まあ好いよ、人間の運と云ふものは、何所にあるか判らないや、まあ、まあ、酒でも飲んでゆつくりしやう、その内には、お前にも、そんな汚いなりはささないよ、』

などと云つて飲んでる内に、もう何もかも無くなつたので、いよいよ名玉を賣ることにして、人に見せると、ラムネ瓶の中に入つてゐる硝子玉であつた。六月八日

蜥蜴の皮

五月の中頃であつた。平生のやうに朝飯を濟まして二階の書齋へ入つた私は、机の前へ坐るのがおつくうであつたから、中敷の敷居の上にあがつて、背を柱に凭せ、兩足の爪先を障子の引手にかけて、取りとめのないことを考へながらぐつたりとしてゐた。と、門口の方でそざりそざりと重い一方の足を引きずるやうな草履ばきの足音がした。何人かびつこを引いてゐる人であるが、何人であらう、ついすると神保町の老人ではないかと、知合の書肆の主人のことを思ひだして顔を右の方に向けて見た。それは肥つた年とつた男で、右の手にちよとした布呂敷包をぶらさげ、左の足を引きずるやうにしてゐるが、書肆の主人ではなかつた。しかし、その容貌がどうも見たことがあるやうに思ふので、ぢつと眼を止めたところで、入つて來た人はふいと顔をあげた。それはジヤハからもう歸るか歸るかと待つてゐた濱川波靜氏であつた。

日本派の俳人として知られてゐる波靜氏は、昨年の秋、自分の奉職してゐる製糖會社の支店長が病氣になつて内地へ養生に歸つて來たので、その留守居にと半年の約束で本社からやられてゐたものであつたが、半年と云へば四月に歸つて來ることになつてゐるので、この一二年來、波靜氏を中心にして俳句をやつてゐた夜來吟社と云ふ詩社では、私をはじめ皆の者がその歸つて來るのを待ちかねてゐるところであつた。勿論遠い異鄕から歸つて來たその道の先達を慰めやうと云ふことが第一の意味であつたが、それ以外にも一つの意味が交つてゐた。それは夜來吟社の肝入であつた酒枝烏川君が、本年の二月、土佐へ行く汽船の中で急病で亡くなつてゐるので、波靜氏が歸るのを待つて歡迎會をやると共に、一夜烏川君のことを心行くま

で話し合ふと云ふことであつた。私は二階を駈けおりて波靜氏を迎へた。

『何時歸りました、これは、ようこそ……』

波靜氏は格子戸を開けて入つて來た。

『二三日前に戻つたが、足に怪我をして不自由なもんだから、まだ何所へも行かないが、此所は近いからね、』

『それは、どうも有難う、ずつと二階へあがつてください、足はかまはないですか、』

『もう大部癒つたから……、彼方で湯に入てゐるところへ、例の夕立がやつて來て、湯殿から家の内へ逃げ込まうと思ふて、ちよとした所を跳ぶ拍子に、足が滑つてひつくりかへつてね、足が痛いから歸りにシヤムへ寄つて、皆が釋迦の遺跡を見に行つたが、行けなかつたよ、』

波靜氏は私と一緒に二階へあがつた。

『酒枝君が寥いことになりましてね、』

私は坐るなりもう鳥川君のことを云つた。

『さうよ、僕も聞いて吃驚した、却つて僕が南洋へ行つて死にはせんかと心配してゐた者があつたさうなが、酒枝君が死ぬるとは思ひもよらなかつたよ、』

二人は鳥川君のことに就いて話しあつた。ちやうど鳥川君が亡くなつた日、土佐へ歸りあはせてゐてその死顏を見てゐる私は、その日のことを細細と話した。それは二月の十一日の朝のことであつた。朝飯の後で、毎日のやうに遊びに行つてゐた土陽新聞の二階の編輯局へぶらりと入つて行くと、

『桃葉、酒枝が死んだぜよ、』

とだしぬけに云ふ者があつた。それは森下と云ふ友人であつた。私は酒枝と云ふ言葉を聞いても、あまり思ひがけないことであるから、すぐには鳥川君と云ふことが思ひ出せなかつた。しかし、正月の十日に、夜來吟社の新年宴會を下谷の同人の家で催うした時、一月の末に土佐へ行くと云つてゐたことを思ひだしたので、それでは鳥川君ではないかと驚いた。

『酒枝とは、鳥川か、』

と云ふと、森下君は、

『鳥川よ、鳥川が死んだぜよ、』

と又云つた、それでも私はどうも本當に思へない。

『本當だらうか、』

『本當とも、今朝、浦戸丸で、おはなを剃つたところで、腦溢血で死んだと云ふぜよ、』

鳥川君は數年前に糖尿病をやり、最近は腎臟に故障があつたことを聞いてゐた。私は諦めてしまつた。東京で鳥川君と親し

くしてゐたことを知つてゐる友人達は、私に烏川君の近狀を問いた。私は夜來吟社の新年宴會で逢つたこと、それから、その翌晩烏川君等と一緒に日本橋の紙問屋の新年宴會に招かれてゐたが、風邪のために行けなかつたのでが十日の晩の會合が一生の逢ひじまひであつたと云ふやうなことを話した。と、烏川君や私達と親しくしてゐて、最近歸つて土陽の記者をやつてゐる尾崎吸江君がやつて來たので、また烏川君の追憶談が一しきり賑ふた。

その後で尾崎君が高知新聞へ電話をかけた。烏川君は高知新聞の東京支局の主任であつた。烏川君の遺骸は高知新聞の社宅へ引き取つて來てあつた。二人は香奠を持つて出かけてつた。高知新聞の社宅は土陽新聞社から二三丁目の上手にあつた。それは土間が入口から裏口に突き拔けた家で、室はその右側になつてゐた。烏川君の死骸は、次の室の眞中へ蒲團をかけて寢かして、それに三人の者がつき添ふてゐた。その烏川君の蒲團の裾の方には、赤ら顏の品の好い老人が坐つてゐた。それは高知新聞の理事の西本辯護士であつた。西本辯護士は烏川君の臨終の際のことを話した。

五つになる中の女の子を連れて東京から歸つてゐた烏川君は、朝の五時頃、船が室戸岬を廻つたところで、胸から肩が痛いと云つて、同室の者に醫者を呼んで貰つて、撫でさすらした上で、便所へ行き、戻つて橫になつてゐる內に、急に容態が變つてしまつた。同船してゐた醫師も來てくれたがどうすることも出來なかつた。私はその話の終るのも待たずに、烏川君の枕頭へ寄つて行つた。

『見せてください、一生の見收めだ、』

私は蒲團をそつとまくつた。顏も頰も鼻も頤も、それは木彫のやうな感じのする烏川君が、僅に顏色が青黑くなつてゐると云ふだけで、他は生前とすこしも變らない安らかな顏をして眼をつむつてゐた。

其所へ尾崎君も寄つて來た。私は眼先が暗くなつたやうに思つた。私は拜をした後に西本辯護士の前へと行つた。

烏川君の故郷は香美郡の佐古村であつた。昨年の暮に母堂が病氣になつたので、すぐ姫娘中の細君を看護に歸して、自分は支局の用事の片付くのを待つて歸る途中であつた。東京から一緖に連れて來た女の子は、お父さんが病氣だと云つて知り合ひの家にあづけてあつたが、平氣で繪本などを見てゐると西本辯護士が云つた。その烏川君の葬式は翌日佐古村で營まれた。

烏川君は角力と俳句が道樂であつた。その烏川君は「高潮」の同人であつたので、私は烏川君との關係から高潮の俳席に顏

も出すことがある。夜來吟社も波靜氏が東京へ家を移して來ると共に、鳥川君の骨折で出來たものであつた。話の内に波靜氏は傍に置いてあつた布呂敷包を解いて、

『何か土産をと思つたが、何も持つて來なかつたから、』

と云つて、棧梠の葉で拵へた二本の團扇と、ビリケンのやうな顏をした彩色した木の人形と、二尺ばかりある蛇とも蜴蜥とも判らない皮を出して机の上に並べた。

『團扇と、人形は、香港で買つて來たが、この蜥蜴は會社の庭で取つたものでよ。』

その蜥蜴は背を裂いて腹の皮を綺麗に殘してあつた。

『此奴は鷄を捕りに來るからね、非常にすばしい奴だから、鐵砲なら打てるが、彼所は和蘭政府がやかましくつて、鐵砲を打つことが出來ない、これは會社に屆ふてゐる土人が旨く捕へて、鼻の穴へ竹片をさして殺したもんだよ、なめして蟇口にでもしてくれたまへ、さう思つて腹を裂かずに背を裂かして來た。』

波靜氏はそれからスラバヤ附近の地勢に就いて話した。野も山も耕地になつてゐて、草や木が生へ茂つて鰐や毒蛇がゐるやうな土地は見當らなかつたと波靜氏は云つた。水も澤山で河と云ふ河にはその水が溢れてゐたとも云つた。スラバヤはバタビヤの奥になつてゐた。海を見るには自動車を半日くらゐも走らさなければならなかつたとも云つた。

『この蜥蜴の肉をテンプラにしたら旨いと云ふ者があつたが、何人も喫ひはしなかつた。』

話は毒蛇のことになつた。私は友人に聞てゐた青竹や飯匙倩の話をしてみた。飯匙倩を捕へるには、穴を掘つてそれに鼠を入れておくと、鼠の好きな飯匙倩がそれを捕りに來て穴の中へ入つてしまふと云ふことから、飯匙倩が人家へ來るのは鼠を捕りに來ると云ふこと、そんな毒蛇のゐる土地では、嫁入道具に蛇を殺す鐵棒を持つて行くので、その數の多いのは嫁入仕度の好いことになつてゐる。そしてその鐵棒は、毎晩寢る時に、蚊帳の裾へずつと置いて、毒蛇の入つて來ないやうにしてあると云ふことなどであつた。

『嫁入仕度に鐵棒を持つて行くは面白いぢやありませんか。』

私の話の後で波靜氏は又ジヤハの話をした。和蘭人がジヤハの酋長の城を奪取した時には、城が水澤の中にあつて路がないので、兵士が行けない。其所で酋長を呼んで來て馬車に乘らして遊ばした。酋長は馬車を城まで乘つて行きたいので、部下に命じて路を作らした。和蘭人はそれを見て急に兵をやつて城を奪取した。波靜氏はこんなことも云つて笑つた。

二時間ばかりも話して波靜氏は歸つて行つた。

『では一つ、歡迎會をやりませう。』

私は波多氏を藤坂の下まで見送つて行つたが、歸つて机の傍へ行つたところで、厭な匂がしたので、蜥蜴の臭氣だと思つて、壁にかけ、急いで臺所へ行つて石鹼で手を洗つたが、しかしそれは私の神經であつた。

私と東京朝日新聞

私は讀んだことはないがルナンの耶蘇傳には、キリストは年が行つてから人を攻むるやうになつたと書いてあると云ふことである。人は年を取つて來ると若い時のやうな忍辱的な分子がすくなくなつて人を攻むるやうになるものらしい。私は最近の自分を顧みてもそのことを認めるし、また先輩知人の間に於てもそれを認めるので、なるだけならつまらないことは云はないやうにしたいと思つてゐるが、私と東京朝日新聞の間に起つた事件は、文筆に從事してゐる人にはこれからも起る事件であつて、私ばかりのことでもないやうに思はれるし、また私としても第三者に疑惑を抱かせて、自個を傷づけられる恐れがあるやうに思はれるから一言することにした。

事の起つたのは五月の十九日であつた、それは私が朝日新聞の朝刊へ連載してゐた『幻華錄』と云ふ物語が、その日限り九回で中止になると共に、幻華錄は田中氏が曾て著はしてゐる書籍の中にある物と大同小異であるから、斷然中止すると云ふやうな侮辱的な斷り書きを附けてあつたことである。私はこれに對して翌日朝日新聞に『幻華錄中止に就いて』と云ふ辯明書を掲げたが、新聞社ではその辯明書の字句を所所削つてあつたので、私の意のある所が模糊とした所があつて、第三者にはちよと判斷に苦しむ所があつたやうに思はれる。それに對しても私としては意見もあるが、それは枝葉の問題であるから云はないとして、先づ幻華錄のことに就いて云はふ。ぜんたい私が幻華錄に筆をつけるやうになつたのは、昨年の暮『剪燈新話』を創作譯にして某書肆から出版する契約が成立したからである。で筆を執りたいと思つてゐると、朝日の社員で友人である某君と或る席上で出くはした。友人を某君と書いたのは直接この事件に關係がないためである、私はその友人に逢つた際、剪燈新話のこと話してみると、友人が朝日の學藝部の名倉聞一氏に交渉してくれたので、先づ新聞に連載することにしたが、名倉氏の話では、書いて貰ふなら百回ぐらゐ書いて貰ひたい、あまり短くてはいけないとのことであつた。ところで剪燈新話の話は二十篇あるが、中には詩文としては興味があつても、物語としては面白くない物があるから、それを除くとなると百回の材料に

は不足である。それに面白いには面白いにしても、同一人の手になつた物では讀む者も飽いて來るだらうと思つたので、剪燈新話から十篇くらゐの話を取り、後は他の材料を用ゐて幻華錄の名の下に幾個もの物語を續けて行くことにした。これは幻華錄のはしがきに『私は今回必要があつて剪燈新話の創作譯をするやうになりましたが、新聞紙の讀物とするには、それぱかりでは單調であるやうに思はれますから、聊齋志異、雨夜秋燈錄、夜譚隨錄、晉唐小說六十種、搜神記、埋憂集等の中から適當な話を採つて、その中へ交くることにします。』と書いてあるのを見てくれるなら判ることである。

話がすこし岐道に入るが、私が何故に剪燈新話の創作譯をするやうになつたかと云ふと、この剪燈新話は今古い日本文學に非常な影響を及ぼしてゐるところに興味があつたからである。本書は明の瞿佑の作で、日本へも早く舶來して讀まれてゐたと見えて、天文年間に書いて享保年間に出版になつた『奇異雜談集』と云ふ近世の怪談小說の濫觴となつてゐる說話集の中には、剪燈新話の中の金鳳釵記、牡丹燈記、申陽洞記等の飜案が雜へてある。なにしろ剪燈新話をはじめ支那の怪談小說は御伽物語、百物語と云ふやうな奇怪的な說話に影響した。中でも淺井了意が剪燈新話を飜案した『御伽婢子』は、當時の人氣に投ずると共に、室町時代文學の大系をなして、それがやがて上田秋成の『雨月物語』となり、瀧澤馬琴をはじ江戸作者の讀本となつて、明治維新に至つたもので、日本古今の文學には見逃すべからざるものである。

さて幻華錄のことであるが、幻華錄執筆の大眼目が既に剪燈新話であるから先づ剪燈新話の物語からはじめた。ところで、私が昨年五月に出版した『戀愛鬼語』と云ふ單行本があるで、その中に剪燈新話から材料を取つて書いた六篇の物語があつて、幻華錄の第一話の月夜も、第二話の牡丹燈も、その內の一つであるが、それは梗概的に、また半ば私の物として物語ふうに書いたものであるから、原文の意をそこねないやうに何所までも原文に忠實に行かうとしてゐる創作譯とは全然違つてゐると思つてゐるから、そんな舊稿は眼中に置かなかつたし、それにすこしも心にやましいことを感じなかつたので、平氣で原文に依つて筆を著けた。しかし立派な原話があつて、その上又古共私の頭の中へ入れて書いた物であるから、會話や文章に戀愛鬼語と似かよつた所もないではないが、それは仕方のないことでもあるし、又さし間へのないことである。外國の書物を飜譯紹介する者が、はじめにその梗概なり、粗筋なりを書いた物を纏めて單行本にした後に、また都合でその全文を忠實に飜譯刊行

することはよくある例である。また私達の同業者の間には、一度雜誌に出した物を單行本にした後に、氣にいらない所があるとそれを改作してまた單行本にしたり、又雜誌に載せた上で、二度と單行本の中に收める者もある。この際名をあげることは困るが、曾て朝日新聞に連載した小說の中には、一度その作者が雜誌に出して單行本に收めてある小說を、その中に所謂大同小異的に挾んであることは世間周知の事實である。要するに短話を連結して長話を作り、梗概を捨てて全譯に移り、不完全を捨てて完全に趣くことは、天地に恥ぢないことと思はれる。何人であつたかちよと名を忘れたが、外國の有名な小說で、いきなり單行本にしたところで、非常に評判であつたから、それをまた新聞に連載したと云ふこともある。私は心にやましくないので、面白い原稿を先に掲載してくれと云ふ名倉氏の意見もあるし、剪燈新話を主としてゐる以上、月夜、牡丹燈記、渭塘奇遇記、綠衣人などは、どうしても逸することの出來ないものであるから、先づ月夜を送り、牡丹燈記奇遇記を送つた譯である。

幻華錄は朝日の夕刊に掲載することにして正月の内に契約が成立してゐたが、議會の記事やその他の記事が輻湊してゐたので、原稿は送らずにゐると、確な日時は忘れたが四月の末頃であつたと思ふ、名倉氏から原稿を送つてくれと云ふ手紙が來たので、名倉氏宛に送つてをくと、十日頃になつて朝刊に載りはじめた。夕刊の約束をしておいて、一言の斷りなしに朝刊に載せると云ふこともおかしなものであるが、私の性質として、そんなことはあまり云はない方だから默つてゐた。友人などが夕刊に出ると云つて居つたのに、朝刊に出たぢやないかと不審する者があると、大いに歡待してくれたとみえるね、と云ふやうなことを云つて笑つてゐた。それについては十六日になつて朝日新聞に原稿料を貰ひに行くと、名倉氏が編輯長が讀んで面白いと云つて朝刊に廻はしたが、無斷でやつてすみませんと云ふやうな意味のことを云つたので、私も好い所へ載せて頂いて有難いと云ふやうな返事をしたが、しかしあまり面白くはなかつた。朝日新聞が一言の斷りなしに、無斷でやつたことはそればかりでなしに、幻華錄第二話の牡丹燈の題目ももと牡丹燈記してあつたのに係らず勝手に記の字を省いてあつた。

十六日の夜、私が朝日新聞へ原稿料を貰ひに行つた日の夜になつて、名倉氏から手紙が來た。その手紙には足下の原稿は足下が曾て出版した單行本の中にある材料と同じだと云ふ非難があるから、今後は他の材料で書くやうにと云つてあつたので、十七日の朝早く速達で返事を出した。その返事は、なるほどあの材料は戀愛鬼話に用ゐた材料であるが、それは今度の原稿と

戀愛鬼語との文章を引き合してくれても判るが、書き方が全然違つてゐる。しかし、新聞の政策として同じ材料の物を用ゐるがいけないと云ふなら、第三話から違つた物語を書くと云ふやうな意味であつた。そして他の材料で原稿を書いて、十八日の朝また速達で手紙を出し、前日の手紙の言葉の足りない所を補足した上で、本日四時から五時の間に原稿を持つて行くと云つてやつてから、ちやうど五時頃、朝日新聞へ出かけて行つて名倉氏に逢つた。名倉氏はいきなり材料の同一問題がやかましくなつたから、一先づ中止してくれまいかと云ふので、一言の下に承諾して、持つて行つてゐた原稿も出さずに歸つて來た。ところで、十九日の斷り書きとなつた。私は怪しからんことであると思つて、二三の知人に相談した後に辯明書を書き、一時頃朝日新聞へ出かけて行つて、名倉氏に逢はふとしたが、まだ來ないと云ふので、社會部の主任に面會を申込んだ。これは私が新聞社の組織が判らないからやつた見當違ひの申込であつた。共所へちやうど幻華錄の口を利いてくれた友人が來合はして、編輯長に逢へと云つて交渉に行つてくれた。その後へ社會部の主任が出て來てくれたので、とにかく成行を話してみると、私は方面違ひでその原稿に關係はないが、あなたも同一料料であると云ふことを斷はつておけばよかつたと云ふやうなことを云つてから引込んで行つた。そしてそれと入り違ひになつて編輯長安藤正純氏が來たので、私はあまり酷いではないかと云ふと、安藤氏はひどくはないと云つた。共所で私は、あなたは剪燈新話の原文と幻華錄の文章とを引き合してくれたかと云ふと、原文は見たことはないが戀愛鬼語の文章に似てゐるからと云つた。私は持つて行つてゐた剪燈新話の原本と、戀愛鬼語と、幻華錄の切拔を出して好く見くらべてくれと云つた。安藤氏は私は漢文は讀めない、內藤湖南がゐると讀めるだらうがと云つた。私は剪燈新話の原本を安藤氏の前へ置いて、それを指でついて讀みながら、一方、新聞切拔と對稱して貰つた。安藤氏はその後で、戀愛鬼語の文章があなたでなければ好かつたと云つた。私は共所で名倉氏との昨日までの交渉のことを話した。すると安藤氏は、君と名倉君とで話したことは僕には判つてゐない、また忙しいからいちいちそんな事を聞いてゐられないと云つた。安藤氏の云つたことは事實のことであらうが、原稿を掲載するまでは名倉氏を朝日新聞の代表者として交渉さしておいて、事件が起つて來るとそんなことを聞いてをられないと云つて、名倉氏の責任を他へ移すと云ふやうなやり方は、私としては甚だ迷惑至極であると共に、以後新聞社と交渉するには、その資格を確めてかからねばならないと云ふやうな

ことになつて不便この上なしである。とにかく私と名倉氏との間に紳士的な解決をつけてゐるところへ、あゝした断り書きを書いたりすると、なんだか相当の人と話してゐる所へ、横合から何か跳び込んで來て、その爪で頰なり額なりを引掻かれたやうな氣がしてならない。また名倉氏と交渉解決をしたことは別としても、同一材料が惡いと云ふことなれば、一度は私の辯明を聞いた上で中止するなりなんなりすべきである。断り書きは惡むべき新聞紙の暴力であると思ふ。このことに就いては、私は朝日新聞社長村山龍平氏に三尋にあまる抗議書を送つてあるから、此所では議論がましいことは云はずに、ただ事實の報道だけに止めて置く。

三つの斷章

佐々木指月

△

怒るんならたゞ怒つてくれ。

怒つてからあとで理屈なんかつけられちやア、やりきれない。

なんにも、わけもなく、理屈もなしで怒られるんなら、いくら怒られたつてかまはない。

こつちも理屈なしに向ふを、なぐるだけの事だ。一つ無断で、理屈をぬきにして、人のあたまを、ぽかんとなぐつて見たいな。

それで、向ふが、何んにも文句を云はないで、組みついてくるやうならば、そいつはきつと話せるやつなんだ。けれども、『何をしやがる。』とか、何んとか云へば、そいつは、もう、なつてゐない證據なんだ。

あゝ、なぐつて見たいなア、何んにも理由なしに、ぽかんと一つ。

私は一人で、げん骨をふりまはしながら、手ごたへのない空氣を、へつたやたらになぐりつけながら、まつくらくらのくらやみを、無我無中に歩いた。

暑い暑い、むんむんと蒸す。それはたまらない暑さだ。

汗が靴のなかへ、一ぱいになつて、靴下がすつかり濡れて、じくじくして、歩くたんびに靴の底が、足のうらへ吸ひついてくる。

草いきれが、ぷンとして、帽子をかぶつてゐる額のところがちくちくする。顔はまるで湯をかぶつたやうだ。

ぴかアりツ。あツ、光つた。

高い、杉の木の、てツぺん、でおやぢの眉間の青筋のやうなものが紫色に光ると、

ばりばりばり、がらがらがらツ。

あたまの心がきききき　と、うすい鋸で挽られるやうな氣もちがして、鼻のさきが、ぷウンと、きなくさかつた。

ぴかアりツ。

あツ、こいつはたまらないツ、私は、耳をおさへて立ちすくんだ。

痛快に、怒りやがるなア。と、思つたとたんに、ひよいと、あたまのなかが、でんぐり返つて、見覺えのある男の顔が、ちらりツと私の目の先へ浮いた。

誰れだつけなア、あいつはア。

見てゐると、その男に、まツかになつて怒りながら、手に持つてゐる鞭をふりまはして、滅茶苦茶に當り散らしてゐる。

そこいらの羅だの、腰かけだのはひつくり返るし、怒られたやつらはまごまごして、あたり一面に、ころがつた錢を拾ふまもなく、石の階段を、まはるくなつて逃げ出した。

一と群の鳩が、ばらばらツと空へ舞ひあがる。白い羊や、黒い牛が、びつくり仰天して、あたり近所へ驅け出した。

男はまだ怒つてる。

怒れ、怒れ、いくら怒つたつて怒り德だ。

がら、がらツ、ぴしやん、どたん、ばたん、何んでもいゝから、思ひツきりやつてくれ。

あツ、また光つたな。

さアアツ。

いよいよ降つて來たな。いや、降るは、降るは、これは少々手きびしいな。

△

私は杉の杜の坂道を、ぐしよぐしよになつて驅けおりた。

まるで牢へ、はいつてゐるやうなものだ、もうこれでこの仕事場に二年ゐる。

なにしろ天井のスカイライトから光線がくるだけで、四方とも壁だからやりきれない。

鉢植の草花を買つて來て、床の上へならべて、晝休みのたびに水をやつて、その青い葉や、あかい花を見てたのしんでゐるのだけれども、花もこの陰氣な仕事場では、その可愛らしい顔を、いつ迄も仰向けにはしてゐない。

ぢきに下を向いて、グールバイとも何とも云はずに萎れてしまう。

私は、なぜ窓を明けてくれないかと云つて、何度主人と喧嘩したか知れやしない。

あるときなぞは窓を明けてくれなければ、出る。出たつて私はこまらないと、懐中の、百〇三弗を出して威張つたものだ。

なにしろ私はその町にたつた一人の、お職人様なので、主人も、これには、こまつて、窓をあけることにした。

その日のうちに大工を雇つて、外から煉瓦の壁を崩すことに話がきとまると、隣の屋敷から苦情が來た。

それは、この建物は、地所一ぱいに建てゝあつて、軒を一寸出しても、隣りの領分へ、はみ出す事になるので、そんなことはされてはならぬと云ふことだつた。

他の三方は窓をあけても建物のなかだし、それで主人も笑ひ顔、私は泣き寝入りになつた。

私は癪にさはつたから、ぺんきで壁へ窓の繪を書いて、硝子を一枚あけた向ふへ、美人の顔をかいてやつた。

然しそれからもう半年たつ。誰がいたづらするともない、美人の顔に、ひげが生えたり角が生えたりしてゐる。

さうして私の懐中は、その後、だんだん淋しくなつて、今ではたゞの廿五仙あるばかりだ。

あゝ、あゝ、とても仕方がないなと、私は、仕事の手をやめて、繪に書いた窓を見つめた。

凝ツと、その窓を見つめてゐると、美人の角がぴくぴく動く。につこり笑つて、赤いおひげの間から、唇の角がぎゆツと上へあがつて、白い歯の間から、赤い舌がぺろりと出た。

すると、その舌が、だんだんに伸びて來て、私の鼻をぺろぺろなめるぢやないか。

氣味が惡いつたらない。私も、舌を出して、向ふの舌を、ぺろぺろなめてやつた。

『おい、』と、うしろで誰かの聲がする。

はつと思つてふりむくと、そこには主人が目を光らして立つてゐる。

『おまへの晝寢に、拂ふやうな給料は、おれは持ちあはさない。後と云はず、すぐ出て行つて貰はう。』と、かう來た。

懐中には廿五仙、と。待つてくれ。然し、もう、かうなつて

はしかたがない。

私は、その廿五仙を、ポケツトからつまみ出して、ぴツしやり床へ叩きつけて、

『籍寝の代は、おれが拂つてやる。さあ出すなら出して見ろ。』

主人は、しばらく考へてゐたが、笑ひたさを、こらへたやうな顔つきで、

『來月は、この建物から引き越さなけりやならないから、その時に窓のある仕事場へ出してやる。』と、云ひ捨てゝ出て行つた。

その翌朝のことである。壁にかいた美人の頬ぺたに、百〇二弗七十五仙と云ふ正札が、はりつけてあつた。

△

私は、暗い暗いトンネルの奥深くはいつて行つた。

赤土の崖を堀りぬいたトンネルの、なかで、こんなに、乾いてゐるとは思はなかつた。

さんざん山道を登りつめた、そのあげくがトンネルと來たのだから、なかへ、はいつたら、燒けつくやうな太陽の光線はなくなるし、淸水も湧いてゐようし、空氣も冷えてゐるだらうと思つたのは、まるであべこべで、トンネルへ一歩ふみ込んだ時から、むつとした熱だ。

汗が一時に額や手の毛孔をついて、だらだらツと流れた。

ウム、ひどいほこりだ。足を片方おろすたびに、烟の湧いて立つやうに、ほこりが立つ。

ぷフツ、こいつはたまらない。立つたほこりは、顔と云はず、衿と云はず、流れてゐる汗の上に、ぴつたりとはりつく。

肩のうしろの入口から、さし込んでくる淡い光に、下を見ると、誰れの通つた足跡もついてはゐない。

何しろこゝは舊道だから、このトンネルを堀つたのも昔のことだらう。何年たつか知れないが、その間一滴の水も落ちたことのないわけだから、土の乾いてゐるのは知れきつたことだ。

それに、その乾いた土を、昔から數へきれない程の人が、踏みほぐして通つたのだから、それがみんな、ほこりになつて舞ひあがるのだ。

かうど知つたら、少しばかりのまはり道を苦にこないで新道を行けばよかつた。

と、思つたが、もう、遲い。また十哩もひつ返すのではやりきれない。

私は、一氣に通りぬけやうと思つて、急ぎ足にすたすたと馳け込んだ。

まるで大きな竈戸のなかを、歩いて渡るやうなものである。

灰のやうな土ほこりは、そのなかに一ぱいになつて、まだうし

ろからさす光も絶えないうちに、あたりは、もはや真ッ暗だ。土、だんだん深くなつて行くやうである。足のはこびもおもくなつた。

前からハンケチで、鼻と口とをおさへて来たが、とても、息が苦しくなつてやりきれない。

どうか一度、深呼吸をして見たいが、さもなくツてさへ、もう口のうちが、ちやりちやりする。

私は口をふさいだまゝ、また駈け出したが、泥はますます深くなつて、もう足掻きもつかない。

でも、呼吸をしないわけに行かないから、ハンケチをおさへた指の間から、そろ〳〵息を吸ひこむと、肺のなかが一ぱいにほこりだらけになるやうだ。

私は咽せた。咳いて吸ひ込んだ土ほこりは、私の咽を一度にふさいだ。

うんと、私はそこに立ちすくんだ。こりやいけない。急げば急ぐほど、ほこりをたてゝ、しまいには吸ふ空気もなくなつてしまうに違ひない。

こりや、しばらく静かにしてゐるに越したことはないと、私は、片手さぐりに闇のなかをさぐつて、ともかくもトンネルの壁をさぐりあてた。

なぜ、そんなことをしたのだか、それは自分にもわからない。トンネルの壁に手がさはると、土は、ぞろぞろと崩れた。

はてな、このトンネルは、はたして先まで透つてゐるのか知らことによつたら、先がとまつて、何年となく、人も通つたことがないのぢやないかしら。行けば、行くほど、この土が深くなつたら、どうしやうか知ら。

と思ふと、急に恐ろしくなつて、しばらくはぼんやりと佇んだ

何しろ、私は目をつぶつてゐる。開いて見やうと思つて、土ほこりを恐れながら見ひらいたが、闇のなかでは、つぶつてゐても開いても、それは同じ事だつた。

すると何だか、馬糞の臭ひがしてくる。ハンケチをゆるめて、よく嗅いで見ると、たしかにさうだ。

して見ると、こゝは通れるところなんだ。あの馬が、四ツ足で、ぽかぽかほこりを立てゝさへ通れるんだ。

その夕方、私は、ヲーナツグローヴと云ふところについた。

あたまから、赤土のほこりをかぶつて、顔も眼も、まツ赤になつてゐる私を見て町の人はあきれて笑つた。

私も、あはゝと笑つた。

しかし、それは、自分の姿が、ほこりまみれになつてゐるせいではない。

私は、あはゝゝと笑つた。

加藤内閣の成立と其閣員批判

文學博士　三　宅　雪　嶺

加藤内閣員及び内閣成立助力者が、公然の秘密といふ態度で明言するに、一致して居る事がある。稍悪意な者が尋ねれば、きつと同一の返答を聞く。それは外でもない、斯うである。政友會内閣が、不統一でも、他の事情でも、既に倒れた以上、第二大政黨なる憲政會の首領を首相に奏薦しようと考へつかぬでない。現に少數であるのでさう行かぬと云へぬ。衆議院を解散して多數を占め得れば、それで可い。その見込さへつけば、政友會員は兎も角、誰が憲政會内閣の成立を妨げる者か。政友會でも物の解つた連中は、斯くするのを順當とするであらう。何分にも憲政會内閣が總選擧に多數を制する事を考へる事が出來ぬ。今は大隈内閣成立當時と勢が違つて居り、總選擧で憲政會が増員して、百五十名位であらう。政友會が百名を減じ、百八十にならうか。假りに大隈内閣の例に傚し、半減するとして百四十名、國民黨及び其他が憲政會よりも政友會に近付かうとし、矢張反對黨が多數を制し、再解散か總辭職か、何れかを免かれなくなる。折角憲政會内閣が成立しても、さうなつては、徒らに動揺を引起すの外、何の得る所が無い。憲政會で政友會に代り多數を制するの見込が付かなくては、何うとも仕様が無いではないか。それと云うて、政友會内閣にする譯に行かず、近來貴族院に政治熱が昂まり、暫く之を基礎にして内閣を組織するのは、政界の安定を圖る所以である。政友會でも加藤男ならばと云ふ事であり、華盛頓會議の跡始末等で、斯くするの外に途が無いでないか。憲政會でも、今回の事で考へ直し、更に發展したならば、何よりの事と考へる。

言ひ方が違つても、大要は此處に在る。之れ強ち拵らへ事でなく、あれやこれやと考へる内、此邊に落着いたのである。

加藤内閣は政友會出の閣員が悉く手を引き、切つても切れぬやうな關係なのが、本來合せ物であつて、必ず離れぬ物と定らぬ。關係は化學的よりも機械的である。幾年か政友會と共にし、

泣きも笑ひもしたが、自ら政友會に加入せぬだけ、運命を之に托するの意なく、何れかと云へば各政黨を操り、自らの位置を安全にし、鞏固にしたいのである。超然内閣が性に合ひ、善くても悪くても、之に傾かうとする。斯かる事に就いて口出したくもあり、口出すべき役柄と思はれる清浦樞相は、成るべく穩に纏めようとし、貴衆兩院の多數の感情を損ねまいとするけれど、何處までも憲政會又は廣義の反對派を押へ付ける必要をも感ぜぬ。圓滑に内閣が更迭し得るならば、前の反對黨が後の政府黨となるべきであるとする。政友會に深い關係ある西園寺侯は、元老として兎角の事を云はず、松方侯に何事も宜しくと云ふ挨拶である。何でも穩かに收拾しようとするのを承知して居る。松方とても必ず政友會の爲めに計るの必要なく、憲政會と特別に違はなくして居り、唯、故障なく運ばうとするには、貴族院の研究會及び公友倶樂部の主なる者、政友會の幹部員と談し合つた所の樣にするに如くはないとする。餘り結構とも思はねど、事を荒立てては宜くないと思ふ。かの一ちまきは何と相談したか。海相加藤男を首相にし、貴族院より閣員を出し、政友會の再び内閣を組織するに便宜を與へようと云ふのが要點となる。

加藤男が首相になるなど、數年前に誰か考へたか。近來兎角首相が世間の豫想を裏切つて飛出して來、前の高橋もさうであり、今の加藤もさうである。首相は個性を以て所動するものでなく、時代の必要に應じて備へ付けられるのであつて、時勢の變遷と共に、何時何處から何者を引出して來ぬと限らぬ。勢は國内のみにて決せず、世界の趨勢で決する。世界戰役が勃發し、米國が國際間に頭を出し、海軍縮少を協定するなど、日本で全く豫想しなかつた所に屬し、豫想しなくても勢の迫る所捨て置かれず、海軍の事ならば、海相自ら事に當るに越した事なく、そこで首席全權委員として出席し、出席したので跡始末の必要あり、何かにつけて加藤を首相にするが宜からうと云ふ事になる。加藤男は大隈内閣に海相となり、寺内内閣に留任し、引續いて原内閣、高橋内閣に留任したのであり、海軍に關する事の外少しの邪魔にならず、利あつて害なき所、何よりも重寶である。加藤自ら事理を察することも明敏、何でも能く分り、人が詳しく説明せねば分らぬと違ふ。人が少しく口を切れば、何の意であるかを知り、知らぬ顏をしても知つて居る。分りの能い事は同僚の間に之れ程なのが少からう。

併し海軍より出でて首相となつたので、山本伯以後、海軍第

一の人物かと云へば、さうでなく、さうでない所が、首相となるに最も與つて居る。彼は東郷司令長官の下に參謀長となり、物の美事に日本海に大捷利を得、水も洩らさぬ手際、天晴れと云へるが、水も洩らさぬ手際が必ず人物の傑出したのを示さぬ。彼は容易に自ら判斷を下さず、次から次と關係者をして意見を述べしめ、多數の承知しさうな所で纏めるの骨を得て居る。頭腦が明敏でなくて出來ぬ事なれど、已れ一人にて決定せねばなら場合、何程の力を顯はすであらうか。冷靜にして沈着、詳かに周圍の事情を知るのは、日露戰役の如きに必要であつても、亂世に腕を振ふに至り、何の結果とならうか。

日露戰役で幸不幸がいろ〳〵ある。東郷大將が早く戰死し、之に代るべき者の順番が定まつて居り、大將が無難に成功したが爲め、順番に出づべき者が全く聞えず、早く豫備になつて居る。島村元帥の如き、日本海で加藤男のやうな譯に行かなんだかも知れぬ。然し海軍縮少せず、世界で戰はねばならぬ場合、大いなる力を顯はすでなからうか。政治家としても、加藤以上に活躍しさうであるが、さう見える所が首相のお鉢を廻されぬ所以でないか。面倒な事は御免を蒙るとの調子では、海相になれず、延いて首相になるい機會が無い。豪傑肌の人物は屬僚本位の場所に不向きである。加藤內閣でカンラカンラ豪傑笑ひするのは誰か。一二之れ有るにしても、先づ靜かに落着くのを特長とするであらう。

加藤首相は物の解りが能く、海軍のみでなく、他省の事も解り、人の氣分及び心持まで解り、それで貴衆兩院の多數を纏め、改造非改造の騷ぎなど、夢にも見る事が無からう。併し已れ自ら何を爲すであらうか。閣員の選定は自らの意に出でたか、他人の献立した所が多いか。何處から誰を推薦し來ても、之は何々の關係で必要と見る事が早いにしても、要するに人を纏めるに長じて居る。前には政友會から閣員を出し、それはそれで結構、後には研究、公友から閣員を出し、それも亦結構、內閣は此の如きものと認めて居らう。政友會出の原首相及び高橋首相と違ふ所は、寺內伯と同じく知識に重きを措く所である。原高橋は學者の小理屈に困る、餘計な事に手數がかゝり、それで何の有難い事も無いとするが、軍人育ちは几帳面に理屈を述べるのを好み、自らは之を聞くを好まずとも、關係事項に就いて十分に知識を具へ、好加減の事をする事はなからうと云ふ所で安心する。已れ自ら士官學校又は兵學校で勉強し、帝大の秀才で、後にも上官及び同僚の覺え目出度かつたと云ふのを好む。何處の馬の骨か知れず、働き者らしいので引上げると云ふやうな事

を好まぬ。恐毛を震つて嫌やがる。
其處で閣員中實際に仕事しさうなものは、學者らしい人達であり、中にも看板附きの學者を要地に置く。學者にもいろ〳〵あり、隨分詭辯の强いのもあるけれど、一般に比較的冷靜にして沈着、事ある毎に愼思熟慮し、急に判斷を下さぬ。あゝでもないかうでもないで終つては、困り、學者に有勝ちの通弊とするけれど、通常に判斷して與れればそれで可いとし、水野氏が内相となり、岡野氏が法相となり、問題多き内政及び法制法律を間違なくやつて行けようと考へる。貴衆兩院で藪から棒の質問が出ても、受け答へに大丈夫らしく心得て居る。日本で先進後進の順序が可なり嚴しく、師弟の間と云ふ事も重きを置かれる。大學出の學者は好んで或る敎授の敎を受けたのでなく、否でも應でも受けねばならず、師弟の關係と云ふても、昔の私塾と違ふに拘らず、敎を受けた先生に從ふのを禮儀とする事になつて居る。其點で岡野水野荒井市來等諸氏は纒りが好く、互に相扶け合ふ所があらう。

併しそれが師弟の關係で内閣に列したかと云へば、さうでなく、各々別に事情があり、或る點に於て代表する所がある。市來氏の藏相たるが如き、松方侯及び薩派の後援する所に係る。前次官神野氏は市來氏と同期生であり、席順も上に居り、藏相として其儘に昇進させて宜さゝうなものであつて、其處が事情の伏在する所、何でも市來でなければならぬとし、神野も次官として續ける譯に行かず、直ちに辭職した。

帝大出の藏相は、前に若槻氏があり、次いで勝田氏があり、今また市來氏があり、何れも財政經濟に通じ、素人の財政家ぶると違ふやうであるけれど、同程度の財政家は相應の數に上ると云はねばならぬ。明治維新以後一廉の政治家があり、一廉の軍人があるけれど、一廉の財政家があると云へるか何うか。松方侯があるでないかと云ひ、現に侯の重きを爲すのが、其の故であつても、果して伊藤大隈等の政治と同列に云へるか。不換紙幣の始末を付けたのは、著しい功とするも、彼の場合に彼の如き事をするのは、誰でも爲す所でないか。其下に居り、日銀創設に與つた富田氏は、何かと云へば曰つた、松方が財政を知りもせずに、財政家顏するに困ると。富田が米國で知識を得た所から觀れば、さう思はれたらう。それから見れば、帝大出身で大藏省に育つた連中は、確に知識を積み、財政家と稱するに足る。而して彼の如きが財政家であれば、一事務家と選ぶ所ないでないか。財政通は少いとせぬが、財政家は他人の惑ふ所で特殊の腕を振ひ、疑を解く所なくてならぬ。不景氣が好いか物

價下落が好いかとは、人の憂ふ所、通貨收縮し物價が下落しても事業が興らず、不景氣になつて仕様が無いでないかと云ふが、さらば捨てゝ置かうと云ふのか何うか。物價騰貴し、日本の貨物が次第に排斥され、獨逸の模造品が日本まで入込んで來るのは何と云ふ事か。此邊で幾人財政家が居つても手を着ける事が出來ぬ。帝大出の財政家なんか仕方なく、財政は天才を持つと云ふても、高橋子が藏相として何の爲す所あるか。學者も不學者も、財政家として成功したのが無いと云ふべきでないか。唯官職に追はれ、世間の景氣不景氣で浮きつ沈みつするならば、別段の事はない。市來氏は松方侯を背景とし、新に手腕を伸ばさうとするのであつて、財政に重きを置くべき時代、財政家として表はれ得るか何うか。荒井農相と共に帝國の後に發展すべき途を切り開くの任に居るが、例により例の如き始末に終りはせぬか。理解に於いて他に劣らず、いよ／＼談合し着手するに於て、兎角力の足らぬ憾みがある。寺内内閣で仲小路農相が青筋立ち、増貫を叱つた事があり、それで何程の影響なく、増貫は近頃病氣で死に、何よりも自然の力の強きを示して居る。人力の及ぶ所は大抵さう云ふものとして諦むべきか。

現内閣員の多くは帝大出身であつて、慶大塾長鎌田氏を文相にした所、帝大と慶大との調合と云ふべき所か。恰かも官僚が政友會と結托し、憲政會を排斥するが如く、帝大が慶大と結び、早大を押退ける形がある。早大のみでなく、他にも加へぬのがあると云ひ得ようが、早大はうまく慶大にしてやられたと見られぬでない。先に高田氏が文相、今鎌田氏が文相、此處にも早大慶大の競爭ありと云ふべきか。

併し鎌田氏が文相となつたのは、得策か何うか。一度なるも何かに付けて好いと云ふ所もあらう。文相は何うしても首相に劣り、慶應の塾長たる者が、加藤雄の下に附くと云ふのが、估券に關せぬと云へるか。福澤翁も一度府會に出でゝ失敗し、後完く人爵を享けず、塾の位置を高めた。鎌田氏は既にいろ／＼の官公職を帶び、文相も其一つと云へば云ふものの、遂に疑を免かれる事が出來ぬ。それとも文相となつたのを幸ひ、政友會に入り、高橋子に代つて總裁となり、次の内閣を組織し得ぬであらうか。同鄉の策士岡崎氏が控へて居り、全く空想でもないやうである。總裁として高橋より宜からうと思はれる。

前内閣に野田氏が遞相として、遞信の事務よりも調停役に當つて居り、現内閣で前田子が同樣の位置に立つて居る。前田子も帝大出の一名ながら、如何にも才子肌であり、一躍入閣した

處、近年の成功者たるを失はぬ。弟は百萬石の養子となり、舊一萬石が之と較べものにならぬのに、百萬石で少將となるのに間があり、自ら押しも押されもせぬ大臣であるなど、運命の神はさま〳〵の事をする。

大木伯が鐵相となつたのは、元田氏よりも重きを置かれての事でありながら、いくらか類似の役目を宛がはれたのでないか。鐵道は利益問題で運動の烈しい處であり、それに割合に公平で、悪い事を爲す、と云ふて全く融通が利かぬでなく、あれなら宜からうと云ふやうな所があつたでないか。遞信にしても鐵道にしても、國家社會に重要な職務を帶びつゝ、大臣が眞面目に從事しようとせぬ憾がある。野田時代に到る處郵便物の小言があり、遲着したり紛失したり、言語道斷、それで遞相が大口開いて笑ひ、無事に過ぎた。國務大臣とは何を爲す者か、妙な者でないかと疑ふ者は隨分疑つた。眞面目に働からうとしては反對が起り、面倒になる。七分三分の兼ね合ひ、洒落を云ふて通れば無事太平である。關係者の心得の惡いのか、世間の風潮が斯くするのであるか。加藤内閣は一應頗る眞面目に國務を念とするが如くなれど、寺内内閣を見れば、眞面目も餘り當てにならぬ。唯、今のところ加藤が寺内より優ると思はれるが、それだけ失望を招かぬやうに用心せねばならぬ。

何と云ふても年代は次第に進み、文官は明治三十年代の帝大出身、局長は四十年代となり、それに取り殘された者は大器晩成、後に飛躍せぬと限らぬけれど、多數は運命の定まつたものと觀念せねばならぬ。一時二十八九年の者が最も榮達したと云はれ、今もさうであつても、此處で次官にならねば、官を去るの日が遠くない。後進生が呼び出されるやうになつては、官職に居れば居れるにせよ、男の意地の無い者となる。同期生が次官となり、局長となり、五年間待つて居るのは宜い。尚ほ其位に續けては、厄介物扱ひにされる。其處は官職に就かず、政黨に居れば、有象無象視されても、太平樂を並べ立てる事が出來る。衆議院に老人が多く、容易に引退せぬのも、忘れ兼ねる所あるによる。勅參が辭職して、しみ〳〵官吏の有難味を知り、内閣の壽命が長かつたならと思ふが、更に年數を經て考へれば、強ちさうでない事を知らう。花一時人一時、當分貴族院のある部分は賑かであるが、數年後に何狀であるかを、察する者があるか何うか。

想華

海

水野廣德

海を書く迄

本誌から海に關する執筆を望まれたのは昨年の秋頃であつた。當時自分としては之を書くべき何等の想案も自信も無かつたので一應辭退した。併し出來れば何か書いて見度いと云ふ意思が此時始めて動いた。其後本誌から更に、再三の依囑を受けたので、つい斷り切れずして軍人御勅論を忘れ「をぼろ氣なる事を諾ないて」遂に「由なき關係を」結んでしまつた。

扨て愈筆を執らうとすれば、アノ平凡を裝ふて而かも變幻極まりなき海に對して、何處に最初のペンを卸すべきか、殆んど目標とする處を發見しない。机に向つて靜思すれば、心に浮ぶは唯洋々たる萬頃の蒼波のみである。椅子に横つて瞑想すれば、眼に映つるは唯澎湃として荒れ狂ふ怒濤のみである。此處ぞと思ひて折角入れたるペンの浮標は、忽ちにして深海に沈み去り、激浪に押し流され、原稿紙一枚書かぬ間に筆は暗礁に乘り上げて仕舞ふ、幾たびか筆を投じ、

幾たびか原稿を破り、今更ながら臆氣なることを諾ないたるを悔ゆれど及ばず、何が何でも書かねばならぬ日となつた。

滿二十年に亘る自分の海軍生活は半分以上陸上に過ごしたので、海軍人々として海上生活に關する經驗と知識とは頗る貧弱なるものである。夫でも尙ほ日本全岸は勿論、韓支沿岸は一通り巡航した。其他印度洋も斜斷した。太西洋も縱に横に航破した。太平洋も二度三度横ぎつた。旅行嫌ひな日本人の中では、比較的多くの親しみを海に有せるものと云へるであらうと思ふ。

併しながら山に棲む者山を知らずで、海に住む者必ずしも海を知れる譯ではない。人は其道に依つて詳しと云ふが、海上を家とする漁師は唯季節を測つて魚の集まる處を知れるにぎない。雲の歩みを見ては波の去來を察するに過ぎない。航海を職とせる船員は唯天象を測つて船位を定むるに過ぎない。海圖に依つて暗礁の所在を知れるに過ぎない。殊に狎るれば貴とからずとかで、日夜海上に職を執り業を營む者に取りては、陸上人が見て以て美とし壯とする、森漫たる大海も徒らに航海の長きを恨ましむる樣子である。澎湃たる激浪の豪觀も却つて航海の苦に泣かしむる地獄の繪である。海に對して何等の感興も何等の愛慕も有するものでない。

都人士の見度がる海上の日出も、曉の夢を叩き起さるゝ朝當番の船員に取りては、眠氣覺ましの澁茶を載せた朱盆程にも難有くはない。詩人の憬がるゝ船上の明月も、寢不足の夜直に疲れし海員に取りては、夜食を盛れる西洋皿の方が難有いであらう。持てば愛し持たねば欲しきは獨り金と弓矢のみかはじや。西洋の或旅行家は、七日以上一所に滯在すれば最早や其地の旅行記を書くの資格なしと言つたが、多くの眞理を含んで居ると思ふ。之に從へば海上生活者は船を書く資格はあるかも知れぬが、海を書くべき資格は無いと云ふべきである。自分の如きも當然無資格者の一人である。

前後約十年間に於ける海上生活を追想すれば、今日尙ほ記憶に存するものは、初めて遠洋航海の途に上りし時、船暈に惱まされてヘド吐き〱航海術の計算に苦しみたることや、北太平洋の荒海にかづられつゝ檣上作業に膽を冷やしたることや、初めて外國の港に入りて、其の施設の雄大に目を驚やかしたることや、內地沿岸津々浦々を巡航して奇俗珍習に驚きたること位に過ぎない。而かも是等の多くも亦、海上生活に關する實驗實歷に過ぎずして海其ものに對する主觀的感想ではない。

海の初感

初めて意識的に海を見たのは、八九歲位の頃小學校の遠足會の時であつた。海岸より僅に一里半を距つる地に住みながら、まだ汽車も電車も無く海水浴と云ふ詞さへ知らざりし時代のことゝて、小供心に海とは遠き世界のことの如く思はれた。唯學校の先生の說明に依り、夏毎に泳ぎに行く泥池の大きなもの位と朧氣に想像して居つた。夫にしても每日の魚市場で見る大きな美しい鯛やはまちが泳いだり、妙な形をした蠑螺や鮑が匍ひ廻はる海とはどんなに面白い處であらう。蒸氣(船)がゴヘダを挾ひて十時間も走り續ける海とはどんなに廣い所であらう。などゝ種々の憬れと怪しみとを以て海なるものを心の中に描いて居つた。濱から來る魚屋に海の譯を尋ねると、剽輕な魚屋は好い氣になつて、天氣の良い日に海の底を瞰くと龍宮の門が見へるとか、夜明方に濱邊に出て見ると鮹が砂原で相撲を取つて居るとか、小供の好奇心を唆る樣な出鱈目を談して聞かせた。海を見たい、海へ行きたいと云ふ思は常に心の奧に潛んで居つた。

生れて初めて學校の遠足會に行くと云ふ歡びと、日頃憬れたる海を見ると云ふ樂みとに、遠足の二三日前から氣が落ち付かず、前日には「照る〱坊主」を作つて木の枝に縛り付けたり、草鞋の穿ち方を稽古したりで、一里半の遠足にお

江戸上りの様な騒ぎ方じやと笑はれた。愈當日になると何時になく早くから目が覺めた。何う云ふ譯か、白八等の町では此頃雨戸のある家は數なかつた。障子一枚明けると空にはまた星が見へて居る。天氣は上等じや。梅干を握り込んだ結びの辨當を斜に背負ひ、草鞋の音輕く學校に馳け付けた。

列を作つて威勢よく校門を出た。明治二十年の頃の田舍の小學校では、教師にも生徒にも洋服を着用せる者は皆無であつた。靴さへも極めて珍らしかつた。袴も着けず帽子などは無論被らない。へこ帶が漸く流行り始めた頃で、白木綿や白金巾を幅廣に卷くことが當時のハイカラであつた。生徒の大部分は小倉の角帶を後で「貝の口」に結び、着物はぺら〳〵と袖も裾も長かつた。シヤツやヅボン下などは未だ流行らない。頭はクリ〳〵坊主に刷りこくるか、家庭刈の伊賀栗ダンダラが多かつた。今の東京の生徒の風俗に較べると實に隔世の感がある。

町を出ると列は亂れた。生徒は教師の制止も聞かず、畦や畠を子犬の如く飛び廻つた。一人の生徒が誤つて小川に轉げ込み、「お辨當が濡れたあ」と泣き出したのが今に目に付いて居る。一里ばかり進んで稍や小高き坂道に登ると、前面に廣々とした水が松暇の枝の間から白く光つて見へた。先生から「あれが海じや」と教へられると、生徒は「海！海！」と手を叩いて歡んだ。今なら「萬歳！」と叫ぶところであらう。之が自分として海の初見參である。

魚市で名高き海濱の町を過ぎて海岸に出た。此の町は自分の生地で二歳まで此處で育つたことを豫て聞ゐて居たので、自分の生れた家はアレであらうか、コレであらうかと總ての家に對して一種の懐かしさと一種の物足らなさとを感じた。海岸には白い細い砂がカナリ長く連つて居る。此邊で毎朝鯖が相撲を取るのだなと思つた。此の日は風が強くて波は稍や高かつた。無數の浪が追つ懸け〳〵、岸の一定の場所に達すると、怪物の如くニユツト立ち上つて逆卷くのが不思議でならなかつた。波の根本を透かして見たが龍宮の門は見へない。先生に龍宮の入口は何處かと尋ねたが、先生は唯

笑ふばかりで教へて呉れなかつた。魚の泳いで居るのも、螃蟝の匍つて居るのも、無論見ることが出來ず、魚屋から得た海の豫備知識は何の役にも立たなかつた。

一丁四方の水泳池と三十間ばかりの川の外見たことの無い目には、海は非常に廣い大きいものと思はれた。地球の球形たることをまだ教はらぬ兒童通有の疑は、海の行き詰まりは何うなつて居るかと云ふことである。この問題に關して五六の生徒の間に砂原で討論會が始まつた。或るものは「海の行き詰まりは崖で、其の先きが龍宮である」と云つた。或る者は「海の向ふには大きな高い土手があつて水を堰き止めて居る」と云つた。又或る生徒は兄から聞き覺への「地球は球形であるから此處から眞直に西に向ひて行けば再び此處に歸つて來る」と云つた。之に對しては「地球が球形なら下側の水は落ちて仕舞ふじやないか」との質問が出た。引力の理を知らぬ物識生徒は忽ち答辯に窮し、海の先は遂に判らずに仕舞つた。

海の初印象は、海の廣いこと、浪の高くて音の烈しいこと、水の碧いこと位の外、何物をも心に殘さなかつたであらう。

其後幾年かの後、瀨戸内には珍らしき大海嘯が起つて、海濱の一二の村を全滅せしめた。眞夜中頃の出來事とて、怒濤に呑まれて行衛を失した村民も尠くなかつた。幸に生き殘つた者も家財田畑悉く流失して忽ち生計の途を失ひ、幾多の悲劇哀話が傳へられた。親を亡ひたる寄る邊なき男女の孤兒は、群を成して自分等の住める町に流れ込んで來た。社會政策尚ほ未だ發達せず、救護機關など皆無なりし時代のこととて、此等不運なる兒童の行くべき道は乞食の外は無かつた。自分等の通學する道路の檐下にも、自分と同じ位な年頃の男女の兒童が數人群居して居つた。乞食御免の世の中とて警察も干渉せねば、町の人も知らぬ顏をして居る。彼等は莚蓆一枚敷くではなく、石のデコボコしたる道の上に

或は据はり或は轉つて居た。顔も手も泥と垢とに塗れて眞つ黒になつて居る。髪はぼう〳〵と亂れ、着物はボロ〳〵に破れ、頭にも着物にも、虱と虱の卵とが氣味惡るい程に食ひ付いて居る。糞便は其場に垂れ流しで、犬猫よりも尙ほ悲慘な狀態である。常に食物を與ふる特志家も無いので、彼等は日に〳〵色は靑褪め體は瘠せ細つた。生徒中の惡戯者は學校の往復に、棒切を以て此の哀れなる乞食を意地目たり、時には甚だしき侮辱を加へたりした。併し彼等には抵抗の勇氣さへも無かつた。或る一人の生徒が棒の先に糞を付けて、乞食の鼻の先に突き付け、之を食つたら豆をヤルと袂から二三粒の煎豆を出して見せた。年長の一人の乞食は豆の慾しさに、妙な顔をしながら棒先を舐めた。見て居る生徒等は一時にドツと囃した。前の生徒は一粒の豆を乞食に投げ與へた。乞食はサモ甘さうにカリ〳〵と咬んだ。生徒は更に棒先に糞を付け、乞食に嘗めさしては一粒づゝ豆を投げた。遂には乞食の間に嘗め方の競爭が始まつた。世に是程の惡戯と侮辱と悲哀と屈辱とがあるであらうか。傍で見て居る大人も別に意に留めもせず生徒達と一所になつて笑つて居た。三十余年前の田舍の町では、斯んな事が商家櫛比の道端で、平氣で行はれ且つ見られたのである。之を思ふと今の社會は進まぬ様でも大なる進歩を爲して居ることを祝さゞるを得ない。

學校への毎日の往返に此の浅ましき哀れなる乞食の姿を見て、之が海嘯の置土産なるを思ふ時、海なるものに對して大なる恐怖と強き憎惡とを感せずには居られなかつた。其後科學知識を修得するに從ひ、海に對して最早や何等の好奇的興味を有せざるに至つた。唯ロビンソン漂流記や浮城物語を讀んで、海上生活の壯快をば僅に心に呼び起したるに過ぎない。

海を尋ねて

自分は今銚子犬吠岬の突端に立つて居る。

海の記憶を呼び起すべく、海の記の糸口を手繰り出すべく、初め相模の海を見た。砂白き波打際に立つて沖合を眺めると、右には伊豆の山峰高く連なり、左には相模の丘陵緩くうねり、末は次第に薄れていつしか霞に消へて居る。豆相兩半島の間には相模灘が紺碧の色を湛へて鮮かなる水線を劃し、伊豆大島が藐乎として有るか無きかに浮んで居る。波は緩く岸を洗ふて白きレースの笹縁をば、畫いては消し、消しては又畫いて居る。唯聲ばかりは寥々として之でも太平洋の浪であることを誇らかに叫んでゐる。景色としては優美である。海水浴には適當かも知れぬ。併しながら海としての大がない。波としての壯がない。

大海の氣に接する爲め、相模灣を去つて總房の外海に向ひ、先づ銚子に行つた。兩國驛より汽車行約三時間半。まだ三月の末ながら下總の野には既に櫻の滿開である、沿道の畠、麥の葉は青く秀てゝ菜の花は黄金を布ひて居る。松林に落葉掻く老媼畦に若菜摘む乙女など、のんびりとした春の田園氣分が漂ふて居る、時候外づれの海見物など氣が利かない、我に一頃の田あらば、筆を折つて鍬を執り、机を砕いて土に据はらんものをなどの氣持もする。

列車の中では燈臺見學の小學校生徒團が、ベチヤ／＼と百舌鳥の如く饒舌り、ネンネコに包まれた隣席の赤ん坊がギヤア／＼と泣き喚めく。二等列車はガランとして殆んど丸空なるに反し、三等は滿員過員で座席さへ無く立つて居る人も澤山ある。赤の恐怖は露國ばかりではないと思はれた。貧乏人は斯く迄虐待せねば國家の威信に關するものかと、自由平等の大海見物に不似合なる階級意識とかゞ濃厚に强烈に頭を擡げて來る。向へ側の二人の若い人が汽車社會觀を語り初めた。耳を澄まして聞く。

Ａ　僕等プロレタリヤは生れて以來二等などには乘つたことが無いから、賃金を知る必要も認めないが、一體二等の乘

車賃は三等の何倍だい。

B　君も社會研究家にも似合はない常識缺乏じやないか、二等は三等の二倍、一等は三倍ぐらゐのことは、此處に居る小學校の生徒でも知つて居るよ

A　君は中々博識じや、そこで次の問題は前の二等と此の三等と、どちらが大きいだろか。

B　此頃の中學校や女學校の入學試驗じやあるまいし、馬鹿な事聞くなよ。そんな事なら車掌に聞くが宜い。

A　まアさう怒るな、之が僕の結論に達する前提じや。僕は同じ大さじやと思ふがね

B　まアさうだらうよ

A　同じだとして、此の三等には二等の何倍の客が乘つて居るだらう。僕は少くも五倍はあると思ふが

B　六倍以上乘つて居るだらう

A　假りに五倍としてもじや、鐵道省の儲ける金高は三等の方が二等の二倍半になる譯じやね。すると收入の點より云へば三等の方が二等よりも大切な御得意樣じやないかね、然るに此の大切な御得意樣たる我々三等乘客を遇するに此の設備は何んじや、隨分ひどいではないか。一個人としては二等の方が餘計な賃金を拂つて居らうが、客車全體としては三等の方が二等よりも二倍三倍の賃金を拂つて居るのじや。にも拘はらず收入の少なき二等客車を必要以上に贅澤にして收入の多き三等客車を故意に粗末にするとは、單に社會問題ばかりでなく、利得報酬の經濟學の常則に反して居るではないか。

B　理屈は正に君の言ふ通りだが、そんな理屈が通ふる世の中なら社會主義なんか起りやせんさ。多數を犧牲にして少數が樂をしようと云ふのが、所謂善良なる風俗、社會の根本組織と云ふんだから仕方がない。一等二等に乘つて樂な旅

行をしようと思やア免れて耻無き程度で金を儲けるさ。

A　要するに鐵道經濟の上より見ると、一等二等で傲然と大名旅行を氣取る先生等は、我々赤切符連中が硬い腰掛で尻の皮を擂り剝き、押され踏まれて絞り出す苦しき汗と血との恩恵に浴せるものじや、鐵道の役人にも少しは目の……生徒の騷ぎで聞へない。

B……ロハで一等二等に乘れるんだから現在の組織制度が彼等の爲めには最も好都合なのじや。成るべく多くの收入を圖り而かも成る丈……の御機嫌を損せぬ様にするのが今の政治の方針じや。見給へ、文化奬勵の看版掛けた博覽會だつて我々貧乏な腰辨の行く日曜や祭日は態と入場料を高くして居るではないか。

A　博覽會の目的より考へると日曜の如き多數の人の行き得る日には入場料を廉くするのが當り前だと思ふが、僕にはどうしても今の世の中が判らん。人生れて貧乏人となる勿れじや、貧乏人が子を產むのは實際子に對する罪惡じやね。サンガー夫人は矢張り偉い。

B　一體君は物事に對する觀察が正直過ぎるよ、それじや迚ても免れて耻なき程度で金は儲けられんさ、まア俗に云ふ貧乏性ぢやね。君は博覽會なるものゝ目的を誤解して居るのじや、僕の博覽會觀は斯うじや、元來博覽會なるものは敎育事業でも無けりや慈善事業でも無論なく、純然たる營利事業じや、經營者は田舍の人の金を東京に吸ひ取る爲め、出品者は自家商品の廣告の爲めに外ならぬのじや、だから繪葉書一枚買はず蕎麥一杯食はぬ我々貧的の入場は、徒に會場を混雜せしむるに過ぎないので、あまり歡迎すべき御客様じや無いのじや。日曜祭日に入場料の高いのは腰辨輩來る勿れと云ふ制札の代りだと思へば、腹も立たんが行く氣にもならんよ。

旅は學問、汽車は動く學校じやと云ふが、誠にさうである。海見物に來て、汽車社會論や博覽會哲學などを聞こうと

は豫期しなかつた。天下の選良共も何時もロハ切符で一等に納まらずと、偶には赤列車にも乘つて見るが良い。世の中の生きた政治が判かる。

やがて緩やかな利根川の流が松林の間から途切れ〳〵に青い帶の姿を現はす。小學生徒が手を打つて囃やし立てる。初めて見る坂東太郎の稱ある日本第一の利根川、思ひしよりも小さきに失望した。

案内圖に記されたる銚子より犬吠岬に至る遊覽電車は、經營難の爲めとかで廢業し、レールまでも取り外づされて居る。停車場より犬吠岬迄約一里、道坦々として人力車を通ずる。東京より汽車の着く毎に犬吠岬旅館の自家用自動車も迎へに來て居る。

何となく活氣の乏しき而かも何となく落付のある舊き銚子の町を外づるれば、車は松丘麥圃の間を走る。翠松の間に櫻の紅交り、綠麥の中に菜の花の黄を彩つて居る。松林の上に雪白の燈臺が淡藍の空を背景として、輪廓鮮やかにクツキリと峙つ眺めは、天使の如くスが〳〵として氣持が良い。漫々たる太平洋はいつか眼前に展開して、栺の上に白帆を浮べて居る麗らかな春の陽は野一面に柔かき光を投げて居るが、海邊の風は流石にまだ冷たい。

岸頭の感

「左燈臺道」の立石に導かれて別莊地向きの松原を過ぐれば、黃褸々たる枯草の低き阜丘が一丁あまり海中に斗出して居る。岬端に近く白堊の壁に圍まれたる白堊の燈臺が機械塲を立てたる如く獨り淋しく衝つ立つて居る。綠林の頂に半ば姿を現はしたる燈臺の眺めは淸美であつたが、荒涼たる枯草山の上に峙つ石灰色の燈臺は、唯無趣味殺風景と云ふの外はない。前には繪葉書、貝細工など賣る店がある。側には「死ヌ程ノ心配アル人ハ相談ニ來レ」と書いた物騒な建札が

立つて居る。道端には多數の石工が黄色い山の皮を剝ぎ、赤い肉を削り骨とも見ゆる白い石を切り取つてゐる。鎚の音がカチン〳〵と物寂しく響く。

燈臺見學の學校生徒も、遊覽の客も、悉く返へり去つた。あたりには人の姿も見へねば、人の聲も聞へない。三時過ぎの犬吠の岬は淋しい。岬の岩頭に立つて見渡すと、風輕くして沖には波もなく、うねりもなく、漫々たる海は紺碧の色深く、縹渺として萬頃の平を延べて居る。之より東四千八百海里、米國桑港に至る迄一路無礙、片礁の波を遮ぎるものもない。近く白帆の點々たる漁舟の濱に歸へるのであらう。遠く淡煙の模糊たるは汽船の旅に上るのであらう。岬の左に連なる君が濱は砂白く、松青く、灣心には群鷗が眠つて居る。右に續く鳥鳴の濱は岩黑く、波白く、三四の旅館は林を負ひ岸に臨んで簷を連ねて居る。

更に俯して崖下を眺める。崖は左程高くは無けれど、水成岩の軟き岩は波に洗はれ、雨に打たれて、恰も新式軍艦の舳の如く內方に抉ぐられて居る。崖脚には波に磨かれたる大小の圓石が磊々として轉がり、累々として重なつて居る。或は尖れる或は平たき幾多の岩礁は樣々の形を成して岸に近き海中に顯沒する。とろりと凪ぎて動くとも見へぬ沖の波は、岸より一定の距離に近づくと淺き波の畝を作り、急激に岸に向つて襲ひ寄せて來る。同じ場所に第二第三の畝が殆んど一定の間隔を以て作られる。第一の波は進むに從ひて次第に其の深さを增し、遂に猛烈の勢を以て岩を叩き岸を打ち、雪と碎け雪と散りつゝ尙ほも力の限り岸に向つて攻め上ぼる。響は鍠々として雷の如く轟き亘り、犬吠にあらずして獅子吼である。第一の波力盡きて退けば第二の波更に進み、第三第四無限の波は無限に續ひて、寄せては返へし、返へしては寄せ、倦まず疲れず岩と鬪ひ石と爭つて居る。不撓不屈の爭に適ふものは天下唯波あるのみであらう。斯くて千年萬年力めて止まず、遂に頑剛の岩も碎き、偉大の山を削り、以て平等の世界を作らんとして居る。今後百千年、今

自分の立てる犬吠の崖も海底に沈む時が來るであらう。

日本橋の杭を洗ふ水はテームスの波に通ずとは、古き海防論者の言へる平凡なる眞理である。今日犬吠の崖を打つ波は、何時か流れて亞米利加の岸を洗ふであらう。北極に漂ふてオーロラに輝くこともあるであらう、南極に凍つてペンギン鳥の舞踏場ともなるであらう。更に印度洋に燒かれては九天の雲と化し、或はヒマラヤ山上千歳の雪と積つて永久に歸り來らぬもあるであらう。或は富士の高根の雪と降り、溶けて流れて昔は女郎衆の化粧の水、今は水力電氣の動力となつて光と熱とを我に與ふるものもあるであらう。ノアの洪水も此の水である。天神降臨も此の水である。神武天皇が東征の舟師を浮べたるも此の海である。コロンブスが亞米利加を發見したるも此の海である。ネルソンがトラハルガーに佛西聯合艦隊を破つたのも、獨逸潛水艇が千萬噸の商船を沈めたのも、蒙古十萬の屍を呑んだのも、露國婆爾的艦隊の滅んだのも、皆此の海である。嗚呼此の海、嗚呼此の水、古來幾多の海戰、幾多の暴風、幾多の海嘯に依つて、如何に多くの船と人とが海神の祭壇に捧げられたであらうか。今自分の立てる此の崖下の海さえも、戀に破れ、貧に苦しみ、病に惱む幾多不運の人の命を呑んだことであらうと思ふ。

更に考へると、八八艦隊の建造に國民の膏血を絞られんとしたのも此の海あるが爲めである。日本が三千年間「萬世一系」の誇りを保ち得たのも此の海ありしが爲めである。英國の版圖に日の沒せざるのも此の海の御蔭である。日本が人口難に苦しむのも此の海ありし禍である。海は萬人に對して公平である。萬物に對して無私である。何物をも抱擁すると共に、何物にも獨占せられない。魚は來つて其の棲むに委せ、水は注いで其の入るに委せて居る。英國は海を利用して其の大を爲し、日本は海を害視して自ら狹くした。

嘗て人生の不可解を歎じ、巖頭の感を遺して華嚴の瀧に投身したる青年哲人があつた。自分は今此の岸頭に立つて海

の偉大を眺め、海の神秘を想ひ、故人に眞似て岸頭の感がある。

汪洋たる哉大海、五洲を包み、兩極を連ね、環流して盡きず。船之によつて浮び、魚之に依つて棲む。浩蕩たる哉大海、百川を吸ひ、千河を吞み、清濁を擇ばず。水之に依つて漑ぎ、地之に依つて實る。其の靜かなるや、萬頃一碧、輕舸駛り、閑鷗眠り、洋々として和氣に滿つ。其の動くや、怒濤滔天、巨船を覆へし、堅巖を碎き、斷々として猛威を振ふ。騰つては雲となり、乾いては鹽を殘す。雨之が爲めに灑ぎ、人之が爲めに生く。干滿時を違へず、環流軌を誤まらず、晝夜休まず、終歳憩はず、汲々營々竟に求むる處を見ず。大なる哉海、偉なる哉海。

人間六尺の軀を稀とし、百歳の壽を珍とす。而かも尙ほ齷齪として利を爭ひ、屑々として名を追ふ。微なる哉人間、短なる哉人生、小なる哉人心。逝いて海の懷に抱かれんか。

日は次第に傾いて波の色は益々濃くなる。漁舟は網を收め艪を揃へて勇ましく濱邊を指して漕ぎ去る。發動船は滿紫の煙を吐きつゝ沖合より歸へり來る。獨り波ばかりは倦みもせず、飽きもせず、疲れもせず、休みもせず、規則正しく岩を打ち岸を嚙んで居る

漁村の夕

陽は後の森の松が枝の下に落ちた。濃紺の海の色は徐々に暗碧に深みつゝある。夕餉の薪を焚く靑い煙は、こゝかしこ低いソギ葺の屋根から靜かに立ち上つて居る。村は太平洋の岸に濱し、五六十の漁家が雜然として連つて居る。家の

多くは荒壁に節柱、屋根には瓦の代りに石コロが置き並べてある。塀とは名のみで、石や岩を唯無造作に低く積み重ねたるばかりである。石くれ立つた狭ま道路の傍には下水の水が、ドロリとして青黒く泡立つて居る。家々の庭先や椽側には目刺の束が砂埃を浴びて、筵の上に干されてある。魚の腐つた肥料の様な臭氣がプーンと鼻を衝く。恰かも朝鮮や支那の田舍村を觀るの思がする。

鳥居ばかり目に付く村の宮の廣場には、五六歳から十歳位の穢ない服裝をした男女の兒童が亂暴た遊戯に耽つて居る。彼等の三分の一位は鼻汁を垂らした子供を小さき背に括り付けられて居る。村は貧しくとも繁殖力には富めるを思はしめる。洋服姿の旅人を見て、恰かも侵入者に對するが如き一種の恐怖と反抗との眼を以て、トラホームに爛れたる彼等の目を見張る。旅人が行き過ぎると、後から意味の判らぬ嘲笑的の言を放つてワイ／＼と囃し立てる。

石屋堂々空を摩し、人車絡繹道を埋むる東京より汽車程僅に四時間にして、此の大古式漁村のあるを思へば、日本の文化とかもまだ玄關の飾りに過ぎざることを感ぜしめる。

後ろには松林の丘を負ひ、前は直に海に臨める此村には、一莖の麥、一穂の米を作る耕地だに見られない。村の生活は全く海に依つて支へられて居る。漁村の夕は一日の中最も活氣のある時である。朝、村人に送くられて濱を出でたる漁舟は、今日一日の業を終へて今しも我が村指して漕ぎ歸つた。大漁の驗か、漁夫の漕ぐ艪には力があり掛け聲は賑やかである。

漁師は其日の舟出が生別れである。いつ不時の暴風に襲はれて、魚漁る身が却つて魚の餌食となるかも知れない。殊に風相險惡なる日本の外海には、時を定めず季を撰ばず屢突風が襲來する。

青く晴れ渡りたる天の一方に一株の浮雲が現はれた。沖に出たる漁舟は「ソレ風雲！」と網を收めて艪を返へす暇もな

く雲は恰かも吸取紙にインキを滴らしたるが如く、見る〳〵廣がり、見る〳〵蔓こり、早や半天を掩ふた。緩きうねりがゆら〳〵と先づ舟を搖さぶる。風がそよ〳〵と吹ひて來る。苫がばた〳〵と煽ほる。漁師は急ひで甲板を片付け總艣を備へ、腕も折れよと滿身の力を罩めて陸地に向ひ漕ぎ始める。うねりの峰は次第に險はしく、次第に高く、頂には早や白波の冠をさへ被つて居る。風は刻々に力を增して皮さへ剝ぎ取らんばかりである。迎へ風に迎へ波、押せども漕げども舟は次第に沖合に流されて陸の影は遠ざかり行く。

先程までも藍を流せし如く靜かなりし碧の海は忽ちにして怒濤洶湧狂瀾怒號の雪の海と變じた。墨を流がせる黑雲は滿天を掩ふて、大粒の雨は投鎗の勢を以て痛き迄に降り注ぐ。天地晦暝四顧暗澹、紫電の火柱は林の如く荒海の上に立ち閃めき、絕間なき迅雷の轟は激浪の叫と合して、天も碎け海も裂けんばかりである。風は愈吹き募り、波は益荒れ狂ひ、舟も人も唯一呑と打ち込んで來る。互に見失はじと力めし僚舟も、いつしか散り〳〵ばら〳〵となつて邊りに影も見へなくなつた。山の如き怒濤の中に唯獨り木の葉の如く揉まれて居る。艣も、舵も、網も、舟板も、悉く洗ひ流されて、舟は全く水舟となる。仲間の幾人かは早や波に浚はれた。海に育ちて舟を家とする鐵の腕の漁師達も、今は力盡きてアカを汲み出す力もない。せめて屍を遺族にと、體を舟に縛り付け、神を祈つて運を天に委して居る。顚覆したる僚舟が近く傍を流れて行く、生き殘れる二三の人が舟底にしがみ付き、斷末の悲鳴を擧げて居る。

日は暮れた。海は暗い。闇に怒る薄白き波の光が一層物凄い、飢と寒とが犇々と身に逼まる。

造船術如何に發達するも、氣象學如何に進歩するも、漁師ばかりは今も昔も、板子一板地獄の暮しである。幾十艘の漁舟、幾百人の漁夫が一度の暴風に行衞を失すること、年々歲々絕ゆることはない。外海に濱せる漁村を訪へば之等、犧牲者の遺族は到る處に見出さられる。漁師の生活は不斷の戰場である。而かも其の戰場は千尋の底の海である。其の

敵は不可測の風である。不可抗の波である。凡そ如何なる職業にも多少の危險はある、若干の苦痛はある。併し其の危險たるや、多くは人爲的である。其の苦痛たるや、多くは肉體的である、精神的である。然るに漁師の危險と苦痛とは天災的である、生命的である。彼等の境遇に向つて同情すると共に、彼等の犧牲に依つて穫られたる一匹の鰛に對しても感謝せざるを得ない。

海靜かなれ、漁豐かなれと心に祈りつゝ、父や子や夫の歸りを待つ村人は、村の漁舟が濱近く歸り來るや、男も女も老いたるも幼きも、家を空にして濱邊に集ひ來る。頭髮の長きと、尻の大なるとに依つて唯僅に女を男と、區別することが出來る。跣足に細帶鐵砲袖、顏は日に燒け手は節くれ立ち、之でも女かと疑はれる。中にはまだ中年ながら齒を染めて居るものもある。笑ふ度に半ば剝げた齒を無作法にむき出す樣四十年前の風俗を思ひ出される。風俗の保守と思想の頑固とは兄弟分である。五十年前の思想を有せる都會人も多き日本に於ては、漁師の妻の御齒黑ばかりを笑ふ譯には行くまい。銀座の町と此の村との比は、銀座の女と此の村の女との比に正に相等しいであらう。女としての裝飾美は無いとしても、人間としての健康美は慥かにある。繁殖率の多いのも無理はない。

竿竹を擔ひだ五十餘りの男が濱邊の石コロに躓いた。側に居た四五人の女達が大きな聲で笑ふ。一人が

「おつさん、何拾つたけー」

男は竿竹を持ち直して女を突く眞似をした。女は二三歩退きながら變なことを言つた。男はイキナリ竿竹を抛り出し

巫山戲くさるな、コノすべた阿魔

と叫びながら砂を掴んで女に投げ付けた。女達が又ワツと騷ひで逃げる。隨分亂暴野卑ではあるが、そこに何等の衒ひ

もなく飾りもなく、天眞爛熳なる處に少しも嫌や味がない。猾茶羅と御世辭とで固めた上邊ばかりの都會人の虚儀と僞善とに比べて、何れに眞の親しみがあるであらう。

此の少さき貧しき村には舟を安全に繫ぐべき防波堤などの設は無い。唯岬端の岩骨が海岸より三十間ばかり尾の如く海中に突出し、不完全ながら低き突堤の形を爲して横に外海の波を堰き止めて居る。村の正面、突堤の內方には岸礁の間に半丁ばかりの砂原がある。此の短かき岩の突堤と狹き砂原こそ、此の村を生みたる母である。漁業の外他に生產の資源なき此の村に取りては、數艘の漁舟こそ村人の生命を繫ぐ唯一の經濟機關である。命の母たる此等の漁舟は每夕村人の總動員に依つて砂濱に引き揚げられる。突堤と砂濱とが無ければ一夜の暴しに舟は粉碎されて仕舞ふのである。山の頂までも薯を植ゑ、谷の底までも麥を作る日本は、僅に三十間の砂濱を便りに五十戶の村を形作つて居る。法律的に窮屈なる日本は土地的にも亦窮屈なる國である。生めよ、殖へよで此の先は何うなるのであらう。併しながら此の村の人は、家は小くとも室は穢くとも、前には太平洋の廣庭を持つて居る。東京の人は唯三坪の庭さへも持ち得ないものが多い。

砂濱の短き斜面の高き所には、舟を捲き上げる爲めに粗末なる轆轤が四五臺作り付けてある。沖より歸りたる漁舟は今轆轤を前にして波打際に漕ぎ寄せられた。シヤツ一枚に捻鉢卷や、褌一つに頰冠りの倔强な漁師が十人ばかり舟から岸に飛び降りた。何れも色は潮風に灼かれて赤銅の如く、手足の肉は隆々と發達して叩けば鐵の響や發せんばかりに男性的筋肉美を顯はして居る。彼等は舟乘特有の敏捷さを以て、足が砂を跳ねるや否や、或るものはテークルの一端を轆轤の横木に引つ懸け、他のものは留守居の村人と一緒になつて、轆轤の腕木に就いた。腕木には女も交つて居る。舟は海との別を惜しむが如く容易に水を離れない。轆轤は重い。テークルの索は竿の如く一直線に緊張する。男のフクラには

力筋が現はれ、女の裾からは赤い布が窺く、色が黑くとも、手は荒くとも、女はどこ迄も女である。

舟を守る漁師は酷吏が罪人を責むるが如く「是でも動かぬか〳〵」と言はぬばかりに、舟を左右に搖さぶる。舟はさも厭やさうにじり〳〵と水を切つて動き始める。舟底には四角に組んだ木の滑り桓が當てがわれる。舟が半分ばかり水を切ると、後は案外輕い。腕木に就ける男と女とがグル〳〵と走馬燈の如く廻はる。やがて波に安全なる場所まで引き揚げられると、四方から支柱を當てゝ其の場に舟を固定する。第二第三第四の舟が同じ手續と同じ努力とを以て順々に引き揚げられる。最後の舟が半分ばかり砂原に上つた時、テークルの索がプツリと切れた。索の切れ口は跳ね返つて一人の男の足を拂つた。皮膚が摺り剝けて血がにじんで居る。舟は進水式の如くズル〳〵と再び海中に辷り降り、一人の漁師は舟と共に水中に引摺り込まれた。四五人の漁師は舟を追うて、シャツの儘海中に飛び込んだ。三月の潮はまだ冷たい。見て居ても寒さうな感じがする。舟は二十間ばかり進んで自然に止まつた。漁師は猿の如く舟に搔き上がるや否や、着物から滴る水を拭ひもやらず、直に櫓櫂を操つて再び岸に漕ぎ寄せ、新規捲き直しを始めた。勇壯、活潑、敏捷、果敢、到底陸上人の企て及ばざる處である。

舟が砂濱に固定せられると、テークルを始末するもの、索を繰るもの、網を干すもの、鍋釜飯櫃を家に運ぶものなど、命令なくして協調的に敏速に行はれる。此の間に今日の收獲が舟から取り出される。大杓を以て船底から汲み出さるゝ鰯はキラ〳〵と光つて、恰も水銀を流すが如く大きな魚笊に注がれる。方々の家から女や子供が笊やバケツを以て魚を貰ひに來る。漁師は誰れ彼れの差別なく、杓の一掬づゝを彼等に與へる。斯くて收獲物を盛れる幾杯かの大笊は棒に擔がれて事務所に運ばれ、此處で處分せられる。

獲物が分たれ、舟の片付が濟むと、村の人も、漁師も、悉く我が家に歸り去る。今まで賑ひたる濱邊には人の影も稀

に、漁舟ばかりが寂し氣に砂原に据つて居る。日は益々沈んで中天の雲が夕照に燃へ始める。遠くの岬は次第に影淡く東の水線はいつしかぼやつて來た。家々の煙は一層濃く屋根の石を燻ぶして居る。漁師達は爐の傍で、健康美の女房や鼻汁を垂らした子供に取り捲かれ、獲り立ての魚の手料理に晝の疲を癒やして居るであらう。

物好きに魚の値を聞くと都會の相場の五分の一位に過ぎない。僅に三四時間の汽車で送るが爲めに價格は忽ち五倍する。漁師が命を掛けて漁る魚の高きは已むを得ないであらう。併し漁師の賣る魚は廉いのである。唯我々の買ふ魚が高いのである。生產者は富まず、消費者は搾られる。肥ゆるものは唯仲介者である。否な仲介者も其の實あまり肥へては居ない。何處に拔穴があるのであらう。

自分が命懸けで獲つた魚が廉からうと、懐手の仲介者が儲けようと、無產の消費者が苦しまうと、そんな事には頓着せず、富貴榮華の慾もなく、お召ダイヤの虛榮もなく、一瓢の飲一簞の食に鼓腹撃壌して人生を樂み得る彼等漁師は誠に幸福である。華盛頓會議も、内閣改造騷ぎも、彼等に取りては棒杭一本折れた程にも感ぜぬであらう。彼等の憂ふる處は唯明日の天氣ばかりである。此の泰平の民を驅つて國家我の迷信者と爲し、權勢の奴隷に仕込む教育なるものも亦一種の禍である。

波の音を後にして村を去らんとすれば、爐に焚く榾の火に照る漁師の顔は赤かつた。

闇の海岸

宿に歸ると、玄關の入口には二ツ星の兵隊サンが、長いのや、短かいのや、黑いのや、赤いのやの靴を十足あまりズラりと並べ、今しも一つの長靴を左手の肩まで衝き込み、舐めんばかりに息を懸けては磨いてゐる。陸軍の士官が泊つて居るのであらう。靴磨きも國民の義務じや。一風呂浴びて室に歸ると、晩飯の膳が据へてある。献立は食事毎に客の好

みに依つて任意に撰ぶことになつて居る。料理の名前を知らぬ悲しさに「何でも宜いから拵つて」との注文に、膳には赤い刺身に、白い燒魚に、カツレツか何かの西洋料理が付いてゐる。先程漁場で見た取り立ての鰯が食ひ度くて溜まらない。背は紺青に輝き、腹は白銀の光を放してるアノ鰯を燒いて食つたら嘸美味からうと思つた。給仕の女中に注文すると「あんな鰯なんか駄目ですよ」と一言の下に撃退せられた。鰯を食ひたがるなんて、定めし下等なお客さんと思つたであらう。田舍では矢張りカツレツ、ビステキの方が持てが良い。

日は暮れた。海の面は薄暗くなつた。空と水との堺が見へなくなつた。燈臺に火がついた。一分間に三同ばかりピカツと光る。客の無き爲めか、外の座敷では早やガラ／＼と雨戸を締めて居る。夕暮の海を眺めると夜の闇が濃墨のにじむが如く沖の方からチリ／＼と極めて緩やかに迫つて來る。春の日は流石に暮れ難い。

夕餉を終へて海岸に出て見る。軟い南風がそよ／＼と吹ひて居る。水線は既に全く闇に鎖された。海の暗くなるに從ひ、燈臺の火は益明るくなる。何れの旅館も雨戸固く締められて燈光一つ洩れて居ない。三月の犬吠岬はまだ淋しい。

僅に暮れ殘る西の空に、鋸の歯を畫きたる松原も今は闇に吸はれた。空には月なく星がまばらに散らばつて居る。潮の光を便りに、海中に突き出でたる岩の鼻に出た。闇は全く天地を包んで、燈臺から投げ出す青白い光ばかりが棒の如く暗空を貫いて居る。波は絶間もなく脚下の岩に激して、燈臺の光がクル／＼と廻つて來る度に、物凄く燐青に輝く。波の音は轟々轟々谺に響ひて晝間よりも一層烈しく鳴りどよんで居る。遙かの沖には夜釣の舟か、數點の漁火が波間に顯滅してゐる。暗澹として魔氣漲ぎる闇の海を詩化する唯一のものである。赤い舷燈をつけた汽船が一隻北に向つて過ぎ去つた。

岩の上に立つて脚下に逆卷く波を見詰めつゝ、不圖犬吠岬の建札を思ひ出した。札は燈臺の横と海岸との二個處に立てゝある。一は「死ス程ノ心配アル方ハ御訪ネ下サイ」、他は「汝等何ぞ死すべけんや神を信じて生きよ」と書いてある。

何れも基督教會で立てたものである。犬吠の波が是まで幾何の人を呑んだかは知らぬが、二個所までも斯樣な札の立てるを見ると、現世の煩悶と苦惱と絕望とのあまり、世を果なみ、世を呪ひ、人を恨み、人を戀ひつゝ、永久の眠を此處に取れる人或は取らんとせる人の尠なからざるを思はしめる。世に死ぬる場所は多い、死ぬる方法も尠くない。然かも死を望む多くの人が犬吠の岬を其の墓場に擇ぶは何故であらう。死を覺悟して此處に來るのか、此處に來て死を誘はれるのか、恐らく豫め覺悟して來るのであらう。併しながら犬吠岬の風物が死を望む人の死の心を鼓舞することは無いであらうか。

其の渺茫として果てしもなき廣き海は煩悶鬱屈せる人々の心を死に招くであらう。其の鬆々として雷の如き波の響は絕望悲觀せる人々の心を死に喚るであらう。其の鬼火の如き青白き燈臺は懊惱苦難せる人々の心を死に導くであらう。犬吠の夜は寂寞である。凄寥である。人間の微を覺り、人生の不可解に悶へ、人事の不如意に泣く時、人は自ら廣大强偉なる海の懷に抱かれたくなるであらう。併しながら犬吠岬の波は荒いが海は淺い。樂に死なうと思ふ人の身を投ぐべき處では無いであらう。

暗黑の海にクル／＼と廻轉する燈臺の光を見ると、旅順の封鎖を思ひ出さずには居られない。日露戰爭の時、水雷艇に乘つて半歲あまり、旅順の封鎖勤務に從事した。晝間の勤務はジャンクの臨撿や陸戰の見物などで幾分心を慰め閑を潰すことも出來る。永き寒き冬の闇夜の海の勤務こそ無味倦怠の極みである。陽が旅順の背面二〇三高地の後に落ちて骨かましき老鐵山の裾が夕霧に煙ぶると、港口を守る四臺の大探照燈が爛々たる眼を開き、毒々しき光焔を吐いてクル／＼と海上を睨め廻はす。味方の隊は夫々己の持場に就く。日は全く暮れて海は烏羽玉の暗となる。黃金山も、白玉山も、老鐵さへも、暗の幕に塞されて目に映ずるものは、敵の探照燈と前統の僚艇に燈す一個の螢火ばかりである。身

を切る如き寒風が小さき檣を掠めて行く。舷に砕ける波の飛沫がパラ〱と外套を打つて凍ふる。前艇の螢火を目標に一定の海區間を波に揺られつ往返警戒する。夜が更ける。體が疲れる。眠くなる。闇の海ほど沈靜で陰凄なるものは無い。

明け方の冬の海は寒さ一しほ厳しい。手足の先は氷の針でつゝかれる如き冷さと痛さとを感ずる。夫でも尚ほ連夜の睡眠不足に立ちながらコクリ〱と、動もすれば前艇の燈火を見失ふて狽てることがある。夜明を待つこと眞に一刻千秋である。ジャンから分捕つた雞が狭い籠の中で、苦しさうに晩を告ぐる聲が恰かも神の福音の如く聞へる。やがて東の空が薄つすりと白む。海の闇は名手の畫きたる墨繪のぼかしの如くいつともなしに薄くなる。前艇の姿がぼんやりと現はれる。山の影が朧ろに浮び出る。精神が俄かに爽快となる。切るが如き寒風も此の時ばかりは心地よく感ぜられる。水線が次第にはつきりする。海の色は黎黒より暗綠に變ずる。敵の探照燈が消へる。味方の軍艦旗が見へる。暗黒の海の寒い、苦しい、眠い勤務を終へて、爽かな朝の氣を吸ふ時の快さは、牢獄を出づる人の思も斯くやと推想される。

夜は全く明け離れた。水面を見渡すと、あちらにも、こちらにも、物騒な機械水雷がポカリ〱と浮びて居る。金米糖の様な形して硝子の角を持つものは敵のである。木椀を倒に浮べた様なのは味方のであらう。毎朝二つ三つは必ず浮んで居る。船が之に當つて硝子の角が破壊するか、或は傾いて電流が完通すると忽ち爆發する仕掛けである。闇の海を當てもなく夜通ふし遊弋しながら、よくも中らぬものであると、毎朝神に感謝する。

毎夜機械水雷の浮流せる闇の海を徘徊しても中らぬ船が多かつた。たつた一度の航海に爆沈された船もあつた。人間萬事天運である。犬吠の荒波に身を沈める人々も、多くは人間としての愚惡にあらずして天運の拙なるに由るのであら

う。世に自殺者は多い。淺草の十二階には金網が張られてある。華嚴の瀧には柵が結ばれてあると云ふ。廣き犬吠岬には網を張ることも、柵を繞らすことも出來ぬであらう。せめて二本の建札の墨の色の消へざらんことを祈るの外はない。

勝浦行

海の淸快は朝である。ほの〳〵と明け渡る大海の靈氣を吸ふ時、心はゆつたりとして而かも氣は自ら引き締められる。海の壯美は日出である。東雲絢爛として錦を織るの下、燃ゆるばかりの紅日輪が悠容として紺靑の波に浮び出づるの大景は、大自然が描く無技巧の大絵畫である。萬象陰秘を去り、萬物生氣を發する海の眞價は朝にある。海の眞美は日出である。

銚子の濱は海の日出を以て著はれて居る。久しく聞き馴れぬ波の響に寢覺め勝なりし曉の夢を破つて翌朝未明に起きた。日の出の美を見んが爲めである。雨戸を明けると、冷たい海の風が爽かに頰を撫でる。言ひ知れぬ磯の香りが鼻を衝く。海は尙ほ薄暗い。前面の巨岩が黑く怪物の如く蟠つて居る。波は岩の根と岸とを打つて白く碎けて居る。徹夜の勤に疲れてか、燈臺の光は鈍い。空は靑い樣で、黑い樣で、晴とも曇とも判らない。消へ殘れる二つ三つの淡い星の光に依つて、ようやく晴と云ふことが想像せられる。

緣側に据つて、徐々に白み行く空と、靑み行く海とを見て居る。空は次第に明るく、東は早や薄い赤味をさへ帶びて來た。併し水線が現はれない。能く見ると、東の海にはミルク色の濛氣が低く靉いて、意地惡く水線を掩ふて居る。日の出は遂に見るを得なかつた。

南總の海を見るべく、銚子を去つて勝浦に向つた。汽車は滿員の客を乘せて悠々緩々牛の如く走る。花見汽車として

は誠に氣が利いて居る。水田麥圃の下總の平野は廣い。今を盛りの櫻は紅く、菜は黃ろい。汽車は博覽會見物の御客さんの話で賑ふ。

○「わしや飛行機とか云ふもん初めて見たがデケーもんで御坐んすの、あれに暴れられちや鳶や烏は溜まりますべい。

×「あいつが火の付いた油を小便の樣に垂れ廻つて敵の町を燒くんじや云ふがの

○「フーン、それで自分の體が燒けねーと云ふが不思議なもんだ

×「隊から歸へつた若い者の話じや、米國とやるとなると、わし等が村は眞つ先にやられるんだから、日本もあいつを澤山作らにやいけねーそうだがの、でも一つに二萬圓もかゝるつて云ふから叶はねへ、其よりやポンプを拵へる方が安上がりじやねへかの

○「恐ろしい世の中になつたもんじや、こんな事は日蓮樣でも御承知ありますべい。

周圍の客がドつと笑ふ。

○「わしや三越いふとこ初めてはへつて見たが、これが又ドエライ景氣なもんですの、村の本祭だつてあんなに澤山の人は出めへが、其が每日だと云ふから驚くじやねへか、ソリヤ何とか言つたの婆さん、汽車の宙吊見たいにツーと獨りで上がる箱があつたじやねーか、矢張り東京は東京でごわすの、

珍々怪々の彼等の會話は其から其へと繋かれて行く。汽車ののろきも苦にならない。之だから赤切符は止められない。別莊地で名高き一宮驛を過ぐると、野は漸く狹まり小松の丘岡が左右に連つて居る。客は驛每に少なくなる。二十人ばかりの消防隊が萬口を擔ぎ小さなポンプを曳いて、レールに沿へる街道を走る。火事じや〳〵と汽車の中が騷ぐ。農夫

が鍬を擔ひて畑から驅け出す。遠くの山の向ふにドス黒い煙が立ち昇つて居る。「——村だらう」「此の風じやチット燒けますべい」「あそこにや水が無へからの」。お百姓らしいのが心配さうに窓から首を突き出して煙を見詰めて居る。短かい隧道を出たり入たり四つ五つ過ぐると、總房線の終點勝浦に着く。豫想よりも繁華な町である。

海の眺望の好い宿へと車夫に命じた。山の手の大きな旅館へ曳き込んだ。風が强くて雨戸を開けることも出來ない。半圓形に入り込んだあまり廣くもない勝浦灣の對岸さへ、砂塵の爲め黄色くかすんで居る。黄塵天を鎖すとは、斯んなのを云ふのであらうと思つた。「此の四五日は毎日夕方になると、斯うなんですよ、ほんとにイヤになつて仕舞ふ」と、女中は縁の砂を拭きながらコボして居る。夜に入ると風は益々烈しい。砂がバラ〱と雨戸を打つ。でも、夕食の勝浦の魚は美味かつた。廣い旅館にタッタ一人の女中は來る度に「忙がしい〱」と云つて居る。

女「昨晩も小湊參詣の團體が百人ばかりも泊まつたので、ちつとも寢ないんですよ。團體さんには一番困ります、四五日の中に又八十人ばかり來るんです。一人じや迚もやり切れません。

「一體小湊と云ふ處には何があるんかね

女「旦那！小湊は日蓮樣の御生れになつた所じやありませんか

此の物識らず奴がと言はんばかりに、ひどくたしなめられた

勝浦の海

翌朝起ると昨夜の風は跡もなく、空はカラリと晴れて朝暾淡く東天を染めて居る。宿の若い衆が表の戸を開くを待ち兼ね、日の出を見る爲め外海の岸に向つた。勝浦の町はまだ寢て居る。海岸に出ると南に面した袋の如き勝浦の灣は、

水静かなること鏡の如く、波はペチヤ／＼と輕く岸を舐めて居る。灣の奥は椿濱と呼び、白砂碧水に連なりて海水浴の好適所たるを思はしめる。對岸の山は薄く朝霧にけぶり、岬端には外海の波が白く騷いで居る。港内には數隻の發動汽船が薄紫の煙を吐いて、機械はステトンテントンとお題目の太鼓の音を立てつゝ今將に漁に出でんとして居る。此處には最早やエツチラ、オツチラ櫓で動く漁舟は一隻も見當らない。漁業の機械化である。同時に資本化である。船頭でなく船長サンとなつた、水主でなく機關士サンとなつた。漁師町を過ぎ、勝手判らぬ狹き山道を辿つて東へ／＼と進む。傾斜急なる草山が巍々として聳へ立ち、一つ越ゆれば又一つ顯はれ、目指す外海の岸は見へない。路傍の叢から不意に飛び立つ小鳥の羽ばたきに驚かされつゝ尚も進めば、海を見ずして八幡の岬の燈臺が見へた。犬吠燈臺と同じ形で同じ色の燈臺が、一本の樹木さへ無き草山の頂に屹然として立つて居る。白い柱の半面は早や朝日の光を受けてキラ／＼と輝いて居る。今日も亦海の日の出を見損つた。酒屋三丁、豆腐屋八丁の山上の一軒家、燈臺守の職も亦寂しいかなである。汗を拭き／＼尚ほ二三の峰を越へた。何れの山も荒涼々たる草山で、殆んど一點の青も無い。荒寥蕭條秋の如く、離々たる草花が纔(わづか)に春の色を表はして居る。岩石磊々たる坂路をうねりくねりて漸く峠に達すれば、眼界忽ち開けて渺茫たる太平洋は眼下に湛へて居る。陽は既に水線を抜くこと十尺、燦々たる金線を碧綠の波に漂はして居る。

外海の波は流石に荒い。南總の岸は誠に險しい。岩は峭直として絶壁を作り、岩層段々織るに似て居る。波は沸溢として白湍を蹴らし濤音轟々雷の如くである。麓には漁村斷續として岸を繞り、沖には多數の發動漁船が木の葉の如く浮んで居る。幾多の岬角は右に左に小灣を抱いて海中に突き出て、遠近色を異にし、高低形を更め、岬端何れも壁立して岸には白波の線を畫いて居る。正に一面の大パノラマである。山頂に立つて海風に汗を干しつゝ大海の氣を滿喫する。心神爽快、意氣豪壯を覺へる。

山を降り岸に沿ふて行けば、道の一側は海に瀕し怒濤洶湧白沫飛んで面を打たんばかりである。一側は山を負ふて僅に一列の人家が立ち連り、大根一本植ゑる畠だもない。此處にも海に依つて生活せる幾村かゞある。波稍や靜かなる入江には漁船を繋ひで鰹に似たる大魚を陸揚げしつゝある。背黑く腹白く體は裂けんばかりに肥へ太つて居る。五六十尾の魚がヅラリと並べられたる有樣は誠に壯觀である。坐ろに海の氣の大なるを思はしめる。

あまり見事さに足を留めて見て居ると、浪に魚の裾模樣を染め出したる派手な「上つ張り」を羽織つた親方らしき老人が、

「東京のお客さん。四五本買つて吳んねえか。二十なら廉いもんじや、今上げたやつだから三日や四日は大丈夫だよ。東京へ持つて歸つて御親戚へでも配つて見ねへ、こいつの作りで熱酣と來ちや溜まらねへからの、

獨りで東京の御客に決めて仕舞つて居る。

「一體二十たあ幾らのことかね、

「ハ……、洋服の旦那にや判らねへ筈じや、二十たア二十〆だ、二圓のことだよ、一貫目二圓じや廉いもんじやねへか、

「一匹がどの位あるかね

「チビで貫五百、デカで二貫位のもんじや、此奴らで一本四圓、五本でタッタ二十圓じや廉いもんじやねへか。東京じや作り一つ幾らするけへ

「サア幾らするかね、五六十錢は取るだらうよ

「五六十錢!、ベラボウに高けへの、五十錢としても一本で四十取りや二十圓じや、わしや危ない漁師やめて東京で刺

身屋始めようかいウアハ……

麗らかな朝日を浴びながら、東京から來た男と土地の漁師との間にこんな談話が交はされた。漁師ならずとも刺身屋が明るくなる。道は千餘曲折、海に沿ふて進むこと一里ばかり、岩は奇壯にして海は雄大、前後の景は刻々に變つて來る。或は孤島洞穴を穿てるものもある。或は孤松險崖に臨れるものもある。斷岸削立、岩礁出沒、波は當つては白沫と碎け、激しては白湍と沸ひて居る。此の間恐らく總房外岸中第一の勝景であらう。縱ひ白砂青松碧水に對するが如き優美閑雅の趣に缺ぐるも、白浪立岩と闘ひ、紅陽蒼波に映ずる處、觀壯烈、景雄渾、男兒豪健の氣を練るに適して居る。

關東の東海岸は犬吠岬を三角形の頂點とし、其の一邊は北上して鹿島灘の波に洗はれつゝ磯で名所の大洗に連つて居る。他の一邊は西角に走つて鰯の產地九十九里濱を經て勝浦に達する。犬吠の西約二里ばかり、北總の丘脈、利根川を櫃ひて太平洋に盡くる處に行部岬がある。此の間を屏風が浦と呼び、斷崖絕壁海波沸ひて眞に屏風を立て連ねたるが如くである。之を過ぐれば砂濱連延として霞に沒し、南總の大東岬に至る迄正味十四里あまり、之ぞ九十九里濱である。呼んで百里とせざる處に一種の面白味がある。二十丁の鎌倉の海岸を七里が濱と稱へ、十四里の此の濱を九十九里と呼ぶ。支那人の白髮三千丈も猥りに笑はれない。

濱は唯一連の砂原にして、漁村點綴、松林疎落、太平洋の波は聲高く岸を打つて居る。前は漂渺たる大海天に接し、片岩の波に激するなく、隻嶼の眼を遮へるものもない。北には行部岬煙よりも淡く、南に大東岬鬼神の如く峙つて居る。孤帆の漁舟は遠近に行き交ひ、網曳く漁師の聲閑かである。

大東岬より勝浦を過ぎて房州小湊に至る迄、岸は外海の荒波に打ち碎かれて、斷崖連立、岬脚亂峙、風無くして波常に怒つて居る。

鯛の浦

信者たると、たらざるとに拘はらず、偕日蓮は佛界の巨人たると同時に日本の偉人たることを認めるに、何人も否ならぬであらう。小湊は日蓮の誕生の地である。其の誕生寺には遠近の參詣者四時絶へず、團體の參詣に勝浦旅館の女中を忙殺せしめて居る。日蓮の罪淺からずである。深山大澤龍蛇を生ずとか、漫々たる大海の宏量と、膨湃たる激浪の意氣とは、巨僧日蓮の性格と靈犀相通ずるの觀がある。偉人の跡を偲びて人と自然との關係を捜ぐるも、海見物として多少の意義なきにあらずと、小湊見物誕生寺參詣を思ひ立つた。勝浦より小湊迄、陸路三里二十六丁、馬車自動車の便があり、海には汽船發動船も通ふて居る。

勝浦より陸路三里の間、海には絶壁の岬角連りに突出して幾多の小灣と狹澳とを擁して居る。道は隧道を出てゝは海岸に沿ひ、海岸を過ぎては隧道に入り、眺望の變化は自動車の速さを憾ましめる。大澤の漁村を過ぐれば「おせんころがし」の嶮がある。總房の國境である。昔おせんと云ふ孝女烈風を冐して草刈中、吹き飛ばされて海中に轉げ落ちたる爲め、此の名ありと傳へられて居る。高さ百尺に餘まる斷崖は殆んど垂直に近き角度を以て直に海面に峙ち、崖の中腹を削つて僅に車を通ずるの一路が鑿たれてある。半ば朽ちたる保護柵の棒杭に縋つて崖下を覗き見れば、數丈の岩壁は板を立てたるが如く、蔓葛まばらに生へて岩膚あらはである。麓の岸には太平洋の怒濤雪を被つて押し寄せ來り、磐根も碎けと勇猛に打ち當つて居る。白沫奔飛、白湍迸沸、正に千軍を襲ひ寄せて萬馬嘶くの觀がある。壯烈凄愴。目も眩み足も慄ふばかりである。今は新道開かれて、物好きなる旅人と樵夫との外こゝを步むものもなく、路傍の木柵徒に朽ちて孝女の名のみ殘つて居る。

「おせんころがし」より小湊まで十餘町の間、道は險崕に沿ふて曲折上下し、幾多の「おせんころがし」がある。太平洋の長風松が枝に嘯き、白浪岬端に激して日に輝いて居る。白帆群れ浮び、汽船時に煙を引ひて走るなど、眺望頗る壯なるも、旅客の運命は運轉手一指の働きに懸れるを思へば、崖を見下ろして冷やりとする。

小湊に着くや先づ誕生寺に詣でた。流石に土地の人達が關東第一と誇る丈ありて、山門祖師堂など結構極めて宏壯である。門内には軍馬三十頭ばかり繋がれ、綠の襟章付けたる兵隊さんが鞍の手入をして居る。士官さんの一群が長劍を鳴らしつゝ山門から出て來る。衆生濟度の寺門に軍馬の嘶とサーベルの響とは何となく不似合の感がする。併し「立正安國」を論じて蒙古退散を叫びたる日蓮の寺には或はふさはしいかも知れぬ。

小湊で見るべきものは誕生寺と鯛の浦である。寺の前より舟を傭ひ、灣内に聳ゆる岩礁の切れ目を縫ふて灣外に漕ぎ出づること數丁、老樹蓊鬱たる入道岬の斷崕下に湛ゆる約一萬坪の海區を妙の浦又は鯛の浦と呼んで居る。昔日蓮の生れたる屋敷跡、數回の地震と海嘯との爲め、今は陷沒して海となつたのである。桑滄の感に堪へない。

浦に近づくと船頭は棒切を以て舷側を叩きつゝ「出て來い〳〵」と叫ぶ。携へ來つた鹽鰛を摑んで海中に投げ込む。鰛が水面より三四尺も沈みしと思ふ頃、出て來た、出て來た、十匹ばかりの大鯛小なるも三尺を降らず、大なるは四尺を越し、脊は黑くくすんで居る。巨口を開ひて鰛をガブリと呑み、腹を翻へして底深く沈み去る。再び投げる、復た出て來る。次第に數を增して三十匹にも達したであらう。其の餌を爭ふて入り亂れつゝ潑溂として浮沈遊泳する樣は、慥かに他で見るを得ざる奇觀であり壯觀である。餌が盡くれば深く潜つて最早や姿を現はさない。同舟の老婦人は「おありがたいことで」と、腕首に掛けた數珠を揉んで居る。

船頭に鯛の謂はれ因緣を尋ねて見たが、唯「御祖師樣の御志」でと云つたばかりで多くを語らない。土地の人の談話

を綜合すると、日蓮上人の生れた時、其の屋敷前に五尺の大鯛二尾海中より飛び上つた。時人瑞兆として之を悦び、爾來今日に至る迄此の海には網を入るゝことも、釣を垂るゝことも固く禁ぜられて居る。若し犯すものあれば忽ち天變地災が起ると云ふことである。鯛の爲めに絶對安全地帶である。

生命と生活との保障を得たる鯛が此處に集まるは當然である。餌を投ぐれば出て來るに不思議はない。日蓮様の御利益なくとも、御料林には鳥が集まる、御堀には鴨が群がる。淺草の鯉は人を恐れない。併しながら御料林の鳥も撃たれることがある。御堀の鴨は飢ゆることもある。淺草の鯉は行動の自由を縛られて居る。此處の鯛ばかりは永久に捕られる心配も、飢へる氣遣もない。而かも去るも留まるも、意志の儘である。物好きと迷信の人間が日に幾回となく餌を與へて呉れる。こんな結構なことはない。恐らく此の世に於ける生物中最も幸福なるものであらう。

唯考へさせらるゝは、此處に棲む魚が鯛に限ることである。而かも大鯛に限ることである。此處の鯛は生殖を行はぬのであらうか。外の魚は何故此處に棲まぬであらうか。之を人間の頭で解釋すれば、一萬坪の海區に棲息し得る魚の數には限りがある。彼等は己の生活を安易にする爲めには、極端なる鯛口制限を行ふの必要がある。己の生存を擁護する爲めには、極力他族の侵入を防止するの必要がある。斯くて彼等は人間と云ふ保護者の下に、自己の安逸と安樂とを貪らんが爲め、生物至重の繁殖を犧牲とし、海の大を自ら狹めて鯛の浦の小天地に跼蹐として居る。自由なるべき海中に恣に繩張を設定し、他族を排斥して我意を振ふて居る。賢か愚か、羨むべきか憫むべきか。人間の部族にも鯛の浦の鯛に類するものが尠くない。

日蓮の生れたる屋敷は、今は海底深く沈んで、當年の跡を尋ぬる由もない。唯彼の育ちたる家は、前に太平洋を望み、坐ながらにして日出の壯景を眺め、寐ながらにして怒濤の猛音を聞き得たるは想像に難くない。居は心を遷し境遇

は人を作る。山地の人は多く狷介不羈である。海邊の人は多く寛裕和協である。北國の人は鈍重堅忍である。南國の人は敏快輕佻である。日蓮の廣大雄宕の心は洋々漫々たる大海の感化に由るであらう。熱烈火の如き意氣は徐々天に昇る旭日の感化に由るであらう。剛猛不屈の氣魄は磐をも碎く怒濤の感化に由るであらう。古來小湊に生れた人間は多い。併し日蓮は前後唯一人である。深山にも蟒が居る、大澤にも孑孑がわく。蛟龍の卵も泥池に育てば蛇となる。唯龍蛇の生まるゝは獨り深山大澤のみである。日蓮の偉大は天禀である。天禀と自然と相合して初めて彼を大成したのであらう。

外房廻り

小湊まで來て再び勝浦へ引き返すも興味がない。休憩茶屋の主人が言葉巧みに說く外房廻ぐりの名所舊跡宣傳に乘せられ鴨川行の自働車に乘つた。岩礁廣延せる小湊の灣に沿ひ、トンネル一つ潜れば幾干もなく、關東一の漁場と稱せらるゝ天津の町が長く續いて居る。車を留めたき乙女の姿は見なかつた。海岸には岩礁蔓つて礁嶼亂布し、赤黑き海草や海苔が岩を掩ふて餘り美的とは云へない。ヒジキと角叉は天津の名產である。關東一の漁場にも、あはれ漁舟を繫ぐべき波止場もなければ、引き揚ぐべき砂濱もない。海岸の岩盤上に稻荷樣の鳥居然と無數の木架を連立し其の上に舟を乘せたる樣一種の奇觀である。天津の突角を過ぐれば鴨川灣廣く開けて黃砂翠松長く連り、白波逆卷く岸邊には地曳網ひく男女が蟻の如く動いて居る。沖には無數の漁舟が或は列を張り、或は星を散らし、白帆と發動漁舟の煙とが靜かな綠の海を縱橫に織つて居る。

此の附近流石に日蓮の御膝元だけありて法華經の臭が大分强い。天津には日蓮小松原の法難に斃れたる天津の城主工藤左近丞吉隆の舊跡日澄寺がある。小松原は日蓮四大法難の一として傳へらるゝところの東條左衛門景隆が法華教を惡

んで日蓮を要撃したる場所である。其時日蓮を救ふて工藤吉隆と共に戰死したる鏡忍坊日暁の墓所小松原山鏡忍寺は此の村にある。天津の奥一里餘に聳ゆる清澄山の清澄寺は、十二歳の日蓮が初めて佛道の教を受け、三十二歳の日蓮が大平洋の旭日を拜して初めて法華立宗の誓を立てた處である。其他日蓮縁故の場所が少くない。曾て自分の家に天津から來た若い女中が居た。頗る日蓮びいきで彼の女の眼に映つる日本の最大偉人は日蓮であつた。小學校で初めて弘法大師の事を教はつて來た子供と屢々弘法日蓮優劣論が闘はされて居た。此邊で迂つかり日蓮など〻呼び棄てにでもしようものなら、物を賣つて呉れぬ店もあると云ふことじや。鹿兒島の西郷ドン、盛岡のワシが原サン、何處にも御國自慢はあると見へる。

天津より鴨川まで一里あまり、土地稍や平濶にして耕耘良く行はれて居る。勝浦以來初めて畑らしき畑を見、外房の人間も魚ばかりで生きて居らぬことを知つた。小湊より鴨川まで約三里半、自働車一時間にして達する。〇〇屋と云ふ宿屋に泊つた。此處にも長靴が澤山脱いである。夕食を終へ露臺に出ると、海は早や半ば暮れて漁舟は三々五々濱邊を指して急いで居る。髮の毛さへも動かさぬ靜かな海にも白波皚々として物凄く眼下の岸に怒つて居る。何處からともなく錆びた聲で

「わたしや房州荒波育ち波も荒いが氣も荒い」と殺調な舟歌が聞へる。房州女の氣は知らぬが波は實際荒らい。ペチヤ〳〵と岸を舐める內海の波が女性の嘯であるならば、ドウ〳〵と岸を打つ外海の波は男性の叫である。海はいつしか暮れて天津の沖には漁舟の火が星の如くチラ〳〵ときらめいて居る。

室に歸へると、一間隔てた隣の室で二三人の客が宿の女中を相手に猛烈に發展して居る。外の宿から二三人の同僚が應援に來る。拳が始まる。極端な俗歌が出る。宿屋か料理屋か、イヤハヤ誠に賑やかな事じや。波の音と隣の騷が耳に

付いて安易に眠られない。豪傑と爲るには尙ほ遠しと自ら思つた。」

翌朝鴨川を發つて南三原に向つた。此の間約五里馬車と自働車とが通つて居る。二年後には汽車も開通するとかで、馬車屋はコボシ、土地の人は歡んで居る。房州第一の大河と稱する日本橋のドブ程の鴨川を渡り、低き坂一つ越ゆれば道は復び太平洋の岸に沿ふて走る。波も荒らいが車も荒らい。五臟六腑がひつくり返つて疝氣が腦天するとは此の事かと疑はれる。東京の眞ん中にも自働車の玄海灘があると聞くから無理もなけれど、此處は正に冬の北太平洋じや。車の爲めか、道の爲めか、ガブ〳〵揺つて居て腹が減る。併し幸に海の景色は美しい。綠翠滴る山や、岩角峙つ岬を背景として、大小黑白、無數の裸岩が恰かも靑疊の上に碁石を撒き散らした如く、或は近く、或は遠く、海上に散らばつて居る。一岩一礁悉く其の形を異にし、劍の如く峙つあり、饅頭の如く浮ぶあり、臥牛の如きあり、蹲虎に似たるもある。外房の荒波が之に打つ付かつて碧水の間に白湍を躍らす光景は正に名手の造つた盆景である。勝浦の海の如く寒脆海を壓して巨濤岩を碎くの豪宕と雄渾の趣は乏しきも、淸美と雅致とを併せ具へて居る。波太より江見に至る間眺望最も美しく、海の景色として恐らく日本有數のものであらう。別莊建てるなら今の中じや。

仙人島

「おせんころがし」と仁右衛門島とは外房海岸に於ける二名所である。鴨川より南三原に通ずる房總縣道をば波太にて左に分れ、纔かに人力車を通ずる岩のデコボコ道を進めば波太(ハブト)の漁村がある。急峻削るが如き山の麓に百戸ばかりの漁家が窮屈さうに、簷を重ねて立ち並んで居る。村の前面、半丁ばかりの狹き水路を距てゝ裸岩群立の間に稍や大なる綠の靑島が橫つて居る。風致の美なる以外、外觀何等の變奇もなく、此の位の島ならば全國海岸到る處に轉つて居る。而

かも是が房州名所の一と呼ばるゝ仁右衛門島である。或は波太島とも稱へて居る。仁右衛門は島主の名前である。

此の平凡なる小き孤島をして有名ならしめたる貧緣が三つある。其の一は島主仁右衛門氏の家が千年連綿たる舊家たることである。其の二は源の賴朝が石橋山の戰に破れ、房州に逃れて此の島に隱れたと云ふ故事である。尙ほ一つは日蓮が此の島に遊んで旭日を迎へたと云ふことが、日蓮崇拜の房州つ子の人氣を呼んで居ることである。

島への渡場に婆さんが茶店を出して居る。十五錢拂ふと仙人島には不似合な、汽車の切符めいた御覽切符を呉れる。婆さんが島に向つて豆腐屋式の喇叭を吹く。小さい傳馬船が島影から悠々と迎ひに來る。島には磯岩に依つて圍まれたる天然の船付場がある。島の中央、雜草の間に藁葺きの屋根一軒見へる。老船頭が「あれが仁右衛門さんの屋敷だ、勝手に入つて見なせへ」と敎へて呉れた、陸から見ると岩と草ばかりと思ひし島にも、來て見れば多少の樹木が生へて居る。岩角には營養不良の瘦松が二三本、海風に惱みながら痛ましく簡ふて居る。上陸場には龍宮亭の暖簾吊したバラック式の休み茶屋がある。觀覽者には便利だが仙人島の仙味を損ずること少くない。日比谷公園に貸事務所建てゝ金儲をする實知主義の世の中とて仕方もあるまい。島の中央鞍部に仙人國の大王、絕對君主の御殿がある。石段を登ると城壁の如き高き石垣が築かれて、黑き門柱には平野仁右衛門の俗名が懸つて居る。門を入ると田舍の寺院然たる藁葺の屋敷がある。刺を通して御島拜見を願ひ出て、

「何か島の記錄の樣なものでもあれば拜見出來ませぬか」

「多少の記錄もあつた模樣ですが元祿の大海嘯の時皆流して仕舞ひましたので」

「では御當家で御編纂になつた島の歷史の樣なものでも御有りなれば」

「其れも有つたのですが唯今皆出し切つて仕舞ひましたので誠にお氣の毒ですが」

奥をキレイに分けた餘り仙人らしくもない若い人が慇懃に答へた。

「どうぞ御隨意に御覽下さい、奥庭の方を最初見られる方が御便利でせう」

と許さるゝ儘に先づ奥庭なるものを拜見する。椽側に置かれた額板に當家來歴の梗概が書いてある。其に依ると、七百餘年前源頼朝此の島に隱れたる時、仁右衞門家は既に此の島に住まひ居り、其より以前は不明なるも今日迄に少くも一千年を經過せるならんとある。一千年前と云へば菅原道眞が太宰府の配所で「秋思詩篇獨斷腸」など〻歌つて居た頃である。家系の連綿として而かも一處不轉の點に於て出雲の神主千家に次ぐの舊家であらう。今の屋敷は元祿年間の建築とかで流石に古色蒼然として居る。說明書にある南天の床柱も一生借家棲居の我等には猫に小判程の興味もない。庭は廣からねど自然の岩に苔蒸して雅趣津々時代の色に錆びて居る。千年の實生の松は岩を貫ひて老幹低く降枝の翠を張り、六百年の蘇鐵は生々とした綠の葉を側に擴げて居る。岩を鑿つた自然の池には水湛々として大きな緋鯉が泳いで居る。優雅清致、到底孤島山上の庭とは思はれない。仙人氣分が漂ふて居る。

邸の裏門を拔けて島の東部に行くと、神樂岩と呼ばるゝ壯烈なる双頭の巨巖が躍るが如く聳つ立つて居る。日蓮が其の巖で旭日を拜したと傳へられ、雜草茫々たる間に此處ばかりは細かき朝鮮芝が美しく刈り込まれてある。東端海濱に近き處に頼朝の隱れたりと云ふ天然の大岩窟がある。岩窟と云ふよりも寧ろ岩の罅隙である。窟奥に頼朝を祭れる小さき祠がある。頼朝が果して此の窟に隱れたりや否やの史實は爰に正す必要がない。石橋山の枯木の洞穴と云ひ、此の島の岩窟と云ひ、頼朝は餘程穴に緣ある男と見へる。祠前の盆には見物人と思はるゝ人の名刺が澤山盛られてある。どう云ふ心理で名刺を置くのか了解が出來ない。護國寺の大隈さんや山縣さんの墓にも名刺受が具へてあると云ふことじや。生前に於て御兩人が如何に偉くとも、死人に口なし、亡者に目なし、墓の底から名刺は讀めまい。一體何の目的で墓に

名刺を置くのであらう？。迷信の爲めか、廣告の爲めか、お賽錢の代りか、お札の積りか、死者に敬意か、遺族に侫意か。

道は此處で行き詰つて居る。引き返へして表門を出づれば石段の途中に、島の西部に通ずる小路がある。雜草生ひ茂つて夏ならば大蛇でも出そうな心地がする。路傍に芭蕉の句碑が立つて居る。「海暮れて鴨の聲……」何とか書いてある。少し進むと誰かの他の碑がある。「いつの世にひらき初めけん仙人の棲家にならふ……」の歌が刻んである。西端には辯天の小祠がある。

島の眺めは美しい。周圍の海には大小の雅岩が刻むが如く剔るが如く、屹々として峙ち斷續として連つて居る。南より東にかけては蒼波淼々天に接し、白帆悠々眠むるに似て、汽船の淡煙夢の如く叢ひて居る。北には勝浦岬霞にけぶつて長く洋中に斗出し、青山翠帶碧水に連なる處、白波一線帶の如く、小湊、天津、鴨川の人家黒白群綴して非幣に似て居る。水色明らかに山光鮮やかである。

仁右衛門の來歷は面白い、仁右衛門の景色は美しい。併し仁右衛門島の本領は島の存在が仙人的なる處にある。房州の本陸より切り離されたる、面積僅に一萬坪而かも其の大部分は岩盤より成れる此の島は、一握りの米麥を産せざるのみならず、一個の井より吸む飲水にさへ限りがある。猥りに人口の增殖を許さない。左れば島は千年の久しき間一島一戶、一戶一族である。初代仁右衛門夫婦が何處よりか此處に移り來りて竹の柱に茅の屋根、浮世離れて仙人生活を初めてより玆に少くも一千年、人間普通の繁殖率を以てすれば、夫婦の子孫は今日幾百人に爲るかは知らねど、現在の家族は僅十人に足らないと云ふことである。繁殖制限策を執りたるか、本陸移住策に依れるか、何れにしても島内に於ける人口の制限が極端に嚴格に行はれたるは事實である。此の嚴格なる人口制限が生存競爭より生ずる骨肉の鬩牆を防ぎ、

由て以て一千年の家系を保ち得たものであると思はれる。人口問題で行き詰まれる日本は仁右衛門家に就きて宜しく其の秘策を學ぶべきであらう。

過去十世紀の間、治亂常なく興亡定まらず、大にしては國、小にしては家、或るものは外患の爲めに、或るものは内憂の爲めに、衰亡廢滅したるもの擧げて數ふることが出來ない。天下の權を握りたる平家も亡び、源氏も滅び、北條も足利も、豐臣も、徳川も斃れた。房州の大名も幾たびか姓を革め人を更へたであらう。其の他豪族名門の種を亡ぼし祀を絶ちたるもの幾干あるか知れない。然るに海上の孤島とは云へ、本陸よりは飛べば渡らるゝ蕞爾たる仁右衛門王國が攻奪侵略マイト・イズ・ライトの世に處して終に能く滅亡を免れ、一千年後の今日尚ほ子孫の榮ゆるものは何故であらう。是亦興味ある研究問題である。仙人主義か、無抵抗主義か。惟ふるに島の生産貧弱にして他人の欲望を唆るに足らざりしことも亦其の一因であらう。女美しうして身を誤り、財多くして家亂る。無は最大の力である。

島は北ふさがりの南受けである。冬暖く夏涼しい。磯には魚多く釣に可なりである。入江は波靜かにして水泳に適して居る。島の名物蠑螺の壺燒は龍宮茶屋で食はして呉れる。景美しく眺大に、俗塵を離れて仙味豐かである。岩影に横つて讀書するも宜く、岸頭に立つて思索するも宜く、朝に大海の日出を迎へて夕に海上の月を眺むることも出來る。仙人島の何時までも俗化せざることこそ望ましい。

仙人道の悲劇

愁もなく、戀もなく、雲と波とを友とする仙人島にも、世智辛き浮世の風は訪づれて時には血腥き慘劇も演ぜられる。波場の茶屋に憩へる土地の老人は澁茶を吸ひつゝ

「月日の經つのは早いものでがす、わし等が未だ十四五で、島の大旦那がヤツト四ツか五ツ位の時でがしたらう。
と感慨深き冒頭と共にぽつり〳〵と五十年前の昔物語を聞かして呉れた。

徳川の幕府倒れて王政維新となり、大名は土地を奉還し、武士は職を解かれ、幾百年間不自然に、無理由に、定められたる封建制度の不法特權は廢せられた。改革の波は仙人島の岸をまで洗ひ、新政の風は絶壁下の漁村をも訪づれた。多年仁右衛門家の管理したる附近海上の漁權は村民一般に解放せられた。小さき海洋の自由である。併し島の周圍の磯根の所有權は依然として島主に屬してゐた。後は嶮崖を負ひ、前は海に瀕する對岸漁民の生業は唯一の漁業である。今日一年數千圓の收穫ありと云ふ磯根の解放と否とは當時村民生活上に至大の關係があつた。村民は之が解放を島主に向つて要求した。島主は頼朝以來の歷史を盾として村民の要求を拒絶した。爾來村民と島主との間に磯根の爭論を生じ遂に裁判問題となつた。仙人の裁判沙汰も時世と時節である。

裁判は仙人側に有利に判決せられた。村民の憤慨と失望とは大である。村の名主は裁判に敗れたる責任を感ずるの餘り、一夜鴨川の荒波に投じて憤死を遂げた。仙人島主に對する村民の憎惡と怨恨とは益強くなつた。板子一枚地獄の稼ぎの命知らずの漁夫達は、村の爲め名主の爲め仁右衛門一家を滅ぼして、重なる恨を報ひんものと恐ろしき直接行動を執ることに決した。

島の上陸場に近く一棟の納屋がある。今は改造されて龍宮茶屋となつて居る。以前は磯の鮑や蠑螺や海草を採收する爲め、島に雇はれたる海女の詰所であつた。明治何年某月某日、此の日朝來風強く、唯さへ荒らき房州の波は愈やが上に猛り狂ひて、磐根打つ怒濤に島も揺がんばかりである。磯の仕事の出來ぬまゝ海女は何れも島を去つて己の家に歸つた。島に在るものは唯仁右衛門一家の人のみである。

日はいつしか暮れた。風は轟々として峰に怒り、波は澎湃として岸に逆巻いて居る。舟は岸に引き揚げられ、家の戸は鎖されて、海にも陸にも燈火一つ見へない。星影さへも稀なる暗の海には岩に砕くる波ばかりが唯独白く光つて居る。前には仁右衛門島の黒き影が怪魔の蟠まるが如く物凄く衝つ立て居る。今しも一隻の小舟が陸の方から島に向つて漕ぎ寄せた。二つの人影が身軽く島に飛び上つた。白装束に白襷に白鉢巻、手には日本刀を提げて居る。二人は岩影に身を寄せて島の様子を窺つた。風の音と波の音とが獨り叫び狂ふて居る。やがて二人は崖を攀ぢ上つて島主仁右衛門の邸内に飛び降りた。島の夜は夙く更けて家は固く雨戸を鎖され、薄暗き行燈の光が微かに戸の隙目から漏れて居る。雨戸は蹴破られた。日本刀は鞘を拂つた。怒號叫喚の聲が俄かに起つた。交番もなければ隣家もなき孤島の一軒家、呼ぶも叫ぶも救ひ手はない。白装束の二人は再び船に乗つて村へは歸らず、其儘行衛をくらました。後には鮮血漂ふ中に仁右衛門夫妻其他の屍骸が惨らしく横つて居る。幼兒の泣き聲が風浪の間に悲しく響くばかりである。

仙人島惨劇の噂も漸く村人の口より遠ざかりたる二年の後、伊豆の大島にて捕へられたる一人の殺人犯人は、村人の同情の涙に送くられつゝ波太の海岸で打首になつた。其後更に十餘年八丈島にて捕はれたる他の殺人犯人は時效の故を以て罪を許され、村に歸つて天命を全ふした。當事兇刃を免れたる四五歳の幼兒こそ今の大旦那と呼ばるゝ人で、一度は衆議院に席を有したこともあると云ふ。仙人島も今は浮世の俗人島と化しつゝある。

老人は一先づ話の緒を斷つた。

「衆議院へでも出るからにや仁右衛門さんは大分財産家だらうね」

「金は有るか無へか知らねーが海からの上り丈けでも大したもんでさア。磯の權利だけでも年三千兩位は上がるんでがすからの。わし等生れてから千兩どころか百兩の金も見たことはなかんべいが」

「あの裸岩から一年三千圓の收入がありや磯の飽もまんざら悪いものじやないね、ところで賴朝さんがあの島に隠れて居たと云ふのは本當の事かね」
「わし等本當か噓か知らねーが、昔からそう云つて居ますべい。何でも賴朝公が將軍樣になつた時、仁右衞門を呼び出して、あの島と周りの磯の御墨付とカラの枕とかを下されたんだそうでがす。今でも枕は正月に一度丈虫干をすると云ひますがの。カラと云ひますから天竺からでも持つて來たもんでがーせうの」
「爺さん、あなた其の枕を見たことがあるかね」
「とてもわし等にや見ることは出來ねーが、何でも大そう香が好いもんだそうでがす。」
「仁右衞門さんが賴朝から貰つたのはタッタ其だけかね、征夷大將軍ともあるものが命を助けられた恩返へしとしちや、ちと御褒美が少な過ぎる樣だがね。」
「そりや先生さん、あんな穴倉へ押し込められちや癪に障りまさア、わし等の家へ逃げて來りや神棚へでも祭つて置くべいだに。」
傍の男が「おやちとこの神棚にや何時でも賴朝公が祭つてあるぢやねーか、ソラ頭の大きい福助さんがよ。ハハヽ」
「違ひねへ〳〵アッハッハ」
丸で落し話の樣になつて仕舞つた。」
再び自動車に乘じ、西太平洋の荒波を眺めつゝ北太洋の荒道に揺られて、終列車を捕へる爲め南三原に急いだ。沿道は鐵道工事に急がしく、老松幹を連ね枝を交ゆる間に白浪の奔騰する景、雄に壯である。虎を描いて猫に類するは尙ほ可なりである。海を書かんとして陸を書きたる罪は深い。

時論

最近政變批判

法學博士　吉野作造

○

本誌前號に掲げた僕の時論を讀まれた讀者に取つて、加藤内閣の出現は決して意外の出來事ではなかつた筈だと思ふ。加藤大將の内閣組織をば事前に豫期しなかつたとしても、さていよ〳〵出來て見れば、成程斯うでもならなければ落ち付かなかつたのだらうと首肯かれるのである。現今の樣な政情の下に於て、高橋内閣に嗣ぐに加藤内閣を以てせるは、極めて自然の成行なのである。

併し自然の成行だと云ふことは、必しも之を是認する理由とはならない。萬事を事勿れ主義で押し通さうと云ふ連中は、ヤレ〳〵と胸撫でおろして十二分の滿足を感じたであらうが、少しでも社會國家の向上進歩を念とせる者に取つては、復かと呆れて政界の前途猶ほ遼遠たりの哀感を抱いたであらう。尤も加藤内閣の出現に接して失望せる者の随一に憲政會があるが、吾人は彼等と失望哀愁の動機を同うする者でないことは呉々も斷つて置く。

何故加藤内閣の出現に對して爾く悲觀するか。僕等は必しも加藤内閣そのものを惡いとは思はない。此點に於て全然憲政會と立場を異にする。悲觀の要點は、加藤内閣の出現を促した政界の空氣そのものにある。僕は加藤内閣の出現は自然の成行だと云つたが、自然の成行だといふ事が即ち悲觀の原因なのだ。そは最近政界の腐敗紊亂は萬人周知の事實であり、誰しも局面の一大轉回を希望し、此希望に促されて高橋内閣の瓦解を見たのに内閣の更迭といふ所謂局面の轉回は在來の空氣に其儘乘つて何等清新の氣分を入れないからである。

在來の政界の安定は、其の裏に必ず腐敗汚辱の種子を包藏して居つた。此事は前號の本欄に可なり詳しく說いた。若し政界が少しでも國民の聲に聽き又自ら其弊を繼續するに堪へずと考ふるなら、此處に廓正の斧鉞を加へて一時政界の安定を失ふも

決して辭すべきではない。而かも當今の政客は、一面天下の清議に應ずるが如き顏をしながら、政界安定の攪亂を恐るゝことと豺狼も啻ならない。故に直接の責任者たる高橋内閣の瓦解は之を救はざりしも、後繼内閣の詮議に對しては、現在政情の攪亂を促すが如き解決を避くべしとの主義で、終始一貫の大運動を試みたではないか。當今の政客の大半は斯う云ふ動機で動いて居り、斯うした氣分に安心を與へるものとして加藤内閣が迎へられたとすれば、同内閣の出現は、誠に自然の成行であると同時に、僕等は當今の政界の未だ眞に覺醒せざるを想ふて、こゝに深甚の失望を感ぜざるを得ないのである。

但し加藤内閣が當今政客多數の俗望に應じて依然政界の積弊を坐視するか、又は獨自の見識に立つて漸次革正の斧鉞を振ふかは、別問題である。故に前にも斷つた通り、吾人は加藤内閣の出現を促した政界の空氣は大に之を遺憾とするも、加藤内閣そのものに對してはまた別個の着眼點から批判すべきものと考へて居る。

○

加藤内閣の出現が自然の成行だといふ事は、政機運用の根本方針が内閣更迭に依て毫も變更されないといふを意味する。而して根本方針の不變は、政機運用に伴ふ腐敗的慣用手段の承認を意味するが故に、政界に對する國民良心の不平不滿は、這の折角の政變に依て少しも癒されない。斯くして民衆の良心が政治から段々と遠退いて行くのは、眞に憂ふべきことである。

併し考へて見ると吾々が政治を商賣にして居る人に依て政界の革命的變動を期待したのは一體大きな間違であつた。軍人に軍備縮少の實行を托し、資本家に共産主義の實現を托するのと同じく、全然出來ぬことはないとしても、こは非常に困難な仕事だ。何故なれば、彼等は僕達の廢めやうとして居る事そのものに倚つて自分の生活を營んで居るものだからである。國家の爲にはどんな犧牲をも辭せないなどゝは云ふものゝ、衣食の道を奪はるゝ段になると、誰しも口實を色々に考へて極力反對するものだ。是れ實際問題として社會問題解決の困難なる所以、又軍縮問題の解決の困難なる所以である。況んや政界革正の問題になると、當の相手は政權を擁するを常とし、從つて之と抗爭するは更に一段の困難を加ふるものあるに於てをや。

夫れでも政界の惡氣流は之を革正しなければならぬ。而して實際問題として此の革正を實現せしめ得べき力は民衆の公議輿論の外にはない。是れ職業的政客に對する民衆的監督の必要なる所以で、近代立憲政治の道徳的根柢も亦畢竟はこゝにある。然るに不幸にして我國ではこの民衆的監督の實がちつとも擧つ

て居ない。憲政逆轉なる言葉が示す通り、民衆が政客を監督するに非ず、政客が民衆を左右すると言ふ狀態に在るのだから、所謂民衆の參政權はほんの形式に止まり、政界の實權は例に依つて例の如く、上下兩院に各若干の分野を占むる政客と所謂元老官僚軍閥の一團との間に潜在して居る。されば內閣組織の如きも、之等の政客の多數の容認を得さへすれば成立するので、民間の輿望の如きは頭から問ふ所でない。果して然らば、今日の政界に向つて政界其者の革正を期待するは、資本家に向つて社會問題の根本的解決を乞ふと齊しく、殆んど木に緣て魚を求むるの類ではあるまいか。

夫れでも猶ほ政界の惡氣流は何とか之を始末せねばならぬのだ。眞に之を始末し得べき筈の民衆の力が未だ政界の最高權威たるべく組織立てられて居ないとすれば、そこで已むを得ず一時の權宜として所謂以毒制毒の手段に出づるの外はないことになる。此意味に於て僕等は當時ひそかに憲政會をして後繼內閣組織の任に當らせたいと希望したのであつた。それは憲政會に積極的の善事を望む可らずとするも、之に依て少くとも政友會の在來のやり方を停止し、其積弊に世人を反省せしむる丈の消極的の效能はあつたらうと考へたからである。

而して吾人が此際憲政會にやらしたいと冀ひし點が恰度多數政客の憲政會を起用すべからずとする理由なのである。憲政會を擧用する事に依て政局轉回の端緒たらしめんと冀ふ點が、即ち政界安定を冀ふ者の極度に忌嫌する所なのである。所謂政界自然の成行を吾人が大に遺憾とする點は實にこゝに在るのである。

なほ重ねて斷つて置くが、僕が憲政會にやらしたかつたといふのは、憲政會の組織すべき內閣は必ず加藤現內閣よりも優れて居るといふを意味するのではない。兩方を比較して孰れが良いかは別の問題だ。只政界の空氣を一新するといふ根本的急務から觀て、憲政會を擧用したかつたと云ふまでゞある。

○

憲政會を立つべきだといふ主張の中に、憲政常道論といふがある。同じく憲政會擧用論でも、此の立場と僕の立場とは全く相異ることを注意して置きたい。

憲政の要義は、民衆を基礎として政治すべしと云ふに在る。民衆の意思の政治的方面を代表するものは政黨だ、從て憲政は政黨政治でなければならぬ。故に一政黨が失脚したとすれば他の政黨が之に代るのが憲政の常道である。この議論は形式上正しい。故に表面の觀察に從へば、政友會內閣に嗣ぐものは憲政會たるべきに疑がない筈だ。加藤新內閣の如きを出現せしめたの

は、正に憲政の逆轉と謂はなければならぬ道理である。

併しこの立場を僕は取らぬのである。僕が憲政會を起たしめたかつたと云ふのは單に彼が前內閣の政敵であるからである。毒を以て毒を制するどいふ意味で、暫く積弊一掃の前驅をなさしめんといふに過ぎず、彼に內閣組織の道德的な又積極的な地位を承認するからでは決してない。僕は平素所謂憲政常道論を鬼面人を欺くの甚しきものと考へて居る。

牛乳は健康にいゝからとて、牛乳のレッテルを貼つた白い液體はすべて飲んで宜いとは限らない。世の中には奸商が多い。責任を以て人にすゝめ世に强ゐるといふには、十分に內容を吟味してかゝらねばならぬ。今日の政界には所謂奸商の類は餘りに多いのだ。民衆の無智に乘じて不正の投票を集め、民衆の良心と其の自由の判斷とに何等の實質的連絡なき代議士輩を集めて之に政黨のレッテルを貼つて居る。抑も政黨內閣の憲政の通義たるを得る所以の道德的根底は、其が民衆の良心の自由無碍の發露たるに在る。形の上で民衆の代表だといふ丈では、白色の液體を人に飲めとすゝめ難きと同じく、憚る所なく之を政界に推奬する譯には行かぬ。僕は元來憲政常道論の熱心な信者であるが、之を實際に適用すべく今日の日本には未だ實質的關係が出來て居ないと考へる。憲政常道論を大事に思ふだけ其の賣物の押賣りには絕對に反對しなければならぬと思ふのである。

政黨は民衆の良心を反映すべきものである。民衆の良心を反映する政客の集團を政黨と謂ふので、政黨と稱するものは必ず民衆の良心を反映して居るものと速斷してはならない。この嚴格な意味に於て、我國には今日のところ本當に政黨と認むべきものは一つもないと思ふ。自ら政黨と僭稱するものはある。併し實質に於て彼等は民衆の良心に超絕して居るのである。故に若し加藤現內閣を民衆と實質的交涉なきの故を以て超然內閣と云ふなら、先きの政友會內閣だつて同じく超然內閣だ。民衆の良心が實質的に政界の權威たらしめられて居ない我國に於て、前述の意味に於ける超然內閣の否定は問題にならぬと思ふのである。

或人は曰ふ。加藤內閣の出現を憲政の常道の爲めに悲しむと。併し今日政界の實狀は憲政の常道が踏みにじられて居るのではなくして、憲政の常道がてんで出來て居ないのだ。悲しむべきは寧ろ憲政常道の開拓を妨げて居る政界惡氣流の跋扈でなければならぬ。此點に於ては政友憲政兩つながら責任を免るゝことは出來ない筈と考へる。

○

以上述ぶる所でも、民衆の良心を政界現實の權威たらしめ、所謂憲政の常道を憚る所なく適用せしめ得る樣な空氣を作ることが當今第一の急務である趣旨は、明白であらう。吾人は從來此の立場に於て政界の批判を試みて來た。今後もまたこの立場を以て一貫するであらう。此點は重ねて讀者の了解を得て置きたい。

併し一歩退いて現在の樣な政情を既定の事實と許して、さて其の基礎の上に如何なる方法が內閣組織に際して省慮せられねばならぬかを考ふるに、矢張り上下兩院の各種政團に專ら意を注ぐべきだと謂はねばならぬ。之等各般の勢力にも何等の連絡交涉なき絕對的超然內閣は、如何なる理由の下に於ても避くべきであらう。若し現在の政界に於て超然內閣を否認するの說を相當理由ありと云ふ者あらば、それは右の意味に之を解さなければならぬ。民衆の意思に對する超然の意味ならば、今日のところ所謂政黨內閣だとて矢張り超然內閣の實質を具ふるからである。而して又若し超然內閣を僕の用ふる意義に解すれば、加藤新內閣は決して超然內閣ではない。形の上では上院政團の多數に根柢を有し、實に於ては研究會政友會の聯立だとさへ謂はれて居る。故に加藤內閣は、現今の政情の下に於ては矢張り其の存立の合理的根據を有するものと謂ふことが出來る。

加藤內閣は此際我々國民の有ち得べき最良の內閣なりや否やは問題である。が、之に憲政常道論を楯に根本的否認の鋒先を向けるは當らない。殊に超然內閣たるの理由を以て之を拒むは丸で見當違ひだ。去ればと云つて、僕は超然內閣論を贊成したり、憲政常道論を罵倒したりする積りはない。只之等の論點に依て加藤內閣を難じ得ない樣な我國現時の變態的政情を太だ遺憾に思ふのである。人は曰ふ。加藤內閣は變態內閣だと。焉んぞ知らん。變態なのは內閣に非ずして政界そのものたることを。我々は讀者諸君と共に深くこの點に思を廻らすことを必要と考へる。

國家思想に關する近時の論調について

○

近頃僕は、友人某君が勞働者の讀み物として書いた小さなパンフレットを繙き、其中に、オッペンハイマーの國家論をひき、國家の起源を「弱者に對する强者の勞働搾取」に在りと說いてあるのを讀んだ。國家の起源を掠奪に在りとする說明は近

頭決して珍らしい議論ではない。西洋には無論のこと、昨今我國の流行思想家の中にも、此種の考を發表して居るものは非常に多い。

今日の國家が餘りに資本家本位に傾いて居ることは疑ない。從つて今日の國家の起源を論理的に尋ねて見る段になると、右の掠奪説に多分の道理あることも爭ひ難い。併し國家の起源の歴史的説明として之が正しいかどうかは問題であらう。

掠奪觀の國家起源論は、現今の資本主義を呪ふ者に取つて有力なる一武器である。從つて之に文句を附けることは、この有力なる武器を奪う結果となるので、動もすると一部の社會改造論者から嫌はるゝ樣だが、併し眞理は如何なる目的の爲にも枉げられない。斯くして掠奪觀の國家論は、純粹なる學問上の見地からは随分怪しいものとして批判さるゝを免れないと思ふ。

暫く一歩を讓つて、國家の起源に關する前記の説明は歴史的に正しいものとしても、史的起源の説明は、決して直に事物の本質を決定するものでないことを知らなければならぬ。假令國家が掠奪に起源したとしても、其の國家を永く繼續存立せしめ來りし所に、該組織が何等か人類の本質的要求に適合するものがあるのではなからうか。親の命令で嫌々ながら結婚した男女の二人が、遂に識らず／＼圓滿なる家庭を作るに至ることある樣に、現在出來上つた狀態の本質は、その史的起源とは全く別の根據から發達するといふことも世間には澤山例のある事だ。

僕の考では、人類の團體生活には統制が要る。統制は一面には教育に依て、他面には強迫に依て附けられる。人類は生れ乍らにして完全なものでなく、進歩向上の段階を踏み登るべきものである限り、此の二つの方法に依る統制は、共團體生活を完うする上に絶對に必要だ。左すれば廣義の教育と共に「強制」は人性の自然に基く本質的要求と謂ふべきである。玆に國家といふ組織の合理的根據があると思ふ。所謂無政府主義は無限の將來に期せらるべき狀態を今日現に存するが如く妄想する點に誤りがある。從つて現在の生活關係の規準としては全然無意義である。

現在の國家が、國家組織を必要とする人類自然の本質的要求を充して居るかどうかは自ら別問題だ。現在の國家の不正を糺彈し、又この點に世人の着眼を促す爲に、今日世上に見るが如き種々の説明を生んだといふ事實には、深く鑑戒すべき點があるとは思ふ。此意味に於て、掠奪的國家觀にも相當の敬意を表するが、併しその科學的根據の頗る薄弱なことは、十分に心得て居るの必要があると思ふ。

○

今日の國家組織の正しくないといふ點を反省せしむる爲に、無政府主義的傾向の諸學說が或る意味の貢献を爲して居ることは、言ふを待たない。併し、吾々は今日如何に開發に赴いたからとて、一切權力組織を必要としないとまで言ひ切ることは出來ないだらう。故に今日若し無政府主義的傾向の諸學說が、多少の共鳴を世上に得て居るとすれば、それは純粹の無政府論が聽かれて居るのではなくして、今日の中央集權的な國家組織を打破しやうといふ點に共鳴を得て居るのであらうと思ふ。權力だの、强制だのと云ふ文字を使ひたがらないのだけれども、要するに、今日までの中央集權的な組織には倦きた、次期の權力組織は何等か變つたものにしたいといふ內心の要求に支配されて居るのであらう。集產主義の外に分產主義の說かるゝも、同じ動機から來るのだと思ふ。ソヴイエツト主義が歡ばるゝのも恐らく之に外ならない。治者被治者の區別を撤し、他の言葉を以てすれば職業的政治家といふ階級を消滅せしめ、從來の被治者が自らまた同時に治者たらんとする意味を徹底するには、ソヴイエツトは理想的の制度だ。眞の自治主義が從來の自治制で實現されず、ソヴイエツトで始めて實現されたと云はれるのも此點にある。而して之は明白に中央集權的組織の破却ではあるが、本質上決して權力組織そのものの否認ではない。正確に云へば、權力組織の改造と謂ふべきであらう。此點に於て無政府主義は、政治否認論と共に、言葉の誤用である。否認し排斥すべきは權力組織そのもの政治そのものではない。在來行はれ來りし特種の型式の國家なり政治なりである。國家と政治とは人類の本質的要求に基き永遠に存續すべきものなのである。

○

近頃盛にもてはやさるゝギルド社會主義の主張の如きは、また中央集權否認の傾向の一つを代表するものである。中央集權打破といへば、之と相對して權力の地方的分散を考ふるを常として居つたが、一つ又方面を變へて、職業的分散を考へたのが即ちギルド社會主義だ。人類の生活を最も大切な衣食の方面から觀ると生產者と消費者とに分れる。從來の代表組織は、どんなに細かに分けても、要するに、消費者の立場を表はすに過ぎぬ。之からは今まで全く無視して居つた生產者の立場を考ふるとが必要だといふのである。而して生產といふ方面から觀ると、人はいろ〳〵の職業に分れる。この職業的團體がまた實に分散されたる權力の分配に與るべき當然の權利があるのだと視るのである。

この說――否此種の說に多分の眞理を含むことは言ふを待たない。從來無視された生產者としての立場を大に重んずべしと

いふに何人も異議はあるまい。併し生産者としての立場に對立するものを、單に消費者としての經濟的立場とのみ觀るは、果して正しい見解であらうか。

人間は生産者に非れば必ず消費者といふ風に物質的にのみ觀ねばならぬものだらうか。生産者としての各々の專門的立場を超越した所謂市民的立場といふものを許されぬものだらうか。此處に政治に關する根本觀念の相違が起るのである。

世間には人類の經濟的生活に對立して政治的生活を説くものがある。人類の生活々動の方向に政治的なるあり經濟的なるありと云ふのならいゝ。人類の生活に政治的經濟的等の實質的畛域が分れて居ると云ふのなら、之れ程間違つた考はない。所謂政治的活動は、人類の生活の凡ての方面に亙つて洩らす所なきものである。何となれば政治的といふのは、人類生活分野の或方面を指稱するのではなくて、生活全體の强制的規律を必要とする方面に係はるものであるからである。

ギルド社會主義が、從來の國家を批評して人類の生産者としての立場を顧みなかつたと説くのは正しい。けれども之より一歩を進めて、國家其ものは本質的に人類の生活の全部を包括し得ないと云ふなら大なる誤りである。人はよく謂ふ。國家は本質的に人類生活の圓滿なる發現を期するものとしては不完全だと。之は國家は强制に依て人類生活の統制を指示するものなるが故に其れ自身完全でないと云ふ意味ならいゝが、人類生活の全班に亙らないからと云ふ意味で不完全だといふのなら、飛んでもない謬見だ。現在の國家の運用が正しいかどうかは別問題だが、要するに、今日ギルド社會主義を説く人の國家論には、隨分ひどい謬見が散見するやうだ。

○

國家の本質を僕の説の如くに觀ると、所謂政治的活動は人類の生活の凡ての方面に拘はるものである。從つて經濟的活動に於けるが如く、生産者としての立場だの、消費者としての立場だのと、區別することが出來ないものである。一部の論者が、國家を以て消費者としての立場を代表するに過ぎずと説くのは誤りである。現在の國家がどうなつて居るかは別問題だ。本質的に觀て國家は、生産者だの消費者だのといふ專門的立場を超越して、全班的活動に係るものと謂ふべきである。從つて人類生活の政治的の立場は、所謂職業を超越した市民的立場でなければならぬと思ふ。階級的國家はこの意味に於て國家の本質に會はない。

この點に於て比例代表といふ觀念は政治の本質に合しないものと謂はなければならぬ。ミラボーの言つたといふ「議會は社

會の縮圖たるべし」といふは誤りだ、「代議士は如何なる級階から選まれても、一旦撰まれたる以上はその階級的利益を代表するものと思ふ可らず」といふものが正しい。比例代表論は市民的立場で取扱ふべき政治を職業的立場で爭はせやうといふのだから僻暴だ。

尤も比例代表は、元の墺匈國のやうな先天的に融合しない多數民族の機械的集合に成れる國家には必要であつた。歐洲諸國には民族宗教等の關係に依て社會的に固定した各種階級が有機的に融合せずして雜居して居るのが多い。其間にも何とか融和調合せしむる原理を發見し又は創造することが必要であるが、之が作られ見出さるゝまでは、已むなく各種の階級に其の力相當の代表を有たしむることが必要だ。比例代表論存在の理由は一にこの點にある。我國の如きに之を説くは極めて淺薄の見だ。之も政治の本質を誤解せる所から來る一例と見べきであらう。

○

人は專門の職業的立場を離れて、超越的な抽象的な所謂市民的立場なるものを取り得るものだらうか。所謂生活事實に卽して人生を如實に觀る人は否と答ふるであらう。之等の人の立場と僕達の立場との相違は、結局人生觀の相違に歸着するであらう。之等の點はまた他日を期して詳論することゝし、今はたゞ最近二三の論文を讀んで感じたるまゝを記しておくに止める。

・　・　・　・

本誌の拙文を緣に一二度和蘭語の示教にあつかたことのある大村君の住所を失念した重ねて御音信を賜らんことを切望する（吉野生記）

Violet Ray High Frequency

Radiorayor



權威ある紫光線 電波療器



電波療器 ラヂオレーヤー

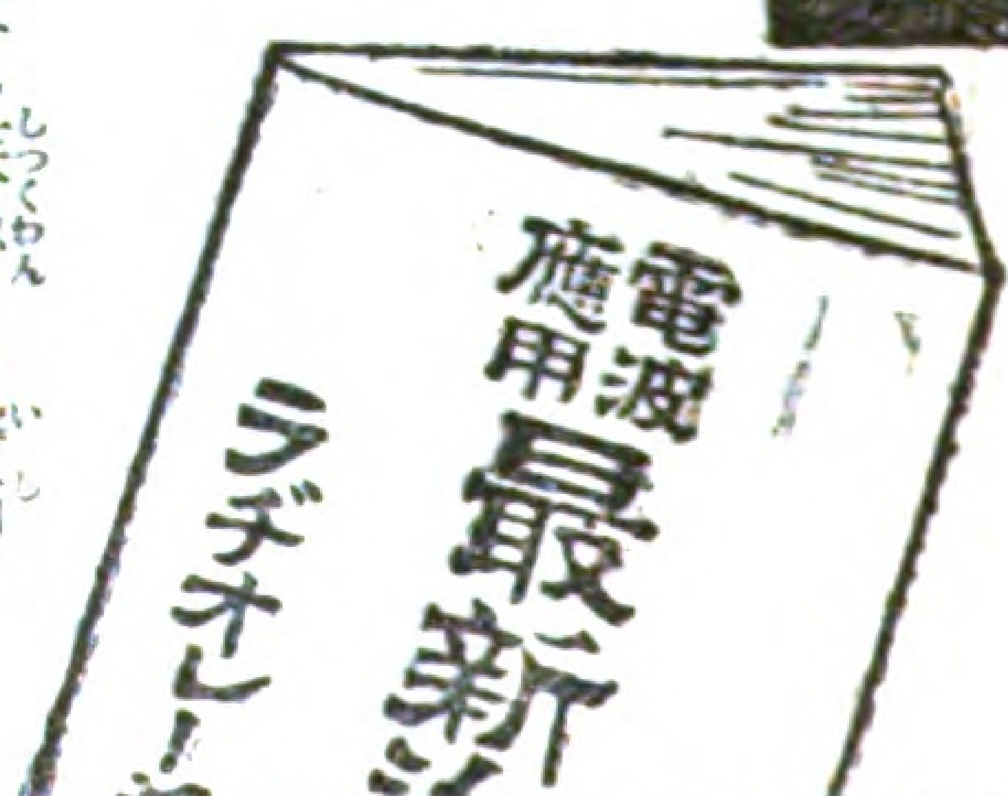
本器は二十世紀の大發明品で實に近世科學界の驚異である

日常の輕微なる疾患より醫藥の効なき難治の重疾をも快癒する

ラヂオレーヤーの不可思議なる靈癒力は日常の輕微なる疾患より醫師の見放した幾多の難症をも容易に快癒するの偉力がある、本器は米國の偉人エヂソン氏の發明に係り、強力なる電波を發生すると共に紫光線と**オゾーン**とを同時に人體に導入して、新陳代謝を旺盛にし、血行を良くし營養を增進する、本器を一度應用すれば激甚なる疼痛も忘るゝ事を得、肺、肋膜、胃腸等の內臟の機能を調整し、神經衰弱、不眠、頭痛等の神經系疾患を快癒し、其他病氣と名のつくものに對しては悉く驚くべき奏効がある。從來の藥物療法に慊らざる人は速かに本療法を試みられよ、必ず豫期以上の効果が得らるゝであらう。貴下は即時はがき一枚を投じて注文相な發せられよ。

（說明書は下方の要求券を切取り封筒に入れ二錢切手貼付投函されたし）





金參拾五圓

ラヂオレーヤー

東洋一手發賣元

ラヂオレーヤー商會

東京本郷一ノ九

電話小石川 六二四番 / 五八三二番

振替東京五二四七番

說明書無代進呈

Free Book Coupon

說明書要求券

左記へ說明書御送附を乞ふ

住所

姓名



今（二幕九場 幻想時代）

大森眠歩

時　現代（秋の深夜）

所　ヨーロッパ洲の或る港。

第一場　消燈せる闇黒の書齋。

第二場　日本の晴れやかな青野原。

第三場　（第一場に同じき闇黒）

第四場　東京、大レストランの廣間。

第五場　（第一場に同じき闇黒）

第六場　東京、見山家の座敷。

第七場　（第一場に同じき闇黒）

第八場　東京、丸の内附近の街頭。

第九場　（第一場に同じき闇黒）

人　見山誠雄（四十二三才、通譯家）

妻、さや子（卅七八才）

廿二三年前の見山夫妻。

十七八年前の見山夫妻。

十二三年前の見山夫妻。

多巳男（三才頃見山の息）

小曾敏郎（卅五六才、或る高等官の書記）

英國紳士（四十四五才、見山の友人）

其他、多勢。

[illegible]　多巳男（十六才頃）

河守（四十才前後、見山の友人）

三人の少女（日本人）

老衰せる放浪者の唄（日本人に非ず）

猛犬。

舞台は上下左右及び背景も全々黑。——但し背景には極く細い純白のリボン（或ひは紐）にて後期印象派風の素描を更に單化して『書齋』の氣分を表し、其のデッサンを具體化したる如き椅子（全體を黑塗りにして背景に用ひたると同じリボン或ひは紐にて簡單に輪廓をとる）を唯一脚のみ、舞台の中央に近い處へ置き、色彩は勿論、大道具、小道具等一切不用——但し背景（白線にて素描せる黑幕）以奥の舞台裝置は別。

（注意）第一場の『黒い舞台裝置』は此の劇を（始終）一貫して觀客の直接視內に置く。（但し、第一幕と第二幕との幕間に於いては觀客の直接視野を去ること勿論也）

——場面の變化沒現は黒い幕（觀客席に近き『黒い舞台裝置の背景』）の昇降に依つて、二重の舞台面を混交し、或ひは遮斷す。

——四十二三才の山一人は、此の劇の終るまで、一度も退場することなし。

——人物の『登場』『退場』は（三十七八才のさや子以外）凡て『明るき舞台』に於けるを意味す。

第一幕

第一場

背景のデッサンも全く見得ぬ舞台闇黒。（觀客席も暗し）

幕、靜に開く。

——間——

さや子（三十七八才、洋裝＝不斷着）火の點いた蠟燭を一本と、コーヒー茶碗（一個、盆に載せて）を持つて手下より登場。

舞台の中央へ來ると立ち停まる。觀客は此の時始めて此の蠟燭一本の淡い光りのみに依つて其處（舞台中央）に見山鐵雄（四十二三才、洋裝＝不斷着）が（椅子に腰掛けて）居る事を知る。

さや子は見山にコーヒーの茶碗を渡す。

――開――

見山（靜かに重い語調）「是れを、少うし飲んでごらん」

さや子。「わたし、ブランデーの入つたコーヒーなぞは、とても戴けませんわ」

見山。「さうすると、矢つ張り入つてるんだね？ 確かに入れたんだね？」

さや子。「……平生より少いことは少いんですけれど……」

見山。「お前にも似合はず、おかしな悪戯をしたもんだね」

さや子（動々狼狽）「いゝえ、悪戯ではありませんのよ」

見山（皮肉らしく）「だつて……怪訝いぢやないか（一と口吸る）これぢやあ全々、何にも入れないコーヒーばかりのやうだ」

さや子。「…………」

見山。「うむ、お前は……俺になるたけ酒を飲ませたくないんだね？」

さや子。「まあ貴方は、又そんな妙なこと仰言るんですか」

見山。「…………」

さや子。「今朝召上る時、あの大きな壜の底に、もうポツチリしきや無かつたつて事を貴方は御存じな筈ですのに……」

見山。「知らないよ」

さや子。「いゝえ、わたし確かに申しましたわ」

——間——

見山「うむ……うむ、さう言はれてみると……そんな氣もしないではないが……」（少しづゝ飲む）

さや子「お氣分に障ると不可いと思ひましてどんなに都合しましてもお酒ばかりは仰信る通りに差上げとりましたけれども（稍沈む）此の頃は轍くものが以前よりは少うし……少うし足りませんので、家賃や何かの定まつたものに拂つて了ひますと、その日〳〵が漸くですもの……」

見山「だが、此の頃は物價が大へん廉くなつたつて新聞に書いてあるよ、多分お前も讀んだらうが……」

さや子「日本の新聞と異ひまして、わたしには漸く拾ひ讀みぐらゐしか出來ませんけれど……新聞には何と書いてありましても、何處の店だつて少しも廉かありませんわ、稀に廉い店がありましても品物が不良かつたり、少かつたりしますから、どのみち同じこつてすの」

見山「…………」（少しづゝ飲む）

さや子「それでも貴方のお酒ばかりはと思ひまして隨分な思ひもしますけれど……（稍沈む）もう此の頃は、どうにもならなくなつて了ひまして……」

見山「此の前、俺が友達から紀念に貰つた時計と、お前の着物一枚賣つたんで、幾らかちがふだらう？」

さや子「あれはもう、疾くに殆んど貴方のお酒になつて了ひましたもの……お酒も近頃のやうに、以前よりはずつと餘計に召上りましては……お體の爲にも必ず良いとは思はれませんわ、まあ、わたしの辛いことはどうせ……どうせ忍耐しますけれども、おためにならない事を知りながら辛い思ひを耐えとりますのは、チツとも張り合ひがありませんで……わたしも、つい……いろいろな事を考へますの」

見山（重く太い語調）「いろ／＼な事つて……何を考へるい？」

さや子。「……それは申されませんけれど……」

見山。「俺に……隠しだてを爲るのあ廢して貰ひ度いね」

さや子。「いゝえ、決してそんな事は……」

見山。「ないと言ふんだね？……さうして現在の事實を否定するんだね？」

さや子。「…………」

見山（更に太い靜かな語調）「俺が斯う言ふのあ間違つてるかい？　酷いと思ふかい？」

さや子（氣分を換へて）「……ねえ貴方、電氣を點けませうよ、斯んなに眞つ闇では氣味が惡いぢやありませんか」

見山。「……うむ……だが……もう少し待つて呉れ……（語調更に重く）有りの儘の現實を見るつてこたあ寂しいよ……お、恐ろしいこつた」（空いた器をさや子に渡して俯向く）蠟燭一點の光り以外、舞臺依然として闇黑。さや子は闇の默迫に堪え兼ね、滅入るやうな氣分を振り拂ふ科。

さや子（悲痛に聲をひそめ）「わたし、こゝ暫く……見るものが悉く不順ですの」

見山。「暫く？」

さや子。「えゝ」

見山（不平らしく）「お前は……俺に隠しだてをするんだね」

さや子。「いゝえ、そんな……」

見山。「また、現在の事實を否定するのか？」

さや子。「…………」

見山。「早速醫者に診て貰つたらいゝぢやないか……どつと惡くでもなつてからぢやあ取り返しが付かないよ」

さや子。「……けれども……」

見山。「診て貰ふのはイヤかい？」

さや子。「いゝえ……貴方のお酒の方が……餘つ程大切ですもの……」（言ひ棄て、嗚咽と共に悲しく退場）

舞臺、再び全く闇黑。

何處よりか、聲のみ聽こゆ。

多巳男（十六才頃の聲調）「お父うさん……お父うさん」

見山（獨白）「おゝ、多巳男の聲によく似てゐる！」

多巳男。「お父うさん、僕です、多巳男です」

見山。「多巳男？　お前は、三年も前に……十三の齡で死んだ筈ぢやないか」

多巳男。「そんな事があるもんですか……（沈痛な聲調）それはさうと……お母あさんは隨分やつれましたね、あの見るからに陰氣な遣る瀬ない容子はどうです……またお父うさんの偏強も以前よりは餘程ひどくお成りですねえ」

見山。「お前は死……死んだ筈ぢやないか」

多巳男。「いゝえ、確かに生きて居ります」

見山。「少しは齡が違ふやうでも、お前の聲はハッキリと記憶えてゐるが、さう言ふお前は、一體、今、何處に居るんだ、お前が死んでからといふもの、眞實に寂しいお父うさんは、永い間、日本の國を遠く離れて消えちまひさうに、

旅から旅へと歩いてゐるんだ。到底お前の想像も及ばない遠くの外國から外國へと彷徨つてゐるんだ、今此の港には居るけれども、何時、又、何處へ行くのか全く目的もないのに、よくお前はお父うさんの居るところを知つてるね」

多巳男。「だつて僕はお父うさんの記憶の中に、ちやんと生きてるんですもの」

見山。「否、お前は死んだ。確かに死んだ、……煉瓦の赤い、冷めたい火葬場の敷き石を踏んで、此のお父うさんは最つ先にお前の骨ぬげをして、石のやうに黒い冷めたい骨甕を、しつかりと抱え込んで寂しい田圃路を歩いた時の光景を天空の色までも、はつきりと記憶えてゐる。……お前は確かに死んだ筈だ」

多巳男。「いゝえ、それはお父うさんの夢にちがいないのです。僕は此の通り、確かに生きて居ます、お父うさんの記憶の中に……」

見山。「おゝ、お前は必度……迷つてるんだな」

多巳男。「迷つてゐるのはお父うさんです、僕は生きてる事を堅く信じて居ます」

見山（動々昇奮して）「さうか、お前は生きて居たのか……だが、此のお父うさんの記憶には、お前の青褪めた冷めたい死骸が殘つてゐるんだ。お前は死んだといふ記憶が瞭然としてるんだ」

多巳男。「僕は此處に斯うして確かに生きて居ます……お父うさんは何をそんなに迷ふんです」

見山（愈々昇奮、急き付くやうに）「だが……否……さうだ……迷ふまい〳〵、お前は確かに生きて居る。さうだ、確かに生きて居る。……お父うさんは近頃、こんな嬉しい事はないよ、今、斯うしてお前と双人で語り合つてるといふことは、なんといふ嬉しい、喜ばしいこつたらう……現在お前が言つてる事は、此のお父うさんの夢であつてもいゝ、やがては消えて了ふ幻であつてもかまわない。兎も角、現在お前が生きてるといふなら此處へ來て、此の疲れ切つたお

父さんを、寂しい〳〵お父さんを、ぎゆつと抱き締めてお呉れ、抱き付かしてお呉れ、……お前が抱き締めて呉れるなら、此のお父さんの體は痺れてもいゝ、冷めたく成らうが、石に成らうが、そんな事はかまわない。木乃伊に成つてもいゝ。……おゝ、こんなに眞つ闇ではお父さんの居るところが分らないだらう。どれ〳〵直ぐに電氣を點けやう、お前の顏も見度い……とハテナ…だが……だがお前は明るくなつたら必度逃げて了ふだらう（愈々急しく）さうだ、必度逃げて了ふにちがひない。さうだ、矢つ張り此の眞つ闇がいゝ、さ、眞ぐに、直ぐに抱き締めてお呉れ、さ、抱き付かしてお呉れ……是れ此の通り裂けるやうに胸を開らいてゐる。兩方の腕を、ち、力一杯擴ろげてゐる、伸ばしてゐる（昂奮絶頂）さ、さ、直ぐに飛び付いて抱き締めてお呉れ、是れ此の通り、い、呼吸が切れさうだ、胸が、胸が裂けるやうだ、腕が千切れて……お前の方へ飛んで行きさうだ。さ、……こ、是れ、此の通り待つてるのに、何故、何故お前は、たつた一と言の返辭もして呉れないのだ（聲次第に衰ふ）さ、……た、頼む、……た、頼む……是れ此の通り……手を、手を伸ばしてるんぢやないか、……是れ、此の通り……此の通り……」

闇黒の中にどつたりと見山が倒れた物音に次いで、微かに、切に抱擁を頼み迫る見山の呻き聲が、失望したやうに斷續する。

——間——

見山（震へる聲で囈言のやうに）「……あゝ……あゝ……とう〳〵夢が醒めた……幻は消えたんだなあ……」

舞臺。依然として闇黒。何處にか更に別な聲。

河守。「おい見山君、なにを言つてるんだ……とう〳〵夢が醒めたつて？　何の幻が消えたんだ……？」

見山（稍々沈着、怪訝さうに）「なんだか……聽いた事のあるやうな聲だが……君は……誰だね？」

河守。「もう忘れたのか……俺だよ、君と一緒によく道樂をした河守だよ」
見山（獨り言のやうに）「……どうも怪訝しい、……君は今、日本に居るんだらう？」
河守。「居る」
見山。「矢つ張り……外務省に出勤してるんだらう？」
河守。「さうだ」
見山。「…………」
河守。「君は一體……今、何處に居るんだ……？　否、それよりも、生きてるのか死んだのか、三年ばかりといふもの全く消息も無いが……若し生きてるとすれば、何處に居て何をしてるんだ？」
見山（力の無い重い語調）「俺には今『生きてる』……と、はつきり答へるだけの自信がない。……恰度、藻屑のやうな生活をしてるんだ。……ぼんやりとして太平洋から、印度洋にも彷徨つた。眼の青い、毛色の變つた人間と太西洋にも流れた。さうして港から港へ渡り歩いてるんだ……（聲を落し）何處へ行つても……人間の住む世界にやあ、さう大して變りはないよ」
河守。「さうか、それで君の爲つてることたあ大概解つたが…併し君のやうに種々な國の原書が讀め、流暢な會話も出來る人間ア、さうたんとはないぜ、だからどうだい、……通辯なんか廢めちまつて、チツトあ割のいゝ生活を選んだ方がトクぢやないか、そのくらゐの泳ぎを知らない君でもなからうにさ……君は平生から少うしでも上役の者に對して要領よくやつてれば、更迭の時一緒に、クビになるやうな事はなかつたんだ。……あれから新しい連中も可成り這入つたがね、語學ぢや天才だなんて隨分騷がれてる奴でも君と較べちやあ丸で子供だよ。また、素晴らしい手腕家も居

ないやうだ。……それにね、近頃は大部上役の連中が變つたから少し調子よくやりやあ君なんさあ、いゝ加減にうまい汁が吸へること請け合ひだ、……若し君、生きてるんなら日本へ歸つて來たらどうだい……君が例のトクな椅子に座りや俺の黴臭い椅子だつて少しは新しくならうといふもんだ」

見山(重い口調)「俺は此の上、自分の生活や人格を汚したくはない、不具にしたくない。自分の意志を挫くやうな事は、とても俺には出來ない、……俺にだつて……さうだ、俺も男性であつてみれば、自分の女房や、またあ世間へ對するプライドもあるんだ。人格の誇りもあるんだ」

河守。「おい見山、金錢も無いくせに未だそんなことを言つてんのか、ちつぽけなプライドなんか棄てちまつて、大きな『人間のプライド』を摑んだらどうだ」

見山(重く)「大きな人間のプライドつて、どんなもんだ? どんなもんが大きな人間の誇りだ?」

河守。「自分で考へて見ろ」

見山。「その宿題は、ズーッと昔の若い時から……俺は考へ續けてゐたんだ。今でも考へてゐる、……けれども、だん〳〵解らなくなつて了つた。……君、若し解つてゐたら敎へて與れ」

河守。「うむ、敎へてやらう。……それは君の場合、今も俺が言つた通り、小さなプライドを棄てることつた。才順しく日本へ歸つて、社會的地位のある先輩に取り入ることつた。巧妙く機嫌を取ることつた。さうして君の秀れた學識と天才を伸ばすことつた。生かすことつた。……若し君の所謂プライドが眞劍なら……宇宙を支配する『時間』の力は總て、世界的の地位を君に與へるだらう、さうして君は人間としての生活を、生存慾を、更に、より偉大に深刻に擴張する爲に、精一杯努力して見たまへ、其の結果はどうなるか、君の妻君はなんと思ふか、世界中の人間はなんと思ふか、(語調更

め）此度は俺が訊ねやう、……如何だ、是れ以上に君としての大きな『人間生活の誇り』が、他に在るだらうか？」

見山（沈んだ聲）「……どうだかなあ……俺にやあ解らないよ」

河守。「なら、君の學識と才能と、博い深い經驗を藻屑のやうに棄てちまつても、君は惜しいと思はないか？」

見山。「……俺は小さいながらに、自分の力を信じてゐる……だから……運命とはいひながら……いかにも殘念だ」

河守。「さうだらう、ちやあ直ぐ日本へ歸りたまへ」

見山。「さうして狡猾く立ち廻れと言ふんだな……他人の機嫌を取れと言ふんだな？」

河守。「小さなプライドを棄てるんだ」

見山（斷乎として重く）「俺は……嫌だ」

河守。「…………」

見山。「他人に頭を下げるなんて……そんな、そんな馬鹿な事が出來るもんか……俺は、『自分の力』を信じてはゐる。……だが……『運命の力』に直接と向ふと、何だか……お、恐ろしくなつて……さうして俺は近頃、小さなプライドをさへ、失はうとしてるんだ。其の小さな誇りを……此の短かい人生に漸く、……やつとの事で持ち堪えてるんだ」

河守の聲、全く無し。何處にか痛烈な嘲笑起こる。

依然として舞臺闇黑。觀客席のみ、動々明るくなる。（但し、平常よりは暗し）

何處にか、三人の少女、涙ぐましき悲哀の音調餘韻長く、動々衰へる聲にて『青葉の笛』合唱。

『一ノ谷の軍敗れ、
討たれし平家の公達哀れ、

凄まじき須磨の嵐に、
聴こえしは是れか、靑葉の笛。

更くる夜半の門を叩き、
吾が師に託せし言の葉あはれ。
最後の際まで持ちし箙に、
殘れる衣や、今宵の歌。』

其の内の一人、『最後の際まで持ちし箙に』以下歌はず、猶も歌ひ續けやうとする双人に對つて寂しさうに聲のみ聴こゆ。

甲。「この歌、可哀さうねえ……他の歌ひませうよ」
乙。「なにがいゝでせう？」
丙。「……『春の遊び』にしませうか？」
乙。「今日、學校で習つたのがいゝわ」
甲。「そうねえ」
丙。「それが良いわ」

三人揃つて『雲雀』の歌を、此度は晴れやかに輕快な、オペラの調子を以つて朗々と合唱。

『朝日は御空に、光りは野邊に、

今こそ長閑けき　春日の朝。
雲雀は　草生の床より出でゝ、
歌聲高くぞ雲井に遊ぶ。

樂しき歌聲、嬉しき調べ、
菫の朝露　翼に散らし。
昇るよ雲雀は富士より上に
響くよ唱歌は　霞める空に。』

二番目の『樂しき歌聲、うれしき調べ……』のあたりから、少女の合唱と共に背景の黒い幕、靜かに揚がり始める。と共に闇黒の舞臺は夜が明けるやうに愈々光々と明るくなり始める。未だ歌ひ切らぬ内、一人が何處にか叫ぶ聲のみ聽こゆ。

少女の一人。「いらつしやいよ、向うへ行つて翻飛びしませう」

いづれも相呼應して歌ひ聲消ゆ。

背景の黒い幕、全く揚がり隱れる。

第二場

光麗目覺むるばかり清澄遠望。

其處は日本の春、晴れやかな青野原、遠くの地平線には美しき山脈、黎明に於ける雲の如く、朦朧として霞み、天空一面、淡き群青色に冴え渡つてゐる。青野原には人無けれども『黒い舞臺』の見山が唯一人 椅子の背後へ向いて恰も乘馬の如く跨がり、椅子の背の上へ兩腕を重ね、それに額を付け、俯伏してゐる側面の全姿が『野原の舞臺』から受ける輝かしい程の明るい光線に依つて、觀客の眼には殆んど影畫の如く、野原の手前に眞つ黑く、カツキリと浮いて見える。(觀客は此の時初めて舞臺一面の光線に接し、見山の姿の全輪廓を見たのである)

やがて下手より、廿二三年前の見山達雄(廿才頃)と、さや子(十四五才)共に相寄り添つて靜かに睦まじく登場。

達雄は輕裝な乘馬服に柔かな鞭を持ち、拍車の付いた長靴を履いてゐる。さや子は、長い袖の着物に緋縮緬の帶上げを胸高に、ふつくらと結び、蕾んだパラソルを柄長に持ち、髮、服裝の華麗な姿は明るい半玉の如けれども淑やかな物腰には奥床しい令孃の氣品が備はつてゐる。

双人は舞臺中央のあたりへ來ると達雄は立ち停まる。さや子も立ち停まつて周圍を見廻し晴れやかな表情で首を斜めに俯向く。達雄は微笑を含んで凝乎と、さや子の顏を暫時、見つめてゐる。さや子は羞かしさうな、併し嬉しさうにもぢ〱して居るが、やがて羞かしさに堪えぬ容子で笑みながら長い袖を擧げて達雄の視線を防ぐ。

達雄。「此處いらで少し休みませう」

さや子(低い微かな聲で)「えゝ」(漸く袖を下ろして身を輕く繕る)

達雄(草の上へ胡座かいて)「………」(キユツ〱と鞭で空氣を切る)

さや子はハンカチーフを敷いて謹ましやかに座り、達雄の視線を避けるやうにパラソルをいぢつてゐる。

達雄は、やがて仰向けに寢轉び、何を歌ふともなく、口笛を鳴らしたりする。何處にか射るやうな小禽の囀る聲も反

辯する。

暗い男（四十二三才の見山逵雄）漸く顔を擡げ、昔の自分達を眺める。

――間――

逵雄（廿才頃）は、ポケットから大きな世界地圖を出すと、今度は腹這ひになつて、故意に、さや子の近くへ、それを擴げる。そして、圖面のあちこちへ手の指をコンパスのやうにして觸れながら、何か獨りで頷いてゐる。其い顔には高大な希望が輝いてゐる。やがて、さや子にマッチ容器を渡して、シガレットを一本啣へる。逵雄の口元へ女の兩手が近付くと煙草に火が點く。

逵雄は更に大きい別な地圖を二枚出して擴げる。

逵雄。「貴女は世界中で、何處の國が一番好き?」

さや子。「…………」

逵雄。「もう大概の國の話しを爲て上げたから凡そ解つてるでせう?……地理も歴史も政治も風俗も……それから言葉の面白い區別もあらまし記憶えたでせう?」

さや子（笑みながら小さな聲で頷く）「えゝ……ドイツの言葉は、疊を爪で引ッ掻きますやうな發音で、……支那の言葉は……お風呂の流し場へ（可笑しさを無理に耐えて）空ッぽの桶を投り出しましたやうで……それから、エジプトは……」

逵雄（首を輕く横に振つて笑み）「否、……僕が今、訊かうと思つてゐるのは何時もの戯談とは異ふんです、今日は特別……（笑みながら更に優しく）ね? 何處の國が一番好き?」（さや子の顔を覗き込む）

さや子。「…………」

達雄。「？」

さや子。「……矢つ張り……日本が一番良いと思ひますは」

達雄。「あ、ウツカリ斷つとくのを忘れた、……日本だけ別。日本だけは例外にして、何處？」

さや子。「…………」

達雄。「ぢやあ唯、……行つて見たいと思ふ國は？何處？」

さや子。「……貴方のお話しでは面白いと思ひますけれども（氣憂さうに）彼方へ參りましてから、もしやの事がありますとねえ……心細くなつて了やしないかしらと思ひますは」（まぶしさうに達雄の顏を見る）

達雄。「でも、誰かゞ件いてりあ大丈夫でせう？」

さや子（羞かしさうに俯向く）「……（思ひ直して少し晴れやかに）貴方は？……何處の國がお好き？」

達雄（凛々しく）「僕は……僕はみんな好きだ」

さや子。「あたしも」

達雄（快活に輕く笑つて）「ぢやあ其の中で、何處が一番好き？」（さや子の顏を見つめてゐる）

さや子。「…………」（當惑の容子）

達雄。「？」

さや子（達雄の顏を斜めに見て）「貴方は？」

達雄（即座に）「貴女は？」

さや子（笑み、兩袖を口に當てる）「……」（更に笑み、俯向き、愈々當惑の容子）

小禽の射るやうな囀り遠く晴れやかに高く青野に反響すること頻り。

『黒い舞臺』の暗い男は憑かれたやうに椅子を離れ、昔の自分達へ、そろ〳〵近寄る。やがて『黒い舞臺』から『野原の舞臺』へづか〳〵歩み込んで行く。そして、昔の自分達の傍へ、ぼんやりと立つて、初々しい双人の顔を熟々と見較べる。

若い双人は、未だ見た事もな、陰氣な暗い男が傍へ近寄つて來たので、愈々警戒しながら氣味惡さうに見返して居る。さや子は少しづゝ達雄（廿才頃）の方へ、にぢり寄る。達雄は遂に、さや子を、しつかりと抱き締めて構ふ。さや子は達雄の胸に顔を埋づめる。

——間——

達雄（暗い男に向かひ、險相に）「貴方は……一體、誰です」（眼が鋭敏に光つてゐる）

暗い男（重い沈痛な口調）「そんなに……そんなに警戒しなくともいゝぢやないか……私はなんにも、お前達に害を與へる者ではないよ……（若い達雄に）お前に抱き付いて慄へてゐる、其の綺麗な若い女は（念押すやうに）さや子だ。さうして見山達雄といふのは、お前だ」

達雄（驚く）「？」（更に眼を見張る）

暗い男（悠々として）「何も、そんなに驚く事はないよ……私が今、名前を……姓名を明かす事は……なんの雜作もないがね……（高く仰向いて強く頭を振り、獨り言のやうに）お前達か……せ、折角、み、未來を……（ゆるく聲を落して慘く）樂しんでゐるのになあ……」（ガクリと首垂れて若い双人の姿を見較べる）

達雄（愈ゝ怪訝さうに）「貴方は、妙な事を言ひますね……何故……何故僕等を御存じですか……僕は、全く貴方に見おぼえがありませんが……？」

暗い男（思ひ切つたやうに、獨り頷く）「！……私の名は……（低い重い聲で）見山達雄といふのだ。……解つたかね！」

達雄＝廿才頃の見山達雄。貴方は……なんだか、油斷のできない人らしい……僕等が未だ若いのに狙け込んで（あたりを見廻し）……此の廣い原ッぱに誰も居ないと思つて貴方は、何か企んでゐるんでせう？」

暗い男＝四十二三才の見山達雄「お前は、うゝ、否、私は、否。お前は、何を途方もない事言つてゐるんだ」

達雄。「…………」

暗い男（深い溜め息をして重い口調に）「今から……恰度、廿二三年前の私が、それ、現在のお前だよ」

達雄（險相に）「僕等は、なんにも貴方に用がないんですから、彼方へ行つて呉れませんか……迷惑です」（氣味悪さうに暗い男の全身を見上げ見下ろす）

暗い男（寂しく笑み、柔和な表情）「うむ、私といふ人間は到底、お前達に信じられやう筈はない、……さうだ。信じなくともいゝ。信じない方がいゝのだ。……けれどもな、私はお前がよく知つてるんだ。でも、決して害を與へる者ではないから、安心しておいで」

達雄は暗い男の優しい態度を見て、警戒しながらも幾らか安心して、さや子に何か耳打ちする。と、さや子も幾らか安心したやうに靜かに顔を上げて達雄の方へ寄り掛かるやうにしながら怯えたやうに、暗い男の顔や體、眞正面から見上げ見下ろす。そして愈ゝ達雄にぴつたり寄り付く。達雄は胡坐かいた儘、そして片方の手は、さや子を抱ふやうに抱いた儘、片方の手を伸ばして地圖を引き寄せ、一枚々々疊み込んでゐる。さうしてゐる若い双人の態度を、ぼん

やゝを見てゐる暗い男は、感慨無量の裡にも何をか思案に耽つて居るらしい容子をして居る。

（やがて建雄は三枚共ポケットへ入れて了ふ。と、暗い男は寂しさうに、併し、温和な笑みを含んで、

暗い男（重く、ゆつたりした語調）「私は、お前達に……世の中で一番愉快さうな、是非とも行つて見たいと思ふ……併し未だ、名前の無い、不思議な國を教へてあげやうかね？」

建雄。「そんな國がありますか？」

暗い男。「在る！」

建雄（再び地圖を出して擴ろげながら）「是れ、みんな世界地圖ですが……其の國は何處にあるんでせう？」（其處へ三枚共擴ろげる）

暗い男。「否々……その國といふのは……どんなに綿密な世界地圖にも出てはゐない……でもな……其の國といふのは（兩手を大きく擴ろげて浮泳する如く精活に動かし）此の地球が、丸ごと腐つた上つ面へ黴のやうにへばり付いてる現在この世界中の、どんな國よりも……（深刻な表情）ずうつと大きくて、もつと美しいのだ」

建雄。「そんな國が在りますか？」

暗い男（どつしりした自信のある語調）「在る！」

建雄。「教へて呉れませんか、詳しく……？」

暗い男（柔和な表情に笑みを浮かべ）「うむ……では、そんなに竦んでゐないで……双人とも起つたらよからう」

若い双人は何をか頷きあつて靜かに立ち、裾なぞを輕く拂つたりして、暗い男の容子を見守つてゐる。

暗い男。「それから……もう一つ言ふ事がある」

達雄（耳を澄ます）「…………？」

暗い男。「さう更まる程むづかしい事でもないがね……斯ういふ事だ……」

達雄。「？」

暗い男（更に重い語調）「……藝術の悲劇といふものは、靜かに眺めて居る事が出來る……だが……生身に食ひ込む、現實生活の悲劇は、……人間の精神を、或ひは肉體を容赦なく引ッ掴んで休む暇も與へず、考へる暇も與へずに追つて〳〵追ひ廻すものだ。……さうして終ひには、もうスッカリ疲れ切つて、息も吐吸ない程に藻掻いて〳〵ばつたり倒れた時……あの長い劍のやうな……汽車のレールを眺めたりな、また、毒藥に憧憬れたり（兩手を翼のやうに擴げ）大きな闇い（一段と低い重い語調）どんよりとした海の底を…………じいッと想像したりしてな……（深い溜め息をして）まあ〳〵話しは悠然と後刻にして……うゝ……兎も角、私と一緒に此方へおいで……此のう、世の中で一番愉快さうな、是非とも行つて見たいと思はずにはゐられない國を……詳しく教へてあげやう」

達雄。「そんな國が……眞實に在りますか？」

暗い男。「在る！　確かに在る！……若しお前達が其の國を觀たら、お前達の希望は、世界で一番華やかに、愉快に……さうしてお前達の生命は、大ネーチュアー……宇宙と同じくらゐに成るだらう（力強く）否、斷じて疑ふ必要はない。それにちがひないのだ。……お前達の希望は未だ、ほんとうに華やかではない。そして小さい、上つ面を滑つてゐる…さ、もつと此方へおいで、私に從いておいで……其の國を見せてあげやうから」（言ひ終ると『黑い舞臺』の方へ向き直つて靜かに歩き出す）

達雄は誘惑されたやうな眼付きをして、暗い男に從ふ。さや子はしつかりと若い達雄の手を握つて『黑い舞臺』の方

へ、そろ〳〵這寄る。――と、暗い男は、くるつと身を返して笑みながら、さや子の手を取らうとする。さや子は吃驚して若い達雄の影へ身を避け中腰になつて若い達雄の腕に縋る。慄へてゐる容子。

暗い男（柔和な表情）「三人仲良く……手を引かれて行かうぢやないか」

若い達雄は、さや子に何か囁く。さや子は首を横に振る。

達雄（暗い男に向かい）「どうしても嫌ですッて……」

暗い男は失望したやうに首肯いて『黒い舞臺』へ若い双人を導く爲に自分が先へ立つて『黒い舞臺』へ悠然と戻る。と、若い双人が（『黒い舞臺』に間近い『野原の舞臺』に）立ち停まつた事に氣が付き、振り向いて靜かに優しく手招ぎする。

若い双人は怪訝さうに『黒い舞臺』を覗き込むやうに見廻してゐる。

さや子（怯えた聲で若い達雄に）「…あたし恐いわ……そんなところへ行かないで直ぐに歸りませうよ（揺つてゐる若い達雄の手を急くやうに細くゆすぶる）ね？　早く歸りませうよ」

達雄（暗い男に向かひ、不安らしく）「僕………此處で失敬します……」

暗い男（意外らしく笑みながら無雜作に）「お前達は何をもぢ〳〵してるんだ、さ、早くおいで、さ、早くおいで……早く」（頻りに大きく早く手招ぎする）

けれども若い双人は互にしつかりと抱擁して何をか用心深く囁いては頷き合つてるばかりで、微塵も暗い男の方へは來さうな容子がないので、暗い男は躍起となつて連呼するが、何の效も無く、其の内に黒い幕（黒い舞臺の『黒い背景』）は靜かに降りて、遂に全く、『明るい野原の舞臺と若い双人の姿』は闇の中に消えて了ふ。

第三場

第一場に同じく消燈せる闇黒の書齋である。闇の中には見山（四十二三才）一人、力無い容子をして椅子の背の上に片肘を載せ、ぐんねりと寄り掛かつて居るが、闇黒の爲に、觀客の眼には全く見得ない。（斯うしてる見山の姿は、軈て開く可き第四場の明るい舞臺に依つて、カツキリと浮き出すのである）

——閉——

黑い幕（黑い舞臺の「黑い背景」）靜かに揚がる。

第四場

第二場より五箇年程經過してゐる。

其處は大レストランの廣間に於ける盛大なる結婚披露の宴會場である。

新郎新婦の親戚は勿論、朋友知人等無數の男女、和洋絢爛相混交して晴れやかな今宵に始まる見山夫妻の一對を取り卷き、祝盃は擧げられ握手は織られ、歡聲祝辭は輝く大燭光に華やかな人の渦卷きを溶かしてゐる。——此の舞臺の中心人物であり新郎である見山精雄は二十四五才の勇壯血氣な若紳士。髮は漆黑に分けられ、洋裝の禮服折り目正しく純白のカラーが光つて見える。顏は歡喜に輝いて繁忙な祝禮の應接に絶え間なく手を、口を、體を動かしてゐる。花嫁たる新く廿才頃のさや子も歡喜の羞恥に包まれて髮は浮き立つやうな櫛笄の高島田に結ひ上げ、顏の化粧も服裝も女の生涯に於ける綺羅の絶頂を今宵に集めて群がる華麗の中にも一と際華やかに明るく引き締まつて目立つ。——

暗い舞臺から其の光景を眺めてゐた暗い男は誘惑されたやうに立ち上がつて、其の宴會場へ、うか〳〵と歩み込んで行く。と、其の見窄しい落魄の姿が明るい方へ歩み寄るに隨つて愈々不調和の對照を舞臺に强める。綺羅美やかな祝宴の群がりは、此の怪しげな闖入者を諦見して以心傳心、場内は忽ち水を打つたやうに靜まり疑惧に光つた多くの視線は俄かに此の暗い男へ集中す。

——間——

暗い男は蹣跚くやうに立ち停まつて沈痛な併し重い吃るやうな語調で。

暗い男＝四十二三才の見山逹雄。「私は決して……怪しい者ではありません（其處に居る若い逹雄の姿を凝乎と見て指差し）……此の男が私で……私は此の男自身にちがひないのです……うゝ今から恰度、十七八年前の私が……此の男自身にちがひないのです」

逹雄＝廿四五才の見山逹雄。「僕は、君のやうな者に全く關係は無いが……今夜は何を强請りに來たんだ？（多衆を省みて）皆さん……此の男は五六年も前から執拗く僕等に附き纒つてるんです。……（此度は暗い男に向かひ）君は今夜……何が欲しくて來たのか言つてごらん、呈上てもいゝもんなら、どんなに遠く行つても從いて來るんでなんでもあげやうぢやないか……そのかわり今後は、どんな場合にも絕對に僕等の傍へ來ないといふ約束をして貰ひ度い……して、其の約束を固く誓つて貰ひ度い」

暗い男（力强く重く）「其のかわり、今、私が欲しいと言ふものは……必ず呉れるだらうなあ？」

逹雄（氣强く）「その欲しいと言ふものは？……一體、なんだね？」

暗い男。「それッ、其のお前の胸に波打つてる若い、鮮やかな（强く、ハツキリ）血を貰ひ度いのだ……押さへても押さ

へ切れない（指差し）共の心臓から溢れる、若い生命の血液を、飲まして貰ひ度いのだ。が、全部とは言はない（其處のテーブルに置いてある洋盃を一つ取つて）……此の小さいコップへ、二三杯でも結構だ、否、唯の一杯でもいゝ（コップを若い逵雄の胸元へ差し付ける）……こんな小さな杯に唯一杯でもいゝのだ」（若い逵雄の顔を凝乎と見詰めてゐる）

満場の群集、恰も人形の如く、咳一つ無く、足音一つ無く、片唾をのむ。

――間――

逵雄（力強く、沈着な言動）「よろしい！」（鷹揚に頷き、ポケットからナイフを出して、キラリッと刃を剝く）

満場、鼎の煮えたる如く俄かに驚きの聲を擧げると同時に多勢で若い逵雄の腕を、體を犇めき抑さへる。そしてナイフを奪はうとしても逵雄は固く握つてゐて、どうしても離さない。が、體、腕等は自由に動かし得ない。

逵雄（依然として力強く沈着な言動）「大丈夫です皆さん、どうぞ離して戴き度い。そして直ぐに醫者を呼んで戴き度い…傷口へ付ける薬品と、それから、繃帯を忘れないやうに……（多勢に押さへ付けられた儘、こんどは暗い男に向かひ）君は醫者が來るまで待つてゐて與れるだらうなあ？」

暗い男（靜かに首肯いて）「む！……待つて居る！」（言ひ終ると直ぐにさや子の方へ近寄つて行く）

さや子は驚いて逃げる。

多勢の人も驚いて、さや子の身を幾重にも圍んで嚴重に警護する。

さや子を守り、逵雄の腕を抑へたり身邊を圍んでゐる群集は、思ひがけない驚愕の連發に戰々兢々としてゐる。多くの婦人達は唯もう、おど／＼うろ／＼してゐるばかり。

其處へ、レストランの傭人が五六人、手に手に得物を携へて騒がしく登場、若い達雄が制めるのもきかずに暗い男を見付けると寄つて集つて引ツ捉へる。暗い男は怒りを含んで辯解するが、そんな事にはかまわず蹴つたり罵つたり小突いたりして次第々々に『黒い舞臺』の方へ押し付け押し出して最後に(『黒い舞臺』へ)亂暴に突き倒す。

黒い幕は靜かに降り始める。

宴會場の多勢は暗い男の姿を凝乎と見守つてゐる。若い達雄の手には依然としてナイフがキラ〳〵光つてゐる。

暗い男は痛さうに、あちこち押さへながら漸く蹌踉き立ち、多勢の人達へ向き直り、逆襲の態度を以つて二三歩ツンのめつた際どい時、黒い幕は降り切つて了ふ。(暗い男は獨り『黒い舞臺』へ隔離されて『祝宴の舞臺』は全く隱消して了つたのである)

第五場

舞臺は第一場に同じく闇黒の書齋。

觀客は闇の中に昂奮した見山(四十二三才)の聲のみ漸く聽き得る。

暗い男‖四十二三才の見山達雄「あい痛う……唯……唯一杯でもいゝから……あい痛……唯……一杯でもいゝから……紅い血を、若い血を飲み度い……」(呻きながら、ばつたり倒れる)

觀客は其の倒れたらしい音のみ聽く。

第一幕、了。

第二幕

見山が結婚してから約五箇年後の冬の夜。家外には雪が降つてゐて、既う四五寸は積つてるらしい氣配――環境は深閑としてゐる。

『黒い舞臺』には暗い男（四十二三才の見山諒雄）が倒れてゐる。第六場の幕が開くと影法のやうに黒く、カツキリと浮き出すのである。

第六場

幕（黒い舞臺の背景も同時に）開く。――勿論、第二幕目の最初也。

見山宅の座敷。

舞臺中央に贅澤な火鉢を挾んで來客の小菅敏郎（卅五六才）と相對してゐるのは十二三年前の見山諒雄（卅才頃）で、右に座つてゐる見山（卅才頃）の近くに多巳男（三才頃）が一人、轉寢してゐて稍々派手な絹布の小掻卷が掛けてある。其の枕元には、二つ三つの小さな玩具と四五冊の畫本が散らかつてゐる。

双人は今、頻りに密談の最中である。

見山（新しい卷煙草に火を點ける）「……では、さういふ事にしませう……料理屋は他處にして綺麗な若い奴を一人に目から鼻へ抜けるやうな年増を一人と、それに半玉を五人ばかりと……」

小菅「それから待合ですが……私は御本尊がお馴染の待合を漸く探り當てましたがね……よく考へて見ると却つて……おなじみでない方が具合がよさゝうな氣もしますが……どうしませう？」

見山（考へる、そして首肯く）「さう！……斯ういふ場合にやあ、却つて余ッきり知らない待合の方がいゝでせう」

小菅。「えゝと、それから（考へる）……もう手落ちはないでせうか……？」

見山。「斯う手順が定まつたら大丈夫でせう」

小菅。「……けれども……料理屋と藝妓も半分づゝ持たうぢやありませんか……相當に賢りますからねえ」

見山。「否、そこんとこあどうぞ御心配なく、ほんとに……」

小菅。「でも……待合の方の費用は夕カが知れてますんで……私の方がちツとムシがよすぎまして……」

見山「否、大丈夫……私が今日あるのも、みんな貴方のお蔭ですもの……（獨り言のやうに）えゝと、それから現金の分と……（言ひながら立ちあがり、戸棚より手提金庫を出して來て座り直し、金を出すと又、錠を下ろし、出した金を數へて小菅の方へ差し出し）では双人名前で、よろしく何卒……」

小菅。「承知しました（受け取つた金を數へる）……はあて、五百圓を半分ですと……之れは五十圓だけ多いやうですが（數へ直して）矢張り三百圓ありますね」

見山。「左樣、失禮ですが、エ、ちち二百圓だけお出しを願へば結構です」

小菅（自分の後頭部を輕く叩きながら）「そりや……あんまりお氣の毒で……」

見山（會釋して）「どうぞ、さういふことに願ひませう」

小菅（どうも濟まないといふ表情）「……さうですか……」（俯向き、何か考へてゐる。隱し切れぬ喜悅）

『黒い舞臺』の暗い男（四十二三才の兇面獰猛）は、そろ〳〵と立ち上がり、忍ぶやうに併し鷹揚に『座敷の舞臺』へ歩み込んで見山（卅才頃）の背後へ膝が摺り付く程に接近して棒立ち（直立）の儘、双人（見山と小菅）を直下に見下ろしてゐる。

小菅は考へ深さうに俯向いた儘、兩手を火鉢の傍へ懸けて火箸の先で灰を掻らし始める。

小菅（俯向いた儘、低い狡猾な聲調）「あの御本尊ときたら見掛けは鎧でも着てるやうですが（巧みに『袖の下』を暗示しながら）……どうして〳〵（聲調を氣取り）御新任のお祝ひとして心ばかりを、チナ調子で自働車へ乘けちまやあ既う此方の自由でさ、（殺害して「止め」を刺すやうに火箸を灰に突き刺し顔を上げて内心吃驚）……見山君、君の背後に又、……例の男が……」（暗い男の顔を凝乎と見上げる）

見山（卅才頃）は直ぐに振り向くと自分の顔が暗い男の衣服に觸つたので内心非常に驚き、座を換へる。暗い男は依然として直立の儘、双人（見山と小菅）を見返し見下ろして居る。

――間――

暗い男（泰然として小菅に）「君い、歸りたまへ、直ぐ歸りたまへ」

見山（暗い男に向つて險しく）「一體、君は何だ？　君は何の用があつて他人の家へ默つて上がり込んで來たんだ？（暗い男の顔を凝乎と睨みながら、何をか暫く考へて後）さうだ！　君はテツキリ、私の心に巣喰つてゐる……幻にちがひないのだ……私は今まで隨分此の事を疑つたり否定したりもしてみた。……だが矢つ張り……私の幻像にちがひないのだ。……おいもうい丶加減に附き纏ふのは廢して呉れ……十年越しの執着とは、あんまり酷いぢやないか」（强いて戰慄を抑へる）

暗い男（見山に向かひ重々しい語調）「お前こそ、俺の幻なんだ。……其處に坐てゐる多巳男は俺の子だ。そうして（腮で小菅を指し）其處に座り込んでる男は俺を誘惑する恐ろしい魔物だ。……（小菅に）君い歸りたまへ、直ぐ（肉迫）さ、直ぐ歸りたまへ」

小菅は暗い男の手が觸れた自分の胸や肩先などを黴菌の附いた砂でも拂ふやうに吹いたり拂つたりしながら、遂には起ち上がり一步二步と千退りして氣味惡さうに警戒の眼を見張つてゐる。が、猶も暗い男に追迫されて後退りに背後の方へ手さぐりしながら更に遂に座敷を出る。

暗い男は見山(三十歳頃)の傍へ戻る。

暗い男(斷然たる命令的態度)「今の相談を、覆へして了へ」

見山(內訓)「君は……飽くまでも私の生活を防害するんだな」

暗い男(折り返す如く)「と、俺がお前にさう言ひ度いのだ。……お前の陰險な權謀術數は、俺の人格を腐らして了ふ。お前こそ俺の生活を防害する毒蟲ぢやないか、さ、今の相談を根柢から覆して了ふと、斷然、俺の前に誓へ」

見山「私は今日まで、君の爲にどんなに煩惱んできたかわからない、……けれども、非常な勇氣を以つて打ち克つて來たいだ。さうして漸く現在の地位にまで漕ぎ着いた私が……今更時代後れな君に、從はう筈はないぢやないか(力強い語調)現在私の生活は、此の私自身にとつては、一番大切な生活なんだ。と、私は誓つて斷言する」

暗い男(兩拳を固め、首を前へのめし)「お前は……な、なんといふ下等な奴だ、なんといふ卑劣な、黑辣な陰猾な奴だ……世に有りと有らゆる現象は、な、みんな公明に享樂すべきものだ。……それをお前のやうに世間に隱れて賄賂を使つたり、腹にもないお世辭を時いたり、他人の機嫌を取つたり、いやしくも男子たり紳士たる者が、なんといふ態だ……お前はそんなにしてまでも地位が欲しいのか? 名譽が欲しいのか?……さうして贅澤がしたいのか?……少しは自分に愧ぢろ」

見山(勇氣を鼓し、痛烈な併し輕い嘲笑)「ま、なんとでも言ふがいゝさ……君のやうな生き物は、ヨク田舎廻りのお芝居

に出て來るよ、今の長つたらしい白も、泥臭い青年達が聽いたら、さぞ喜ぶだらう……が、そいつあ大都會の眞ん中へは通用しないよ。……君のやうに時代後れな、のろい面倒臭い者を相手にしてる程、私には馬鹿らしい無駄な閑暇は、チツトも無いがね（重く）どうしても私が扶養しなければならない妻が在り、子供が在り、さうして一家を支へる主人としての重い責任だけは、がつちりと在るんだ。……此の物凄い渾沌とした現代生活の、どん底の渦巻きの眞ツ中心へ飛び込んで、自分の生活を切り開らいて行ける力と自信だけは、確かに在るんだ。持つてるんだ。」

暗い男。「…………」（俯向く）

見山「意氣地の無い君なんさあ、絶えず自分の生活に押し流されて、喘いでるぢやないか、……それで苦しまぎれに、昔の甘い夢を戀しがるんだ。……さうして君のやうに、少しばかりの文字を嚙つて悟り顔な天狗野郎は、永劫の眞理とか、永遠のなんとかを睨んで、空想したり、達觀したり、上眼使つたりしてりあ、いゝお慰みになるだらうよ。だがちつぽけな……『人間』が拵へた宗教や、哲學や、科學や、道德や、藝術なんぞ、なんの足しになるもんか。……君が謂ふ『公明』とは一體何だ？何よりも公明な太陽に、此の『現代』を照らしてるんぢやないか」

暗い男（吃る）「……」（見山の顔を見詰める）

此の双人の態度を物影に隱れて覗いて居る少官の姿は、觀客の眼に見えてゐる。

見山（猶も暗い男を嘲る如く）「私は生存競爭の荒浪の中に、勇ましく鬪つてるんだ。……現代に生れて、現代生活を嫌つたり、逃げたり、回避したりするやうな貧弱な卑怯者に、他人の生活を罵倒するだけの資格があるか、人格を云々するだけの天稟があるか」

暗い男。「では……（肉迫）俺の生活が墮落して、腐つても、お前はなんとも思はないのか？」

見山（殊勝として）「よく聴いておいで、……一匹の『尺取り虫』が枯れ枝に化けたり、一羽の美しい『蝶』でさへ木の葉に化けたりするぢやないか。『人間』に狡猾や欺瞞や權謀術數が有るのは當然といふよりも、寧ろ無い者は不具者だ。けれども、眞實にそんな不具者が世界中に唯一人でも居るだらうか……君のやうな生活の劣敗者が、世に有らゆる現象を公明に享樂しやうなんて……『引かれ者の小唄』つて事を君は知つてるかね？（重い低い嘲笑。更に冷笑。そして言葉柔らかに）……また冬は寒いつて事や……眞ツ闇に日が暮れるから又、夜が明けるだんつて事を、君は知つてるかね？」

暗い男は突然、見山の胸元を掴んで押し伏せやうと爭ふ。

小背は驚いて飛び出し、若い見山に加勢する。

不思議にも全く音響の聽こえぬ、而も悽愴な三人の格鬪が始まる。——暗い男は遂に、双人の爲に撲ち伏せられ、四本の手に壓さへ付けられて了ふ。

暗い男（喘ぎながら重い口調）「……お前達は……俺をどうする心算だ」

小背（しつかり壓さへた儘）「君は、どうして亂暴な眞似をするんだ」

暗い男（重く）「俺を……どうするつもりだ」

見山（物狂ほしさうに壓さへた儘）「君は……君は、なんと言つても、私の幻像にちがひないのだ。幻なんだ。」……さう執拗く附き纏ふのは廢して呉れ。私を此の上懊惱ますのは廢して呉れ、免して呉れ、頼む……」

暗い男（力の籠つた重い語調）「だから……俺をどうしやうといふのだ」

見山（壓さへた儘）「直ぐに消えて呉れ、頼む、直ぐに消えて呉れ」

暗い男「お前が……俺の幻ぢやないか」(身を藻搔く)

見山(猶も力を增して壓さへ付ける)「……」

暗い男(片腕を引き拔き抵抗する)「離せツ」

見山(手を捉へやうと敏速に爭ひ齒軋り)「こいつ……抵抗するかツ……」

暗い男(力一杯に身を藻搔いて)「離せ……離せ」

見山は小實に何か耳打ちする。小實は直ぐに頷く。と、暗い男の兩手をぐつと力一杯に片膝も加へて壓さへる。見山も矢張り片膝は暗い男を壓さへてゐながらも素早く自分の懷中より携帶用の注射針(魔醉藥)を取り出し、小實と協力して暗い男に注射する。そして猶も壓さへ付けてゐる。

――間――

やがて魔醉藥の爲めに、ぐつたりと眠りに落ちた暗い男を『黑い舞臺』の方へ押し轉がした双人(見山、小實)は又、火鉢を挾んで座り直し、眼と眼で何をか頷き合つて居る。

倒れて居る暗い男の姿は『座敷の舞臺』の光線に依つて、觀客の眼には眞つ黑い影畫のやうに、カツキリと浮いて見える明るい『座敷の舞臺』に相對してゐる双人(見山と小實)は、或る不安に襲はれながらも、其の表情には勝利と凱歌の喜びが仄めいてゐる。

――間――

小實(思ひ出したやうに低い聲)「馘になつた連中は、今頃どうしてるでせう……妻子は有り金錢は無しつて者は、氣の毒てや氣の毒ですが……」

見山。「みんな自業自得ですよ、自縄自縛ですよ、馘られてから血眼になつたつて追つ付くもんですか」

双人は無雜作に輕く嘲笑し冷笑する。

小菅（態度を改め、腰を浮かし）「では……さういふ事に……とんだ失禮しました」

見山。「まあ未だいゝぢやありませんか」

小菅（立ちあがる）「え。又ゆつくりお邪魔にあがります」（二三歩歸りかける）

見山。「……さうですか……ぢやあ其處までお供しませう」（手を拍つ）

さや子（上品な丸髷に赤い手柄＝廿四五歳）登場。

小菅の今、歸宅せんとする容子を直覺。

さや子（愛想よく小菅に）「まあもう少しおよろしいぢや御座いませんか、未だ時間も早うございますのに……いつからしてもちつとも、お構ひ申上げませんで……」

小菅。「否、どういたしまして、てまいこそ……」（相手の隙を狙ふやうな眼付）

見山も立ち上がつて、さよ子に外出の身仕度を命令ける。さや子、明るく頷いて、いそ／＼退場。

小菅。「このお寒いのに何處へ？」

見山（輕く微笑して落ちついた口調）「……あんまりしやもいですから、しやもでもつゝきながら一杯やらうぢやありませんか、まだ、時間も早いんですから」

小菅（狡猾らしく）「ほ、そりあ結構ですが相憎と今日は小錢を持つてませんから、又こんどにしようぢやありませんか」

— 4 —

見山（無雜作に輕く）「ナニ、御心配は掛けませんから御迷惑でも如何です？……お急ぎの御用さへ無ければ……」

小菅。「否、別に用はありませんがね……用はありませんが……」

見山。「なら御迷惑でも是非……。どういふもんですか私は相手の無い酒は飮めないんです。面白くないんですね、妙に斯う鬱ぎ込んぢまふんです……さうかつて一々藝者をあげる程のお大盡でもありませんし（微笑）……どうもとんだ御迷惑ですね」（言ひながら待ち遠しいやうに振り向いたりする）

小菅（喜悦）「なんで迷惑なもんですか、いつも御馳走にばかりなりつぱなしで……」（後頭部をさする）

見山（仰山な否定の表情）「否、私こそ平生からお世話にばかりなりつぱなしなんですから、さう仰言られると却つて恐れ入ります」（言ひながら猶も振り向き、輕い口調で妻に催促する）

さや子の聲のみ聽こゆ。「はひ〳〵たゞ今」やがて外套、帽子、襟卷等を持つて登場。

さや子（双人に）「どうもお待ち遠うさまで御座いました（見山に）外套のボタンが一つ緩んでましたから附け直しとりましたの」（言葉を切らず小菅にも愛想よくお世辭を使ひながら見山の身仕度を、あれ、これと手傳ひ始める）

やがて身仕度が濟むと見山は、寢てゐる多巳男（三才頃）の傍へ近寄り、手を伸ばし指の先で小さな頬を輕く、さする眞似をする。小菅も多巳男に近付いて覗く。

さや子（笑みながら極めて靜かに）「今、眼が開きますと又、貴方のあと追つて一と騷ぎしなけりやなりませんから……ほんとに、およしなさいよ」（そつと手を出して優しく制める）

見山。「近頃、性質の惡い感冒が流行るつてえから、ちやんと寢かしてやつた方がいゝよ」

さや子（嗜めるやうに）「まあ貴方、お客様がお待ちになつてらつしやいますに……」

小菅（遠慮らしく）「否、別に用は無いんですから（矢張り多已男の顔を見てゐる）どうです此の頬ぺたは……恰で林檎のやうぢやありませんか」

見山は満足さうに頬笑みながら腰を伸ばし手袋をはめる。

やがて双人はさや子に見送られて三人共に下手へ退場。

此の時、ふと我れにかへつた『黒い舞臺』の暗い男は再び漸く立ちあがつて蹌踉めきながら、そろ／＼と「座敷の舞臺』へ歩み込んで行く。そして多已男が寝てゐる傍へ漸く膝をつき、我が子に對する愛熱の籠つた身振りをしながら頻りに輕くキツスしたりしてゐる。

玄關らしい方からは聲のみ聽こえて來る。

さや子「小菅さんがお外套を召したお姿は、恰度わたくしの兄に酷似で御座いますわ、ま 不思議ですこと、其の帽子のお色氣までが、酷似なんで御座いますのよ」

三人（見山、小菅、さや子）の低い作り笑ひする聲が聽こえる。

見山（輕く落ちついた口調）「人樣をつかまへてそんな失敬な事を言ふ奴があるもんか」

小菅が笑ひ、さや子が笑ひ、見山も一緒に三人また笑ふ。

小菅（氣分を轉換するやうに）「お、、先刻よりか大へん小降りになつたやうですが……五寸は確かに積もつてますね……や、どうもお邪魔しました」

さや子「どうぞお氣をお付けなすつてらつしやいまし、ごめんください……」

双人（小菅、見山）は外へ出たらしい氣配、――間もなく、さや　、手に光つてゐる指環を氣にして引りかから　敷

へ戻る。(登場)舞臺中央へ來ると多巳男の傍に暗い男が座つてるのに眼を留め、びつくり立つ竦んで一歩退き、片手は頬に、片手は胸に、押し當て、恐怖の眼をキツト見開らいてゐる。怯え戰いてゐる。

座つてる暗い男は身を捩つて、さや子に向かひ、平生自分の妻に對する如く。

暗い男(多巳男とさや子を見較べ靜かに)「……此の坊主は斯うして、確かに生きてるんだ。この可愛らしい無邪氣な顔はどうだ。此の唇は恰で、女の子みたやうぢやないか、ホレ、よく隣りの妻君が、此の口はお前ので此の頭腦の格好は俺のだと言つたが、此の眉間に開らいてる新世界の匂ひは既う俺にも前にも無い。此の新しい生命が、此の生き〳〵した可愛い坊主が、後十年ぐらゐで死んぢまふなんて、誰が知つてるだらう……幾年の何月何日の何時何分何秒まで俺には神のやうに詳しく解つてゐても、それが爲に俺はどうして偉いと言へるだらう、……どうして幸福だと言へるだらう? おい、お前は、どうしてそんな隅に、そんな妙な顔付きをして竦んでるんだ? さ、また急に起こして泣き出すと困るから、お前が先い、そうツと乳のましてやつて呉れ、そして俺は今、この坊主を、ぎゆつと抱き締めて、熱いキツスをしてやるんだ。さ、直ぐ一ぱいのましてやつて呉れ、直ぐ……」(蹌踉めき立ち上がつて、さや子の方へ急迫に催促しながら歩み寄る)

磁石の針の兩尖端が反對にめぐる如く、さや子は急ぎ逃げ離れて我が子(多巳男)の身を庇護ふ。

今度は暗い男が、多巳男に離れ、竦然と立ち戰く。

さや子(恐怖)「主人が不在の……ましてや女一人の家へ(おど〳〵震へながら)……ほんとに、わたし……どうしたらいゝでせう……」

暗い男。「……お、俺とお前とは、夫婦ぢやないか」

さや子。「……貴方は、十年も前から其のお服裝で、同じやうなお齡で、まあ氣味が惡いつたらありやしない……貴方はそんなに私達に附き纒つて、了ひに私達を、どうなさるお心算なんです」

暗い男（重い口調）「どうもしやしない……唯、俺の言ふ事をきいて呉れりあいゝんだ」

さや子。「お化粧してれば鏡の中を覗いて、卑猥らしい、氣味の惡いこと仰言るし、此の子を見れば何時々々に死んで了ふといふ事ばかり仰言つて……そんな事一々きいとりましたら、それこそ、それこそ……」

暗い男。「お前は俺の女房ではない……といふ證據が、どこにあるだらう、お前はどうして現在の事實を否定するんだね？ 俺もお前も現在生きてるんぢやないか……さうしてお前とは離縁したといふわけでもないから、俺がお前の昔の面影を呼び起こして、今の俺には氣に入らない生活を、更めて貰はうといふのに……少しも不思議はなからうぢやないか」

さや子。「そんな事は兎も角、早くお歸り下さいな」

暗い男（重く）「今夜はお前に、尋ね度い事があるんだ、といふのは他でもないが……どうも俺にはお前の心の奥の底に、或る秘密な思想が潜んでゐるやうに思はれてならないんだ……それを聽いたら直ぐに歸らう……俺は昔のお前達が何處のどんな處へ隱れやうが、決して見逃す事はないからな」

さや子（驚怖沌惑）「………」

暗い男。「古い言葉にもある通り……弱き者よ、汝の名は女といふではないか……（重く強く）俺はお前の秘密を握るまでは、蛇のやうに絡み附いて、鼬鼠が生血を吸ひ取るやうに、お前の心を吸ひ取らずには置かない」

さや子（恐懼）「まあ此の人は……なんといふ恐ろしい……」

暗い男（首を前へのめし）「よもや……瞞しはすまいな？」（一二歩迫る）
さや子（身を傾け）「……」（暗い男の顔を眞正面に險視）
暗い男「どうだ？」（肉迫）
さや子「……ほんとに、直ぐお歸り下さいますか？」
暗い男（豪然直立）「うむ！　話せば……」（眼光鋭敏、さや子の全軀を見締む）
さや子（窮鼠、猫に向ふ如く）「必度？」
暗い男「歸らう！」
さや子（騒ぐ乳胸を靜かに堪え）「……」（覺悟の容子）
暗い男（重い語調）「先刻、双人（見山、小菅）は……何處へ行つたか、お前は知るまい？……知つてる筈はないが……」
さや子（透明な低い聲）「いゝえ、ちやんと解つてます。（物凄い沈着）先刻も双人は、ほんの手輕くお酒でも飲んで來るやうな事は申しましたが、あれは嘘なんです。今夜も必度あの容子ではどちらかへ泊つて明朝歸るでせうよ、さうしてわたしには眞實やかな口實を使ふでせうが、まあ大概嘘なんです。けれども、それを眞に受けた振りをして、平生と同じやうに素直に、少しも手落ちのないやうに事へてますわたしの心の裏には或る樂しい喜びがありますの」
暗い男「否、お前は、お前自身を欺いてるんだ。持つて生れた清い純粹な精神を殺してるんだ。……今の俺はな、お前のさうした虚僞の生活を更めて貰ひ度いのだ。で、お前も一個の人間として、僞りの無い慾望、僞りの無い不平を漏らした方がいゝのだ。……お前の貞淑な犧牲も、努力も、昔の俺には、……昔の俺にとつては、たいへん都合よく、又、一種の滿足ではあつたが、今思へば、さうして跼蹐つたお前の生活に對して、俺は慚愧に堪えない……でもお前

が言ふやうに、そんな虚僞の生活の裏にも、樂しい喜びがあるだらうか、さう言ふ言葉が既に僞りではないだらうか？」

さや子。「貴方が仰言るまでもなく、わたしも人間ですから、不平も慾望も澤山持つてます。他人様よりは、もつと〳〵澤山持つてます。……けれども、わたしは『人間の家』に住んでますから、幾時間經てば、舞臺の役が濟んでお給金になるといふやうな『ノラ』なんかとは異ひまして、わたしの役は生涯同じですもの……明日のお惣菜も考へたければなりませんし、世間のお交際とても其の通りで、あまり見つともない服裝では人樣の前にも出られませんし、殊に良人のやうな勤めをしてますと、わたしまでが、平生は黄金で間に合ひます時計でも指環でも、出るところへ出ます時は、プラチナに大きな金剛石……といふやうな譯で、服裝も、生活も矢つ張りそれに調和しなければなりませんから其の遣り繰りも一と通りの苦勞ではありませんもの。……隨つて、わたしから唯一日でも『虚僞』を除つて了ひましてわ、正しい禮儀は勿論出來ませんし、一寸したお世辭も挨拶も恐くなつて、わたし達の生活は、精神的にも、物質的にも行き詰まつて了ひます。動けなくなつて了ひます。……『眞實』の事を申しますのは却々むづかしいこつてすが、欺瞞る事は慣れてさへ了ひますれば、其の方が却つてラクで、體裁がよござんすわ」

暗い男。「だが、お前の言ふ樂しい喜びとは、一體、何を指すんだね？」

さや子（身を竦め）「……もつと、離れてらして下さいな」（暗示するやうに、暗い男の全軀を見上げ見下ろす）

暗い男。「…………」

――間――

暗い男、漸く隙を狙ふやうに五六歩退く。

— 4 —

さや子。「それは……『嘔吐』といふ女の天性が……と申しましても、女の嘘は殿方の嘘とは異ひまして、むづかしい理論なんぞには構はず、お互の幸福の爲に善用しますから、チツとも愧づることはないと思ひます。それがわたしにも豊かに備はつとりまして……その日〳〵の虚僞がみんな成功するからですわ、いゝえ、もつと本當の事を申しますと……わたしは既う良人の弱點を骨の髄まで握り込んどりますから、わたしの骨折り甲斐が僅か二三ケ年の間にメキ〳〵と、實現れて參りましたもの」

暗い男。「お前は、お前の良人に、どういふ弱點を見付けたね？」

さや子。「良人の一番甚い弱點は、何よりも女が好きで、機嫌買ひで、傲慢で、氣狂ひじみた程淸潔好きなんですが、其のいづれよりも、もつと大きな缺點があります」

暗い男（首を前へ伸ばす）「なんだね？　それは……？」（思はず片足のみ、一歩進む）

さや子。「女の爲る事は何一つ出來ないです」

暗い男。「さうしてお前の骨折りといふのは、どういふ手段に依るんだね？」

さや子。「言葉に申しましては、雜作もないんですが……」

暗い男「それは？」（思はず更に殘りの片足を進める）

さや子（力強く、しんみりした口調）「わたしの總べてを（兩手で自分の胸を抑さへ）心の奥までも（胸から兩手を離し、捧げる表情）良人の運命の中へ解かし込んで了ひまして、良人の運命が少しでも立派に開らけますやうに努めるんです」

暗い男。「解つた。……お前の樂しい喜びといふのは、畢竟るところ、犠牲の快感を指すんだね？」

さや子（冷嘲）「わたし、そんな馬鹿々々しい事は嫌ひです。そんな棄て鉢な氣持ちんなぞ直ぐに疲れて縒りが戻つて了ひます」

暗い男「もしや、さうでないにしても、總べてを相手の運命に解かし込んで了つたら、お前の生活は無くなつて了ふだらうぢやないか」（ぐつと深く、さや子の顏を覗き込む）

さや子「そのかわり良人の生活がツマりわたしの生活ですから、内容が、ずつと力强うございますわ……さうして世間の眼に見えます『わたしの生活』は、如何にも女らしくて良人にも喜ばれ……それで面倒な重い責任はみんな良人に被負けて了ひますと、わたしの生活は水のやうに低く／＼流れては參りますけれど、此の力の爲に良人の生活に、ずん／＼押し流されてます事が、わたしの眼には見えるやうです。此のわたしの力は、婦人の參政權とか、婦人解放なんとは異ひまして、露骨には見えませんから世間體も良ござんす。……さうして良人が自分から進んで、牛のやうに馬のやうに、『猿廻し』のお猿のやうに働きますのも、みんな此の、わたしの力に違ひないと、わたしには思はれます」

暗い男「お前は、そんな狡猾い、體裁のいゝ生活法を、誰に教はつたね？」

さや子「いゝえ、誰方にも……」

暗い男「教はらないと言ふのか！」

さや子「是れは、教へたり教はつたりは出來ないと思ひますけれども、『女性特有の天才』にはちがひないと、わたしには思はれます」

暗い男「だが、お前は……『舊い女』の悲しみを知つてるかい？……また、どうして『新しい女』は叫ぶんだらう？……

…繊弱い女が公衆の前にお辭儀をして、靜かに演壇を下りて行くあの悲哀な姿はどうだ」

さや子。「自覺が足りないからですわ」

暗い男（重く）「ところが……女の忍從と涙の歴史は……隨分永いよ、さうして、近代の或る女は……隨分惱んでるよ。どうして惱むんだらう？　どうして叫ぶんだらう？……もしお前のやうに、狡猾い、體裁のいゝ生活法が事實、女の天才なら、既う疾うに自覺してるだらうぢやないか」

さや子。「世界に有名な女の將軍や、お后や女王方に就きましては一概に申されませんが……わたしのやうな女は昔から澤山あると思ひます……眞實に自覺しました女は、決して誰にも此の生活法を盜まれる筈はありません。自分の良人にも、舅姑にも……見付かれば最後、直ぐに逆に裏切られて了ひますもの。……けれども、さうした女こそ、自分の家庭はおろか、お向ふにも、お隣りにも、噂の種にさへなりませんから幾ら歴史は永くとも、決して見破られたり裏切られたりする筈はありません」

暗い男（溜め息、獨り言のやうに）「……全く……全く人生は不道徳だ」

さや子。「いゝえ、あんまり道徳過ぎるんです。……それが爲に『虚僞』の價値を自覺する事が出來ないんです。さうして惱んだり叫んだりするんです」

暗い男（勵々心氣一轉）「お前の生活法を世に宣傳したらどうだ……さうして男もそれを理解したら、世の中はもつと靜かになるだらう、もつと良くなるだらう」

さや子。「まあ貴方、とんでもない」

暗い男。「…………」

さや子。「貴方は御自身が男でありながら『男性』といふものを、未だハッキリとは御存じないと見えますね」

暗い男（重く、語尾をはぬ）「なにを？」（思はず片足を一歩進める）

さや子。「わたしには、それがよく解ります」

暗い男。「それとは何だ？」

さや子。「男の缺點と弱點をです」

暗い男。「なら……男には、理解出來ないと言ふんだな」

さや子。「いゝえ、理解だけは、否、もつと以上のお力はおありでせうが……それだけまた、猶一層油斷は出來ませんからねえ」

暗い男。「男は、女を愛さないと言ふんだな」（殘りの片足を進める）

さや子（冷嘲）「……『疊と女房は、新しい程良い』と、いふ言葉がありますけれども……貴方は？」（微笑）

暗い男。「…………」

――間――

暗い男。「お前は現在……此の俺を征服したつもりで居るだらう。其の胸の内には、勝ち誇つた氣持ちが波打つてるだらう、だがな、（重く）十年ばかり經てば、此の多巳男は（强く、更に重く）間違ひなく死んで了ふんだぞ」

さや子（險相に吃る）「……」（昏迷狀態）

暗い男（重く）「……昔も今も、お前と俺とは夫婦なんだ……さうして、唯一人の子供には死なれ……何や彼やと悲しい、淋しい生活をな、みんな振り棄てゝ了つて、また、新しい生活を作らうが爲に、未だ今のお前は知るまいが……滿洲

航路の船に乘るんだ。……（ため息、聲低く、力無く）けれども、お前は俺と同じやうに、矢つ張り、愈よ（半ば口籠る）……さ、さび、淋しくなるんだ。……此の責任は勿論俺にもあるが、又、お前にもあるんだ（聲、震へる）……おゝゝ俺は、……お、お前を恨んでいゝのか或ひは、……感謝して、詫びなければならないのか、……あゝゝ……俺には、俺には解らなくなつて了つた」（天井に向かひ、眼を瞑り、全軀を震はす。足、踠ぐ）

さや子は多巳男を庇護ふ如く、小寢卷の上に輕く手を掛け、暗い男の言葉に對して怒りを含み、キツと眼を瞠る。

暗い男は確かりと足を踏みしめ、茫然と首を垂れ、寢て居る多巳男と、さや子の容子を見較ぶ。

暗い男（首を前へのめし、重い斷言）「……多巳男は……確かに死ぬんぞ」（我れ知らず、さや子と多巳男に接近する）

さや子（更に恐怖、頑強に否定の表情）「わたし、もう知りません……（聲低め、險しく）まあ氣味が悪い、こんなに傍へお寄りになつては困ります……もつと離れていらして下さいな、否、直ぐにお歸り下さいな」

暗い男。「………」

——間——

暗い男、足摺りして、漸く二三歩退く。そして崩れ落ちたやうに座る。片足は立て膝——その膝頭へ肘を載せる。

さや子。「貴方のやうに見すぼらしくて、そんなきたない、陰氣な方が良人の未來ですと前以つて解つとりますれば、誰が酔狂にそんな不甲斐な人と結婚なんぞするもんですか」

暗い男（頬を上げ）「ところがお前は爲たぢやないか」（また膝頭へ肘を載せ、眼を伏せる）

さや子。「もうどうぞ、直ぐにお歸り下さいな」

暗い男（顔を上げ、眼を眞ン丸く開らき）「お前が今まで話した事は（重く堅く、念押す口調）確かに眞正だらうか？」

（ぐつと首を伸ばして、さや子の顔を凝視）

さや子。「わたしは貴方に、それを保證します義務などは少しもありません」

暗い男。「なら、もつと深いたくらみでも……あると言ふのか？」

さや子。「わたしは『虚僞』といふ重寶な道具を打ち壞したり、種明かしをしたりするのは女として、又、人間としても、決して利益な生活法ではないと思ひます」

暗い男。「………」

さや子。「ましてや此の渦卷きのやうな現代に家庭を營つとります女としては、現在の良人に對しましても、其のくらひの警戒と準備がありませんければ、いつも見苦しい夫婦喧嘩が始まるにきまつてます。宅の主人（卅才頃の逞雄）は此のわたしを舊い貞淑な弱い女と思ひ込んで、いつも傲慢に尊大に構へては居りますけれども、わたしには猛獸使ひよりも巧妙な秘訣がありますから内心では却つて……わたしが慾を滿たして生きる爲に、良人が一人で齷齪働いてるやうなもんですもの」

暗い男（さや子の方へ躄り寄る）「だから……此の俺なぞは問題にならないと言ふんだらう」

さや子。「どうぞ……もういゝ加減にお歸り下さいな」

暗い男（更に躄り寄る）「俺とお前とは……夫婦ぢやないか」

さや子（接近した暗い男の全軀を見くるめ）「……貴方は、ほんとに執念深いこと、いつまで同じ事を仰言るんです……良人の氣性はキッパリとして男らしうござんす。顔も貴方のやうに爺々むさく貧相ではありませんし、立ち動作の輪廓も、クッキリとして緩みがありませんからね、眼の光りなどは、もつと明るく生き〳〵と輝いてます。そして服装も

貴方のやうに、こんな粗末なものではなく、もつと上品で齡をずつと若うござんす」

暗い男（さや子の顏へ息を吹掛けるやうに）「……い、生きてる者は……一年每に齡を取るんだ」

さや子は身を避くるやうに觀客の方へ横向いて顏のみ險しく、暗い男の方へ眞正面に向ける。

暗い男は全身震へる如く、微妙なる表情變化の交錯。即ち明確に分解すれば、憤怒あり、悲歎あり、怨恨あり、反省あり、自棄あり、悔悟――。やがて、

暗い男（迫るやうに）「さ、早く坊主を起こして泣かないやうに抱かして吳れ、さ、早く…………」（兩手を差し伸ばす）

さや子（キツパリ拒絶）「いゝえ、いけません」

暗い男（針を含んだ聲）「……いけない？」

さや子。「貴方は何處の誰方ですか……わたしは未だ、貴方のお名前も存じません……いつも〳〵良人の口眞似ばかりなすつて……（更に身を竦める）氣味が惡いつてありやしない」

暗い男。「…………」（眼を瞑り、頭部を強く振りながら立ち上がり、舞臺中を行きつ戾りつ悲悶彷徨）

さや子警戒の眼を見張つて居る。

――間――

突然、暗い男の態度一變。さや子の前へ戾り、嚴肅に端座。

暗い男（靜かに重く命令的態度）「さ、俺の言ふことをきけ……此の上もしお前が拒んでみろ（強く執拗に重々しく）そしたら俺は、老人になつて……死ぬまでも……お前達の生涯に附き纏つてやるからな」

さや子、當惑思案――乳胸に波打つ激しい動悸を非常な努力を以て堪え愈々躊躇。が、軈がて、思ひ切つたやうに、しつかりと多巳男を抱き込んで立ちあがり、逃げるやうに急ぎ下手の方へ行きながら恐怖と憤怒に息堰き吃り。

さや子。「今……今、交番へ訴へて來ます」（退場）

暗い男は自分の妻子を捉へやうとして俄かに立ちあがつたが或る感情に遮られて危く蹌踉めく。蹌踉めきながら斷念むる如く喪心。――『座敷の舞臺』を出で、『黒い舞臺』へのめり込み、懊惱悶絶の如く倒れる。

黒い背景、極めて靜かに下り始める。

『黒い舞臺』に倒れて居る暗い男の姿は、眞つ黒く、カツキリと影畫のやうに（觀客の眼には）見える。

明るい『座敷の舞臺』は黒い背景の爲に遂に全く闇の中に消えて了ふ。

第七場

第一場に同じく消燈せる闇黒の書齋。

闇の中には見山（四十二三才）即ち暗い男一人床に倒れて居て、空虚なる椅子のみ一脚、孤立してゐる。が、闇黒の爲に觀客の眼には全く見得ない。

やがて――、

黒い背景、極めて靜かに〳〵上がり始める。（『黒い舞臺』に倒れて居る『暗い男』の姿は黒い背景の漸く上がり始めた頃には既に――觀客の眼にはカツキリと見得る）

黒い背景は未だ漸く半分にも到らない程に極めて靜かに上がりつゝある時である。――暗い男は恥き記憶えのある會

話の聲が近付いて來るらしい氣配なので重く漸く肱を杖にして僅かに上半身のみ床より擡げ周圍を見廻してゐる。誰も居ないのである。

會話の聲は愈ゝ近付いて來る氣配に暗い男は猶も見廻してるうちに黒い背景は漸く上がり切つて了ふ。

第八場

其處は人通りも稀な、東京、丸の内附近の街頭（四つ辻）である。

上部の見得ない程に高い建物が、そゝり立ち、遙かに軒を列ねてゐる。其の合ひ間（即ち道路を挾んで遠く集縮された建築線のまさに接觸せんとする空間）には更に遠く遙かに宮城の濠、石垣、松などの霞に淡い風景が見える。眞夏の早朝である。

其處へ下手より双人の紳士（先刻よりの會話の當人）晴れやかに語りながら極めて悠暢な步行にて靜かに漸く登場。

一人は上品な英國人で、其の相手は日本の紳士、（『暗い男』と同齡）見山達雄である。

見山（應揚堂々たる紳士の態度）「……！」（相手の言葉に明るく同意して首肯く）

英紳士（流暢な日本語）「その、一番重い『責任』の次に……何をお感じになりましたか？　見山サン」

見山。「奇蹟を感じました」

英紳士。「キセキ？」

見山。「Miracle を感じました」

英紳士。「……どうして？」

見山。「私のやうなものが、世界の一等國へ、而も『領事』の任命を受けるなんて……どう考へても奇蹟といふ外ありません」

英紳士（眞面目に重く否定の表情）「それ、貴方の謙遜です見山サン」

見山。「…………」

英紳士「貴方の偉い評判、私よく知つてゐます」

見山。「……」（歡喜、停歩、自ら握手）

英紳士。「今夜の盛大な晩餐會、わたくし待ち遠しい」

見山。「……感謝します」（握手を離す、二三歩共に歩く）

舞臺中央にて英紳士立ち停まる。見山も立ち停まる。

英紳士（『黒い舞臺』の暗い男を指し）「オー、不思議、彼處に貴方酷似な人が居ます、そして此方を見てゐます」

見山は暗い男を見ると內心驚く。暫くは暗い男と顔見合はして居る。

やがて見山、英紳士に小聲で何か囁く。英紳士頷く。快活な握手。

英紳士のみ一人上手へ退場。

見山、靜かに『黒い舞臺』の方へ近寄つて立ち停まる。其の片足は『街頭の舞臺』片足は『黒い舞臺』を踏んでゐる。

双人は暫時、顔見合して沈默――。

見山が浴してゐる光線は明闇カッキリとして鮮やかに、濃い調和の色彩は、恰も傑れたCubism（立體派）の繪畫を見てゐるやうである。其處に於ける見山の一擧手、一投足は強い影と強い光りの美しき跳躍――。

見山（嚴然たる紳士の態度）「君は……遂う〳〵私の力に征服されたんだな……見ろ、其の態を……今後は幾ら君が私の姓名を騙つても何の益は無い……だが、もし君の名前が眞實に見山達雄といふなら、矢張り此の私の幻像にちがひないのだ」

暗い男（身を捩ぢ起こして胡座かいて）「さういふお前が、現在俺の幻ぢやないか」

見山「さういふ君は今日まで、一體何を目的に生きて來たね？」

暗い男「俺の生活を新しく立派なものにしたいが爲だ。……さうして俺の靈魂を愛するが爲には俺はどんな犧牲も惜まなかつた……現在でもさうだ」

見山（冷やかに嗤ひ）「君の靈魂は結婚して以來今日まで、唯一遍でも眞實に喜んだ事があるか？」

暗い男「…………」

見山「私は私の靈魂を今日まで、非常に働かして來た。今後はもつと〳〵烈しくなるだらう……だが、私の靈魂は平生凱歌を擧げてゐる。生き〳〵と喜んでゐる。さうして私の生活は靈魂の勞働に依つて不斷緊張してゐる。本當に生きてるんだ」

暗い男（ムキになる）「……靈魂を尊重しないやうな奴は眞正の意味に於ける人間とは言へないのだ。否、人間ではないのだ」

見山（重い沈嘲）「…靈魂の勞働を自覺しない奴こそ眞正の意味に於ける人間とは言へないのだ。否、人間ではないのだ」

暗い男「…………」

見山「私の靈魂は絶え間なく働いてゐる。おち〳〵眠むる暇もない程に働いゐる。それが爲に勞れてはゐる。だが、君

の靈魂のやうに現在の生活に失望してはゐない。淋しがつてはゐない。勿論悲しんでもゐない。（強く）そして不斷、生活の力に充滿してゐる。今この現在の生活を享樂してゐる。喜んでるんだ」

暗い男（尊嚴、誇らかに）「……俺の靈魂は（深遠な語調）未來永劫に憧憬れてるんだ」

見山（冷嘲、『街路の舞臺』を漫歩しながら）「それは、君が君の靈魂を愛してゐない證據ぢやないか……君の靈魂は、どうして現在の生活に滿足が出來ないのか、又、どうして悲しんだり愁しがつたりするのか、自分でよく考へて見るがい〻……畢竟は、君の愛が徹底してゐないからだ。錯誤つてゐるからだ」

暗い男。「…………」

見山。「君には其の自分の靈魂を頑丈な革の鞭で（強く）引つ叩いて教育するだけの、勇氣が無いんだ。否、自分の靈魂をさへ、幸福にしてやるだけの力が君には無いんだ」

暗い男（反抗的態度、強く斷言）「だが、お前を殺すだけの勇氣は有るんだ。お前を殺す事が出來る、自信と力とは有るんだ」

見山（竦然として立ち停まる）「私を殺す？」（暗い男の眼を凝視）

暗い男（重く）「さうだ」

見山。「…………」

暗い男（執拗な重い語調）「お前が生きてる〻、俺の生活は腐つて了ふ。破壞されて了ふ」

見山。「だから、私を殺すといふのか？」

暗い男「……逆にお前の生活を破壞してやるんだ」

見山（漸く沈着、輕い冷嘲と不安）「けれども、それを實行するだけの勇氣が、君には有るか？」
暗い男（強く重く）「有るか無いか、實行てみたら解るだらう」
見山「うむ、面白い……けれども、私を殺したら君は、直ぐに死刑の宣告を受けるだらう……（腕組み考へる）今から……十七八年昔だ。私が結婚した當時、君は此の私の、血を飲まして呉れと言つたな、でもあの時は他人の邪魔に依つて私も殘念だとは思つたが（あたりを見廻し）今は誰も居ないやうだ……さいわい此の私の温かい生血を、たつぷり飲ましてあげやうぢやないか。もしそれで濟むなら、今、直ぐ此處でナイフを刺すから（暗い男の顏を覗き込むやうに）君は其の傷口へ直接に吸ひ付いて、思ひ切り飲んだらよからう？」
暗い男（首を横に振る）「お前の血は既う、結婚當時のやうに新しくはない、清くはない。濁つてゐる……俺は今、そんな汚い血を飲み度くはない」
見山「けれども……私の生命を取れば、何がどうなると言ふんだ？」
暗い男（寛然として）「俺の意志に適つた、新しい生活を創るんだ」
見山、暗い男に警戒しながら『黑い舞臺』に踏み込み、あたりを見廻しながら漫步す。
見山「君が住んでる空想の世界には、何も無いぢやないか、おゝ、此處に椅子が一脚ある。成る程、軀を休めるには具合が良さゝうに出來てゐる……（あたりを見廻す）だが矢つ張り、他には何にも無いぢやないか、そして眞つ暗ぢやないか」（猶も『黑い舞臺』を行きつ戻りつしてゐる）
暗い男（どつしりした重い語調）「當然さ……現代生活を齷齪してる者に、どうして俺の世界が見えるもんか、……其處には……天國の風景が在つてな、地獄の生きものが澤山、住んでるんだ。さうして、地獄の生命が天國の踊りを舞ひ

ながら、互に手を引かれて地獄のドン底へ、静かに降りて行くんだ。其處には、何が在ると思ふ？……未來永劫に休みの無い、崇嚴な食堂が開らかれてるんだ。さうして有らゆる金石も、人間の肉も動物の肉も、美味さうな湯氣を揚げながら、未來永劫に休みなく煮えてゐるんだ。それを食ふとな、潑溂とした新しい生活が絶えず〱生れるんだ。……俺の自由な、完全な空想はな、お前の生命を貰つて、新しい生活を創るんだ」

見山、『黒い舞臺』と『街頭の舞臺』の境界線に立ち停まる。

見山。「さうして君は、どんな人間に生れ變り度いといふのだ？」

暗い男（力強く、重い怒號）「馬鹿ッ、お前は『生活』と言へば、人間より外にはないと思つてるのか……（放棄するやうな語調）お前の空想も矢つ張り『人間』といふ、狹苦しい範圍に捉はれてるんだ……（語調一轉）さ、其生命を、何時呉れるか、ハッキリしたところを聽いて置き度い……さ、何時呉れるね？……明日とか、明後日とか、間違ひのないところを聽いて置き度い……（首を前へのめし）何時呉れるね？」（蹌踉めき立ち上がり迫る）

見山（態度を改め）「私は、罪人でもなければ、狂人でもないぞ」

暗い男（斷言の語調）「な、なんと言はうが、俺は必度、お前の生命を取るんだ」

見山（冷嘲、胸を膨らめ）「取れるもんなら取つてみるがいゝさ、……（やをら『街頭の舞臺』を漫歩しながら重い強い語調）私の軀は君のやうに貧弱ではない。そして未だ一度も、病氣といふものに掛かつた事が無い。……而も柔道師範の免状と、護身用の武器を持つてゐる。是れ、此の通り（ピストルを出して見せる）寢る時も離しはしない……また、身の廻りを警戒するにも巨萬の富が有る。法律が有る。學識と名望が有る。さうして而も私は、大日本帝國を背負つて國際の舞臺に立つんだ。私は『領事』だ」

暗い男（無氣味な冷嘲、重く）「そんなものが何になる……俺には（更に重い語調）『時間』といふ武器が有るんだ。」タイ

ム—といふ絶對的な、偉大な武器が有るんだ」

見山、立ち停まつて考へる。考へて竦乎とする。そして怯えたやうに眼を宙に据える。据えた視線を暗い男に向ける。

互に凝視。

——間——

見山（憤怒、恐怖、拳を固め）「君は、なんといふ恐ろしい……執念深い幻だ……（肉迫）消えろ、さ、消えろ〳〵」（暗い男の胸をドンと衝く）

暗い男（憤怒、恐怖）「お前こそ、お前こそ執念深い幻だ……（肉迫）消えろ、直ぐに消えろ」

双人の顔と顔、鼻と鼻とが接觸——瞬間。更に瞬間。

暗い男は彈けたやうに飛び退く。

見山の腕には第二の鐵拳が準備された。そして、今にも飛ばんと戰いてゐる。

瞬間……。

更に瞬間……。

『黒い舞臺』の下手より陰氣な洋装不斷着のさや子（三十七八才）慌しく登場。

此の場の夢中な、音もなく險怪な幻爭に驚いたさや子は踵雄（自分の良人）が双人居るので、更に驚き迷ひ、迷ひながらも急り吃るのみ——。

見山と暗い男の双人は、互に警戒しながら、さや子の容子を見る。

さや子は双人の間にあつて、唯、おど／＼してゐるばかり、何とも言葉の出しやうがない。

——間——

暗い男（さや子の手を取つて引き寄せ）「其處に居る男は……俺を誘惑して苦める、恐ろしい幻なんだ……もつと此方へ來ておいで、そして用心しなけりやいけない」（見山を凝視）

見山「おい、さや子、お前は何時の間に、どうして此寒處へ來たんだ……先刻私が我家を出る時は、平生と少しも變つた容子はなかつたのに……一體まあ、その見すぼらしい服裝はどうだ、而も其處に居る怪しげな男は二十年も前から、私に附き纏つてる、恐ろしい幻像だ。幻だ。おい、何をそんなに、きよと／＼してるんだ……事に依つたら、お前も其の幻に憑かれてんのかも知れない（さや子の手を無理に引つ張り）さ、私と一緒にお歸り、さ、直ぐに歸るんだ」

見山と暗い男は、互にさや子を奪はれまいとして、沈默の裡に愈々爭ふ。

此の時、暗い男は、俄かにさや子の手を離して、見山に飛び掛からうとする。見山はすかさず身構へする。

斯うして双人は互に身構へながら一歩、半歩と後退りし、猶も相睨み合つてゐる。——さや子は憑かれた狂女のやうに見山と暗い男の間を行きつ戻りつ、愈々迷ひ躊躇ひ……感情激動して遂に倒れて了ふ。そして氣を喪ふ。

見山と暗い男は全く同時に機械的に、さや子へ近寄る。そして互に更に身構へする。双人は全く同時にさや子を呼ぶ、が、さや子は身動ろぎもなく返辭もない。双人は更に（同時に）呼び起こさうとするが、互に相手（見山には暗い男、暗い男には見山）を遠ざけやうとし、さや子を奪はれまいとして、沈默の裡に物凄く、相睨み合ふ。そして、さや子を中心に磁石の針の如く、見山と暗い男の位置交換す——瞬間、見山は暗い男の手許へ飛び込み、いきなり『當身』を打つ。暗い男、ばつたり氣絶。

見山、暗い男を『黒い葬禮』へ押し轉がし、そして一人頷いてさや子の傍へ戻り、さや子を仰向けに寢かせ、兩足を揃へて静かに上半身を起こし、その背後に廻つて右膝頭をさや子の背骨の部に押し當て、左足底を左臀に踏み開して構へ、さや子の兩胸の乳下をよく摩擦してから少し俯向かせ、のめらぬやうに左手を以つて、さや子の胸のあたりを支へて「エイツ」と發聲瞬間▲右膝頭を三四寸程押し上げ、右手の指先を背中の第一骨より下、六七骨の處に付け、掌の下端にて押し彈くやうに強く打つ▼（即ち『誘の活法』を施行す）

さや子は呼吸を復活して漸く正氣に復へる。

見山（優しくさや子の顏を覗いて）「……氣が付いたか？……確かりせにやいかん……お前は、どうして倒れたのか、自分に解るか？」

さや子（落ち付かぬ溜息）「……よくは、存じませんけれども……」

見山「ふむ」

さや子「わたくし先刻……隨分迷つて了ひました」

見山「どうして……？」

さや子「…………」

見山「まあ話しはゆつくり後刻で聽かうが、兎も角、早く歸らう、そんな見すぼらしい姿をして往來に立ち話しなんか為てゐちやあ第一私の恥だ、私の恥は又お前の恥だ、さ早く歸らう」

さや子は、なんとなく暗い男に氣を引かれて躊躇してゐる。

見山は、もどかしさうに急き立てる。

見山。「お前が歸つて來なかつたら、あの神經質な多巳男は又、どんな心配するかも知れないぢやないか」

さや子（多巳男と聽いて驚く）「え？　多巳男は……生きとりますの？」

見山（さや子の質問に却つて驚く）「お前は何を言つてるんだ、怪訝なことを言ふぢやないか、お前は多巳男が、死……死んだ……とでも思つてるのか、いやさ、そんな夢でも見たのか？」

さや子。「あの子は……確かに亡くなつたんでございますわ」

見山（怒る）バ……バカなこと言ふと……否、冗談ではないぞ」

さや子。「…………」

見山。「……その服裝……その言葉……お前は氣がへんにでも成つたんぢやないか？……私が俄かに出世したんで……（考へる。獨り言のやうに）或ひはさうだ！　女の胸は……狹いからなあ」（さや子の容子を凝視）

さや子。「數へてみますと……あの子は今年、十六になる筈でございますわねえ」

見山。「勿論さ……（幾らか優しく）あんなに弱い體にも關らず、中學へ通つてゐられるのも、みんなお前の丹誠ぢやないか」

さや子。「さうして貴方は此度、大へんな御出世をなさいましたのね」

見山（輕く眉をひそめ）「……併しお前は、氣を確かに持たないといけないよ……此の將來は、まだ／＼お前を驚かすやうな事が澤山あるだらう、あるにちがひない……だからお前は、もつと氣を大きく持たなけれあいけないよ」（慰める如く勵ます如くさや子の肩に手を掛け、顏覗き込む）

さや子。「…………」

見山（俄かに不安）「なんだか今、……お前の氣が狂つたのか、それとも、それとも私自身が或る幻を見てるのか……私にも解らなくなつて了つた……（強度の不安）さ、早く我家へ歸つてみやうぢやないか」（さや子の手を取つて促すやうに、ゆすぶる）

さや子は増す〳〵深く、聽ては狂はんばかりに迷ひ、迷ふ。

――間――

見山（態度語調一變して詰問）「お前は此の私を……眞實の良人ではないと思つてるのか？」

さや子「…………」（暗い男の倒れてゐる姿を省みながら、愈々しどろに迷つてゐる）

見山は、さや子の容子を暫く凝視してゐる――。やがて、

見山（決然として）「よしッ……お前は、此の私の眼に見える幻にちがひないんだ。さうして眞實のさや子は、矢つ張り何時ものやうに貞淑に、我家を守つてるにちがひない」

さや子（驚いて見山に追ひ縋る）「どうぞ、お願ひでございます。あの子に、多已男に遇はして下さいましな、どうぞ……どうぞお願ひでございます」（堅く握つた合掌を振り震り急き込む）

見山（厳粛に）「お前は……誰だ？」

さや子（急き込みながら）「まあ情けないこと仰言る……わたしは、わたしは貴方の所有でございます。そして……そして多已男の母でございます、mamma でございます」

見山（さや子の體を押し退け）「多已男は此の私の大切な獨りつ子だ。……お前のやうな幻に遇はせる事は出來ない……（俄かに）うむ、斯うしちや居られない」（去らうとする）

さや子（見山の行手を遮つて）「……どうしても……どうしても御一緒にお伴れ下さいまし、是非、是非お願ひでございます、是非……」引き戻し押し戻して暫く爭ふ。見山は遂にさや子を拂ひのけて退場。

倒れたさや子は狂氣の如く立ち上がる。

さや子（悲痛な吃音）「わたくし、無理にも……無理にもお供いたします」（言ひながら蹌踉めき躓き慌てふためき見山に追ひ付くやうに退場）

舞臺靜寂。

黒い背景、靜かに下り始める。――そして約半分程にて止まる。（『街頭の舞臺』の下半部だけが見えてゐる）

『黒い舞臺』に倒れてゐる暗い男の姿は、眞つ黒く、カツキリと影畫のやうに見えてゐるが、依然として動かない。

――間――

やがて、さや子は悲歎茫然として誰をか探す如く、あたりを見廻しながら『街頭の舞臺』に彷徨ひ戻る。（登場）

悄然として力無く猶も『街頭の舞臺』中を、あちこち誰をか探し歩き彷徨ふ。

そして遂に全く茫然として『街頭の舞臺』の中央に立ち、兩手を顔に當てると忽ち崩折れ俯伏し聲を忍んで慟哭。

――間――

漸くにしてさや子、冷靜にかへる。

涙を拭きながらたちあがる姿には『悲しい斷念』の心狀が見ゆ。

軈て其の眼に淡い覺醒が仄めくと同時に『黒い舞臺』へ歩み込んで來る。そして、倒れて居る暗い男を庇護ふ如く靜かに蹲む。

さや子（獨り言のやうに）「……矢っ張り……矢っ張り此の人がわたしの（聲極めて微かに）本當の良人にちがひない…………」（熟々と暗い男の顏に見入る）

そして軈てさや子は、茫然として『街頭の舞臺』を省みる。と同時に黒い背景は靜かに下り切つて了ふ。

第九場

第一場に同じく消燈せる闇黒の書齋。

――（以後、暗い男を見山と復稱す）――

此の時に限り、舞臺の左右より双人（見山夫妻）に、而して双人のみに、青白い微光（此の光りは極めて暗微なるを要す）を與へて大體の表情を觀客に示す。舞臺そのものは依然として闇黒。

舞臺の人物は、第八場の終りに於ける儘、動かず、即ち倒れて居る見山を庇護ふ如くさや子は跪み居り、一脚の椅子は双人の傍に孤立してゐる。

――間――

見山、漸く眼が醒めたやうに顏をあげ、不審さうに、あたりを見廻し、怪訝な眼付きをして、さや子の顏を見詰める。

見山（上半身を起こし）「お前は今……何處へ行つて來たね？」

さや子「？……どこへも參りませんわ」

見山（額に掌を當て）「……」（考へる、更に考へる）

さや子（極めて靜かにしんみりと）「貴方の古い銘仙の綿入れね、洗ひ張りが出來て來ましたから、晝間のうちに仕度しときまして、今夜から早速縫ひ始めましたの。……貴方も矢つ張り、日本のキモノがお好きな事、わたし熟く解つてますから……」

見山。「………」

さや子（本心から見山の機嫌をとるやうに）「秋季は直ツきに日が暮れて了ひますがねえ、……夜は、ゆつくりと氣が落ち付いてよござんすけれども（何をか想像しながら）直ぐに又、寒くなりますわねえ……」

見山。「…………」（靜かに立ち上がる）

さや子。「……あれは既う、三度目の縫ひ直しですから、今年はまあ我慢しましても、來年の冬は外へ着ちや出られませんでせうよ……でもねえ、あの銘仙は昔ののですから、物がしつかりしてますけれども、此の頃出來たもんぢや、値段ばかり高くて、モウ一遍でも水へ浸つちや着られやしませんわ」

見山（椅子へ腰かける）「…………」（兩膝へ兩肘を載せ、兩掌に額を支へて俯向く）

さや子（恰も子供をなだめる如く）「さ、また、感冒でもひくと不可ませんから、ちやんとおやすみなさいな……ね？」

見山（重い口調）「お前は……昨夜、徹夜泣いてゐたね」

さや子（意外らしく否定す）「……いゝえ……わたし、夜が明けるまで何も知りませんでしたわ」

見山。「否、……昨夜俺は、いろんな事を考へながら……うつ／＼しては、幾度も眠を醒ましたがね……お前は矢つ張り……聲を忍んで泣いてゐた。……俺には、……俺にもな、……お前の氣持ちが、あ、よく、……よく解つてるんだ……」

さや子（俯向く）「………」（エプロンに指の先をくるみ、涙を拂ふ）

——間——

微かな哀音が聽こえて來る。

見山（低い重い獨り言のやうに）「……おゝ、また、ヴァイオリンの流しが來たやうだ……（深い溜め息。どんよりした眼付きで、さや子の顔を見る。が、又、ぼんやり俯向いて了ふ）……あんなに腰が曲つてゐちやあ、ずゐぶん歩きづらいだらうなあ」

さや子（涙ぐめる、沈んだ聲調）「あのお爺いさんは、終ひに何處へ行くんでせうねえ……いつも、獨りぼつちのやうですわねえ」（輕く涙を拂ふ）

見山。「………」

落魄したメロデイの流れは、憤る甲斐も無く、力も無く、軋々、觀客の耳へ縫ひ付き透る。——

——舞臺の空氣は、エキゾチックな愁しい俗謠の爲に零々とおのゝいてゐる……。

——間——

突然、此の靜澄な空氣を劈いて、大きな犬が吠え始む。流浪音樂師の足元へらしく、愈々牙迫して、吠え吠える。音樂止む。

觀客は然犬の聲のみ聽きながら、闇黑の舞臺に極めて暗微な、そして、不安な二個の異性（見山夫妻）を目のあたり眺めて居る。

然犬（實體は見えず）は今にも嚙み付きさうに喧々險々愈々激しく追ひ猛り吠え猛る。

（緞帳）（了）

——一九二一・一〇・一七脫稿。一九二二・六・五改作——



庭

上

芥川龍之介

昔はこの宿の本陣だつた、中村と云ふ舊家の庭である。

庭は御維新後十年ばかりの間は、どうにか舊態を保つてゐた。瓢簞なりの池も澄んでゐれば、築山の松の枝もしだれてゐた。栖鶴軒、洗心亭、――さう云ふ四阿も殘つてゐた。池の窮まる裏山の崖には、白々と瀧も落ち續けてゐた。和の宮樣御下向の時、名を賜はつたと云ふ石燈籠も、やはり年々に擴がり勝ちな山吹の中に立つてゐた。しかしその何處かにある荒廢の感じは隱せなかつた。殊に春さき、――庭の内外の木々の梢に、一度に若芽の萌え立つ頃には、この明媚な人工の景色の背後に、何か人間を不安にする、野蠻な力の迫つて來た事が、一層露骨に感ぜられるのだつた。

中村家の隱居、――傳法肌の老人は、その庭に面した母屋の炬燵に、頭瘡を病んだ老妻と、碁を打つたり花合せをしたり、屈托のない日を暮らしてゐた。それでも時々は立て續けに、五六番老妻に勝ち越されると、むきになつて怒り出す事もあつた。

家督を継いだ長男は、従兄妹同志の新妻と、廊下續きになつてゐる、手狹い離れに住んでゐた。長男は俳號を文室と云ふ、癇癖の强い男だつた。病身な妻や弟たちは勿論、隱居さへ彼には憚かつてゐた。唯その頃この宿にゐた、乞食宗匠の井月ばかりは、度々彼の所へ遊びに來た。長男も不思議に井月にだけは、酒を飲ませたり字を書かせたり、機嫌の好い顏を見せてゐた。「山はまだ花の香もあり時鳥、井月。ところどころに瀧のほめく、文室」――そんな附合も殘つてゐる。その外にまだ弟が二人、――次男は隣家の穀屋へ養子に行き、三男は五六里離れた町の、大きい造り酒屋に勤めてゐた。彼等は二人とも云ひ合せたやうに、滅多に本家には近づかなかつた。三男は居どころが遠い上に、もともと當主とは氣が合はなかつたから、次男は放蕩に身を持ち崩した結果、養家にも殆ど歸らなかつたから。

庭は二年三年と、だんだん荒廢を加へて行つた。池には南京藻が浮び始め、植込みには枯木が交るやうになつた。その内に隱居の老人は、或旱りの烈しい夏、腦溢血の爲に頓死した。頓死する四五日前、彼が燒酎を飲んでゐると、池の向うにある洗心亭へ、白い裝束をした公卿が一人、何度も出たりはひつたりしてゐた。少くとも彼には晝日なか、そんな幻が見えたのだつた。翌年は次男が春の末に、養家の金をさらつたなり、酌婦と一しよに駈落ちをした。その又秋には長男の妻が、月足らずの男子を產み落した。

長男は父の死んだ後、母と母屋に住まつてゐた。その跡の離れを借りたのは、土地の小學校の校長だつた。校長は福澤諭吉翁の實利の說を奉じてゐたから、庭にも果樹を植ゑるやうに、何時か長男を說き伏せてゐた。爾來庭は春になると、見慣れた松や柳の間に、桃だの杏だの李だの、雜色の花を盛るやうになつた。校長は時々長男と、新しい果樹園を歩きながら、「この通り立派に花見も出來る。一擧兩得ですね」と批評したりした。しかし築山や池や四阿は、それだけに又以前よりも、一層影が薄れ出した。云はば自然の荒廢の外に、人工の荒廢も加はつたのだつた。

その秋は又裏の山に、近年にない山火事があつた。それ以來池に落ちてゐた瀧は、ぱつたり水が絶えてしまつた。と思ふと雪の降る頃から、今度は當主が煩ひ出した。醫者の見立てでは昔の癆症、今の肺病とか云ふ事だつた。彼は寐たり起きたりしながら、だんだん癇ばかり昂らせて行つた。現に翌年の正月には、年始に來た三男と激論の末、手炙りを投げつけた事さへあつた。三男はその時歸つたぎり、兄の死に目にも會はずにしまつた。當主はそれから一年餘り後、夜伽の妻に守られながら、蚊帳の中に息をひきとつた。「蛙が啼いてゐるな。井月はどうしつら？」——これが最期の言葉だつた。が、もう井月はとうの昔、この邊の風景にも飽きたのか、さつぱり乞食にも來なくなつてゐた。

三男は當主の一周忌をすますと、主人の末娘と結婚した。さうして離れを借りてゐた小學校長の轉任を幸ひ、新妻と其處へ移つて來た。離れには黑塗の簞笥が來たり、紅白の綿が飾られたりした。しかし母屋ではその間に、當主の妻が煩ひ出した。病名は夫と同じだつた。父に別れた一粒種の子供、——廉一も母が血を吐いてからは、毎晩祖母と寐かせられた。祖母は床へはひる前に、必頭に手拭をかぶつた。それでも頭瘡の臭氣をたよりに、夜更には鼠が近寄つて來た。勿論手拭を忘れでもすれば、鼠に頭を嚙まれる事もあつた。同じ年の暮に當主の妻は、油火の消えるやうに死んで行つた。その又野邊送りの翌日には、築山の陰の栖鶴軒が、大雪の爲につぶされてしまつた。

もう一度春がめぐつて來た時、庭は唯濁つた池のほとりに、洗心亭の茅屋根を殘した、雜木原の木の芽に變つたのである。

中

或雪曇りの日の暮方、駈落ちをしてから十年目に、次男は父の家へ歸つて來た。父の家——と云つてもそれは事實

上、三男の家と同様だつた。三男は格別嫌な顔もせず、しかし又格別喜びもせず、云はば何事もなかつたやうに、道樂者の兄を迎へ入れた。

爾來次男は母屋の佛間に、悪疾のある體を横たへたなり、ぢつと炬燵を守つてゐた。佛間には大きい佛壇に、父や兄の位牌が並んでゐた。彼はその位牌の見えないやうに、佛壇の障子をしめ切つて置いた。まして母や弟夫婦とは、三度の食事を共にする外は、殆ど顔も合せなかつた。唯みなし兒の廉一だけは、時々彼の居間へ遊びに行つた。彼は廉一の紙石板へ、山や船を描いてやつた。「向島花ざかり、お茶屋の姐さんちよいとお出で。」――どうかするとそんな昔の唄が、覺束ない筆蹟を見せる事もあつた。

その内に又春になつた。庭には生ひ伸びた草木の中に、乏しい桃や杏が花咲き、どんより水光りをさせた池にも、洗心亭の影が映り出した。しかし次男は相不變、たつた一人佛間に閉ぢこもつたぎり、晝でも大抵はうとうとしてゐた。すると或日彼の耳には、かすかな三味線の音が傳はつて來た。と同時に唄の聲も、とぎれとぎれに聞え始めた。「この度諏訪の戰ひに、松本身内の吉江樣、大砲固めにおはします。……」次男は横になつた儘、心もち首を擡げて見た。と、唄も三味線も、茶の間にゐる母に違ひなかつた。「その日の出で立ち花やかに、勇み進みし働きは、天つ晴勇士と見えにける。……」母は孫にでも聞かせてゐるのか、大津繪の換へ唄を唄ひ續けた。しかもそれは傳法肌の隱居が、何處かの花魁に習つたと云ふ、二三十年以前の流行唄だつた。「敵の大玉身に受けて、是非もなや、惜しき命を豐橋に、草葉の露と消えぬとも、末世末代名は殘る。……」次男は無精髭の伸びた顔に、何時か妙な眼を輝かせてゐた。

それから二三日たつた後、三男は蕗の多い築山の陰に、土を掘つてゐる兄を發見した。次男は息を切らせながら、不自由さうに鍬を揮つてゐた。その姿は何處か滑稽な中に、眞劍な意氣組みもあるものだつた。「あに樣、何をしてゐる

だ？」——三男は巻煙草を啣へたなり、後ろから兄へ聲をかけた。「おれか？」——次男は眩しさうに弟を見上げた。「こけへ今せんげ（小流れ）を造らつと思ふ。」「せんげを造つて何しるだ？」「庭をもとのやうにしつと思ふだ。」——三男はにやにや笑つたぎり、何ともその先は尋ねなかつた。

次男は毎日鍬を持つては、熱心にせんげを造り續けた。が、病に弱つた彼には、それだけでも容易な仕事ではなかつた。彼は第一に疲れ易かつた。その上慣れない仕事だけに、豆を拵へたり、生爪を剝いだり、何かと不自由も起り勝ちだつた。彼は時々鍬を捨てると、死んだやうに其處へ横になつた。彼のまはりには何時になつても、庭をこめた陽炎の中に、花や若葉が煙つてゐた。しかし静かな何分かの後、彼は又蹣跚と立ち上ると、執拗に鍬を使ひ出すのだつた。

しかし自然は頑強だつた。荒廢した庭は幾日たつても、捗々しい變化を示さなかつた。池には相不變草が茂り、植込みにも雜木が枝を張つてゐた。殊に果樹の花の散つた後は、前よりも荒れたかと思ふ位だつた。のみならず一家の老若も、次男の仕事には同情がなかつた。山氣に富んだ三男は、米相場や蠶に沒頭してゐた。三男の妻は次男の病に、女らしい嫌惡を感じてゐた。母も、——母は彼の體の爲に、土いぢりの過ぎるのを惧れてゐた。次男はそれでも剛情に、人間と自然とへ背を向けながら、少しづつ庭を造り變へて行つた。

その内に或雨上りの朝、彼は庭へ出かけて見ると、蕗の垂れかかつたせんげの縁に、石を並べてゐる廉一を見つけた。「叔父さん。」——廉一は嬉しさうに彼を見上げた。「おれにも今日から手傳はせておくりや。」「うん、手傳つてくりや。」——次男もこの時は久しぶりに、晴れ〱した微笑を浮べてゐた。それ以來廉一は、外へも出ずに、せつせと叔父の手傳ひをし出した。次男は又甥を慰める爲に、木かげに息を入れる時には、海とか東京とか鐵道とか、廉一の知らない話をして聞かせた。廉一は青梅を嚙ぢりながら、まるで催眠術にでもかかつたやうに、ぢつとその話に聞き入つてゐ

た。

その年の梅雨は空梅雨だつた。彼等、——年とつた隠人と童子とは、烈しい日光や草いきれにもめげず、池を掘つたり木を伐つたり、だん〳〵仕事を擴げて行つた。が、外界の障害には、どうにかかうにか打ち克つて行つても、内面の障害だけは仕方がなかつた。次男は殆ど幻のやうに、昔の庭を見る事が出來た。しかし庭木の配りとか、或は徑のつけ方とか、細かい部分の記憶になると、はつきりした事はわからなかつた。彼は時々仕事の最中、突然鍬を杖にした儘、ぼんやりあたりを見廻す事があつた。「何しただい？」——廉一は必叔父の顔へ、不安らしい目付きを擧げるのだつた。「此處はもとどうなつてゐつらなあ？」——汗になつた叔父はうろうろしながら、何時も亦獨り語しか云はなかつた。「この楓は此處になかつらと思ふがなあ。」廉一は唯泥まみれの手に、蟻でも殺すより外はなかつた。

内面の障害はそればかりではなかつた。次第に夏も深まつて來ると、次男は絶え間ない過勞の爲か、頭も何時か混亂して來た。一度掘つた池を埋めたり、松を拔いた跡へ松を植ゑたり、——さう云ふ事も度々あつた。殊に廉一を怒らせたのは、池の杭を造る爲めに、水際の柳を伐つた事だつた。「この柳はこの間植えたばつかだに。」——廉一は叔父を睨みつけた。「さうだつたかなあ。おれには何だかわからなくてしまつた。」——叔父は憂鬱な目をしながら、日盛りの池を見つめてゐた。

それでも秋が來た時には、草や木の簇がつた中から、朧げに庭も浮き上つて來た。勿論昔に比べれば、栖鶴軒も見えなかつたし、瀧の水も落ちてはゐなかつた。いや、名高い庭師の造つた、優美な昔の趣は、殆ど何處にも見えなかつた。しかし「庭」は其處にあつた。池はもう一度澄んだ水に、圓い築山を映してゐた。松ももう一度洗心亭の前に、悠々と枝をさしのべてゐた。が、庭が出來ると同時に、次男は床につき切りになつた。熱も毎日下らなければ、體の節々も痛

むのだつた。「あんまり無理ばつかしるせゐぢや。」——枕もとに坐つた母は、何度も同じ愚痴を繰り返した。しかし次男は幸福だつた。庭には勿論何箇所でも、直したい所が殘つてゐた。が、それは仕方がなかつた。兎に角骨を折つた甲斐だけはある。——其處に彼は滿足してゐた。十年の苦勞は諦めを敎へ、諦めは彼を救つたのだつた。

その秋の末、次男は誰も氣づかない内に、何時か息を引きとつてゐた。それを見つけたのは廉一だつた。彼は大聲を擧げながら、緣續きの離れへ走つて行つた。一家は直に死人のまはりへ、驚いた顏を集めてゐた。「見ましよ。兄樣は笑つてゐるやうだに。」——三男は母をふり返つた。「おや、今日は佛樣の障子が明いてゐる。」——三男の妻は死人を見ずに、大きい佛壇を氣にしてゐた。

次男の野邊送りをすませた後、廉一はひとり洗心亭に、坐つてゐる事が多くなつた。何時も途方に暮れたやうに、晩秋の水や木を見ながら、…………

下

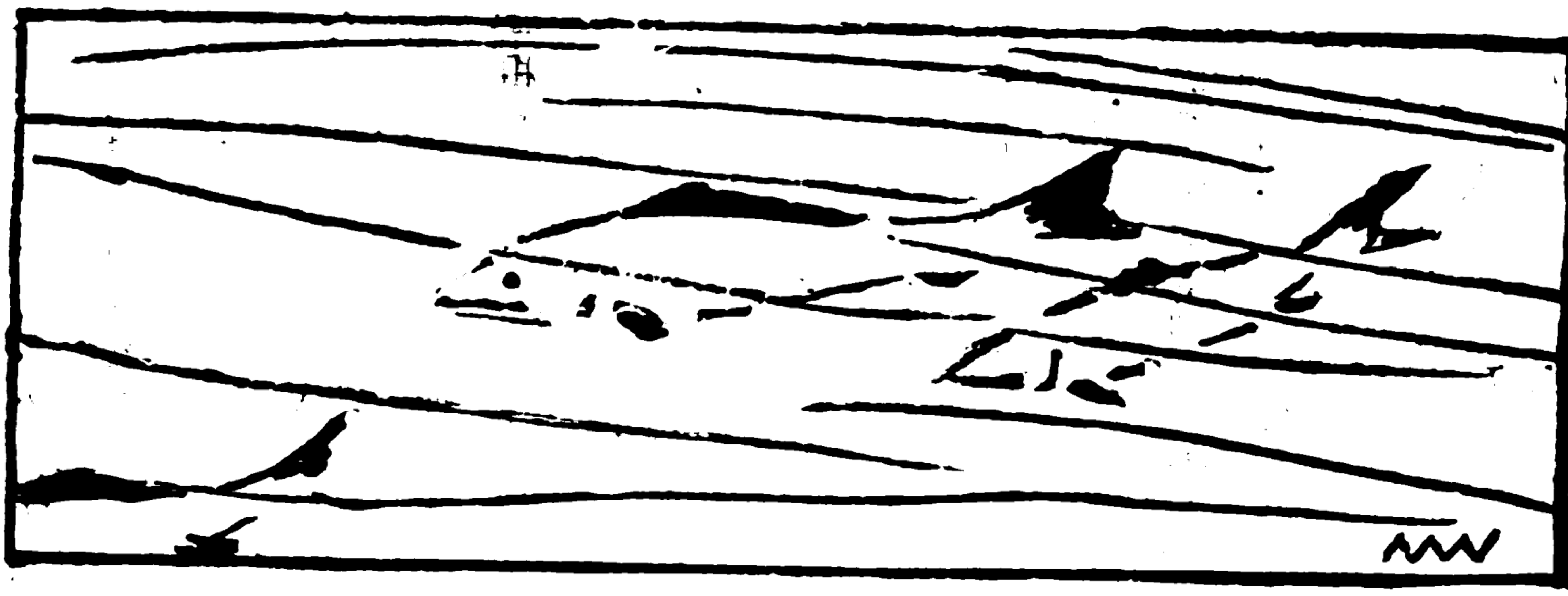
昔はこの宿の本陣だつた、中村と云ふ舊家の庭である。それが舊に復した後、まだ十年とたたない内に、今度は家ぐるみ破壞された。破壞された跡には停車場が建ち、停車場の前には小料理屋が出來た。

中村の本家はもうその頃、誰も殘つてはゐなかつた。母は勿論とうの昔、亡い人の數にはひつてゐた。三男も事業に失敗した揚句、大阪へ行つたとか云ふ事だつた。

汽車は每日停車場へ來ては、又停車場を去つて行つた。停車場には若い驛長が一人、大きい机に向つてゐた。彼は閑散な事務の合ひ間に、靑い山々を眺めやつたり、土地ものの驛員と話したりした。しかしその話の中にも、中村家の噂

は上らなかつた。況や彼等のゐる所に、築山や四阿のあつた事は、誰一人考へもしないのだつた。

が、その間に廉一は、東京赤阪の或洋畫研究所に、油畫の畫架に向つてゐた。天窓の光、油畫の具の匂、桃割に結つたモデルの娘、——研究所の空氣は故郷の家庭と、何の連絡もないものだつた。しかしブラッシュを動かしてゐると、時々彼の心に浮ぶ、寂しい老人の顔があつた。彼はこの顔を思ふ度に、何か力強い心もちがした。「お前はまだ子供の時に、おれの仕事を手傳つてくれた。今度はおれに手傳はせてくれ。」——その顔は何時も懐しさうに、かう廉一に呼びかけるのである。（終）



崩されたる團結

江口渙

「今ねえ。女房から電話が掛つて來て、又、家賃を騰げて來たさうだよ」

大野は川瀬の部屋へ入るといきなりかう云つて、可なり不愉快さうな表情をした。

「ひどいな。この間騰げたばかしなのに」

「何でも昨日大家のかみさんがやつて來て、無論君の處へも行つたらうと思ふけど、他處(よそ)さまでもお騰げになりますから、手前どもも騰げていたゞきますつて云つたさうだよ」

「莫迦にしてやがるな。それで幾何にするつて云ふんだい」

「電話で好く解らんけど、たしか十五圓程騰るらしい」

「十五圓？……こんどは一度に十五圓」

一足飛に十五圓の値上と聞いてむつとした川瀬は、思はず口早にかう云つて相手を見詰めた。

「少しひどいな」

「ひどいとも、强硬に談判をして値切らうぢやないか」

「うむさうだな。然し相場から云へばそれ位高くなつても止むを得ない感じもあるけど、まあ一應懸け會つて見た方が好い事は好いな」

大野はかう云つて一寸當惑したらしい顏色を見せた。いつもこんな時に最初の間必ず變にもじもじしてゐて煮え切らないのは大野の癖だ。だが、平生からそれを知つてゐる川瀬は格別氣にもしなかつた。

「相場も糞もあるもんかい。とにかく一度に五割の値上はひどいよ。それに大家なんて奴はこつちがおとなしくしてゐりや幾何だつて附け上るんだし、反對に强く出りや必ず讓歩するんだからな。第一値切れれば値切つただけ得ぢやないか」

「それは無論さうだけど」

だがかう云つた大野の言葉つきには、まだどうもはつきりとした態度が現はれてゐなかつた。つまり無論、値上はされたくはないが、拒るのも拒り難いと云つた風な氣持らしい。それを見た川瀬は殊更語氣を强めて

「大家なんて奴はとにかく搾れるだけ搾らうとするんだからね」

と、可なりむつとした調子で云つた。だが、大野は寂しさうな微笑を一寸洩らしただけで格別それには答へなかつた。

大野と川瀬とは小説の原稿を書くために、一と月ほど前から湘南のKと云ふ避暑地の宿屋に來てゐるのだ。大野は奥のはなれの下座敷に川瀬は母屋の二階に陣取つて、朝から萬年筆を走らせて日を暮した。すると今日東京に殘つてゐる大野の細君から電話がかかつて、突然、こんな事を知らせて來たのだ。

二人の家は東京でも中心から可なりはなれた或る共同墓地の近所にあつた。同じ町内の同じ番地に、謂はば背中合せ

のやうな工合になつて建つてゐるのだ。川瀬の家の二階裏に取り附けてある物干へ出ると、小さな庭を隔てて大野の應接間である二階の八疊やその向ふの長四疊が筒ぬけに見える。退屈の時なんか川瀬が好く物干へ飛び出しては、大野の二階へ向つて「おーい」と呼びかけると、その長四疊で晝間でも敷きつぱなしにしてある床の上へ腹ん這ひになつたまま、掛布團から肩だけ出してせつせと原稿をかいてゐる大野の顏が、ひよいとこつちを向いて「おーい」と答へる。

「どうだ。書けるか」

「ううんどうも書けないな」

などと云ふのだ。かうして二人は苦しい時にはお互に勵し合つたり、暇の時には世間話をしたり、又氣が向くと文壇の作家や月評家を片つ端しからこき卸して見たりするのだ。

二人の家は同じ家主の家作だつた。一年ほど前、大野が始めて世帶を持つた時に、折好く後の家があいてゐたので川瀬がそれを大野に世話したのだ。その時に一度家賃が騰つて、秋になつて又騰つて、更にこの一月にもう一度騰つた。それをこんどは一足飛に十五圓も騰げやうと云ふのだ。始の間はおとなしく家主の云ふ事を聞いてゐた川瀬も、かうなると流石にむつとしないわけには行かない。

「東京へ歸つたら是非何とか話をつけやうぢやないか」

障子を開けつ放した宿屋の二階から、眞正面に見える豐かな海を眺めながら、川瀬は又こんな事を云つた。

「さうだな。然し、毎月原稿を少し餘計に書けば好いわけなんなんだが」

「だつて君、一年に積れば百八十圓だぜ。このまま默つてゐりや、みすみすそれだけ奪られるんだからな」

「成程ね。さう考へると一寸大きいな」

大野の態度は相變らずはつきりしない。そして眼鏡をかけた面長の顔には矢張、値上はされたくないが値切るだけの**男氣もないとでも云ふ風な、表情が動いてゐた。**そのため川瀨も幾分張り合ぬけがして終つて、値下げの話はもうそれつ切り打ち切つたのであつた。

川瀨が幾つかの原稿を書き終つて、久し振りに東京へ歸つたのは、四月の中旬頃でもあつたらうか。留守の間に疊換の出來てゐた二階の八疊で着物を着變へたり、バスケットを引つくり返して書物の整理などをしてゐる裡にも、川瀨の妻は早速彼に家賃の値上げの事を話した。

「さうだつてね。實際莫迦にしてやがるな」

「あなた、もう御存じなの」

「だつて大野の處へ細君から電話が懸つて來たんだもの」

「まあ。さう」

「それでうちぢや何て返事をしたんだい」

「無論、あなたがお留守だから解らないつて云つてやつたわ。……どう。あつちに好い家が有りさう」

「無いね。一軒あつた事はあつたけど、ひどいんだ」

川瀨はかう云つて一寸首を傾げた。彼は二三年前から烈しい神經衰弱に懸つてゐた。それが今年になつて一層ひどい。その上、彼の妻も決して丈夫な方ではなかつた。そのため事に依つたら東京を引き拂つて當分暖かい海岸にでも住んで見やうか、と云ふ話が前から出てゐた。で、大野から家賃の値上の事を聞いた時、彼は宿屋の女中に案内して貰つて、

K町の松林の中にある貸別莊を四五軒見て歩いた。然し、どれもこれも莫迦に廣すぎたり狹ますぎたり、或はひどくぼろぼろであつたりして、何處にも思ふやうな家は無かつた。そして、小半日を唯ぶらぶらと無駄に過したにすぎなかつた。然し、ひろびろと續く松林の處々に混つて咲き盛つてゐる桃畑の花の群が、松の綠と相交錯して一と際鮮かに浮き上つて見える上に、柔かな日光が明るく流れてゐる、如何にも海邊の春らしい麗かな眺めは、その日の川瀨にとつて何よりも貴い收獲だつた。家へ歸つて直ぐ様又値上の事を聞かされた彼は、「ほんとうにあんな處で一年位のんきに暮して見たいな」としみじみ思はざるを得なかつた。

「あんまり家賃を騰げるので、私東京にゐるのがいやになつたわ。早く何處かへ行きませうよ」

「然し、さう急に思ひ立つたつて、一寸好い家は見附かりやしないよ」

「さう」

いささか張合がぬけたらしくかう答へた川瀨の妻は暫時何事かを考へてゐた。

「こんどは何處の家でもみんな怒つてゐるやうよ。この間も往來で木戸さんの奧さんに逢つたら、あんまりひどいから場合に依つたら出る處へ出ても値切つてやりたいつて云つた事よ」

かう云つて話を又前に戻した。

「さうだらう。彼處なんか殊によつたら一番こたへるかも知れない」

木戸と云ふのは大野の左隣にゐる會社員だ。小さな子供を三人も抱へてゐながら女中を置かないばかりか、二階を間貸してゐる樣子から考へて可なりに生計(くらし)は苦しいらしい。細君と云ふのは二十五六の色の白い眼鼻立の整つた女だ、そして、眞白な糸切齒を覗かせて笑ふ時の表情が時に可愛らしい女であるが、何處か世帶やつれのしてゐる樣子から考へ

ても、生計はあまり樂ではないらしい。その細君が本氣に怒つてゐると聞いた時、川瀨はあの生活なら怒るのが尤もだと云ふ氣がした。

「それに散花夫人の處でも矢張り怒つてゐるさうですよ」

「ああ例の散花夫人か」

かう答へると、今まで眞顏であつた川瀨も思はずつい微笑を洩さざるを得なかつた。何となれば、「散花夫人」と云ふ名前には、いやでも微笑を起させるに足るだけの有名な逸話があるからだ。その夫人と云ふのは大野の一軒置いた右隣に棲んでゐる藝者上りの妻君なのだ。そのもう一軒隣に川瀨や大野の古くからの友人である永井と云ふ西洋畫家が棲んでゐる。その男がそんな名前を奉つたのだ。何でも去年の春であつたか、女がそこへ越して來てから間もなくの事だ。或る日、永井の家の庭へ櫻の花片が突然雪のやうに何處からか降つて來た。そして變に頭の上の方でさらさらさらさらと微かな音がしては、矢張、何時までも同じやうに降り續けた。その樣子があまり變なので、永井がとうとう緣側まで出て行つた。そしてひよつこり首を上げて見ると、隣の二階の窓際に、綺麗にお化粧をした若い女が立つてゐた。女は左手で窓の柱をつかまへて體を支へながら右手にもつた櫻の枝を出來るだけ前へ差し出して、永井の家の庭の上へ頻りに花を散らせてゐた。ところが永井の姿を見るが早いか、女は慌てゝ身を引いてぴしやりと窓を閉めて終つた。然かも永井が又もとの席へ歸つて再び畫を描き出すと、又々前と同じくさらさらと微かに葉ずれの音をさせては櫻の花を散らすのださうだ。そんな事がその後一週間ばかり、殆ど毎日のやうに繰り返へされた。永井は肉附のよい色の白い何處か女に好かれさうな風彩をして居る上に、三十歲とは思はれぬ程に初々しい處のある男だ。女がそれに心を引かれたのか、或は引かうとしたのか、それとも一寸した惡戯かのためか、かうして花を散らした理由はいまだにはつきりと解らない。

だが幸か不幸かその時はもう永井の家には最愛の綺麗な細君がゐたので、安芝居の序幕みたいな、女の仕草は、遂に何事をも生み出す事が出來ずに終つた。それ以來大野や永井はその女に「散花夫人」と云ふ尊稱を奉る事にしたのである。唯、川瀬だけは運惡くまだ一度もその女を見た事がなかつた。

「かう家賃を騰げられちや、散花夫人も去年見たいに矢鱈に花も撒けまいね」

川瀬はこんな事を云って笑つた。然し、彼の妻は格別それには答へなかつた。そして、暫時默つてゐた。が、やがて少々云ひにくさうな樣子をしながら

「私一昨日、大野さんの奥さんに憤慨しちやつたのよ」

と云つた。無論、その眼の中には可なり不愉快さうな影がさした。

「如何かしたんか」

「だつてね。一昨日、家の玄關で一寸話をして行つたのよ。その時も家賃の話が出たらね。あの奥さんてば……手前どもでは構ひませんが御近處が大分お喧しいやうすよつて大家のおかみに云つてやりましたつて云ふのですもの。同じ店子でありながら、自分一人好い見になるなんて餘りだわ」

かう云つて再び不愉快さうな顏附をした

「ほんとうにそんな事を云つたんかい」

「ええ。」

「ぢや大野の家では留守中に細君が値上を承諾したんかね」

「無論、さうなんでせう」

「そいつは困つたな。あつちで大野と相談して大家へ抗議を申し込む事になつてゐたのだが……それに他の店子を出し拔いてそんな事を云ふなんて、隨分他人を足蹴にしてゐるな」

川瀨も實際いやな氣持がした。大野の口振では無論まだ値上の承諾は與へてゐないらしい。それだのに何故細君が勝手にそんな事を云つたのだらう。大野の家では主人の留守にも家賃の値上に應じるだけの僭越を、十分細君に許してあるのかしら。若しさうなら細君がK町へ電話をかけた時に、その事をも併せて知らせて來さうなものに。そして、川瀨と値上反對の相談をした時に「もうおれの家では承諾した」と大野がきつぱり云ひさうなものなのに。然し、あの時、大野が甚だ煮え切らない樣子を見せた事から考へると、或はそれを知つてゐながら川瀨の强硬な態度に出會つて、とうとう云ひ出し切れなかつたのではないかしら。元來が弱い大野の性格として、それは一寸ありさうな事だ。それにもともと大家や警察の事なら、どんな事でもきかなければ惡いもののやうに心得てゐるのが、大野の細君だ。だからこんども不用意の裡に餘計な返事をしたのかも知れない。だが、そんな事はどうでも好い。主人の大野が値上反對に贊成した以上、場合に依つては細君の存在などは無視してまでも話をどしどし進めて好いのだ。然し、最初からそんな餘計な言質を取られてゐる事は可なりにまづい事だ。かう思ふと川瀨は矢張一寸いやな氣持にならざるを得なかつた。

その頃「惡家主撲滅」「家賃値上反對」の聲が非常な勢で東京市の内外に渦卷き始めた。日々の新聞紙は頻りに借家、借地の爭議を傳へた。そして、遂に「新借家借地法」と稱する法令さへも敷かれるに到つた。然し、それは結局徒に家賃値上、地代値上の宣傳をするのと同じ結果になつて終つた。何となれば地主や家主の方では「他處でそんなに騰げるのなら、おれの處でも騰げなければ損だ」としか考へられないやうな態度でもつてみんな憶面もなくどしどし家賃を騰げ

出したからだ。殊に「新借家法」では立退きの通告を受けてから六ケ月目には、店子はいやでも家を家主に引き渡さなければならなくなつた。だから尚更家主は強くなつて行つた。その結果店子は到る處でみじめな敗北ばかりくりかへしてゐた。

今まで單なる世間の問題として眺めてゐた「不當なる家賃値上」の事が、とうとう自分自身の問題として眼の前に落ち懸つて來た時、川瀨は始めて家主に對するほんとうの不愉快さを感じ出した。

「敗けるか勝つか、とにかくやれる處までやつて見やう、場合に依つたら法廷で爭つても好い。唯、このままぐずぐずに屈伏したくはない。そして、いよいよ駄目となつた場合に、始めて家を引き渡せばそれで好いのだ」

かう思つた川瀨は、この不當な値上に極力對抗する決心を堅めた。

それに元來が小説を書いたり論文を書いたりして生活してゐる所謂自由職業者であるから、若し最後に立退きを强制された時、運惡く東京に好い家が見附からなかつたとしても、K町か何處かの田舍へ引つ越しても好い。その點で川瀨は他處の店子ほどに立退きから絕對的な脅威はうけないですむのだ。そのため川瀨はそれほどの最後の決心が出來たのである。

然し如何に最後の決心をして見た處で、自分一人の力だけでは無論どうにも仕方がない。飽くまで他の借家人と手を取つて進まなければ、折角の決心も結局犬死に終るだけだ。かう思つた川瀨は先づ何よりも先に、利害を同じくしてゐる借家人達の結束を堅めなければならないと考へた。

川瀨の家を起點として鍵なりに續いてゐる七軒の二階建は、どれも同じ家主の家作だつた。南側では川瀨の家と、直ぐ右隣の石川と云ふ飜譯家の家とがさうなのだ。そして、他の五軒は、前の二軒とは背中合せのやうな工合にずらりと北

向きに續いてゐた。取つつきの角が木戸と云ふ、綺麗なくせに世帶やつれのした細君のゐる會社員の家で、その隣が大野の家だ。その又隣は矢張會社員らしい。そして、もう一軒向が「散花夫人」の家で、最後が永井の家なのである。

大野の細君が大家のおかみに云つたと云ふ言葉が、川瀨には一寸氣がかりだつた。然し主人の大野が川瀨に贊成してゐる以上、そんな事はどうでも好い。又、書家の永井は元來が家賃をあまり拂はない方なのだから、無論贊成するにきまつてゐる。更に木戸と云ふ家と「散花夫人」の家とは、細君達がひどく怒つてゐると云ふ以上大丈夫だ。唯石川と云ふ飜譯家と大野の隣の會社員との態度がまだはつきり解らなかつた。だがまさか反對する事もあるまい。

「こんどこそはあんまりだから、七軒揃つてぶつかつてやらうぢやないか」

川瀨は夕飯の時にも、妻とこんな話をした。

「そりやその方が好いわ。一軒や二軒で抗議を申し込むよりも、七軒揃つてぶつかつた方がずつとこたへるでせうからね」

「さうだとも。つまりここでも小さな借家人同盟が出來るわけだ。例へ七軒だつて團結すれば大きな力になるからね」

川瀨がかう云つたのは、その頃、非常な勢で關西の都市を捲席しつゝある「借家人同盟」の事を考へたからだ。その同盟には川瀨が加入してゐる東京の社會主義團體からも大勢の社會主義者が應援に出懸けて行つた。そして、到る處で可なりに好い成績を收めてゐるらしい。それが五月には東京でも大々的な演說會を開く事になつてゐるのだ。さうなればその宣傳が、今自分達の面前に起つて來たこの問題に對しても間接に多少の功果を擧げ得ないとは限らない。かう思ふと川瀨は可なり心强い氣持にさへもなるのである。

一週間以上もたつた後で大野はやうやくK町から歸つて來た。そこで川瀬は早速大野の家へ出かけて行つた。二階へ通されると、そこには既にN雜誌社の都築も來てゐた。川瀬と都築とは原稿の事から、もう半年以來親しい間柄になつてゐた。今日も都築は矢張原稿の事で大野の家へ來たものらしい。

「近頃、お體の工合はどうです」

都築は川瀬の顏を見ると直ぐから訊いた。川瀬がひどい神經衰弱で永らく原稿を書き澁つてゐる事は誰も知らないものがなかつたからだ。

「この間うち、一寸好かつたのですが、少し書き續けたら又惡くなつて」

「そいつは、いけませんな」

「その上、こんど家賃をうんと騰げられて大いに困つてゐる處なんです。實はその相談でここへやつて來たんですがね」

川瀬はこんな言葉をきつかけにして、家賃が一足飛びに十五圓も飛び上つた事や、それに對して近處七軒の反對同盟を作らうとしてゐる事などを話した。

「そりやひどいですな。この際、是非同盟して大いにやるんですな。それが一番好いです」

都築は、その大きな體を窮屈さうに坐らせたまま、如何にも愉快さうにこんな事を云つた。

「大阪の借家人同盟などは實に旺んなものですな、毎日毎日加入者が殖へるやうです」

「はあ、さうですかね」

今まであまり口數をきかなかつた大野が、始めて多少興味をそゝられたやうな調子でもつてから云つた。女物かと思

はれるほどの荒い大島の袷と袷羽織を着て、思ひ切り派手な長襦袢の袖口から出してゐる細い腕を如何にも大事さうに前で組んで、四角い卓へ心持體をよせかけてゐる大野と、多少垢じみた銘仙に古ぼけたセルの袴をつけて、大きな體を窮屈さうに坐らせてゐる都築との向き合つてゐる樣子は、川瀨にとつて可なりに興味のある對照を形造つてゐた。

「あなた。大阪の能見好三と云ふ男を御存じでせう」

「名前は聞いてますが、まだ會つた事はないんです」

こんどは川瀨が答へた。事實、大阪の社會主義者の一人として、又借家人同盟の發頭人として能見の名前はずつと前から聞いてゐた。だがまだ一度も會つた事はなかつたのだ。

「彼奴、實に痛快な男でね。いつも無政府主義者大林儆、乾分、能見好三と刷つた大きな名刺を持ち歩いてゐるんです」

「ははあ。そんな男ですか」

「いや、無論故意にやつてゐるんですが、大阪ではそれが莫迦に效くんですな。この間も或る町の八百屋が大家に追ひ立てを喰つてさんざん困つた揚句、能見の處へ馳込んだんですな。すると奴さん早速、祝開店三週年とか何とか稱して大林儆、高井敏男、石野多村なんて云ふ所謂錚々たる社會主義者の名前をずらりと並べた暖簾を送つたもんです。さうしたら餘程驚いたものと見えて、それ切り大家が追ひ立て處か家賃さへも取りに來なくなつたさうです」

都築はかう云つて又更めて頗る愉快さうな聲で笑つた。

「そりや愉快だな。……實に愉快だ」

川瀨が思はず大きな聲を出して膝を打つと、大野も一寸微笑を浮べて

「そんなに效くものですかね。そんなら僕も一つ暖簾をかけて貰ひますかな」

などと云つたほどだ

「一つ川瀬君に心配して貰つたらどうです」

「ハハツ……」

「實際、大家なんてものはこつちがおとなしければどんな無理でも云つて來るんですかな」

「さうさ。それが資本家の通有性なんだ」

川瀬が横からかう云ふと、こんどは大野が答へた。

「ぢや、先方から云つて來た値段の半分位にしてやらうかな」

「莫迦を云ふな。そんな事でどうする。今までだつてさんざ騰げたんだから、こんどは五圓でも多すぎるよ」

「だつて相場から考へてそんなものぢやないかね」

「いやそんな事はないです。せいぜい讓歩して一割ですな」

こんどは都築が口を入れた。その聲の調子が恰かも裁判官が判決でも下したやうな感じがあつたので、川瀬も一寸驚たほどだ。

「そんなものですかな」

「無論、さうです」

「では、一割なら勘辨するつて云つてやるか」

「そりや駄目だよ」

こんどは川瀨が大野の言葉を遮つた。

「そんな事をすれば必ず折り返して三割にしろの四割にしろのつて云つて來るから。それよか最初は全然應じられないつて、きつぱり拒るんだ。さうしてさんざすつたもんだした揚句に、仕方がなかつたら一割位に勘辨してやるんだね」

「さうですとも。それが好いです」

都築は早速應援した。

「ぢや、とにかくさうしやうかな」

「無論さ。飽くまで強く出なけりや駄目だよ」

「然し、立退きを命ぜられると、今一寸家が無ささうぢやないか」

「なあに。そんな事を云つて來やがつたら腰を据えて動かないだけさ。正式に立退きを要求して來たつて半ケ年間は法律上住める權利があるんだ。又それから正式裁判を仰いで決定するまでには又一年位かかるからな」

「さうかね」

大野は川瀨の言葉に對して、感心したやうなしないやうな返事をした。然し、都築が横から元氣をつけてくれたお蔭でとにかく腰だけは坐つたらしい。その結果、近處の殘る五軒を歩いた上で、まだ値上を承諾してゐなければ、早速この小同盟に加入して揃つて抗議を申し込むやうに勸める事に、はつきり話がきまつたのである。

「ああ。君。永井は先月から細君と大阪へ行つてゐるよ」

川瀨が格子戸を開けて出やうとした時、玄關まで送つて來た大野は後からかう云つて呼びかけた。

「そいつは困つたな、ちやどうしやう」

「いや。從妹が二人留守して居るよ。あれに一と言斷つて置けば好いだらう。無論、僕と君とで決めたからつて、後で手紙を出せば好いから」

「ぢや、さうしやう。何しろ永井は今までだつてあんまり拂つてゐない方なんだからね」

「だから無論喜ぶだらう。ハハツ……」

大野の笑ひ聲を後にしながら、ぶらりと外へ出た川瀨は、第一番に永井の留守宅を訪ねて見た。家には恰度好い工合に、從妹が二人ともゐた。どつちもせいぜい女學校の一年か二年らしい。最初、川瀨が來意を手短かに話した時には、借家人の同盟と云ふ事や、値上反對に就いての駈引きなどが、二人には一寸手輕に呑み込めなかつたらしい、そこで川瀨は小學校の先生が生徒に云つて聞かせる時のやうに、その內容や利害得失を出來るだけ丁寧に說明した。その間、二人の女の子は川瀨の一語一語に頭を首肯せながら、如何にも熱心に聞き入つてゐたが、やがてやうやく安心したらしく、

「それなら大變好い事なのですわね」

と、先づ丸顏の方が子供らしい笑顏を見せた。

「無論、さうですとも」

「ぢや、さうお願ひしませうね」

面長の少しソバカスのある方が、直ぐ橫から附け足して一方を見た。そして、二人とも殆ど同時に

「ぢや、どうぞよろしく」

と云つて、子供々々した樣子でもつて兩手を疊へついて、無雜作に頭を下げた時には、川瀨も思はず愉快な微笑を浮べざるを得なかつた程だ。

次に訪ねたのは「散花夫人」の家だつた。川瀨はまだ見た事のないその女の顏形をいろいろと心の中で模索しながら、だが怖らく可なり嫌味な女だらうと考へながら、がらりと格子を開けて玄關に立つた。ところが出て來たのは割合感じの好い、否、思ひ切つて愛嬌の好い二十三四の女だつた。で、彼は一寸意外な感じがした。

「あなたが、奧さんですか」

そのため彼はこんな事さへも訊いた位だ。

彼の話を聞き終ると、女はうつすり白粉をつけた面長な顏に愛嬌のある笑を漲らせながら

「實はあんまりですから、手前どもの方で皆さまに御相談しやうかとも思つてゐたのですが、それではあんまり差出がましいやうでも御座いますし、それにどなたか、何とかおつしやつて下さるだらうと思ひましてつい遠慮して居りましたのですが」

流れるやうな言葉使でこんな事を云つた後で「主人も大變怒つて居りまして」などと附け足した。

物を云ふ度に眞白に並んだ齒並が、唇の間から鮮かに顏を見せる。それが切れの長い眼と、好く整つた鼻と、薄くはあるが血色の好い唇とに調和して、尙更一と際なまめかしい感じを與へた。殊に、張のある聲の響と、人をそらさない柔かな物腰とは、如何に平凡な束髮に結ひ、目に立たない柄の着物を着てゐても、矢張、いまだに何處か男の心を十分引きつけるに足るだけの力があつた。

「この女が二階から櫻を撒いたのかなあ」

かう思ふと、川瀨はそれが滑稽であると云ふよりも、むしろ變に不似合な感じがした位だ。

「まあ。御覽下さいまし。この通りなのですよ」

やがて女はかう云つたと思ふと、その細造りな體を幾分ねぢるやうに動かしながら家の中を見廻して見せた。

「いくら頼んだつて直してくれないんですもの。障子は壞れますし、雨はもりますし、第一玄關なんか三和土が目茶々々になつても捨てて置くんですかね」

川瀨はその言葉につれて、女の眼の行く方を追ひながら順々にあたりを見廻した。成程、その通りだ。玄關の靴ぬぎの三和土は、かけた瓦を置き列べたやうに跡形もなくぶち壞れて、下からは堅い黑土が一面でこぼこ顏を出してゐる。

「僕の家の物干もすつかり腐つて、今ぢや危なくつてものを乾しに行けない位いです」

「さうなんですの。手前どものも矢張踏むとめりめり崩れるんですよ。それだのにいくら頼んだつて知らん顏ですからね」

最後に聲を高めてかう云つた女の顏は、家主の傲慾に對する抑へ切れない不愉快さでもつて一つ杯だつた。そして、その切れの長い眼の中には、言葉で云へない反感が力强く動いてゐるのが川瀨にはつきり受取る事が出來た位だ。やがて彼がいよいよその家から出やうとした時、先刻開けた格子戸を片手でもつて後向きに閉めやうとした。だがどうしたのか格子戸は唯徒に(ママ)がたがた云ふだけで動かない。川瀨は止むなく兩手でもつて力任せに閉めやうとした。

「いいえ。どうぞそのままに……格子戸だつてこの通りなんですからね」

その時、かう云つて後から彼を制した女の聲は、日暮に近い往來へ極めて鋭く擴つて行つた。

飯布夫人の家の隣は、杉田と云ふ會社員だ。そこでは思ひ切つて耳の遠い婆やが取り次に出て來た。そして玄關の仕

切りの障子を開けると、主人が薄ぐらい茶の間の長火鉢の側に床を敷かせて横になつてゐるのが好く見えた。

「先々月流感で家内を亡くしました上に、私もまだすつかり好くならないものですから」

障子を開けつ放した向ふの部屋から、玄關に立つてゐる川瀬に向つて、主人はこんな事を云つた。床の中から體を少しねぢるやうに起き上らせながら、こつちを見てゐる主人の顔には、氣のせいか何となく力がない。丸顔の、もう年は四十を越してゐるらしい。川瀬は取り次に出てゐる婆やをはつて置いて主人と直接大きな聲で話し合つた。無論、主人が川瀬の提案に賛成したのは云ふまでもない。

「俄かに家内に死なれましたので、何かにつけて不自由がちな事ばかりで少しもお手傳は出來ませんが、ではどうか何分よろしくお願ひします」

かう云つた主人の聲は、むしろ痛々しい程弱々しく川瀬の耳に響いた。

間もなく川瀬は、大野の家を通り越した右隣りの木戸と云ふ家の玄關に立つた。そこでは例の綺麗ではあるが世帶やつれのした細君が直ぐ樣彼を二階へ案内した。日暮に間のない家の中はもううす暗かつた。茶の間兼用の玄關を通りぬけやうとして、不圖右側の座敷を覗くと、そこには布團や着物や子供の玩具などが、一面亂雜に取り散されたままになつてゐた。それが、乏しい光の中にもはつきり彼の目に入つた。その時何處で乾してゐるのか、蒸れるやうな襁褓のいきれがぷうんと烈しく彼の鼻を打つた。

主人は四十に間もない年らしい。少し肥り肉の丸顔であるが、年の割に髮の毛がうすくなつてゐるのと、額に二た條ほど皺を刻んでゐる樣子が、たしかに所謂苦勞人であるらしい。川瀬がこんどの計畫について凡ての話をした時、夫婦とも喜んで彼の意見を迎へてくれたのは云ふまでもない。

「大家の方が飽くまで横暴な態度で出て來るやうでしたら、私は場合に依つたら法廷へ立つても好いと思つてゐますが、こつちにそれだけの決心がなけりや、今時の大家にはとても駄目なんですからね」

最後に川瀬はこんな事まで云つた。

「さうですとも。近頃の店子はおとなしくして居りや何をされるか解りませんからな」

肥り肉の主人はかう云つて、その丸顔に人の好ささうな笑を見せた。がやがて、褞袍にくるんだ體を起して座敷の片隅へつかつかと歩いて行つた。そして、机の上から焦茶の假表紙のうすい書物を一冊取り上げて

「かう云ふものを買つて來ましてね。大分研究して見ましたのですが、どうもこんどの法令は私達にとつて好し悪るしですな」

と云ひながら、それを川瀬の手に渡した。見ると大型な活字で「新借地借家法釋疑」と刷つてある。

「もうこんなものが出來たのですか」

「ええ。此日本屋で一寸見ましたものですから、買つて參つたんですが、この法令はいよいよ今月から實施された譯なんですな」

「さうですとも。つまり私達は場合に依つたらこの法令の最初の犠牲者になるかも知れないんです」

川瀬が笑つたのに促されて、主人も細君も一緒に笑つた。だが、川瀬が大聲で笑つた氣持の中には「この家でもこんどの値上にはよくよく困りぬいたと見えて、とうとうこんなものまで買つて來たのだな」と云ふ、一種同病相憐むやうな感じも混つてゐたのである。

「若し御奔走下さるのに、入費がおかかりの折は、手前どもでも一緒に負擔させていただきますから、どうか御遠慮な

くおつしやつて下さいまし」

「いよいよの時には友人の辯護士にも十分相談してみたい」と川瀬が云つた時、主人はこんな事を云つた。無論、それは唯のお世辭ではなかつたらしい。全く腹からほんとうの氣持でもつて云つてゐるのだ。それがはつきりと解つたので、川瀬は何だか一度に大勢の味方を、然かも大野などよりずつと力强い味方を見出し得たやうな氣持さへした。

「いいえ。そんなものは好いんです。唯、友人として一寸訊くだけなんですから」

川瀬は思はず卽座にかう答へた。無論、かう答へた彼の氣持も、矢張、ほんとうの氣持からであつた。そして、彼は始めてここに自分と一番近い氣持でこんどの問題に對してゐる人のある事を知つて、少なからず心を强うせざるを得なかつたのだ。

川瀬が最後に自分の右隣の石川と云ふ飜譯家を訪ねたのは、もうすつかり日が暮れて電氣がついた時分だつた。その家の門をくぐつた時、彼は一寸變な氣持がした。何となればその家とは二年近くも隣り合つて住みながら、單に近づきにならないばかりでなく、主人と往來で出會つても、ついに一度も挨拶をした事がなかつたからだ。その上、その男について彼はいろいろ變な噂も聞いてゐた。子供が二人もあるのに、細君をだまして鄕里へ歸らせた後で、何處かの若い女と結婚したとか、その女は初婚のつもりでやつて來たら鄕里から子供が二人も出て來たので驚いたとか、だか、とうとうそのまま泣き寢入りになつたとか、そのため先の細君は身を投げやうとしたほどだとか、そんな噂をいままでちよいちよいと耳にした。

勿論、そんな噂が事實かどうか、川瀬ははつきり知らなかつた。唯、三月ほど前に結婚式が擧げられて十八九の花嫁が來た事と、半歳ばかり見えなかつた二人の女の子、六つ位と四つ位の二人の子が、近頃何處からかひよこり舞ひ戻つ

て來た事だけは事實だつた。殊に川瀬をして一種不思議な氣持を抱かせたのは、結婚式の夜古めかしい手打ちの音がシヤンシヤンシヤンシヤンと隣の二階から響いた事と、今まで長い間妻やを邪險に叱り飛ばしてばかりゐた主人が、結婚の次の朝は二階の縁側で頻りに鼻唄を唄つてゐた事だつた。

川瀬はこんな事を考へて、一寸逡巡する氣持にもなつた。然し、この場合まさかそんな事に拘泥してもゐられない。彼はとうとう思ひ切つて、その家の玄關に立つた。

取り次に出た花嫁が引つ込むと、間もなく主人が出て來た。黒く骨張つた顏に、うす赤い髯を細長く生やした三十五六の男である。花嫁がどんな取り次ぎをしたのか、最初、相手は懷手をしたまんま、變にぬうつと突つたつて、何の言葉もなしに唯じろじろと川瀬の顏を眺めてゐた。ところが一旦來意を聞き終ると、その迂散くささうな態度は俄かににこにこした樣子に變つた。そして極めて愛相の好い挨拶をした。その上、即座に川瀬の提案に無條件で贊成したばかりでなく、

「一度は是非お伺ひして文學上の御高見もお伺ひしたいと思つてゐたのですが、どうも出不精だものですからつい失禮いたして居りましたが、今度はこれを御緣に又必ず御邪魔させていたゞきます」

などとも云つた。實際始の態度と後の態度との間にあまりに甚しい相違があるので、川瀬は一寸面喰はされたやうな形であつた。その上、最後には大家に對する非難を、これまでの家の人達よりは數倍の烈しい程度に於いて加へ始めた。

「大體、あのかみさんと云ふのが浮氣者でしてね」

翻譯家は凡てを知つてゐるらしい口調でもつて先づかう云つた。

「はあ。さうですかね。僕はそんな事を一向知る機會がないんですが」

川瀬は全くありのままを答へた。

「いや。なかなかなんださうです」

相手は平然と斷案を下した。

「あのかみさんは一旦後家になつたんですが、女學校や中學へ通ふ子供があるくせに、どうにも我慢が出來なくなつて、何處からか今の亭主を拾つて來たんださうですよ」

「ちや。あの亭主は入婿なんですか」

「いや。事實は入婿なんですが、戸籍の上ではかみさんが二人の子供を置いて嫁に行つた事になつてゐます。だから御存じの通りこの家作は全部息子の名儀でせう」

「ははあ。成程」

始めてさう云ふ事情を聞いた事よりも、この男が何處からそんな事を訊き出して來たのかと云ふ事に、川瀬は少なからず感心した。

「無論、亭主は財産を目當に入つたんでせうが、まさか子供の手前さう遊んでもゐられないんで、幸ひ以前に肉を取り扱つた經驗があつたとかで、かみさんに金を出して貰つて始めたのが今の肉屋なんださうです」

「道理で、かみさんは上品な綺麗な人なのに、亭主は變に不釣合だと思つてゐましたが」

「ええ。いづれ何處かの牛殺かなんかを拾つて來たんでせう。何しろ肉を扱つた經驗があると云ふんですから」

相手は何と思つたのか、嚙んで吐き出すやうにかう云ふと、變ににやにやと笑つて見せた。何故、笑つたのか、無論、川瀬には解らなかつた。その上、大きな子供があるのに後家を通せなかつたと云ふ事から、どうして浮氣者だと云ふ結

論が出て來るのか、それも矢張り解らなかつた。だが、今の場合、重ねてそれを委しく訊いて見るだけの興味も勇氣もなかつた。で、川瀨はそのままさつさとそこを切り上げて終つた。その間、若い細君は一言も物を云はずに、唯、じつと亭主の側にしやがんでゐた。そのひどく無表情な、と云ふよりもむしろ頭の惡さうな顔附が、大家のかみさんの事よりも、その時の川瀨にとつては何故か遙かに氣になつた。

その夜、川瀨はもう一度大野の家を訪ねた。そして、二人で相談して大家に對する抗議書を認めた。抗議書と云ふよりも、むしろ先方の提案の全部に對する拒絶狀と云つた方が好いかも知れない。それを持つて川瀨は又更めて近處を廻つて、一軒一軒に主人の自署と捺印とを求めた。永井のは取り敢へず川瀨が署名して、唯印だけを捺して貰つたのだ。そして、それを近くの郵便局から書留でもつて出したのである。

かうして殆ど半日半夜がかりで七軒の同盟を造つて、最初の仕事を片附けた川瀨は、家へ歸へつてからも、尙幾分の亢奮を殘してゐた。こんな事は川瀨にとつてとにかく生れて始めての經驗であつた。そのためか豫期以上にみんなが快く結束してくれた事が心から川瀨を喜ばせたのだ。殊に平生は純然たる他人としてはなればなれに生活してゐた人達でも一度利害を同じうする場合には、案外手易く團結するものだと云ふ實證を、それが如何にささやかなものであるにもせよ、かうして眼のあたり見る事の出來た事は、川瀨にとつて何よりもの悦びであつた。

「何處でも莫迦に歡迎してくれたよ」

木戸と云ふ家から借りて來た「新借地借家法」の本を覗きながら、電燈の下で腹ん這ひになつてゐた川瀨は、妻に向つてこんな事を云つた。

「そりやさうだわ。みんなのとくの行く事なんですもの。それにあなた一人でこんなに骨を折つてゐるんですもの」

「まあ、さう云へばさうだけど……殊に散花夫人なんか變な女だつて聞いてゐたのに、今日は初對面の割合にひどく愛想が好かつたよ」

「だつてもともと藝者をしてゐたんですもの、こんな時には、尙更人を反らさないでせう」

妻は極めて無雜作に云ひ放つた。そのあまりに無雜作であつた事が、川瀨に一寸いやな氣持を起させた程だ。然し、彼はそれに對して格別何も云ふ氣にはなれなかつた。そして、唯、心の中に殘つてゐる愉快な亢奮を自分一人で味ひながら、晝間からの出來事と、並びにそれが伸びて行く將來とについて又更めていろいろ一人で考へつゞけた。

「この事件の發頭人はとにかく自分だ。抗議書を認めたのも自分だ。そして、七軒の聯名の冐頭も亦自分だ。その上、みんなの前で自分は責任をもつて飽くまで鬪つて見せるとも云つた。又、場合に依つては法廷へ立つても好いとも云つた。だから恐らく大家は自分を發頭人と認めて、必ず第一にぶつかつて來るにちがひない。ぶつかつて來るなら來い。おれは飽くまで勇敢に鬪つてやるから」

こんな事を考へると、川瀨は橫暴に對し不正に對する小さいながらも氣持の好い反抗でもつて、何時か心が一杯にされたのだ。そして、その夜は川瀨にとつて近頃にない愉快な愉快な夜であつた。

果然、三日目の夕方、大家から郵便でもつて返事が來た。それは卽座に最初の申し出の半額をまけると云ふのだ。唯、後の半額は九月に必ず騰げる事を今から堅く約束して置くと附け足してある。そして、その理由として、近來諸物價がめきめきと騰つた事、殊に家屋稅が騰つた事や、家屋の修繕費が莫迦に高くなつた事などがこまごまと書いてあつた。

然し、川瀬などの立場から見れば、それ等の事は殆ど値上の理由とはならないのだ。一月から物價は二割五分も騰るどころか、却つて絶頂を越してちりちりと降り氣味だ。又、家屋税の増率だつて知れたものだ。まして、二年近くも手を入れない家に何の修繕費のかかりやうがあらうぞ。その上、殘りの半額を九月に値上げする約束をしろなんて、あまりと云へば虫が好すぎる。九月までに他の物價が二割五分も騰るか騰らないか、それが今から受合へるか。要するに大家の氣持は他處でも家賃を騰げるから自分の處でも騰げてやれ。そして出來るだけうんと絞つてやれと云ふまでの事だ。川瀬の考は矢張最初の時と少しの變りもなかつた。

その日、川瀬は又早速大野の處へ出かけて行つた。それは次の對策に就いての大野の意見を訊くためだつた。」

「どうだ、驚いたな。一週に半分まけて來たぢやないか」

川瀬の顏を見ると、大野は直ぐ樣かう云つた。

「それ見ろ。どうだい。おれの云ふ通りだらう。向ふは必要に迫られてて騰げるんでなくつて、唯無闇に貪るために騰げるんだから、一撃を喰はせると、もうそれだけでも直ぐかう讓歩して來るんだ」

川瀬は笑ひながらこんな事を云つた。假令、先方の返事は可なり不滿足なものだとしても、多少とも自分の豫想が當つた事を思ふと、矢張愉快にならざるを得なかつたからだ。

「七軒が團結したのには、大家でも一寸面喰つたらう」

「それりや面喰つたらうさ、然しあんな横暴な事を云つて來て、みんなが團結しないと思つてゐるのが間違つてゐるよ」

かう云つた後で川瀬は又更めて大野を見た。

「さうだね。成程、怖しいもんだな」

社會問題なんかにこんで興味のない大野でさへも今更團結の力の如何なものであるかを知つたためか、如何にも感心したらしくから答へた。

「無論さ」、

「然し、君、九月に後半分膽けるなんて條件は實に不愉快だね」

「いや。不愉快なんて云ひ出したら全部不愉快だよ。こんども前通りきつぱり拒つてやらうぢやないか。さうして最後に一割ならまあまあ勘辨してやる事にしようよ」

「まけりやそれに越した事はないけど、然し半分位は仕方がなくはないんかね」

「莫迦云ふな。一割で澤山だ」

川瀬がきつぱりから云つたので、大野もそれに對して格別反對もしなかつた。

そこで川瀬はもう一度更めて大家に對する拒絶狀を認めた。無論、前と同じやうな肩苦しい文句でもつて、そして、こんども先方の理由に對して一つ一つ手酷しい反駁を加へてそれを又川瀬自身一軒一軒持ち廻つてそれぞれの署名捺印を貰つた上で、前と同じく書留でもつて差しだしたのである。

「こんど若し何とか云つて來たら、返事は七軒相談の上で出す事にしませう。でないと大家に出しぬかれてうまく團結を切り崩される怖がありますから」

その日、川瀬は一軒一軒にこんな事を云つて歩いた。全くその通りなのだ。七軒がお互にうまく連絡を取つて對抗しないと、どんなペテンに懸つて切り崩されないとも限らない。どんな嘘八百を並べて巧みに店子を陥れないとも限らな

い。川瀨はこの點に就いてみんな特に用心するやうに賴んだのである。

その後、殆ど半月の間、川瀨の身邊は近頃になく多忙を極めてゐた。それは彼が加入してゐた社會主義運動の大結社が、その第二回大會を神田の或る會館で開く事になつたからだ。

そのために川瀨の家へは頻りに若い社會主義者が訪ねて來た。無論、重要な用件を提げて來る場合もあり、又、時には單に尾行を撒く目的でやつて來る事もあつた。それが多い時には日に七八人にもなる。その度に銘々一人乃至は三人位の尾行を引きつれて來た。だからどうかすると川瀨の門の前には一度に數人の尾行が立つてゐる事さへあつた。それが近處の人には非常に珍しかつたと見えて、ひまさうな細君や娘さんや、時には女中や子守などが好く見物に來た。或る時などは學校の歸らしい女學生が三人、通りすがりのそれ等の尾行刑事の群を見附けて

「あら、又來てゐてよ」

などと云つては、振り返り振り返りしげしげと眺めて行つた事もあつた。その上川瀨の家の飼犬も、尾行と見ると必ずやつ氣になつて吠え立てるのだ。それには尾行達も餘程困つたらしい。どうかすると居堪れなくなつて、向ふの横町まで退却する事さへある。犬にだつて尾行の持つてゐる感じの惡さは、矢張はつきり解るらしい。

「近處でここの家の事を評判してゐるやうよ」

川瀨の妻は或る時こんな事を川瀨に云つた事があつた。

「どうしてだい」

「だつてこの頃、尾行を伴れた人が隨分來るでせう。多い時には五六人も門に立つてゐるんですもの」

「この邊ぢや珍しいからだらう」

「それにうちの犬が無闇に吠えるんで、少し氣の毒になるわ」

「かまふもんかい。ほつて置け」

川瀬は極めて無雜作にこんな事を云ふだけで所謂近處の評判などは格別氣にも留めなかつた。

やがて間もなく、社會主義運動の大結社の第二回大會が開かれた。その時、彼は解散と同時に會場で警官のために囚へられた。そして、その夜を警視廳の檻房の中で、次の夜を他の警察の留置場で過ごした。だが歸つて來た後でも、川瀬は檢束された事などを、少しも氣にはしなかつた。却つて留置場で見て來た眼新しい出來事に對して、深い趣味を感じてゐた程だつた。然し、川瀬の妻はその事を可なり氣に懸けてゐた。

「だつて近處ではあなたが、何か大した惡い事でもしたやうに思つてゐるらしいんですもの」

こんな事を云ふ度に妻は、如何にも不愉快らしい顏附をした。

「人なんか何と思つたつて好いぢやないか」

「そりやそうですけど……でも、この近處の人達にほんとうの氣持なんかてんで解りやしないんですもの。

「この近處の人なんかに解つて貰はなくつたつて、自分一人正しいのが解つてゐればそれで好いんだ」

川瀬は相變らず無雜作にかう云ふだけであつた。

「だつて散化夫人さんなんかつたら、昨日お湯で逢つた時に、先日新聞で拜見しまして早速御見舞に上るはずだつたんですが、あんまりお氣の毒でつい失禮して終ひました、なんて眞面目に云ふんですもの」

かう云つた時川瀬の妻は、前よりも倍一倍不愉快な感じに襲はれたらしい。

「何だい。あんな女の云ふ事位どうだつて好いぢやないか。藝者が引つ張られるのとは引つ張られ方が違ふつて云つてやれば好かつたのに」

妻の言葉を聞いた時、川瀬は唯かう云つて笑つて終つた。だが心の中では實際そんな事を云はれたのかしらと思ふと流石に一寸いやな氣持がしないわけには行かなかつた。

川瀬がこんな出來事に取り廻かれて、慌しく日を送つてゐる間に、大家のおかみは四度彼の家を訪ねて來た。無論、家賃値上の理由に對する陳述なのだ。そして、七軒の借家の全部に戸別訪問を試みて、一軒一軒泣き落しにかけやうとしたのは云ふまでもなかつた。その度に川瀬は事面倒だと思つたので、極力逢ふ事を避けた。そして、何時も妻を通じて、

「返事は七軒相談の上でする事にしますから」

とばかり云はせて何時も體好く追ひ返した。三度目の時にはおかみは嘘かほんとか全く泣きさうな聲を出してゐた。そして、この家作の家賃は全部二人の子供の教育費に當ててゐるのだから子供が可哀さうだと思つて騰げてくれろとまでも云つた程だ。

妻からその話を聞いた時、川瀬は、

「月謝が騰つた譯ではなし、隨分人を莫迦にしてゐるねえ」

と云つて笑つてゐた。

「それに七軒全部の上り高から地代と家屋税と維持費とを差引いたつて、二百圓は大丈夫殘るさ。それを月々、中學生と女學生に使はすなんてあんまり贅澤だよ。おまけにもつともつと他に家作も持つてゐるのだし、この上、値上なんかし

やうものなら却つて子供を惡くするばかりだ」

四度目に來た時は、もううす暗い夕方だつた。多分これまでとは反對に永井の家を起點として廻つて來たものらしい。川瀨の家へ來た時には、他の六軒大野の家でも永井の家でも何處でもみんな今日とうとう値上を承諾してくれた。唯、殘つてゐるのはここだけだと云つて、ひどく怨言を併べて行つた。

「怖らく全部嘘だらう。殊に大野が自分に相談なしに屈服するなんて確かに嘘だ。こんな事を云つてみんなをうまく陷れやうとするんだらう」

かう思つたものの川瀨は流石に一寸氣になつたので、早速、二階裏の物干に上つて、庭越しに大野を呼んだ。大野の家には今日も矢張若い女客が來てゐる。二人が大きな卓を挾んで座つてゐる姿が物干に突つ立た川瀨のつい鼻先に見える。眼隱しのためにぶら下げた緣側の簾も、電氣がつくと一向何の役にも立たない。その時、大野は細い兩腕をくねくねと動かして、恰度握り飯でも造るやうな手附をしながら、その若い女客と愉快さうに笑つてゐる處だつた。

「おうい」と川瀨が呼ぶと「おうい」と大野が答へた。そして、直ぐ樣立ち上つてわざわざ欄干の處まで出て來て、簾の橫から細造りな顏を突き出して川瀨を見上げた。

「今ね。大家のおかみがやつて來て、君の家でも何處でも値上を承諾したつて云つたけど、まさか嘘だらう」

「そりや、嘘だよ。第一、女房がおれに無斷で承諾する筈がないからな」

「まあ、さうだけど、然し君の細君がうつかりそんな返事をしたかも知れないから、一寸、訊いて見てくれないか」

川瀨は大野に一寸駄目を押した。それは大野の細君が何時か大家のおかみに「手前どもでは構ひませんが、御近處が大分おやかましいやうですつて云つてやつた」と云ふ事を思ひ出した結果、今日も亦不用意の裡に何か云つたのではな

いかと云ふ不安を感じたからだ。

「では、一寸待つてくれたまへ。下で訊いて見るから」

から答へた大野はいささか不本意らしく下へ降りて行つた。やがてトントンと何時ものやうな足音をさせて上つて來た大野は、こんどは前と反對に欄干の一番はずれの、灯が懸つてない處へ姿を現した。然し、その時の大野の顔には、前とちがつて可なり不愉快らしい色が動き、金縁眼鏡をかけた柔和な眼には不安さうな光が見えた。そして、一寸もじもじした後で

「川瀬さんでも何處でも御承諾になりましたから、お宅でも是非つて云つたものだから、承諾しなけりや惡いと思つて、承諾したんださうだよ」

と云つて、氣の毒さうな、同時に困つたらしい眼附をした。

「何だそんな事か。一軒々々同じやうな嘘を吐いてペテンに懸けて歩きやがつたんだな。あんなおとなしさうな顔をしてゐるくせにひどい奴だね」

川瀬は思はず嚙んで吐き出すやうにから云つた。大家のおかみの陋劣な懸け引きに對する抑へられない憎惡と、あれ程云つて置いたのにうまうまそれに引つ懸つた大野の細君の人の好さに對する憐憫とが、變にこんがらかつた川瀬の心は、忽ちむかむかするほどの腹立しさに充たされた。そしてそのため顔の表情が見る見る險しくなつて行つたのが、彼にもはつきり解つた位だ。

「ひどい嘘をつくもんだね」

川瀬が俄かに默つて終つたので、尚更氣の毒になつたものか、大野はこんな事を云つた。

「見たまへ、大家なんて、みんなこんなものだよ。おれ達の方が餘程正直だ」
「全くだね」
　大野はその事を始めて心から痛感したらしい。
「大家だつて平氣でこんな事をするんだから、他の所謂資本家が如何に悪辣であるかつて事は想像に餘りあるさ」
「乾度さうなんだらうな。……ところで、君、如何したら好いかな。先刻の返事は間違つてゐたつて云つて、手紙か何かで取り消さうか。無論、女房が承諾したにしろ、主人が不承知ならそれまでなんだから」
「無論さ。是非さうしたまへ。さうしても一度うんとがん張つてやらうぢやないか……それから永井の處はどうなつたんだらうね。承知したやうな事をおかみが云つてゐたけど」
「それも嘘だらう、だつてこの間、あいつ大阪から手紙を寄こして、おれの處は今までだつて拂へないんだから騰げられたら尚更拂へなくなるだらう。拂はない點では、騰つたつて騰らなくつたつて結果は同じ譯なんだからどつちでも好いやうなものの、矢張、騰るよか騰らない方が好いつて云つて來たよ」
「相變らず呑氣な事を云つてやがるな。ハハハ……」
　その考へ方が、如何にも永井らしいので、川瀬は思はず大きな聲で笑つて終つた。そのお蔭でそれまで蒸されるやうな不愉快さのなめに、頻りに重苦しくなつてゐた彼の心も、幾分洗ひ流されたやうな氣持がした。
　やがて下へ降りた川瀬が、妻にそんな話を繰り返しながら、夕飯を食べてゐると、からからと格子が開いて、大野の細君が玄關へ訪ねて來た。
「どうも先程は何とも申し譯のない事をいたしまして……

かう云つた大野の細君の聲は、もうすつかり潤味聲になつてゐた。そして大きな丸髷と、綺麗に塗つた白粉と、眼立つて華手な着物とが、その如何にも不安らしい顏附と體附とに對して何となく變に不調和な位であつた。

「先刻大家のおかみさんがもう他處樣ではどなたも承知して下さいましたからつて申しますものですから、それでは宅でも承知しなければ惡いんだらうと思ひまして、つい返事をいたしましたんでございますが……唯今、主人からそんな事をされては川瀨さんに顏向けがならないつてひどく叱られまして……ほんとうに何とも申しわけない事でございますが……」

かう云つて上り框へ手をついて丁寧に頭を下げた大野の細君は、何時か聲まですつかりおろおろさせてゐた。そして、再び顏を上げた時には、もう眼に一つぱい涙があつた。

「いいえ。そんなにお仰らなくつたて好うござんすよ。何も取り返へしのつかない事ではないんですから。

その樣子が變に氣の毒になつた川瀨は、却つてこつちから慰めたいやうな氣持になつた。

「それでは先程大野にお仰つて下すつたやうにいたせば、それで宜しいんでございませうか」

「ええ。ありや間違ひだつたつて云つてやれば大丈夫ですよ」

「左樣でございませうか……でも若しも向ふで承知したものと決めて終はれたら、どういたしたものでございませう」

「そりや、何處までも今まで通り押し通せば好うござんすよ」

「では、さういたします事にいたしませう……ほんとうにとんだ粗相をいたしまして、何とお詫びいたしましてよろしいのやら」

大野の細君は相變らず不安さうな樣子を見せて、幾度もこんな言葉を繰り返へした。そして、お仕舞には何時か涙が

濃い白粉の上を細く條になつて流れてゐた。

「餘程、ひどく叱られたと見えるね。ああ悄氣られちや却つて氣の毒になるな」

大野の細君が歸つた後で、川瀨は妻に向つて思はずこんな事を云つた程だ。

「無論、少し用心すればあの程度のペテンに懸るはづはないんだけど……然し、大野の家ばかしでなく、惡くすると他處でも同樣ペテンに懸けられた家があるのぢやないかしら。そんな事で愚圖愚圖に團結が切り崩されたら不愉快だけど……」

茶の間へ歸つた川瀨は、汲み置きの番茶を新しいのに代へながら、獨語のやうにかう云つた。

「永井さん處なんか、一寸危いわね。お留守居がお留守居だから」

彼の妻も矢張その事に強い不安を感じたらしい。

「いや。永井の處は丈夫だよ。留守居の女の子達は唯大家の云ふ事を手紙で永井に知らせるだけなんだらうからね。つまり電話線の役しかしないんだから、却つて安全だよ。それよりも他處の家が如何かなあ」

二人が茶布臺を中に挾んでこんな話をしてゐる裡に、再び玄關の格子戸が開いた。

「今晩は……」

かう云つた聲は木戸の細君だつた。木戸の細君は「急ぐから」と云つて如何しても座敷へは通らなかつた。そのため川瀨夫妻も先刻の大野の細君の時と同樣、止むなく玄關で立ち話を始めた。平生往來してゐない木戸の細君が、かうしてわざわざ訪ねて來たのは、無論大家のおかみについての同じ問題のためであつた。そして、木戸の家でも川瀨の家や大野の家に於けると同樣、大家のおかみが同じやうな嘘を吐いた事が解つた時、三人はほんとうに聲を合せて驚いた程

だ

「まあ。ほんとうにあきれますわね。あんなおとなしさうな顔をしてゐる癖に……」

木戸の細君は如何にも驚いたと云ふやうにその眼を見張つた。そして、色白の顔に人の好さうな笑が浮ぶと、心持開けた唇の蔭からは相變らず糸切歯が可愛らしく覗いてゐた。

「だけどあのおかみ、あれで却々遣り手なんださうですから、その位の嘘は平氣でつくでせう」

川瀬は淺黒くはあるが鼻條の通つた、そして切れの長い眼を持つたおかみの顔を、心の中に描きながらこんな事を云つた。

「でも、あんまりですわ。……私の處でももう少しで一杯喰ふ處だつたんですもの」

「ハヽッ……さうですか」

「でもね。變だと思ひましたんですの。だつてお宅さまでももう御承諾なすつたつて云ふんでせう。他處さまはとにかく、あんなに御心配下さつたお宅様で、私どもをほつて置いて先に御返事なさる筈はないと思ひましてね。とにかく返事はみなさまと御一緒にするつてお約束になつてますから、手前ども一軒では御返事しかねますつて、返してやつたんですの」

「宅でもさう云つて返してやりましたんですよ」

川瀬の妻はこんな事を云つて、笑ひながら川瀬を見た。

「僕の家ぢや、僕は兎倒だから何時も會はない事にきめてゐるんです」

「それが好うございますとも。」

「他處さまでは何と御返事なすつたか知りませんが、宅ではあれだけみなさまと堅く御約束した以上、自分勝手の返事は出來ませんですからね。それに第一、お宅さまに義理が立たなくなりますもの」

「いや。さう云はれると一寸恐縮しますが……然しほんとうに有難う御座いました」

川瀨は相手の自分に持つてゐてくれる純粹な厚意に對して、心から感謝せざるを得なかつた。

「だけど、大野さんのお隣の會社員の方ね」

かう云つた木戸の細君は、その名前を思ひ出さうとするらしく、一寸上眼づかひに川瀨を見上げた。

「さうさう。杉田とか何とか云ふんでせう」

「あの家とお隣の石川さんとは、もう大家の云ふ通りになつて、承諾の印をお捺してなつたんですよ」

「何時？」

「今日」

「ほんとうですか」

「ほんとうですとも」

「驚いたな。……ぢや、二軒とも矢張ペテンに懸つたんですか」

「いいえ。あの二軒が一番先きに落されたらしいんですの」

「莫迦にしてやがるな。あれほど堅く約束して置いたのに」

川瀨は體中が蒸し暑くなるやうな不愉快さが、見る見る烈しく湧き上つて來るのを感じた。そして、如何なる理由の下に、かうまで易々と自分達を裏切つたか、殆ど見當がつかない位だつた。

「どうしてさう易々と讓步したんでせう。第一隣り近處を出し拔いて」

「それがあなたお話しにならないんですの。私も腹が立つて腹が立つて……」

かう云つた木戶の細君は、その抑へられない不愉快さをもうはつきり顏へ現してゐた。大概の時にはにこにこと氣持好ささうに笑つてはその唇の蔭から綠切齒を見せてゐるこの細君が、これほど生眞面目な顏附をした上に、如何にも腹立しさうな樣子を見せる以上、好く好くの事が起つたのではあるまいか、かう思つた川瀨は、尙更一倍の不安に驅られた。

「一體、どうしたんです」

「どうのこうのつて、そんな處ぢやないんですの……杉田さんの事は今し方、あの藝者上りの奧さんにお湯屋でお目にかかつた時に聞いたんですが」

「例の二階から花を撒いた人ですか」

「ええ。……あの方の處でも矢張、みなさんと御相談の上、御返事するつて斷つたんださうですの。さうしたらおかみがお隣の杉田さんへ行つたんですつて、それで何を云ふかと思つて門へ出てそうつと聞いてゐたら、あそこの御主人が玄關へ出て來て、近頃は何處へ行つたつて借家はないんですから、かうして置いて頂けるだけでも結構ですつて云つたんですつて」

「驚いたな。男のくせに卑屈な事を云ふんですね、一體何のために髯なんか生やしてやがるんだらう」

川瀨は思はず知らず大きな聲でかう云つた。

「さうしてね。その上、近頃の相場ではこれ位の御値段は當り前ですつて云つたさうですよ」

「そんな事まで云つたんですか。いやな奴だな。それならこの間僕が行つた時に印を捺さなきや好いのに」

川瀬は堪らない程の不愉快さが、硫黄の煙の渦のやうにぐん〴〵と頭の中へひろがつて來た。……あの時は一割位が當り前でせうとたしかに云つた。それを今になつて何だ。これが相場としては當り前だと好くも云へたものだ。その上、置いていただけるだけでも結構だなどと、借家人を食客と間違へてゐるやうな言葉がどうして口へ出せるんだらう。あれほど堅く約束した七軒の同盟を裏切つてまでも。……川瀬は實際その男を頭から輕蔑したい氣持でもつて、頭の中が一杯にされた。だが、その時、最初に會つた折の相手の印象がまざまざと眼に浮ぶと、その烈しい輕蔑の感じは、更に進んで特殊な憐憫にさへも變つたのだ。……薄暗い茶の間に敷いてあつた布團の中から半身を起して、玄關に立つてゐる川瀬に向つて話しかけたその時の態度と聲の調子とは、如何にも疾み上りらしく弱々しさを極めたものだつた……變に淺黑く血色の惡い顔や、剃刀の當らない頬髯や、色の褪めたネルの寢間着は、その力のない聲や目つきと相待つて、尚更さう云ふ感じを深くさせた。殊に「この間、家内に死なれまして全く困つて居ります」と云つた時の聲と云ひ眼附と云ひ、一と眼見ただけでも全く「弱さ」そのもののやうであつた。それを思ふとその同じ男が、大家のおかみに向つて「置いていたゞけるだけでも結構です」と云つた處で、格別、何の不思議もない。そして、さう云ふ風な男に對しては、川瀬の性格として憎惡とか輕蔑とかと云ふよりも、むしろ好意を拔きにした憐憫の情を感ぜざるを得なかつたのだ。

「ぢや、あの家では何もペテンに懸つたわけぢやないんですね」

川瀬は更めてかう訊いた。

「ええ。さうらしいですの。藝者の輿さんの處でもそのお隣りでも、他處さまで承知したからなんて事は、てんで云は

なかつたさうですよ」

「でも、大野の家ではたしかにさう云つた處を見ると、あの會社員が屈服した拍子におかみが突然そんな嘘を發明したのかも知れませんね」

川瀨が笑つたので、他の二人もそれに誘はれて笑つて終つた。

「だけどあの杉田とか云ふ人は、一寸見ただけでも氣の小い人のやうですね」

もう一度その男の顏や體つきを思ひ浮べた川瀨が、獨り語のやうにこんな事を云つた。だが木戶の細君はそれには答へないで、更に話を進めて行つた。

「あの方よりも誰よりも、私お隣の石川さんにはほんとうにあきれちやいましたの」

かう云つた相手の顏は、ほんとうに心からあきれたらしく、すつかり眼を大きく見張つてゐた。

「どうしてです」

「だつて、あんまりなんですもの。實はね、私もお隣で何を云ふかと思つて、子供を遊ばせるやうな風をしながら電信柱の蔭で一寸立ち聞きをしたんですの」

「ハヽツ……」

川瀨があんまり大きな聲で笑つたので、相手は一寸きまりの惡さうな眼附をした。だが、それもほんの僅かな間であつた。

「それでどうしたんです」

川瀨がかう訊いた時、相手はそれをしほに言葉をつゞけた。

「だつてね。……石川さんは、初めから自分なんかは半分にまけていただいては却つて御氣の毒だと思つてゐた位ですつて云ひましたよ」

「どいつもこいつも不愉快な事を云ふんですね」

「だから二度目からあんな事の仲間入りをするのはいやだつたんですけれど、何しろ御近處がまるでやかましいんでねえつて、お宅の方を指でかうしてゐましたよ」

かう云つたと思ふと、木戸の細君は横の方を一寸指差す眞似をした。

「彼奴、平生からいやな奴だと思つてゐたら、矢張、さうなんですね」

「ええ。私も大嫌なんですの……その上、お宅の事をさんざ惡く云つてゐるんですもの、私、聞いてゐてお仕舞には腹が立つて腹が立つて……」

「さうですかね。驚いたな、僕には大家のおかみさんの事をさんざ惡く云つたくせに、……浮氣者だつてな事まで云つたくせに」

「まあ。あきれますわね」

「で、何つて惡口を云つたんです」

「だつて、あんまりなんですもの」

「あんまりつて、如何（どう）あんまりなんです」

どんな惡口が並べられたかと云ふ事に對する川瀬の興味が烈しい力で動き始めたのを見ると、相手は一寸返事に窮したらしい。云はうか云ふまいかと躊躇するもののやうに、暫時、まじまじと川瀬の顏を見詰めてゐた。

「云つたつて好いでせう。そこまで云つて置いて、後を云はれずに終ふと却つて氣持が惡くなりますからね」

川瀨がかう云つてもう一度促すと、とうとう追ひ詰められたとでも云ふ風に、相手は止むなく口を切つた」

「だつてね。小說家なんてものはろくろくお金が取れないもんだから、家賃の値上位でも血眼になつて騷ぐんですつて」

「莫迦だな……ハハツ……」

川瀨は又々大きな聲で笑つて終つた。

「ゝらない事を云ふ人ね。自分だつて飜譯家のくせに、どれだけお金が取れるんでせう。

川瀨の笑ひ聲の止まない裡に、彼の妻は側からこんな事を云つた。いまいましさうな調子でもつて、そして、顏には何時か不愉快さうな氣持を漲らせてゐた。

「私。他處さまの事ですけど、默つて聞いてゐられないほど腹が立ちましたわ……こんなに御心配下すつたお宅さまに好くもあんな事が云へたものですわね」

相手がこんな事を云つてゐる間にも、川瀨は矢張笑ひつゞけた。然し、その笑は彼自身にとつて、決して愉快なものではなかつたのだ。何となれば近頃永い間の神經衰弱のためと、心がとかく社會主義運動の方へばかり傾くために、ろくろく原稿が書けないので、事實可なり金に困つてゐたからだ。無論、石川と云ふ男はそんな内輪の事情を知つてはゐまい。唯、好い加減な想像で云つたのにすぎないだらう。然し、ここ半歲の間、とかく家賃が滯り勝ちになつてゐる以上、石川の言葉が大家のおかみにどんな響を與へたか。それを思ふと川瀨は實際いやな氣持がした。だが、そのいやな氣持を隱すために、彼は尙更一層大きな聲で笑つたのだ。

「ほんとに好くもあんな失禮な事が云へたものですわね」
「なあに。そんな事位云はれたつて構ひませんよ」
「その上にね、實はもつともつと失禮な事まで云つてゐるんですの」
「ハヽッ……。まだ何とか云つてゐるんですか」
「ええ」
「何んて」
「だつて」

かう云つて相手は又言葉を切つた。その時、川瀨を見上げた女の眼は隣の主人の非禮に對する腹立しさよりも、何故かむしろ川瀨に對する氣の毒さの方を遙かに多く示してゐた。

「ほんとに何て云つたんです。次でにみんな云つたつて好いぢやないですか」

相手が逡巡してゐるのを見ると、川瀨は再びかう促した。だが女は相變らず彼を見上げたまゝ、可なりの間無言のまま唇を動かしてゐた後で、やうやく口を開いた。

「あのね。あなたの事を社會主義者だつて、そんな失禮な事まで云つてゐるんですもの」

かう云ひ終つた時の相手の眼は、前よりも更に一倍氣の毒さうな感じでもつて一杯だつた。そして、その裏には「こんな餘計な事まで云はなければ好かつたのに」とでも云ふ風な淡い後悔の色さえも動いてゐた。だが、それを聞くと川瀨はこんどこそほんとうに心から可笑さがこみ上げて來て、一度にどつと笑つて終つた。そしてその笑は彼にとつて以前の笑よりも遙かに遙かに氣持の好い、否、むしろ却つて心の隅まで明るくなるほど愉快な笑であつた。殊に、川瀨に對

して十二分の好意を持つてゐるこの女が、善良ではあるが無知なお蔭で「社會主義者」と云ふ意味を感違ひして、却つて彼のために憤慨してゐてくれる事を思ふと、何とも云へない皮肉な、だが非常に愉快な笑がこみ上げて來るのを抑へるわけには行かなかつた。

「そんな事まで云つてゐるんですか。ハハツ……然し、僕は社會主義者つて云はれても一向差支へないんですが」

「まあ」

「いや、ほんとに社會主義者なんです」

「ホホツ……」

「まあ」と云つた時、木戸の細君は全く驚きの眼を見張つて川瀬を見上げた。だが、その後から更めて細い綺麗な齒でもつて笑つて見せた。その笑は前の驚を殊更隱さうとするためのやうでもあり、又「御冗談をおつしやつてはいけません」と云ふ言葉の代りのやうでもあつた。それが尚更可笑しかつたので、川瀬は一層……顏が自然と天井を見上げたほどの勢でもつて笑つたのだ。だが、その笑ひ聲は相手にとつて可なり不思議なものに思はれたらしい。

「それにね」

又女は云つた。相變らず川瀬を不思議さうに見上げながら

「まだあるんですか。ハハツ……」

「だつてね。お仕舞には社會主義者つて云ふものは、家賃を踏み倒すものだからお氣をつけなさいつてまで云つてましたんですもの。お宅さまのやうな眞面目な方に、そんな失禮な事まで云つて」

木戸の細君はもう何時か以前と同じやうな如何にも腹立しさうな表情に返つてゐた。そして、それを聞くと川瀬の心

も今し方のやうな單に愉快な明るい氣持でばかりゐられなくなつた。そして間もなく再び以前と同じ不愉快さですつかり心を一杯にされた。そのため川瀨の顏は何時の間にか自分でさへもはつきりと解るほどに、硬張つてゐた。

「なあに。あんな奴が陰で何んて云たつて構ひませんよ」

「ですけど、なんぼなんでも」

「ほんとうにいやな奴ね。こんないやな人間がどうしてこの世の中に生きてゐるんでせう」

川瀨の妻は心から不愉快らしい樣子を見せてから云つた。

「實際、毆飛はしてやりたくなるけど……然し、まあほつて置くさ、どうせあんな奴は人間以下なんだから」

川瀨は最後にこんな事さへも云つた。そしてもうそれつ切り隣の主人の事は再び口にしなかつた。實際、口にするのさへも不愉快だつたからである。その代り彼は妻と木戶の細君と三人で、かうまでみじめに崩された結束に對して、更めて善後策を講じた。その結果、まだ屈服しない五軒、永井と大野と川瀨と木戶と、そして「散花夫人」の家との五軒だけはもう一度强硬な抗議を提出する事に決めたのであつた。

木戶の細君が歸つた後でも、川瀨の不愉快さは依然として續いた。否、考へれば考へれ程、益々不愉快になつて行くばかりであつた。

杉田と云ふ會社員のやうにその意氣地なさから、乃至は卑屈に近い程の弱さから、借家人を食客か何かのやうに感違ひして愚圖々々に屈服するのならまだしもだ。さう云ふ男はむしろ憐憫に近い輕蔑の感じを起させるだけで、格別腹を立てるだけの價値さへもない。だが、隣の石川と云ふ翻譯家の態度に到つては、唯々言語道斷と云ふより外はない。殴

初、川瀨がこの話を持つて行つた時には、殆ど空お世辭に近い位のお世辭を並べて贊成した。その上、こつちから聞きもしないのに、大家のおかみの惡口を並べたいだけ並べもした。ところがこんどはそれが全然逆になつたのだ。全く堪つたものではない。殊に「自分は最初から不贊成だつたのだ」とか「社會主義者と云ふものは、家賃を拂はないものだから氣をつけろ」とか好くもそんな好い加減な事が云へたものだ。

　こんな事を考へてゐる間にも、隣の玄關で會つた時のその男の印象……淺黑く突つ張つた頰骨と、きよときよと落ちつかない小さな眼と、うす赤い細い髯とが、はつきり心に浮ぶと、何故かそれに向つてかつと唾を吐きかけたいやうな氣持にさへもなつて行つた。

「こんな小さな事件にさへ、ああ云ふ奴が出るんだから、もつと大きなもつと眞劍な勞働爭議の時なんかには隨分不愉快な奴が飛び出すんだらうね」

　川瀨は妻にこんな事を云つた。

「ほんとうにさうでせうね。だけどそんな時にはみんなが眞劍なだけにあんな者が出れば撲られるわ」

「無論、さうさ、まごまごすれば生命に係るやうな目に逢はないとも限らないよ」

かう云つた時、川瀨は××の大罷業で所謂罷業破りが闇打ちに會つて死に損なつた時の話を思ひ出した。同時にその話を川瀨にして聞かせた或る勞働者が「ああ云ふ奴は資本家よりももつともつと憎くなる」と云つた事をも思ひ出した。そして、その言葉の眞實を彼は今更ながらまざまざと身にしみて感ぜざるを得なかつた。

「全くあんな奴は蹴飛ばしてやりたくなるな。うじ蟲以下だ……明日から隣の犬が庭へ入つて來たらぶん撲つてやれ」

最後に川瀨はこんな事さへも云ひ出した。文字通り噛んで吐き出すやうに

「だつて犬に罪はないわ。可哀さうに……」
川瀬の妻は可笑くつて堪らないと云ふ風に笑ひ出した。然し、川瀬は何故か一向可笑しくも何ともなかつた。
「一體、おれはあの犬からして第一に嫌いなんだ。いやに卑屈で……」
「ほんとうに卑屈な事は卑屈ね。……何時でも變におどおどしてゐて、來い來いつて呼んでも一寸も寄つて來なくつて……そのくせ何か投つてやればくわへてどんどん自分の家へ逃げて行くんですもの。まるで牡みたいぢやないわねえ」
「さうさ。飼主がろくでなしなら、犬までろくでなしになるんだ。つまり飼主に自然似るものと見えるね」
「さうかも知れないわ。うちの犬なんかいやに氣ばかり强くつて好く怒る處は飼主そつくりだわ。それでゐて他處の犬に自分の御飯を喰べられても平氣でゐる處なんか、やつぱり共產主義と見えるわね」
「つまらない事を云ふなッ」
川瀬はとうとう持ち前の肝癪を起して終つた。先刻からいろいろな事で、不愉快で不愉快でたまらなかつた處へ、更にこんな事を云はれたので、どうにも我慢が出來なくなつたのであつた。
だが、何時までさう怒つてばかりもゐられなかつた。で、彼はやがて二階の書齋へ上つて行つて、又更めて大家に對する抗議書を認めた。そして、それを同居してゐる從弟に持たせて、殘る五軒の署名捺印を求めさせるために、又近處を廻らせた。
「かうして近處隣に不愉快極る裏切者が出た以上、この團結は或はさう長く續かないかも知れない。一軒落ち二軒落ち、そして、何時の間にかみんな愚圖愚圖の裡に屈服する事にならないとは限らない」
かう思ふと何となく强い不安を感じないわけには行かなかつた。そして、みんなが虱潰しに潰された後の事を考へる

と、一寸我慢の出來ない位な不愉快さがこみ上げて來る。つまり「理由なくして屈服する事」から來る不愉快さである。然かもこんな風に早くも裏切者を出したために、その裏切者のお蔭でむざむざと屈服するのかと思ふと、尙更堪らない氣持がした。

「他の家はとにかく、せめておれの家一軒だけは最後の最後まで戰つてやらう」

川瀨はその夜床へ入つてからも、こんな事をほんとうの氣持でもつて考へた。

ところがこんどの抗議書に對しては、もう諦めたのかそれとも何か別に考があるのか、何の挨拶も來なかつた。無論、おかみも顏を見せなかつた。それが却つて川瀨にとつて、何となく一層不安を濃くしないでもなかつた。

その裡に再び月末が來た。そして、又何時も同樣おかみが家賃の取り立てに來た。だがその時川瀨の家には相當金がなかつた。無論、そんな事は今更始つた事ではない。收入の不定な川瀨の家では、大概の拂ひは月の十日位にする事になつてゐる。どうかすると家賃なども二た月まとめて拂ふ事さへあるのだ。だからその日も矢張何時もと同じやうに「十日頃にはこつちから持つて伺ひます」と云つて拒つた。するとおかみはそれに對して格別の苦情も申し込まなかつた。その上、こんどは値上げの事についても、甚だ簡單に「何とかしていただけないでせうか」と云つただけで、それ以上あまり多くを云はなかつた。唯、川瀨の妻が

「とにかく御近處とも御相談しまして、ゆつくり御返事をいたします」

と答へた時に、おかみはその眼鼻立の好く整つた、そして歲よりはずつと若く見える面長な顏に、變な笑ひを浮べながら、

「でも、大野さんでももうこんどのお家賃でいたゞきましたのですが」と云つた。そして、そのすらりと伸びてゐる體を靜かに動かして輕い挨拶を殘したまんま、すうつと歸つて行つて終つた。

それを妻から聞いた時、川瀨は何となく好い氣持はしなかつた。「何か先方に決心があるためではないかしら」そんな氣持が又新しく彼の心を通つたからだ。

殊に「こんどは大野の家でも永井の家でもちやんと新しい家賃で拂つて貰つた」と如何にも立派に云ひ切つて歸つた事が、又しても川瀨の腑には落ちなかつた。無論「いづれ又この前と同じやうなペテンに相違ないのだらうが」からは思つたものの、矢張、何となく氣懸りだつた。で、川瀨は例の通り二階裏の物干へ出懸けて行つて大野を呼んだ。

「おうい」と云ふ返事がすると、大野が奧の長四疊から出て來た。今日も相變らず布團を敷きつぱなしにして、腹ん這ひになつて原稿を書いてゐたらしかつた。縁側に懸けた簾の端の處へ突つ立つた大野は、單衣の綻間着の袖から出てゐる細い兩手で欄干を押へながら川瀨を見上げた。

「今、大家のおかみがやつて來たよ」

「うん、おれの處へもつい先刻來たさうだよ。家賃はどうした」

「金が無かつたから拂つてやらなかつたよ」

「おれの處では感じの惡い事をして行つたよ」

大野はかう云つて、その柔和な眼に不愉快さうな色を見せた。

「どうしてだい。だけどおれの處では、大野さんからも永井さんからも、こんどの家賃でいたゞきましたつて云つたさ

うだよ」

何となく大野の口振が變なので、川瀬は直ぐ樣からう云つた。

「それがさ。實に人を莫迦にしてゐるんだ」

「又、今日もだまされたんかい」

「いや。それがもつと酷いんだ。……おかみが取りに來たから、女房が早速、ではこれだけ差上げますつて云つて、今まで通りに金を渡したんださうだ。無論、それ以上、やる必要がないんだから……さうしたら、金を受取つて勘定をして默つて懷へ入れたと思ふと、ではこれをつて云つて受取を寄越して、そのまますうつと歸つたさうだ。で、値上の話はもうあれで好いのかなと思つて受取りを見ると、上の方へこんど向ふから云つて來ただけの金高を書いて、その代り方へ小さく、右、內金として今までの家賃を書いて、請取の印が押してあつたさうだよ」

「ぢや、つまり君の家は承諾したものと認められて終つたんだね」

「まあ、あれぢやさう云ふ形式になつてゐるわけだな」

「然し、手紙で取り消は出したんだらう」

「無論、書留で出したよ」

「だけど向ぢやその取り消を認めないんだね」

「さう云ふつもりなんだらうな」

「だけど、又細君が眼の前に見てゐて、何だつてそんな事をさせたんだい」

「いや、うつかりしてゐたらしいんだ」

「駄目だね」

「いや。おれの女房、さう云ふ處はあかんのだ」

「そんな女房、箒か何かでぶん撲つてやれ」

「ハヽツ……」

二人は殆ど同時に笑つて終つた。然し、この場合何時までも笑つてゐられるものではない。自然、二人は直ぐ樣眞顔に返つた。

「で、どうしたら好いだらうな」

大野は如何にも困つたらしくかう訊いた。

「仕方がない。唯、永久に頑張るより外にないね」

「だけど、向ふだつて永久に内金、又、内金で押して來るだらうからな」

「さうさ。それでいよいよ引つ越す時には敷金で差引かうつて云ふんだらう」

「ちや、引つ越す前には當分家賃を拂はない事にするか」

「然し、告訴でもされた場合には矢張君の方が敗けだよ」

「さうかね。不愉快だな」

「いや。一體あのおかみの遣り口は實に感じが惡いね。こんどの内金なんか詐欺以上だよ。全くひどい……ところで永井の處は如何なつたんだい。おかみ自身は矢張ちやんと頂きましたつて云つてゐるさうだけど」

大野の家でさへ見す見すそんな目に會つた以上、十五六の女の子しか留守をしてゐない永井の家では、或はそれ以上

の目に逢つてゐるかも知れない。かう思つた川瀬は勢ひ不安にならざるを得なかつた。ところが大野の返事は全く川瀬の意表に出た。

「さう。さう。永井の處は國元で拂つたさうだよ。先刻、あそこの女中がおれの處の女中にそんな事を云つてゐたさうだ」

「國元から」

川瀬はあまり意外だつたので、尙更大きな聲を出した。

「いや。前にもさう云ふ事が一度あつたんだが、あんまり溜つて來ると大家から國元へ直接請求するらしいね。つまりこんどもその手ですつぽり取つたさうだ」

「何の事たい。莫迦にしてやがるな。ぢや、おれ達がいくらやつ氣になつたつて又あの女の子がいくらぺたぺた印を捺した處で何にもならないね」

「まあ、さうだね」

「それなら永井は何だつて又わざわざ贊成して來たんだい」

「永井は無論、全然、知らないだらう。この前も知らない裡にやられたんだから……いづれ夫婦揃つて國元へ呼びつけられて親爺にうんと叱られる事だらうが」

「だから、永井の奴、何時も平然として家賃を滯らす筈だね」

「無論、滯らさない方が叱られずにすむだらうけど、然し叱られたつて拂つて貰つた方が得は得だからな」

「そりやまあ、さうだらうけど。……然し……」

川瀬はもうそれ以上、何か云ふ氣にはなれなかつた。そして唯、何となくその邊にあるものを片つ端から叩きつけてやりたいやうな氣持さへした。無論、永井そのものに對しては、何等の悪い感じは持てなかつた。然し、折角あてにしてゐたものが、意外の處から、然かも苦情の持つて行き場もないやうな意外の處から崩れたので、川瀬の張り詰めてゐた力が變な工合にすぼりと拔けて終つたからだ。

「折角の借家人同盟も、これぢや影がうすくなるばかりだね。南風競はずか」

「南風だか熱風だか知らないが、頭の中が蒸し蒸しするほど不愉快だね」

川瀬はかう云つた切り、自然と口を噤んで終つた。川瀬一人で如何に地段駄を踏んで見たところで、こんな工合に端から崩されて行つては仕方がない。その上、大野などは崩されて行く事に大した不愉快を感じないやうな樣子さへ見える。そんな事を考へると、川瀬は尚更で地段駄を踏まざるを得ない程の氣持になるのだ。

「他處の家はもう如何なつたつて好いよ。おれの家一軒だけは最後の最後まで戰つてやるから」

やがてこんな事を獨語のやうに云つて物干から引つ込んだ川瀬の頰には、多少敗け惜し味に近い微笑、むしろ苦笑のやうな微笑が溢れてゐた。

それから數日の間、川瀬は社會主義運動の或る準備のために、可なりに忙しい思をした。その或る朝であつた。前の晩の夜更しのために思ひ切りぐつすりと朝寢をして、眼を醒すと、枕下には平生のやうに數通の郵便が置かれてあつた。何の氣もなく順々に取り上げて見ると、彼はその中に書留で、然かも内容證明、配達證明と云ふ赤い版子がぺたぺたと捺してある不思議な郵書を發見した。實際、こんな郵便物を受取つたのは、川瀬にとつて生れてこれが始めてだつた。

その上、差出人は、辯護士、大村虎吉と赤いゴム印で捺してある。無論、全然知らない人だ。

「社會主義運動に關して何か事件でも起つたのかしら」

全く見當のつかなかつた川瀬は、漠然とこんな事を考へながら封を切つた。するとそれは大家から、川瀬に當てた立退請求書であつたのである。

「賃貸借契約解約申入通知書」と莫迦々々しく長い「みだし」を冒頭に置いて、次に異る三人の住居姓名がずらりと並べてある。最初が「申入人」として大家の息子の名前だ。その次が「右代理人、大村虎吉」最後に「被申入人」として川瀬の名前が書いてあつた。そして、紙質の惡い赤刷の罫紙にこんな文句が並べてあつた。

申入人ハ被申入人ニ對シ東京市下谷區××町××番地所在木造瓦葺二階家建坪拾四坪五合ノ被申入人居住ノ家屋ヲ期間ノ定メナク大正×年×月×日ヨリ賃貸致シ居候處今般都合ニ依リ本書到達ノ日ヲ以テ右賃貸契約ヲ解約仕候ニ付此段解約申入及通知候也。右申入代理人、大村虎吉」

そして、最後に大村虎吉なる者の印が大きくぺたりと捺してあつた。無論、用紙は郵便局備付の規定通りの用紙である。

それを見た時、川瀬は實際たまらない程の屈辱を感じた。殊に、彼を不愉快にしたのは辯護士などと云ふ者を何處からか傭つて來て素人を嚇さうとする卑劣な態度と、たつた一と月前に布かれたばかりの「新借地借家法」の缺點を、利用して早速逆襲して來た事とであつた。

その上、川瀬を尚更一層不愉快にしたのはそこに使はれてある片假名混りの文章であつた。彼は實際たしかにもう十年以上も片假名で書かれた文章を受取つた事はなかつた。否、偶々あるにはあつても、それは悉く、檢事局の呼出状と

か學校の校友會費の催促とか、稅務署の通告とか云ふものに限つてゐた。從つてそれは川瀨にとつては、官僚主義と法律萬能主義と、その他一切の舊思想とを連想させるばかりでなく、さう云ふ文書を受取る時には何時もきまつて何等かの不愉快を與へられずにはゐなかつたからだ。

「大家からとうとうこんな物を寄越したよ」

彼は顏を洗ひに下へ降りた次でに、その片假名混りの文書を妻に見せた。

「まあ。とうとう寄越したのね。私、今朝何かしらと思つてゐたのよ」

「無論、最後にはこんな事になるだらうと覺悟はしてゐたけど、まさか今頃寄越さうとは思はなかつたね」

「こんないやな家、早く引つ越しませうよ。K町か何處かの海岸が好いわ」

「だつて、こんな不愉快な目に會はされながら、自分の方からのこのこ出て行くなんて……」

「だけどこんな事になつてから住んでゐるのも、氣持が惡いわ」

「構ふもんか。叩き出されるまで頑張つてやる。……それはとにかくこんな物を寄越されたのはおれの家ばかりかしら」

かう云つた時、自分の家よりも遙かに他處の家の事が氣になり出した。何となれば川瀨の家は職業の性質上、越さうと思へば何處へでも越せる。殊に、K町あたりへ行つて少し念入りに搜せば、家はいくらでもあるだらう。然し、木戸と云ふ家や「散花夫人」の家では主人が會社へ勤めてゐる關係上、さう何處へでも引つ越して行けるものではない。だからこんな通告を受けたら隨分困りはしないかしら。かう思つた川瀨は早速女中を使にやつて、第一にその事を糺させた。だが使から歸つて來た女中は、そんなものは川瀨の家以外何處にもまだ配られてないと云ふ報告を持つて來た。そ

してその後で
「ですけど、この間家賃を取りに來た時に、みな樣がさうまで云ふ事をきいて下さらなければ出て行つて頂くより外はありませんつて云つたさうです」
と附け加へて、不愉快さうな顏をして笑つた。無論、女中だつて同じ家にゐる以上、こんな目に會はされれば不愉快になるにきまつてゐる。
「ははあ。ぢやあの二軒は嚇かせば大丈夫屈服すると見たんだね。それに大野の家はもう屈服したものと認めてゐるんだし、要するにおれの家一軒追つ拂へば後はどうにでもなると見込んでこんな物を寄越したんだね。さう思ふと尚不愉快だね」
　川瀨は全くいまいましさうにかう云つた。顏の筋肉はもう何時の間にか湧き上る不愉快さのためにすつかり硬くなつてゐた。
「そりやここの家が一番先に睨まれるのは當り前だわ。だつて何時もあなたがあゝして手紙を書いては骨を折つたんですもの。字を見ただけだつてあなたが、重立つて奔走してゐるつて事は直ぐ解るわ。その上、お隣であんな餘計な事を云つたんですもの」
「さうだよ、社會主義者だから氣をつけろなんて下らない事を彼奴が云つたもんだから、大家のおやぢやとんでも無い事にならない裡にさつさと片附けて終へとでも思つたんだらうさ」
「さうよ。乾度、さうよ。あなたを陰謀の巨魁と認めたんだわ」
「莫迦にしてやがるな、かうなると尚更隣の奴を張り倒してやりたくなる」

「あんな人間がどうして世の中にゐるのかと思ふと、何だか情なくなるわ」

「なあに。日本にはあんな奴がうようよゐるんだ。だから萬事が駄目なんだ」

かう云つた時、川瀨はこみ上げて來る不愉快さのために、もうそれ以上、言葉をつゞける氣持になれなかつた。そして、じつと深い沈默に耽つたまゝ、又更めてこの間中からの出來事を思ひ返した。

「まあ、好いさ。どうせおれが主になつてやつた事なんだから……自分の蒔いた種を又自分に刈らされるんだと思へばそれで好いさ」

やがて川瀨はすつかり平靜に返つたやうな言葉の調子でかう云つた。だが、彼の心の底は依然として尙拭はれ難き不愉快さでもつて一杯だつた。そして、その不愉快さの中からは六軒の利益のために美しい犧牲になつたのだと云ふ風な氣持は何處からも出て來なかつた。否、若しこれに強いて犧牲と云ふ名を附ける事が出來るなら、犧牲とはよくよく不愉快極るものだ。その上、その人にとつて結局何の美しさにも何の値打にも價ひしないものだ。そして、そのために當人が腹一杯に詰め込まれるものは何だ。要するに唯憎惡と反感とだけである。だが、その憎惡と反感もかう云ふ場合は當面の敵に對するよりも却つて側面の裏切者に對してより多く抱かせられるものだと云ふ事を、川瀨は今更のやうにはつきりと知つたのであつた。

「裁判所の判決がおれをこの家から放逐するまで、頑として動いてやるものか。これからは家賃なんか斷然拂はんで好いよ」

川瀨は最後に又こんな事を云つた。

「だつてもし向ふから取りに來たら如何するの」

彼の妻はそれでも流石に不安らしくかう訊き返した。

「その時はこの紙つきれを突きつけてやれば好んだ。賃貸借の契約が解約された以上、賃借料を拂ふ義務はないつて、追つ拂つてやりや好いんだ」

かう云つて彼は赤刷の罫紙にかかれたその片假名混りの文書を指差した。

「私、家賃を拂はずに他處の家に住んでゐるのは、今まで何だか惡いやうな氣がしたけど、今日少し安心したやうな氣がするわ」

或る日、外から歸つて來た川瀬の妻は、川瀬を見るといきなりこんな事を云つた。

「どうしてだい」

「だつて今日往來で大家の娘さんに逢つたら、先方の方が私なんかより何層倍も立派な裝をしてゐるんですもの。好い着物を着て好い指輪をはめて、まるで女學生見たいにちやくつてよ。その上、お伴の女中にお花なんか持たせて……あんな贅澤をしてゐるものに家賃なんかやる必要はないやうな氣がするんですもの」

「さうさ。あいつ達は餘計な贅澤をしたいばつかりに、おれ達から搾るんだ。それでゐてまだまだ搾らうつて云ふんだからね」

川瀬はかう云つて如何にも愉快さうに笑つた。（一一、五・三〇）

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町 東京堂
同 神田區裏神保町 上田屋
同 京橋區銀座三丁目 東海堂
同 京橋區元數寄屋町 北隆館
同 日本橋區本石町 至誠堂
同 本郷區春木町 春堂
大阪市北區梅田町 文館
同 北區東梅田町 盛堂
京都市七條停車場前 共盛社
同 四條西洞院 前田大誠社
名古屋市 富澤町 中京堂
朝鮮京城本町二丁目 日韓書房

◉定價 金八拾錢郵稅金貳錢五厘（海外郵稅貳拾八錢 但支那を除く）

冊數＼國別	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓貳拾四錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓四拾八錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號增刊號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七冊分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾七圓六拾八錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

送金注意

一誌代郵稅 は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金 口座は東京三十四番なり
一郵券代用 は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるゝを拒まず
一代金引替 小包の取扱は一切謝絕す
一集金郵便 御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず

一金一圓迄 金六錢
一金五圓迄 金七錢（集金委託料及送料共）
一金拾圓迄 金八錢

一中央公論及婦人公論 代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ
一受領證請求 は必ず返信料を要す

大正十一年六月三十日印刷納本
大正十一年七月一日發行 （禁轉載）

發行兼編輯人 瀧田哲太郎
印刷人 高木酉三

發行所 東京市本郷區本郷三丁目六番地 中央公論社
電話 小石川一四四
電信略號コウロン

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

